教界の師表たるに足る傑僧、名知識が少くない。氏も亦その一に數へらるべき同派中の偉材にして、夙に本願寺文學寮に學んで僧侶たるべき修業を重ね、日露戰役に際しては滿洲の曠野に從軍して出征軍人の慰問に努力し、其の後同派の東京第一教團長として赴任し、同派の勢力扶植に努力すると共に、庶民の教化に貢献する所甚大であつた。多年の功績に依り且つその非凡なる手腕を認められて地位も亦漸次進み、大正三年には同派の執行長となり、更に管長事務取扱を命ぜられ

屋を創め、銘酒「金龜」の發賣元として漸次發展し、良品廉賣と信用本位の取引に依つて逐年販路を開拓し、同業界に確乎たる地歩を占め、遂に今日の隆況を呈するに至つた。趣味として乘馬、謠曲等を愛好す。

妻かね（明治二六年生、滋賀縣小林善吉長女、彦根高女卒）長男信一郎（大正四年生、早稲田高等學院在學）二男仁郎（同七年生、東京市立一中在學）三男美男（同一〇年生、同上）四男志郎（同一三年生）五男忠雄（同一五年

事情を調査研究した。現時滿洲國各方面に飛躍しつゝある者にして氏の教へを受けたる者は尠くない。大正十五年辭任して歸國するや、天理外國語學校教授に聘せられ、昭和八年三月迄同校に教鞭を執つた。同年五月滿洲國政府の招聘に應じ文教部學務司專門教育課に入り、主として日本及歐米諸國に派遣する留學生に關する事務を管掌し、新國家の發展に努力以て今日に及んでゐる。趣味として書道を好む。

妻千勢（新潟縣出身、青山高女卒）二

女郁子（昭和七年生）

脇山啓次郎氏　長崎市浦五島町二一　電話　長崎四八・三五

入來屋商店代表、長崎商工會議所會頭、九州鐵道、瓊浦土地、長崎紡績、九州製菓各(株)取締役、長崎電氣軌道、大日本製氷、北九州商船、長崎無盡、旭酒精、東邦電力各(株)監査役、長崎株式取引所理事、長崎縣多額納稅者

安政六年一〇月生、長崎縣

氏は長崎縣脇山兵五郎氏の長男として同縣下に生れ、明治二年家督を嗣いだ。夙に長崎港に於ける貿易に從事し、烱眼敏才克く商機を捉へて產を興し、同地貿易界に確乎たる地歩を占むるに至つた。かくて巨萬の富を積むや更に紡績、鐵道電力、海運、土地、其他各種事業に手を伸べて悉く成功し、今や前掲各社の重役を兼ねて益々活躍し、九州財界の長老として信望を博してゐる。

妻とも（慶應元年生、長崎縣相部清三長女）男良雄（明治四一年生）養子勘助（同二一年生）二女ヒデ（同三一年生、同夫寛及其一子と共に分家）

萬　富三氏　東京市豐島區長崎東町三ノ五一六

從七位、豐島師範學校教諭兼東京聾唖學校講師

明治一七年二月生、岐阜縣

明治三七年岐阜師範學校卒業

氏は岐阜縣吉城郡船津町萬淺次郎氏の三男として同地に呱々の聲を揚げた。岐阜師範學校を卒業後直ちに岐阜高等小學校に赴任したが、明治三十九年文部省中等教員檢定試驗（圖畫科）に合格し、岐阜師範學校教諭に任ぜられ、大正五年山口縣室積師範學校に轉じ、同十年靜岡師範學校に轉じ以て今更に同十二年豐島師範學校に轉じ以て今日に及んでゐる。圖畫教育に關して造詣頗る深く、夙に斯界の權威として目せられ、「寫生畫と構圖」「黑板略畫」「圖案の作り方」「圖案構成と其應用」「圖畫の學習」「旅のスケッチ」等の著書は何れも數版を重ね斯界に普く識られてゐる。眞宗を信仰し、文藝、釣魚等に趣味がある。

妻こと（明治二三年生、岐阜市石崎信次郎二女）長男徹（明治四一年生、東京高工卒、東洋インキ會社勤務）二男明（同四四年生、高等工藝卒）三男博（大正九年生）四男勉（昭和二年生）長女吏子（明治四〇年生、不二高女卒、河村勇介妻）二女喜代（大正三年生、府立第五高女卒）三女靜子（同六年生）四女政子（昭和四年生）

吉田　甚三氏　牛込區市ケ谷富久町六〇　電話四谷三一・一九二

アルゼールトミー(資)代表社員

明治二四年五月生、富山縣

氏は富山縣人吉田逸太郎氏の長男として同縣富山市に呱々の聲を揚げた。夙に上京して實業界に投じ、エドワードメンデルソンブラザース、横濱上野商店、東京眞野樂器玩具製造工場等に勤務して漸次斯界に經驗を積み、確乎たる地歩を占むるに至つた。その後大正八年向島萬歳社技師長兼專務取締役として敏腕を揮ひ同九年高木商店に轉じ、營業部長に任ぜられ更に東京支店長に進んだ。同十一年之を辭し、獨立してアルゼールトミー合資會社を設立し、その代表取締役となり、爾來專ら同社の經營に意を注ぎ以て今日に及んでゐる。敏腕達識にして而も業界稀に見る人格者として信望を博し、社運は逐年發展しつゝある。信仰は眞宗、趣味は書畫骨董等である。

父逸太郎（文久元年生、現戸主）母たつ（明治六年生）妻いと子（同三〇年生、東京府平野長三郎二女）二女喜代子（大正一〇年生）

高嶋　莫能氏　大阪市浪速區元町三ノ一四四

月江院住職、大本山永平寺顧問、大阪市宗務所長
安政三年七月生、兵庫縣
曹洞宗派屈指の名智識として聲望隆々たる氏は、兵庫縣三田町の出身である。夙に佛門に歸依し、佛道の教へを嚴守して謹身戒心の德を積むと共に、難行苦學に耐えて廣く智を求め識を加へ、後之を人に施して衆生濟度の使命を達成せんとし教を布き法を說いて斯道に邁進すること既に幾十年、其の努力と偉大なる功績は同宗内に普く認められてゐる。月江院住職たると共に大本山永平寺顧問として或は同宗の大阪市宗務所長として曹洞宗の布教發展に努力すること亦既に久しくその德望は老來益々加はりつゝある。

鷹崎　正見氏　横濱市神奈川區澤渡町二〇、電話本局二五四
商學士、古河電氣工業(株)總務部勤務
明治三三年二月生、福島縣
大正一四年早稻田大學商科卒業
氏は福島縣鷹崎貞衞氏の長男として同縣平町に呱々の聲を揚げ、昭和六年家督を相續した。夙に早稻田大學に學び優秀の成績を以て卒業後直ちに古河電氣工業株式會社に入社し、初め營業部に勤務したが、後總務部庶務課に轉じ、昭和二年四月同社横濱事務所に移つた。此の間大正十四年一年志願兵として近衞輜重大隊に入營し、後昭和五年陸軍輜重兵少尉に任ぜられた。中學在學當時より柔道を學び、大正五年講道館に入り、同年初段となり爾來漸次上達して昭和六年六段に昇進した。同八年五月嘉納治五郎氏に隨つて歐洲諸國に航し、柔道の實演、及び講演、講習等をなして名聲を海外に博した現在斯界に於ける有數の猛者として重きをなしてゐる。宗旨は眞言宗、趣味は柔道、スキー、庭球、野球等である。
妻篤子（明治四四年六月生、嘉納治五郎五女、日本女子大學卒）長男正敏（昭和六年一月生）

土屋　耕二氏　板橋區板橋町三ノ二五六、電話大塚七〇一
正五位、勳五等、法學士、內閣印刷局書記官、內閣印刷局總務部長兼監理課長總務部經理課長同官報課長、行政裁判所評定官、法制局參事官
明治二四年一月生、千葉縣
氏は千葉縣土屋權四郎氏の長男として同縣夷隅郡に呱々の聲を揚げ、大正六年家督を相續した。夙に東京帝國大學法科大學に入り、獨逸法科を修め、優秀の成績を以て卒業後直ちに官界に入り、累進して內閣印刷局總務部長の要職に任ぜられた。此の間大正十二年歐米各國に出張を命ぜられ、歸朝後新知識を傾注して益々敏腕を認められ、更に昭和八年五月再度歐米出張の命を受けて各國を巡遊視察し、同年十一月歸朝した。敏腕達識加ふるに崇高なる人格者として信望を博し前途を囑望されてゐる。
妻淑子（明治三五年生、栃木縣柿沼竹雄長女、高知高女卒）長男伸二（大正一一年生）二男周二（同一四年生）三男昭二（昭和二年生）

南波　禮吉氏　赤坂區青山南町二ノ四八、電話青山一〇一一（店舗）日本橋區坂本町一七、電話茅場町三一
金萬證券(株)社長、東京株式取引所一般短期實物並國債取引員
明治六年五月生、愛知縣
明治二六年慶應義塾大學卒業
氏は舊名古屋藩士南波傳內氏の長男に生れ、明治三十七年家督を嗣いだ。學業を卒へるや直ちに株式界に投じ、同三十六年獨立して株式仲買店金萬を開き「商機一刻値千金」をモットーとして奮鬪努力、遂に巨萬の財を積み斯界の雄として名聲を博するに至つた。一方相模鐵道、日本染色、日光登山鐵道、觀音劇場、中央冷藏製氷、横須賀埋立等各社の重役を兼ねて財界に飛躍しつゝある。繪畫に趣味深く、南山と號し花鳥に巧みである。
妻つね（明治一五年生、愛知縣士族馬淵益彥妹）長男進吉（同三二年生）二男二郎（同三四年生）三男海三（同三六年生）四男陸雄（同三八年生）五男宙藏（同四一年生）六男鮮吉（同四三年生）七男正吉（大正元年生）二女き

の後同宗公選議員に選ばれ、或は同宗大本山布教師に拔擢され、更に地方布教部委員長、同宗總務尙署等の要職に擧げられて益々信望を博するに至つた。現時前揭の任に在つて彌々同宗の發展に努力しつゝある。

松下　長久氏　東京市外武藏野吉祥寺一九〇一電話吉祥寺九
日本鋼管(株)常務取締役兼技師長、川崎窯業(株)取締役
明治一七年七月生、東京府
明治四二年京都帝大工科採鑛冶金科卒業
氏は東京府士族松下道久氏の長男とし

鷹崎　正見氏　横濱市神奈川區澤渡町二〇、電話本局二五四

商學士、古河電氣工業(株)總務部勤務

明治三三年二月生、福島縣

大正一四年早稲田大學商科卒業

氏は福島縣鷹崎貞衞氏の長男として同縣平町に呱々の聲を揚げ、昭和六年家督を相續した。夙に早稲田大學に學び優秀の成績を以て卒業後直ちに古河電氣工業株式會社に入社し、初め營業部に勤務したが、後總務部庶務課に轉じ、昭和二年四月同社横濱事務所に移つた。此の間大正五位、勳五等、法學士、內閣印刷局書記官、內閣印刷局總務部長兼監理課長總務部經理課長同官報課長、行政裁判所評定官、法制局參事官

明治二四年一月生、千葉縣

氏は千葉縣土屋權四郎氏の長男として同縣夷隅郡に呱々の聲を揚げ、大正六年家督を相續した。夙に東京帝國大學法科大學に入り、獨逸法科を修め、優秀の成績を以て卒業後直ちに官界に入り、累進して內閣印刷局總務部長の要職に任ぜられた。此の間大正十二年歐米各國に出張の後同宗公選議員に選ばれ、或は同宗大本山布教師に拔擢され、更に地方布教部委員長、同宗總務尙署等の要職に擧げられて益々信望を博するに至つた。現時前掲の任に在つて彌々同宗の發展に努力しつゝある。

山崎弟二郎氏　赤坂區青山南町六ノ一六、電話青山二八六六

資產家

明治二七年八月生、東京府

氏は故山崎錫吉氏の長男として大森區馬込町に呱々の聲を揚げ、後家督を相續した。山崎家は同地方屈指の大地主にして又數十代連綿たる舊家である。夙に荏原中學に學び、更に早稲田大學商科に進み、同大學卒業後東京商工會議所に入り調査科に勤務し、後貿易事業に携はり盛んに活躍したが、現時は實業界を退き悠々自適してゐる。資性溫厚にして稀に見る人格者として尊敬され、身を持すること頗る謹嚴である。趣味として日本音樂特に長唄を嗜み、夫人も亦長唄に長じ舞踏の名手として上流社會に著聞し、琴瑟相和し家庭は頗る圓滿である。

妻あい（明治三〇年生、鳥居吉五郎姉實踐女學校卒）長男純男（昭和二年生）長女千惠子（大正九年生）二女惠美子（同一三年生）

松下　長久氏　東京市外武藏野吉祥寺一九〇一電話吉祥寺九

日本鋼管(株)常務取締役兼技師長、川崎窯業(株)取締役

明治一七年七月生、東京府

明治四二年京都帝大工科採鑛冶金科卒業

氏は東京府士族松下道久氏の長男として呱々の聲を揚げ、明治二八年家督を相續した。夙に京都帝國大學に於て採鑛冶金を修め、優秀の成績を以て同大學を卒業後實業界に入り、敏腕を揮ふこと多年斯界に於ける地歩次第に進み、現時日本鋼管會社の常務取締役として經營の衝に當ると共に、技師長として製作監理の重責を帶び、更に川崎窯業會社の重役を兼ねて益々業界に活躍しつゝある。最近日本鋼管會社が異常の好成績を擧げ急激なる發展を示しつゝあるは、氏の努力に負ふ所頗る甚大である。

妻たきせ（明治一九年生、山形縣上野友藏二女）長男敏久（大正三年生）二男德久（同六年生）長女米子（同九年生）

牧野　康熙氏　麴町區富士見町二ノ四五、電話九段一五七二

從五位、子爵、日滿發聲映畫(株)社長、横濱正金銀行東京支店勤務

明治六年五月生、愛知縣

明治二六年慶應義塾大學卒業

氏は舊名古屋藩士南波傳內氏の長男に生れ、明治三十七年家督を嗣いだ。學業を卒へるや直ちに株式界に投じ、同三十六年獨立して株式仲買店金萬を開き「商機一刻値千金」をモットーとして奮鬪努力、遂に巨萬の財を積み斯界の雄として名聲を博するに至つた。一方相模鐵道、日本染色、日光登山鐵道、觀音劇場、中央冷藏製氷、横須賀埋立等各社の重役を兼ねて財界に飛躍しつゝある。繪畫に趣味深く、南山と號し花鳥に巧みである。

妻つね（明治一五年生、愛知縣士族馬淵益彥妹）長男進吉（同三二年生）二男二郎（同三四年生）三男海三（同三六年生）四男陸雄（同三八年生）五男宙藏（同四一年生）六男鮮吉（同四三年生）七男正吉（大正元年生）二女きよ（同三年生）三女すみ（同五年生）四女靜子（同八年生）長女ヒサ（明治三一年生、東京府宮本信彥妻）

上野　舜潁氏　芝區芝公園二一號光寶寺內、電話芝一六七〇

曹洞宗總務、大本山永平寺監院、福井縣臥龍寺住職

明治五年生、福井縣

福井縣下に呱々の聲を揚げたる氏は、幼時より佛門に入り、長じて曹洞宗專門支校に學び、更に同志社に轉じ、後曹洞宗大學に進んで再び佛教の研究に沒頭したが、尙意に滿たずして斯界の權威宇野玄機氏の垂教を乞ひ、研鑽數ケ年にして佛道の蘊奧を究め曹洞宗の奧儀に達したかくて修行成るや福井縣三方郡八村に僧堂を結んで更に難行苦學を續けると共に布教興學に努めること多年、其の佛道に對する敬虔なる態度と熱心なる布教は同派內に普く認められると共に、多くの歸依者を出し、斯道布教の實を擧げた。そ

明治二八年九月生、東京市
大正七年中央大學商科卒業
越後長岡藩主牧野駿河守忠成の二男、內膳康成は父の所領中一萬石を與へられて分家した。是れ當家の祖である。康成の子康道を經て康重の時信州小諸一萬五千石の城主となり、爾來歷代之を繼ぎ明治維新に及んだ。康重七世の裔先代康强は明治十七年子爵を授けられた。康熙氏は侯爵嵯峨公勝氏の二男、同實勝氏の弟として東京に生れ、昭和四年先代の養子となり、家督相續と同時に前名次郎を康熙と改め、襲爵仰付けられた。夙に中央大學卒業後横濱正金銀行に入り、同行東京支店勤務の傍ら日滿發聲映畫會社を創設して社長を兼ね、今日に及んでゐる。信仰は神道、趣味は釣魚等である。
妻當子（明治三三年生、白木屋元社長大村彦一郎妹、府立第一高女卒）長男實愛（大正一二年生、學習院在學）二男公積（昭和二年生）長女公子（大正一四年生）養父康强（明治一一年生、家督を讓り後分家す）

藤田　繁氏　杉並區和泉町一〇一
西洋舞踏家、藤田堺舞踊研究所長
明治三六年三月生、兵庫縣
氏は本名を尾崎繁一と呼び、神戸市下山手通に呱々の聲を揚げた。幼少の頃より上京し、慶應義塾普通部に通學中偶々西洋舞踊に興味を覺え、遂に學業を廢しエリアナ・パヴロワに師事して斯道に專念するに至つた。技熟するや大正十二年大阪松竹樂劇部に教師として入所し、同十三年歸京して高田舞踊團に入り、後昭和二年堺千代子夫人と共に現在の地に教授所を開設した。爾來夫人と共に門弟を教授する傍ら各所に出演して其の名技を揮ひ、次第に名聲を博し、今や斯界に確乎たる地歩を占むるに至つた。得意のダンスは古典的のもの或はパントマイム等にして、就中「天狗」「道化師」「港の浮浪者」「亡び行くインデアン」等は夙に定評がある。趣味は舞踊、映畫、スポーツ等である。
妻千代子（明治三八年生、東京府堺幸藏長女、神田高女卒、舞踊家）長女彌千代（大正一三年生、藝名藤田彌千代）

兒島善三郎氏　澁谷區代々木初臺町五七二、電話四谷二五七
洋畫家、獨立美術協會員
明治二六年二月生、福岡縣
氏は福岡縣故兒島善一郎氏の長男として同縣博多に呱々の聲を揚げた。修猷館中學を卒業後洋畫界に志して上京し、本鄕繪畫研究所等に於て研究を積み、二科展等に出品して漸次斯界に認められるに至つた。大正十四年歐洲に航し斯道を研鑽する事四ケ年にして昭和四年歸朝するや直ちに二科會員に推薦され、同派の中堅として活躍したが、同五年同志と共に二科會を去り、獨立美術協會を創立し其の會員となつた。同協會は從來の我が洋畫界が佛國の亞流に甘んじ清新の意氣乏しきを慨し、此の弊風を打破して本邦獨特の畫風を創造し、新人の爲めに新らしき路を開拓し、以て新時代の美術を確立することを抱負とするものにして、創立以來每年東京府美術館に協會展を開催し十五名の會員が力作を發表して我が洋畫壇に異彩を放つてゐる。而して氏は常にそのリーダーとして活躍し、協會の發展に努力すると共に研鑽怠らず、今や斯界一方の雄として名聲を博してゐる。

小柳政一郎氏　大牟田市曙町一四　電話大牟田二九四九
壽海產物(株)監査役、大牟田商工會議所理事
明治九年一月生、佐賀縣
明治二六年大阪高等商業學校卒業
氏は佐賀縣人吉村吉兵衞氏の長男として佐賀市に生れ、後小柳家の養子となりその家督を嗣いだ。大阪高商卒業後大阪商船會社に入社したが、約三ケ年にして辭し、後京都電鐵會社庶務課長となり、次で日本火山灰會社に轉じて支配人に就任し、更にその後自ら帝國火山灰株式會社を創立して專務取締役に選ばれた。昭和三年大牟田商工會が設立されるや、衆望を負ふて其の理事に推され、同會が同七年商工會議所となるや引續き理事に選

明治一一年七月生、東京市
氏は先代操氏の二男として呱々の聲を揚げた。夙に實業に志し、明治三十三年巴石油株式會社に入社し越後柏崎に出張を命ぜられ工場長として活躍し、同三十六年高田市外東頸城工場長に轉じた。同四十年同社を辭し、翌四十一年臺灣製糖株式會社に入社し、東京販賣部に在りて獨郵報社に勤務したが、後之を辭して東京帝國大學文科に入り哲學を究め、大正四年陸軍通譯となり獨逸捕虜收容所たる丸龜及び坂東等に勤務した。而も此の間更に語學、法律等を研究し、大正八年外交官試驗に合格し同九年安東領事館に領事官補として赴任した。爾來次第に昇進めた。東京外國語學校卒業後約一ケ年日

信仰は神道、趣味は釣魚等である。
妻當子（明治三三年生、白木屋元社長大村彦一郎妹、府立第一高女卒）長男實愛（大正一二年生、學習院在學）二男公積（昭和二年生）長女公子（大正一四年生）養父康强（明治一一年生、家督を讓り後分家す）

藤田　繁氏　杉並區和泉町一〇一
西洋舞踏家、藤田堺舞踊研究所長
明治三六年三月生、兵庫縣
氏は本名を尾崎繁一と呼び、神戸市下

である。
妻千代子（明治三八年生、東京府堺幸藏長女、神田高女卒、舞踊家）長女彌千代（大正一三年生、藝名藤田彌千代）

兒島善三郎氏　澁谷區代々木初臺町五七二、電話四谷二五七
洋畫家、獨立美術協會員
明治二六年二月生、福岡縣
氏は福岡縣故兒島善一郎氏の長男として同縣博多に呱々の聲を揚げた。修猷館中學を卒業後洋畫界に志して上京し、本鄉繪畫研究所等に於て研究を積み、二科

に努力すると共に研鑽怠らず、今や斯界一方の雄として名聲を博してゐる。

小柳政一郎氏　大牟田市曙町一四　電話大牟田二九四九
壽海產物(株)監査役、大牟田商工會議所理事
明治九年一月生、佐賀縣
明治二六年大阪高等商業學校卒業
氏は佐賀縣人吉村吉兵衛氏の長男として佐賀市に生れ、後小柳家の養子となりその家督を嗣いだ。大阪高商卒業後大阪商船會社に入社したが、約三ヶ年にして

辭し、後京都電鐵會社庶務課長となり、次で日本火山灰會社に轉じて支配人に就任し、更にその後自ら帝國火山灰株式會社を創立して專務取締役に選ばれた。昭和三年大牟田商工會が設立されるや、衆望を負ふて其の理事に推され、同會が同七年商工會議所となるや引續き理事に選ばれ以て今日に及んでゐる。此の間大牟田市の開發に常に意を注ぎ、同市が石炭の外誇るべき特產物なきを慨し、昭和三年頃より海產物の採取及販賣を奬勵し、海產物販賣組合等を設けて乾海苔、貝類等の加工に意を注ぎ、更に昭和八年壽海產物株式會社を起して其の監査役となり同社の發展延いて同市の隆盛に努力しつゝある。信仰は曹洞宗、趣味は謠曲、音曲等。
妻ヨウ子（明治二四年生、佐賀縣平野仁叔母、成美女學校卒）長男正美（大正元年生、九州醫專在學）長女文子（同三年生、大牟田高女卒）二女久代（同九年生、同上在學）三女昭子（昭和六年生）

麻田　弘氏　葛飾區龜有町五ノ二四（會社）荒川區三河島町三ノ二九三二　電話　下谷五〇六九
三甲製藥(株)代表取締役

明治一一年七月生、東京市
氏は先代操氏の二男として呱々の聲を揚げた。夙に實業に志し、明治三十三年巴石油株式會社に入社し越後柏崎に出張を命ぜられ工場長として活躍し、同三十六年高田市外東頸城工場長に轉じた。同四十年同社を辭し、翌四十一年臺灣製糖株式會社に入社し、東京販賣部に在りて敏腕を揮つた。その後大正二年同社を辭し、獨立して日本橋區小網町に麻田商店を設け、酒精及び工業藥品類の卸賣を始めたが、同十二年十二月之を閉鎖し、翌十三年三甲製藥會社創立と同時に取締役に擧げられ、同十五年代表取締役の重職に就き以て今日に及んでゐる。信仰は神道、趣味は謠曲等である。
二男平三郎（大正一一年五月生）長女悅子（明治四三年一二月生、文化高女卒）二女惠子（大正六年五月生、渡邊裁縫女學校在學）

荒川　充雄氏　滿洲國奉天省營口縣營口三義廟街
正六位、勳六等、滿洲國牛莊領事
明治一六年五月生、熊本縣
明治四三年東京外國語學校獨逸語科卒業
氏は舊細川藩士藤田源太氏の二男にして、父の任地千葉縣佐倉町に於て呱々の聲を揚げ、後母方の姓を襲ふて荒川と改

めた。東京外國語學校卒業後約一ヶ年日獨郵報社に勤務したが、後之を辭して東京帝國大學文科に入り哲學を究め、大正四年陸軍通譯となり獨逸捕虜收容所たる丸龜及び坂東等に勤務した。而も此の間更に語學、法律等を研究し、大正八年外交官試驗に合格し同九年安東領事館に領事官補として赴任した。爾來次第に昇進して大正十一年墺太利維納公使館三等書記官となり、昭和三年營口領事に任ぜられ、其の後前記の職に就任以て今日に及んでゐる。趣味として寫眞を好む。
妻貞子（明治二八年生、香川縣豐澤有格妹、日本女子大學卒）二男正雄（昭和二年生）三男三郎（同四年生）

安積伊二郎氏　麴町區飯田町四ノ二〇　電話九段二四一三（事務所）麴町區內幸町大阪ビル電話銀座三五五
法學士、辯護士、辯理士、朝鮮拳闘倶樂部顧問
明治二二年七月生、宮城縣
大正六年東京帝國大學獨法科卒業
氏は宮城縣人窪松之助氏の二男として仙臺市に生れ、後安積彌六郎氏の養子となり、その家督を相續した。夙に上京して東京帝國大學に學び、卒業後高田商會に入社したが、幾何もなく同商會を辭し

て辯護士及び辯理士を開業した。爾來帝都在野法曹界に著々擡頭し、大正十三年には國際辯護士會日本代表として比律賓に派遣され海外に名聲を博した。その他或は東京辯護士會長として、或は東華生命保險會社取締役として活躍し、現時益々躍進しつゝある。趣味として狩獵、劍道等を特に好む。

妻貞（明治三〇年生、養父彌六郎長女東京女學館卒）嗣子彌一郎（大正一三年生）長女百合子（同七年生、佛英和高女在學）二女律子（同九年生、同上）三女啓子（同一四年生）

堺千代子女史　杉並區和泉町一〇一

西洋舞踏家

明治三八年七月生、東京市

女史は堺幸藏氏の長女として東京市神田區に生れ、大正十四年舞踊家藤田繁氏に嫁した。神田高等女學校の出身であるが、舞踊は夙に十三歳の頃より斯界の妙手故高木德子女史に師事し、女學校通學中も熱心に研究を積み其の技倆を認められるに至つた。恩師高木女史が逝きて後その遺志を繼ぎ淺草金龍館に出演し、爾來十餘年只管その技を磨くと共に各所に出演して西洋舞踊の發展に努力し、高木女史の唯一の女流門下生として活躍以て今日に及んでゐる。藤田氏に嫁して後も依然堺千代子の藝名を以て夫君と共に斯界に精進し、有數の名手として名聲を博してゐる。得意の舞踊は「春の訪れ」「からたちの花」「アニトラの舞」「聖光」等である。趣味として映畫、歌舞伎劇等を好む。

夫藤田繁（明治三六年生、本名尾崎繁一）長女彌千代（大正一三年生）

宮下　舜達氏　横濱市南太田町一二九六、慈眼院內

慈眼院住職、增上寺執事

弘化四年三月生、長野縣

氏は長野縣下に呱々の聲を揚げたが、幼にして佛門に歸依し、慶應元年十八歳の時淨土宗大本山增上寺に於て宗脈戒統を傳持し、爾來淨土宗の勢力を扶植し、同宗を廣く民衆に普及することに依つて佛門歸依の使命を達せんとし、布教傳道を開始し、凡ゆる艱困と闘ひながら只管初志の貫徹に努めた。横濱に慈眼院を設けたるも、之を本據として內外人に佛陀の教へを說き淨土宗の功德を傳へんとする本旨に基けるものにして、同院開設後は益々布教に專念し、一方增上寺執事としても亦克く同派の爲めに貢獻しつゝ今日に及んでゐる。その行ひ淸く德高く名智識として尊崇されてゐる。

三輪　俊治氏　城東區大島町七ノ三三七、電話本所六八六四

城東區會議員、三輪製藥所主

明治一九年九月生、福島縣

大正二年早稻田大學商科卒業

氏は福島縣故三輪信左衞門氏の五男として、同縣田村郡瀨川村に呱々の聲を揚げた。明治三十九年笈を負ふて東上し同四十一年早稻田大學商科に入り、學業を卒へるや直ちに第七銀行に奉職し活社會に第一歩を踏出した。後貿易商山內洋行に轉じ、更に大正七年日本工業藥品株式會社に移り、販賣主任として敏腕を揮つたが、翌八年同社が閉鎖されたる爲め斷然意を決し、同十年獨立して三輪製藥所を創設した。爾來專心同所の經營に意を注ぎ、優良品廉賣と誠實本位の取引を以て邁進の効果空しからず、次第に各方面の信用を博し遂に今日の盛況を呈するに至つた。資性潤達にして公共心に富み、大東京出現するや衆望を負ふて城東區會議員に選ばれ、新區民の爲め努力し、信望を博してゐる。

妻愛子（明治二一年一月生、千葉縣山武郡大網町故島田德太郎二女）女輝代（大正八年生、上野高女在學）男英嗣（同一一年生）女美子（昭和三年生）

三浦　計氏　澁谷區原宿一ノ一四八　電話　青山三五二七

法學士、大日本製氷(株)常務取締役

明治一三年五月生、福島縣

明治四〇年京都帝國大學獨法科卒業

氏は福島縣三浦義司氏の二男として同明治二六年生、青森縣

明治四五年青森縣三本木農學校卒業

氏は舊南部藩士三浦吉兵衞氏の末子として青森縣三本木町に呱々の聲を揚げた鄕里三本木農學校畜産科に學び、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに滿洲に航し、滿鐵農事試驗所に入り、爾來恪地たる福岡縣三笠村より京都に移住し、理化學用器械類の製造を開始し當家の業礎を築いた。氏は其の長男にして幼名を梅治郎と呼び、明治二十七年家督相續と同時に源藏を襲名した。家業を繼いで漸次斯界に擡頭すると共に博物標本製作を開始し、更に「ジーエス」蓄電池の製造

西洋舞踏家
明治三八年七月生、東京市
女史は堺幸藏氏の長女として東京市神田區に生れ、大正十四年舞踊家藤田繁氏に嫁した。神田高等女學校の出身であるが、舞踊は夙に十三歳の頃より斯界の妙手故高木德子女史に師事し、女學校通學中も熱心に研究を積み其の技倆を認められるに至つた。恩師高木女史が逝きて後その遺志を繼ぎ淺草金龍館に出演し、爾來十餘年只管その技を磨くと共に各所に出演して西洋舞踊の發展に努力し、高木女史の唯一の女流門下生として活躍以て

の時淨土宗大本山增上寺に於て宗脈戒統を傳持し、爾來淨土宗の勢力を扶植し、同宗を廣く民衆に普及することに依つて佛門歸依の使命を達せんとし、布教傳道を開始し、凡ゆる艱困と闘ひながら只管初志の貫徹に努めた。横濱に慈眼院を設けたるも、之を本據として内外人に佛陀の教へを說き淨土宗の功德を傳へんとする本旨に基けるものにして、同院開設後は益々布教に專念し、一方增上寺執事としても亦克く同派の爲めに貢獻しつゝ今日に及んでゐる。その行ひ淸く德高く名智識として尊崇されてゐる。

然意を決し、同十年獨立して三輪製藥所を創設した。爾來專心同所の經營に意を注ぎ、優良品廉賣と誠實本位の取引を以て邁進の効果空しからず、次第に各方面の信用を博し遂に今日の盛況を呈するに至つた。資性潤達にして公共心に富み、大東京出現するや衆望を負ふて城東區會議員に選ばれ、新區民の爲め努力し、信望を博してゐる。

妻愛子（明治二一年一月生、千葉縣山武郡大網町故島田德太郎二女）女輝代（大正八年生、上野高女在學）男英嗣（同一一年生）女美子（昭和三年生）

三浦　計氏

澁谷區原宿一ノ一四八
電話　青山三五二七

法學士、大日本製氷(株)常務取締役
明治一三年五月生、福島縣
明治四〇年京都帝國大學獨法科卒業

氏は福島縣三浦義司氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に京都帝國大學に學び、優秀の成績を以て同大學を卒業するや、實業界に志し、翌四十一年浪速銀行に入り秘書として活躍した。その後大日本製糖株式會社に轉じ門司工場大里工場等に勤務して次第にその敏腕を認められ、本社調査部に移り累進して理事となり、更に昭和六年取締役に擧げられ、朝鮮支店詰として同社の發展に貢獻する所甚大であつた。その後同八年十月大日本製氷株式會社常務取締役に就任し以て今日に及んでゐる。

妻かつみ（明治一八年生、指田義雄妹女子高等職業學校卒）三女美子（大正三年生、日本女子大學在學）四女邦子（同一一年生）五女雅子（同一四年生）長女登志子（兼馬起忠妻）二女泰子（指田家養子）

三浦四郎助氏　滿洲國新京曙町
滿洲國興安總署技正
明治二六年生、靑森縣
明治四五年靑森縣三本木農學校卒業

氏は舊南部藩士三浦吉兵衞氏の末子として靑森縣三本木町に呱々の聲を揚げた郷里三本木農學校畜産科に學び、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに滿洲に航し、滿鐵農事試驗所に入り、爾來恪勤精勵すること約二十年に亘り、その地歩も次第に進み同所内に重きをなすに至つた。昭和八年三月滿洲國興安總署に聘せられ、同署産業部に勤務し、技正（獸醫）に任ぜられた。多年の經驗と熱心なる研究と相俟つて、畜産關係の法規或練達せるのみならず、畜産關係の法規或は行政等にも通曉せる爲め、諸制草創の同署に在つて頗る重んぜられ、立法、行政その他各方面に活躍しつゝある。

妻タマ（明治三六年生、大連高女卒）長男正好（昭和六年生）長女京子（同三年生）二女順子（同八年生）

島津　源藏氏

京都市中京區東洞院通押小路下ル船屋町四二〇、電話中五七〇七

勳五等、島津製作所、日本電池、鉛粉塗料各(株)社長、日本新藥(株)取締役、島津(名)代表社員
明治二年六月生、京都市

當家の先代源藏氏は、父祖累代の居住地たる福岡縣三笠村より京都に移住し、理化學用器械類の製造を開始し當家の業礎を築いた。氏は其の長男にして幼名を梅治郎と呼び、明治二十七年家督相續と同時に源藏を襲名した。家業を繼いで漸次斯界に擡頭すると共に博物標本製作を開始し、更に「ジーエス」蓄電池の製造に成功して巨萬の財を積み、國産振興に寄與したる功績に依り大正五年綠綬褒章を授けられ、更に昭和三年勳五等に叙せられた。その偉功は赫々として輝き、關係諸業は隆々として發展の一路を辿つてゐる。

長男良藏（明治三四年生、東京美術學校卒）同妻日出榮、三男敬三（同三七年生、同志社大學卒）同妻千代子（同四二年生、京都府相原兼次郎三女、同府立第一高女卒）孫美都（昭和五年生、敬三長女）長女まち子（明治三〇年生藥學博士桃谷幹次郎妻）二女英子（同四一年生、兵庫縣武井睦雄妻）庶子しづ子（同三二年生、瀨川條利妻）同和子（同三八年生、有馬純孝妻）妹ひさ（同二四年生、鈴木庸輔妻）弟源吉、同常五郎は共に分家

神保　辨靜氏　千葉縣中山町法華經寺
淺草區新谷町一六幸龍寺
日蓮宗管長、同宗大本山法華經寺、同宗

幸龍寺各住職
明治二年十二月生
日蓮宗隨一の長老たる氏は、幼時より佛門に入り難行苦學怠らず、後池上檀林に入りて修業を積み、夙に宗政に參與して日蓮宗の發展に努力し、其の敏腕を認められるに至つた。その後堺の妙國寺住職となり、或は中山法華經寺、淺草幸龍寺等の住職として活躍し、或は宗務總監として日蓮宗の統轄及びその布教に貢献する所尠なからず、又後進の指導に努力し、その手腕、識見、人格乃至多年同派の爲めに盡したる功績等に於て同派內隨一の功勞者として尊崇されるに至つた。昭和八年推されて日蓮宗管長に就任し、爾來同派の爲め益々努力以て今日に及んでゐる。

清水　孫秉氏　滿洲國新京錦町四ノ二七
滿洲中央銀行文書課長
明治四一年明治大學商科卒業
氏は長野縣の出身にして、夙に明治大學商科に學び、卒業後臺灣銀行に勤務すること十三ヶ年に及んだ。此の間銀行に關する實務は勿論、貨幣、金融等に就いて深く研究し、又支那、南洋等に駐在し或は獨、佛等に巡遊して識見を廣めた。その後懇望されて母校明治大學講師となり、後進の指導に當ると共に益々研究を積んだ。就中支那研究に最も興味を持ちその兵制、金融等に關しては頗る造詣深く、著書「支那貨幣論」及び「拓殖金融論」等は空前の快著として洛陽の紙價を高からしめた。爾來氏の名聲頓に擧り、昭和七年滿洲國が中央銀行を設立し從來紊亂の極に達したる幣制の整理を圖り金融の圓滑を期せんとするに際し、斯道に通曉せる者を我が國に求むるや、氏も亦その適任者として拔擢され、同行文書課長に任ぜられた。爾來その職に在り、多年の蘊蓄を傾注して滿洲國家の爲めに努力しつゝある。

森本市太郎氏　秘露國リマ市バキハノ街古八、電話一九二三
ペルー國立農會理事、レッテス農事(株)社長、ワラル操綿工業(株)專務取締役
明治五年六月生、鳥取縣
氏は鳥取縣人森本常十郎氏の二男として鳥取市に生れた。長じて京都同志社に學んだが、明治二十七年中途退學して渡米し、桑港に日本新聞社を起し、後同社が北米新聞と合併し日米新聞となる迄そのビヂネス・マネージャーとして現法學博士米田實氏と共に活躍した。桑港に在ること三ヶ年にして歸朝し、大澤商店神戸支店に勤務したが、明治三十七年九月ペルーに航して貿易業を起し、爾來逐年發展して昭和二年リマ市にレッテス農事株式會社を設立し、同六年にはワラル操綿工業株式會社を起し、兩社の創立以來社長及專務として今日に及んでゐる。南米開發の功勞者として、昭和二年ペルー政府よりオルデン・オフシヤル・デル・ソール章を授與され、又我が今上陛下より卽位の大典に際し銀牌を下賜された。曩にペルー在住邦人がリマ市に南米隨一の大銅像「マンコカパック」(高さ十六米)を建設せんとし、一時中止となりたる際氏の奔走に依つて之を實現し、ペルー大統領及び帝國公使參列の下に昭和元年盛大なる除幕式を擧げたことは、氏の面目の一端を語るものにして、該銅像は今猶ほ同地在留邦人の誇とする所である。信仰は基督教、趣味は讀書等である。
妻幸(明治一一年生、千葉縣鹽谷榮妹フェリス女學校卒)

鈴木　文吉氏　世田谷區羽根木一八二〇、電話松澤一五〇
西松組勤務
明治九年一二月生、東京府
氏は東京府士族鈴木壽承氏の二男として呱々の聲を揚げた。明治三十二年鐵道省に奉職し、同三十七年迄勤續したが、同年之を辭すると同時に臺灣總督府に入り、現交通局の前身たる鐵道部に勤務した。爾來大正十三年に至るまで同部に在りて各地の鐵道建設工事等に從事し、異境に健鬪すること實に二十年に亘り、その功績顯著であつた。同十三年臺灣總督府を辭すると同時に西松組に入社し、同組東京支店房總線出張所長として活躍し、その他に關係して敏腕を發揮し、以て今日に及んでゐる。資性潤達にして志操堅固、皇室中心主義を奉じて常に國體の精華發揚に努力し、或は對外同志會主幹、或は雜誌「日本」主筆、或は皇道義會々長等として多年活躍し、其の顯著なる功績は普く認められてゐる。現時前揭の要職に在り益々國家民人の爲めに建鬪しつ

岡山縣下實業界に確乎たる地步を占め昭和八年三月倉敷商工會議所會頭に推され以て今日に及んでゐる。信仰は眞言宗、趣味は圍碁、謠曲等である。
妻フミ(明治二三年生、廣島縣藤本德兵衞長女)長男大一郎(明治四四年生東京帝大法科在學)二男凌二(大正二年生、東京農大在學)四男靜夫(同一

でゐる。

清水　孫秉氏　滿洲國新京錦町四ノ二七

滿洲中央銀行文書課長

明治四一年明治大學商科卒業

氏は長野縣の出身にして、夙に明治大學商科に學び、卒業後臺灣銀行に勤務すること十三ヶ年に及んだ。此の間銀行に關する實務は勿論、貨幣、金融等に就いて深く研究し、又支那、南洋等に駐在し或は獨、佛等に巡遊して識見を廣めた。その後懇望されて母校明治大學講師となり、現交通局の前身たる鐵道部に勤務した。爾來大正十三年に至るまで同部に在りて各地の鐵道建設工事等に從事し、異境に健闘すること實に二十年に亘り、その功績顯著であつた。同十三年臺灣總督府を辭すると同時に西松組に入社し、同組東京支店房總線出張所長として活躍したが、昭和元年同組が本社を東京に移すと同時に本社詰となり、以て今日に及んでゐる。鐵道工事に關しては多年の經驗を有し、加ふるに資性溫厚にして社内外の信望厚く、今や益々西松組の發展に努力しつゝある。

妻テイ子（明治三一年生）長男文正（同四一年生、慶大卒）二男實（大正元年生、日本樂器會社員）

石井　三郎氏　澁谷區千駄ケ谷町四ノ六五八、電話四谷五六〇

正五位、衆議院議員、陸軍參與官

明治一三年二月生、茨城縣

氏は茨城縣石井宗三郎氏の弟として同縣久慈郡久米村に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。夙に上京して中央大學に學び、卒業後大藏省囑託として活躍したが後政界に志し、大正九年衆議院議員に當選した。爾來代議士たること三期政友會に屬して地歩次第に進み、昭和七年六月陸軍參與官に擧げられ、滿洲事變その他に關係して敏腕を發揮し、以て今日に及んでゐる。資性潤達にして志操堅固、皇室中心主義を奉じて常に國體の精華發揚に努力し、或は對外同志會主幹、或は皇道義會々長等として多年活躍し、其の顯著なる功績は普く認められてゐる。現時前掲の要職に在り益々國家民人の爲めに健闘しつゝある。

妻やす（明治三三年生、兵庫縣松本剛吉養子）男正治（大正三年生）

石井　熊夫氏　岡山縣倉敷市西榮町　電話　倉敷三五〇

倉敷商工會議所會頭、奬農土地（株）常務取締役、岡山電氣軌道（株）取締役

明治一二年七月生、廣島縣

氏は廣島縣石井英太郎氏の五男として同縣福山市に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に入り、其の烱眼と敏才相俟つて着々地歩を開拓し、同地方に於ける屈指の實業家として名聲を博するに至つた。その後大正十四年奬農土地株式會社の設立と同時に、株主の信望を負ふて常務取締役の重任に就いたが、爾來一意同社の發展に努力してその期待に背かず、益々その敏腕を認められるに至つた。一方同年設立されたる岡山電氣軌道株式會社に於ても取締役に選ばれ、兩社重役を兼ねて岡山縣下實業界に確乎たる地歩を占め昭和八年三月倉敷商工會議所會頭に推され以て今日に及んでゐる。信仰は眞言宗、趣味は圍碁、謠曲等である。

妻フミ（明治二三年生、廣島縣藤本德兵衞長女）長男大一郎（明治四四年生東京帝大法科在學）二男凌二（大正二年生、東京農大在學）四男靜夫（同一一年生）長女秀子（同一三年生）

春野芳子女史　東京市中野區朝日ケ丘二

西洋舞踊教授

明治四二年一月生、秋田縣

新進女流舞踊家として名聲嘖々たる女史は本名を布施艶子と呼び秋田縣布施長市氏の長女として同縣能代町に呱々の聲を揚げた。先天的に藝術的才能に秀いで、鄕里の能代高等女學校を卒業後大正十三年上京し、永井郁子、阿部秀子兩女史等に師事して聲樂を修めたが、後感ずる所ありて舞踊に轉じ、エリアナ・パヴロワに就いて專心西洋舞踊を研究した。技熟するや新舞踊家として淺草に出演し、その異常なる

ペルー國立農會理事、レッテス農事（株）社長、ワラル操綿工業（株）專務取締役

明治五年六月生、鳥取縣

氏は鳥取縣人森本常十郎氏の二男として鳥取市に生れた。長じて京都同志社に學んだが、明治二十七年中途退學して渡米し、桑港に日本新聞社を起し、後同社が北米新聞と合併し日米新聞となる迄そのビヂネス・マネージャーとして現法學博士米田實氏と共に活躍した。桑港に在ること三ヶ年にして歸朝し、大澤商店神戸支店に勤務したが、明治三十七年九月ほ同地在留邦人の誇とする所である。信仰は基督教、趣味は讀書等である。

妻幸（明治一一年生、千葉縣鹽谷榮妹フェリス女學校卒）

鈴木　文吉氏　世田谷區羽根木一八二〇、電話松澤一五〇

西松組勤務

明治九年一二月生、東京府

氏は東京府士族鈴木壽承氏の二男として呱々の聲を揚げた。明治三十二年鐵道省に奉職し、同三十七年迄勤續したが、同年之を辭すると同時に臺灣總督府に入

好評を嫉む多くの同業者の非難に屈せずして只管藝道に精進し、遂に今日の名聲を博するに至つた。二十歳の妙齢を以て獨立以來、或は公開の舞臺に立ち、或は個人教授を爲すること僅かに數年にして今日の地位を築き上げたるは、天才に加ふるに不斷の努力の然らしむる所にしてその得意とする古典のジヤズを始めとし新舞踊「歎きのセレナーデ」或は「タンゴ」「スパニッシュダンス」等は入神の技と稱へられ、前途の大成を期待されてゐる。信仰は眞宗、趣味は映畫、日本舞踊等である。

抱月庵昌言氏　東京市四谷區東信濃町一〇、電話四谷四二九
同　美惠女史
茶道石州流鎭信派指南
明治二二年八月生、福島縣
早稲田實業學校出身

氏は本名を伊藤隆三郎と呼び福島縣白河町に呱々の聲を揚げた。夙に青雲の志を抱いて上京早稲田實業に學び後郷里の實業界に投じ、少壯實業家として聲名を馳せた。性來風雅の道に嗜み、偶々石州流家元松浦伯が同地南湖神社の献茶の爲め大正十三年出張の際、請ひてその門を敲き、爾來茶道の研鑽に餘念なく、同門の逸足森翠松氏等にも師事して斯道に精進した。その後昭和三年上京し現所に新居を構えて以來松浦宗家に就いて斯道に專念し、克くその蘊奥を窮めて昭和七年秋免許を得爾來同門の長老近藤、森兩氏等の後を追ひ斯流の發展に努力以て今日に及んでゐる。又挿花に就ては一見識を有す。郷里白河には樂翁公遺蹟現名勝保存地南湖公園有り此の湖畔の蘿月庵と呼ぶ茶室は樂翁公御使用の席にして昔日のまゝ保存せるは同氏等の盡力によるものにして、園内の風光と相俟つて其の名顯はる。氏の入神の技は崇高なる人格と共に茶道界に普く識られてゐる。風流韻事往くとして佳ならざるはなく、謠曲は野島信氏に觀世流を學び以來二十餘年造詣淺からず、餘技に繪畫を好くす。洋畫壇の鬼才故中村彝畫伯と交り厚く又古徑青邨靱彦畫伯等と交遊有り、始め洋畫を研究し後日本畫に移り萩乃舍と號し、作る處のものは餘技の域を脱す。夫人も亦石州流鎭信派を究め氏と同時に免許を受け、相携へて斯流の發展に貢献しつゝある。

妻美惠（明治三一年生、福島市外野田村吉野周太郎三女、福島高女出身）長男千代雄（亡）二男信雄（大正八年生、慶應在學）長女輝子（明治四二年生、福島高女卒業、東京市渡邊氏に嫁す）二女兼子（大正五年生、九段精華高女在學）三女文子（同九年生、同上）

豐島美王麿氏　（自宅）麻布區谷町四八、電話赤坂一四六六（店舗）丸ノ内海上ビル、電話丸ノ内二九三四

豐島海事貿易(株)代表取締役、富士山商會（マール齒刷子同齒磨本舗）經營主

明治二五年一一月生、靜岡縣

當家は武藏の豪族豐島家の裔にして、先代豐島美喜保氏は幕府に仕へ、維新の際鳥羽の役を始めとし會津、函館等にて轉戰したが時利あらずして敗れ、靜岡縣藤枝の田中城に謹愼の身となり閉門を仰付けられた。氏はその三男として藤枝町に生れ、明治四十四年家督を嗣いだ。初め文學に志し東京帝大專修科、東京外國語學校等に學んだが、後實業界に入り大正六年山下汽船會社に入社し營業主任となり、同十四年辭して豐島海事貿易會社を創立し、後昭和七年富士山商會を起し兩社を經營以て今日に及んでゐる。豐島海事貿易會社は一般海運業及び鐵鑛の輸入を主とし、日本鋼管、富士製鋼、淺野製鋼其他の有力會社を顧客とし、富士山商會はマール齒磨及びマール齒刷子本舗として、共に隆況を呈してゐる。信仰は曹洞宗、趣味は競走馬の飼育等である。

妻直子（明治二九年生、東京府勝川智修長女、神田高女卒業）長女良子（大正七年生、東洋英和女學校在學）更と同時に代表社員となり以て今日に及んでゐる。信仰は眞宗、趣味は圍碁、將棊等である。

妻とく子（明治九年生、東京府萩原氏女）長男卯三郎（同三六年生）

音　正　古氏　小石川區小日向臺町三

する隱れたる恩人にして、曩に大正十三年日本赤十字社特別社員に列せられた。又語學の天才にして獨、英、佛、西等五ケ國に通じてゐる。趣味は草花等。

妻シゲ代（明治一七年生）養嗣子良夫（大正七年生、大阪府久保氏二男、東京府立四中在學）

茶道石州流鎭信派指南
明治二二年八月生、福島縣
早稻田實業學校出身

氏は本名を伊藤隆三郎と呼び福島縣白河町に呱々の聲を揚げた。夙に青雲の志を抱いて上京早稻田實業に學び後鄕里の實業界に投じ、少壯實業家として聲名を馳せた。性來風雅の道に嗜み、偶々石州流家元松浦伯が

の技は崇高なる人格と共に茶道界に普く識られてゐる。風流韻事往くとして佳ならざるはなく、謠曲は野島信氏に觀世流を學び以來二十餘年造詣淺からず、餘技に繪畫を好くす。洋畫壇の鬼才故中村彛畫伯と交り厚く又古徑靑邨靱彥畫伯等と交遊有り、始め洋畫を研究し後日本畫に移り萩乃舍と號し、作る處のものは餘技の域を脫す。夫人も亦石州流鎭信派を究め氏と同時に免許を受け、相携へて斯流の發展に貢獻しつゝある。

妻美惠（明治三一年生、福島市外野田村吉野周太郎三女、福島高女出身）長

轉戰したが時利あらずして敗れ、靜岡縣藤枝の田中城に謹愼の身となり閉門を仰付けられた。氏はその三男として藤枝町に生れ、明治四十四年家督を嗣いだ。初め文學に志し東京帝大專修科、東京外國語學校等に學んだが、後實業界に入り大正六年山下汽船會社に入社し營業主任となり、同十四年辭して豐島海事貿易會社を創立し、後昭和七年富士山商會を起し兩社を經營以て今日に及んでゐる。豐島海事貿易會社は一般海運業及び鐵鑛の輸入を主とし、日本鋼管、富士製鋼、淺野製鋼其他の有力會社を顧客とし、富士山

商會はマール齒磨及びマール齒刷子本舗として、共に隆況を呈してゐる。信仰は曹洞宗、趣味は競走馬の飼育等である。

妻直子（明治二九年生、東京府勝川智修長女、神田高女卒業）長女良子（大正七年生、東洋英和女學校在學）

富坂　與八氏

向島區吾嬬西町五ノ五七、電話墨田一一七三（自宅）千葉縣市川眞間二〇

富坂ゴム工業所(資)代表社員、東京ゴム工業組合理事

明治二年一一月生、新潟縣

氏は新潟縣下に生れ、明治十七年上京して日比谷平左衞門商店に入り實業界活躍の第一歩を踏んだ。同二十八年同店を辭して獨立し綿糸ブローカーを營み、同三十年新材木町に綿糸店を開き、大正十年迄之を經營した。此の間同三十七年より同三十九年迄群馬縣下に於て鑛山を經營し、同四十三年末にはシヤム綿花調査員として暹羅に航し、或は大正元年より同九年迄千葉縣船橋に於て鹽田を經營する等各方面に活躍した。又大正八年東洋調帶會社を創立し專務取締役となつたが大震災の爲め解散し、同十四年令兄の經營せる富坂ゴム工業所を讓受けて其の經營に專念し、昭和八年三月合資組織に變

更と同時に代表社員となり以て今日に及んでゐる。信仰は眞宗、趣味は圍碁、將棊等である。

妻とく子（明治九年生、東京府萩原氏女）長男卯三郎（同三六年生）

音　正古氏

小石川區小日向臺町三ノ一〇七

陸軍々醫學校講師、帝國女子醫學專門學校教授

明治一〇年生、オースタリー

明治三七年プラーグ大學醫學部卒業

氏はオーストリヤ人フアランス・ショーブル氏の三男として同國に生れた。プラーグ大學卒業後渡米し、フイラデルフイア、マルフオル會社血精研究所に於て細菌學等の研究を積み、後テンプルカリチ醫學專門學校教授となり、大正元年米國政府より比島マニラの農務天然資源科學局微生物細菌學部長を命ぜられて同地に赴任した。先天的に熱心なる親日家として、休暇の都度來朝し、マニラへ研究に赴きたる田邊醫學博士、平野軍醫正、森島醫學博士、草間醫學博士、齋藤醫學博士等は何れも氏の薫陶を受けた。昭和七年日本政府の招きに應じ陸軍々醫學校教官として來朝し、遂に日本に歸化することゝなりオツト・ショウブルの名を日本式に音正古と改めた。我が醫學界に對

する隱れたる恩人にして、曩に大正十三年日本赤十字社特別社員に列せられた。又語學の天才にして獨、英、佛、西等五ケ國に通じてゐる。趣味は草花等。

妻シゲ代（明治一七年生）養嗣子良夫（大正七年生、大阪府久保氏二男、東京府立四中在學）

大塚玉次郎氏

神田區須田町一ノ四

正七位、勳七等、帝室林野局令規係

慶應二年八月生、栃木縣

明治二六年東京法學院卒業

昭和八年度の辯護士試驗に、六十八歲の高齡を以て父子同時に合格の珍記錄を作りたる氏は栃木縣芳賀郡大內村字京泉六〇大塚寬治氏の五男として同所に生れた。明治二十年近衞步兵第一聯隊に入營し、下士適任證を受けて滿期退營後東京法學院に學び同二十七年日淸戰役に出征し、凱旋後一時歸鄕したが同三十年再度上京し、同三十二年文官高等試驗の豫備試驗に合格し同年地方裁判所書記となつた。同三十九年行政裁判所書記となり、大正二年之を

辭し同四年林野局文書係を拜命し、同五年訴訟掛に轉じ、後令規掛となり今日に及んでゐる。頭腦頗る緻密にして曾つて手續上の失敗等なく、研究心に富み、行政裁判所判決例等を完成し、昭和八年養子光氏と共に辯護士試驗に合格し天下を驚倒せしめた。宗旨は日蓮宗、趣味として讀書、圍碁、將棋等を好む。

妻千代子（明治元年生）養子光（同三三年生、兄豐治孫）長女慶子（同四〇年生、光妻、六妻高女卒業）

大塚　光氏　神田區須田町一ノ四

專修大學專門部講師
明治三三年生
昭和四年東京商科大學卒業

氏は大塚豐治氏の孫として呱々の聲を揚げた。夙に眞岡中學卒業後小樽高等商業學校に學び、大正十一年同校卒業後渡鮮し、朝鮮鐵道管理局營業課に奉職したが、同十四年十一月之を辭し、翌年東京商科大學に入學した。昭和四年優秀の成績を以て同大學を卒へ、專修大學に教鞭を執り、會計學を教授する傍ら法律を研究し、昭和八年養父大塚玉次郎氏と共に辯護士試驗に應じ僅かに一回にして合格し、父子同時合格の記錄を作つた。頭腦明晰にして前途の活躍を期待されてゐる趣味として俳句を好み、高味石田氏に師事し頗る堪能である。

大田　彥市氏　本郷區湯島新花町三四　電話　小石川九七四

大田計器製作所主
明治二九年八月生、山口縣
大正四年海城中學校卒業

氏は山口縣大田兼吉氏の三男として同縣阿武郡に呱々の聲を揚げた。夙に上京して海城中學に學び、卒業後佐野莊夫氏に就いて計量器の製作を見習ふ傍ら熱心に研究を積み、大正八年獨立して大田計器製作所を設立した。爾來多年の蘊蓄を傾けて氣象機械、海洋觀測機、計量器等の製作に心血を濺ぎ、從來に見ざる精巧正確なる逸品を製出して漸次各方面に認められ、斯業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。今や中央氣象臺、帝國大學及び陸海軍工廠等の指定工場となり、又朝鮮總督府專賣指定工場に選ばれ、その製品は測候所、水產試驗場、各學校、陸海軍航空本部及び一般民間に確實なる販路を擁し、業績隆盛を極めてゐる。禪宗を信仰し、計量器研究が唯一の趣味である。

妻クニ（明治三七年生、東京府高橋伊太郎長女）長男利彥（大正一二年生）二男實藏（同一五年生）長女九重子（同九年生）二女和江（昭和三年生）

各務　鎌吉氏　小石川區大塚窪町二　電話小石川九六四(2)

正六位、貴族院議員、東京海上火災、東明火災海上、明治火災、三菱海上火災、近海郵船、三菱信託各(株)會長、日本郵船(株)社長、日清汽船、東京報知機、大福海上火災、東京サルヴェージ、辰馬海上火災、スタンダード・インシュアランス・コンパニー・オブ・ニューヨーク、スタンダード・シュアチー・エンド・カジュアルチー・コンパニー、オブ・ニューヨーク各(株)取締役、三菱銀行(株)監査役、東洋海上火災、大倉火災海上、大連火災各(株)相談役、福壽火災(株)顧問
日本海員拔濟會理事
明治元年一二月生、東京府
明治二一年東京高等商業學校卒業

氏は各務幸一郎氏の弟に生れ、明治三十三年分家した。學業を終へるや直ちに實業界に入り、その敏腕を以て著々擡頭し、三菱系諸事業に廣く關係して我が財界の第一線に活躍すること多年、夙に斯界の重鎭として自他共に許し、現時前揭の要職を兼ねて益々雄飛しつゝある。

妻繁尾（明治一三年生、東京府士族藤岡正信妹）養子孝平（同二八年生、東京府莊田達彌弟）同妻惠美子（同四一年生、京都府西野惠之助三女）同長女鶴子（昭和六年生）長女光子（明治三七年生、鳥取縣澤田退藏妻）

河上鈴子女史　京橋區銀座六ノ四　電話　銀座三七九六・三七七

西洋舞踏家
明治三七年七月生、東京市

天才に加ふるに多年の練磨を以てせる女史の至藝は夙に普く認められ、就中古典的舞踊に於ては斯界有數の名手と稱せられてゐる。趣味は舞踊研究、ゴルフ等である。

吉松　貞彌氏　大森區上池上町一〇七　電話　荏原三七八一

吉松貞彌商店（寫眞製版能率增進用機械及藥品販賣）店主、獨逸ウバクローム會社日本代表者

氏は青年時代より勞働問題の研究家として知られ、大正四年柔港に於て開催さ

氏は大塚豐治氏の孫として呱々の聲を揚げた。夙に眞岡中學卒業後小樽高等商業學校に學び、大正十一年同校卒業後渡鮮し、朝鮮鐵道管理局營業課に奉職したが、同十四年十一月之を辭し、翌年東京商科大學に入學した。昭和四年優秀の成績を以て同大學を卒へ、專修大學に教鞭を執り、會計學を教授する傍ら法律を研究し、昭和八年養父大塚玉次郎氏と共に辯護士試驗に應じ僅かに一回にして合格し、父子同時合格の記錄を作つた。頭腦明晰にして前途の活躍を期待されてゐる

鶴子（昭和六年生）長女光子（明治三七年生、鳥取縣澤田退藏妻）

河上鈴子女史　京橋區銀座六ノ四　電話　銀座三七九六・三七三七

西洋舞踏家

明治三七年七月生、東京市

女史は故宮田信一氏の二女として東京市麴町區富士見町に呱々の聲を揚げた。宮田氏は日清汽船會社に勤務し、後海運業を營み一時上海に居住したる關係上女史も亦上海に住み、同地のパブリックスクールに學んだ。舞踊は幼時より趣味深く、七歳の頃より墺太利人マダム・ケルビー、露國人マダム・コルチョスカヤー、伊太利某等の名手に師事して斯道の蘊奥を窮めた。その後北米、南洋、歐洲諸國等のステーヂに立ちて好評を博し傍ら各國大家に就いて益々技を磨き、昭和六年二月歸朝した。歸朝後直ちに日本劇場の舞踊師となり、多摩川原教授場に於て後進の養成に當つてゐたが、同七年十二月之を辭し、現住地に舞踊研究所を設け、爾來門下生の指導に努力しつゝ今日に及んでゐる。

天才に加ふるに多年の練磨を以てせる女史の至藝は夙に普く認められ、就中古典的舞踊に於ては斯界有數の名手と稱せられてゐる。趣味は舞踊研究、ゴルフ等である。

吉川　浩氏　麴町區紀尾井町八

工學士、トキワ鉛工業(株)取締役

明治一六年一月生、茨城縣

明治三九年東京帝大工科卒業

氏は茨城縣吉川瑛氏の長男として呱々の聲を揚げ、明治二十五年十歳の幼時家督を相續した。夙に上京して東京帝國大學工科に學び、採鑛冶金學を專攻し拔群の成績を以て同大學を卒業した。卒業後懇望されて母校に教鞭を執ること久しく篤學博識の教授として聲望を博した。大正九年學界を去つて實業界に入り、多年の研究を傾けて實地に應用すると共に更に研鑽を積み、業界の發展に貢獻以て今日に及んでゐる。トキワ鉛工業會社が、本邦空前の逸品を製出し名聲嘖々たるは氏の努力に負ふ所莫大である。

妻ハナ子（明治二三年生、貴族院議員元田肇長女）長男浩一郎（大正元年生）三男浹（同九年生）四男洸（同一一年生）長女靜子（明治四四年生）二女尊子（大正三年生）

氏は各務幸一郎氏の弟に生れ、明治三十三年分家した。學業を終へるや直ちに實業界に入り、その敏腕を以て着々擡頭し、三菱系諸事業に廣く關係して我が財界の第一線に活躍すること多年、夙に斯界の重鎭として自他共に許し、現時前揭の要職を兼ねて益々雄飛しつゝある。

妻繁尾（明治一三年生、東京府士族藤岡正信妹）養子孝平（同二八年生、東京府莊田達彌弟）同妻惠美子（同四一年生、京都府西野惠之助三女）同長女

められ、斯業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。今や中央氣象臺、帝國大學及び陸海軍工廠等の指定工場となり、又朝鮮總督府專賣指定工場に選ばれ、その製品は測候所、水產試驗場、各學校、陸海軍航空本部及び一般民間に確實なる販路を擁し、業績隆盛を極めてゐる。禪宗を信仰し、計量器研究が唯一の趣味である。

妻クニ（明治三七年生、東京府高橋伊太郎長女）長男利彥（大正一二年生）二男實藏（同一五年生）長女九重子（同九年生）二女和江（昭和三年生）

吉松　貞彌氏　大森區上池上町一〇七三　電話　荏原三七八一

吉松貞彌商店（寫眞製版能率增進用機械及藥品販賣）店主、獨逸ウバクローム會社日本代表者

氏は青年時代より勞働問題の研究家として知られ、大正四年柔港に於て開催されたる萬國博覽會勞働大會には鈴木氏と共に帝國を代表して出席し、勞働問題を通じて日米親善に寄與したる功績顯著であつた。代表たる使命を果して後も依然米國に滯留して勞働問題を研究し、傍ら製版術を學び、大正十一年歸朝した。同十三年製版術を專門的に研究する爲め再度渡米し、斯術の蘊奥を究めて昭和三年歸朝した。爾來製版能率增進用機械及び藥品の販賣に從事し、特許吉松式腐蝕機同サンコールドエナメル其他各種優良品の普及に努め、特に我が新聞界に腐蝕機の使用効果を宣傳し、出版界、印刷界乃至製版界等の發展に貢獻しつゝ今日に及んでゐる。

高畑小十郎氏　豐島區巢鴨町六ノ一四七〇　電話　大塚二九六〇

金門商會(株)支配人

明治一八年三月生、京都府

氏は京都府人高畑倉造氏の長男として同府內に呱々の聲を揚げ、明治三十九年

その家督を相續した。長ずるに及んで教育界に志し、京都府師範に入學し優秀の成績を以て卒業したが、後實業界に轉向すべく上京して東京物理學校に學んだ。同校を卒業後金門商會に入社し、誠實本位に勤務して次第に認められ、漸次累進支配人に擧げられ、現にその職に在つて同商會の發展の爲めに益々活躍しつゝある。資性溫厚篤實にして而も商機に長け業界稀に見る人格者として尊敬されてゐる。宗旨は禪宗、趣味は旅行等。

妻乃ぶ江（明治二八年生、京都高女卒）長男生一（大正六年生）二男益道（同一二年生）三男恒夫（昭和三年生）

高橋　美正氏　下谷區御徒町一ノ一三　電話下谷六〇七

泰信商會主、東家旅館及福島保險倶樂部經營

慶應三年三月生、岩手縣

氏は岩手縣人高橋連平氏の二男として同縣和賀郡湯田村に生れ、明治三十七年十一月分家した。岩手師範學校卒業後實業界に志して上京し、明治十九年第一國立銀行に入り各支店に勤務し、故澁澤榮一子の推薦に依り同二十八年有隣生命保險會社に入社した。爾來大阪、札幌、博多等の各支店長を歷任し、後本社營業部長に進み在社三十年に及んだ。大正十年同社を辭し若尾家の懇望に依り三ツ引商事株式會社の常務取締役となつたが、昭和四年之を辭して泰信商會を創設し、保險代理業を營む傍ら、大正十三年以來夫人をして東家旅館を經營せしめ、或は自宅に福島保險倶樂部を設け、東北、北海道方面の有志その他の便宜を圖り、以て今日に及んでゐる。溫厚にして公共心に富み、保險界に活躍中は克く後進を庇護し、又常に鄕黨後輩の爲め斡旋の勞を厭はず、信望を博してゐる。

妻りん（明治九年生）

高田　悅三氏　日本橋區坂本町一八　電話浪花四三(7)

金高株式店主、東京株式取引所一般短期實物取引員

明治一八年四月生、東京府

氏は東京府高田安太郎氏の四男として呱々の聲を揚げ、後分家した。夙に株式界に投じて斯業に關する經驗を積み、後獨立して金高商店を起し、株式その他有價證券の賣買を開始した。斯界先進業者の間に伍して奮鬪努力し、信用本位の取引に依つて漸次顧客の信用を高め、徐々ながら堅實なる發展を遂げ、帝都に於ける證券界に普くその存在を認められるに至つた。現時東京株式取引所の一般短期及び實物の各取引員として益々活躍し、同業者の信望厚く、又顧客の信任裡に業績日に向上の一路を辿つてゐる。

妻たけ（明治二四年生、東京府相澤繁藏二女）長男增太郎（大正二年生）二男繁夫（同六年生）

上島　慶篤氏　大連市春日町一六

大華電氣冶金公司（資）代表者、大華工具（株）取締役

氏は長野縣の出身にして夙に上京して學業を修め、學成るや滿蒙飛躍の雄志を抱いて明治四十年渡滿し、南滿洲鐵道會社に入社した。同社に於ては電氣技師として活躍したが、更に研究を積んで國家的に貢獻せんとし、歐洲に航しベルリン大學に於て諸大家の指導の下に孜々として研究を勵み、後歐米諸國を巡遊して歸朝した。此の間に於ける不斷の研磨と更に歸朝後に於ける熱心なる研究の結果遂に前人未踏の境地を拓き、世界に誇るに足る硬度鋼の發明に成功し、國防上及び工業的に甚大なる貢獻を爲し、克くその初志を貫徹した。昭和八年十一月多年國防に貢獻せる功勞に依り觀菊御宴に召されたるは、氏の感激措かざる所である。今や前掲の職に在つて益々活躍しつゝあるが、餘技として支那周代の銅器、宋代の靑磁、唐宋畫、六朝の石刻、奏代の鏡等の蒐集鑑定を好み、同好者間に名聲を博してゐる。

空閑　綠氏　京橋區銀座二趣後屋ビル、電話京橋七四〇・七四一

日本麻雀聯盟、日滿麻雀聯盟各總裁

明治一六年五月生、福岡縣

書課長たる傍ら日支外交の裏面に活躍し後滿鐵を辭し義兄田中末雄氏經營の山東興業及び田中商事兩社の重役となつた。一方故本山彥一氏の信認を得、靑島の本山別莊の建設管理を委ねられ、又大每、東日の特派員を兼ね、同地實業界操觚界

明治二二年九月生、三重縣

明治四五年海軍經理學校卒業

氏は三重縣山本伊之助氏の長男として同縣阿山郡布引村に生れた。海軍經理學校卒業後大正三年軍艦石見に乘組み靑島攻擊に參加し、後臨時靑島要港部、軍艦

泰信商會主、東家旅館及福島保險倶樂部經營

慶應三年三月生、岩手縣

氏は岩手縣人高橋連平氏の二男として同縣和賀郡湯田村に生れ、明治三十七年十一月分家した。岩手師範學校卒業後實業界に志して上京し、明治十九年第一國立銀行に入り各支店に勤務し、故澁澤榮一子の推薦に依り同二十八年有隣生命保險會社に入社した。爾來大阪、札幌、博多等の各支店長を歷任し、後本社營業部長に進み在社三十年に及んだ。大正十年明治一八年四月生、東京府

氏は東京府高田安太郎氏の四男として呱々の聲を揚げ、後分家した。夙に株式界に投じて斯業に關する經驗を積み、後獨立して金高商店を起し、株式その他有價證券の賣買を開始した。斯界先進業者の間に伍して奮鬪努力し、信用本位の取引に依つて漸次顧客の信用を高め、徐々ながら堅實なる發展を遂げ、帝都に於ける證券界に普くその存在を認められるに至つた。現時東京株式取引所の一般短期及び實物の各取引員として益々活躍し、

て研究を勵み、後歐米諸國を巡遊して歸朝した。此の間に於ける熱心なる研究の結果遂に前人未踏の境地を拓き、世界に誇るに足る硬度鋼の發明に成功し、國防上及び工業的に甚大なる貢献を爲し、克くその初志を貫徹した。昭和八年十一月多年國防に貢献せる功勞に依り觀菊御宴に召されたるは、氏の感激措かざる所である。今や前掲の職に在つて益々活躍しつゝあるが、餘技として支那周代の銅器、宋代の青磁、唐宋畫、六朝の石刻、奏代の鏡等の蒐集鑑定を好み、同好者間に名聲を博してゐる。

空閑　綠氏　京橋區銀座二趣後屋ビル、電話京橋七四〇・七四一

日本麻雀聯盟、日滿麻雀聯盟各總裁

明治一六年五月生、福岡縣

氏は福岡縣朝倉郡の出身にして前名を知鶩治と呼んだ。早稻田大學政治經濟科に學び、日露戰役には第一軍梅澤混成旅團司令部に屬し經理事務の傍ら通譯として活躍し、凱旋後滿鐵撫順炭坑に勤務し明治四十四年同社より英國に留學を命ぜられ、東伏見宮同妃兩殿下、東郷、乃木兩將軍一行と共に渡歐し、滿洲日々新聞倫敦特派員を兼ね、ジョージ五世戴冠式其他の重要記事を送り、ペンネーム綠苑の名聲を馳せた。後英米獨佛白墺匈各國の鐵道、港灣鑛山、或は勞働問題、德育問題等を調査して滿鐵に歸社し秘書役となり、米國ペンシルバニヤに於ける露天堀の坑法を撫順炭坑に移して同炭坑の發展に寄與し、日獨戰役後同社より山東鐵道に派遣され青島守備軍民政部鐵道事務官、鐵道部秘書課長たる傍ら日支外交の裏面に活躍し後滿鐵を辭し義兄田中末雄氏經營の山東興業及び田中商事兩社の重役となつた。一方故本山彥一氏の信認を得、青島の本山別莊の建設管理を委ねられ、又大每、東日の特派員を兼ね、同地實業界操觚界に活躍した。大正十三年鄕里より推されて代議士に立候補したが、中途勇退して上京し、東京麻雀會を組織し、名門等に出張教授し、或は機關誌を發行して斯技の普及に努力し、昭和二年以來屢々麻雀大會を開催し、後四谷より銀座に本部を移し、每月大會を開き又月刊誌麻雀春秋を發行した。一時大會には二百五十卓の大競技が行はれ、麻雀春秋の發行部數二萬五千部に達した。此の間麻雀賭博排擊の爲め段位制を設けてその健全なる發達に資し、大衆化、スポーツ化に努め、又日本麻雀聯盟を組織し伊達侯、濱尾子、大岡子、稻田男等知名の士を役員とし、全國に支部、指定道場加盟團體等を設け更に大連に日滿麻雀聯盟を設ける等、益々斯技の普及に盡瘁以て今日に及び、斯界の第一人者として信望を博してゐる。

山本丑之助氏　大森區新井宿二ノ一四八二

從五位、勳四等、海軍主計大佐、海軍々令部及海軍省勤務

明治二二年九月生、三重縣

明治四五年海軍經理學校卒業

氏は三重縣山本伊之助氏の長男として同縣阿山郡布引村に生れた。海軍經理學校卒業後大正三年軍艦石見に乘組み青島攻擊に參加し、後臨時青島要港部、軍艦八雲、橫須賀海軍經理部等に勤務し、同七年軍艦新高に乘組み南亞ケープタウン方面の警備に從事し、後舞鶴海軍工廠、軍艦八雲、德山海軍燃料廠等に歷勤し、同十二年造船造兵監督會計官に任ぜられ英國に出張を命ぜられた。同十五年歸朝後海軍艦船本部、海軍經理局等に出仕し昭和六年ジュネーブの一般軍縮會議に全權隨員として派遣され、同八年九月歸朝後海軍々令部及び海軍省に勤務し以て今日に及んでゐる。溫厚潤達にして身を持すること謹嚴「一日一忍」を處世訓とし典型的武人として信望がある。

妻貞子（明治三三年生、三重縣阿山郡山田村出身、大阪府立淸水谷高女卒）

長女佐紀子（大正一〇年二月生、山脇高女在學）

前田　直造氏　牛込區市ヶ谷砂土原町二ノ一、電話牛込五〇〇〇

從四位、勳四等、法學士、滿洲電信電話(株)社長

明治一六年三月生、三重縣

明治四二年東京帝大法科卒業
氏は三重縣前田保氏の三男として同縣下に生れ、大正三年分家した。幼時より俊才の譽れ高く、鄉里の中學卒業後第一高等學校を經て東京帝國大學に學び、卒業の翌明治四十三年文官高等試驗に合格し、同四十四年遞信局書記官となり、後遞信事務官補、遞信局副事務官、遞信局事務官、遞信書記官、遞信局電話課長、電務局規畫課長等を經て昭和二年仙臺遞信局長を拜命し東京遞信局長に轉じた。後之を辭し昭和七年一月滿洲電信電話株式會社設立されるや其社長となり、滿洲國の通信界發達に努力以て今日に及んでゐる。眞宗を信仰し謠曲に趣味がある。
妻さゑ（明治二二年生、三重縣小津六三郎妹）嗣子直典（大正四年生）四男饒（同六年生）五男浩（同九年生）六男直之（同一一年生）長女みゑ（同一四年生）七男直昭（昭和二年生）

增本芳太郎氏　澁谷區原宿一七〇　電話　青山四七九二
東京砂糖取引所理事、日本砂糖貿易(株)專務取締役、北滿製糖(株)常務取締役
明治二一年一〇月生
明治四五年東京高等商業學校卒業
氏は先代增本德太郎氏の長男に生れ、大正九年その家督を相續した。夙に實業界に志し東京高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに增田貿易會社に入社し、東京支店員として活躍した。大正九年日本砂糖貿易株式會社に轉じて以來、同社の發展に努力すること久と共に砂糖業界の發展に努力すること久しく、斯界に普く名聲を博するに至つたその後高津久右衞門氏と共に北滿製糖株式會社を設立して滿蒙產業の開發に貢獻する所尠なからず、現時前掲の要職に在つて益々糖業界に活躍しつゝある。趣味として能樂を好む。
妻はな（明治三〇年生、靜岡縣佐野久太郎長女、三崎高女卒）長男良夫（大正六年生）長女せつ子（同九年生）二女廣子（同一四年生）

前田　宗松氏　（自宅）麴町區五番町六　（會社）神田區錦町三ノ三五、電話神田三四五
文成社(印刷業)社長、東京印刷同業組合神田支部常任幹事
明治二三年六月生、福井縣
氏は福井縣人前田嘉左衞門氏の三男として、同縣今立郡南中山村字南中津山に呱々の聲を揚げた。家は半農半機業にして長兄嘉吉氏は日露戰役に出征して名譽の戰死を遂げ、次弟富士太郎氏が家督相續者となつてゐる。氏は夙に青雲の志を抱いて上京し、三秀社に入り專心業務に精勵したる効果空しからず、同社支配人に擧げられた。同社に勤務すること二十ケ年に及び、大正十三年十一月辭任すると同時に現在の地に文成社を創立して其の經營に專念し、昭和八年七月資本金十萬圓の株式組織に改め、爾來逐年發展以て現在に至つた。宗旨は一向宗、趣味はスポーツ等である。
妻つぎよ（明治三一年生、福井縣平松氏二女、敦賀實科高女卒）長男榮一（大正一一年生）二男秀郎（同一三年生）三男靖郎（同一五年生）長女嘉代（大正八年生）二女惠美（昭和七年生）

日下部鉦次郎氏　大連市鳴鶴臺一一九　電話　大連八〇八〇
從五位、勳六等、工學士、關東廳遞信局工務課長
明治二九年一月生、愛知縣
大正八年東京帝大工科電氣科卒業
關東廳遞信局に活躍すること多年、その練達の技と溫厚なる人格と相俟つて名聲嘖々たる氏は、明治二十九年一月二日名古屋市內に呱々の聲を揚げた。幼時より明晰なる頭腦と進取の氣魄を以て將來を囑望され、東京帝國大學に進んで電氣學を修めるに及んで其の鋒鋩は益々現はされた。拔群の好成績を以て大學の業を卒へるや、直ちに大阪遞信局に奉職し、後廣島遞信局に轉じ、更に大正十二年末關東廳に轉じた。爾來精勵恪勤以て今日に及び、現時工務課長の要職に在つて益々活躍しつゝある。

福川　忠平氏　芝區白金今里町九六
四一年生）女ふみ（同四二年生）女みつ（同三八年生、靜岡縣杉村七郎妻）養子壽惠（同二四年生、群馬縣中山博妻）

淺野芳五郎氏　芝區白金三光町八八
ある。
妻トク子（秋田縣人）長男正勇（大正元年生、東京工藝專修卒）外に四男四女あり。

佐谷　台二氏　赤坂區青山高樹町八　電話　青山一七〇

饒（同六年生）五男浩（同九年生）六男直之（同一一年生）長女みゑ（同一四年生）七男直昭（昭和二年生）

増本芳太郎氏　澁谷區原宿一七〇　電話　青山四七九二

東京砂糖取引所理事、日本砂糖貿易(株)專務取締役、北滿製糖(株)常務取締役

明治二一年一〇月生

明治四五年東京高等商業學校卒業

氏は先代増本德太郎氏の長男に生れ、大正九年その家督を相續した。夙に實業

前田　宗松氏　（自宅）麹町區五番町六　（會社）神田區錦町三ノ三五、電話神田三四五

文成社(印刷業)社長、東京印刷同業組合神田支部常任幹事

明治二三年六月生、福井縣

氏は福井縣人前田嘉左衞門氏の三男として、同縣今立郡南中山村字南中津山に呱々の聲を揚げた。家は半農半機業にして長兄嘉吉氏は日露戰役に出征して名譽の戰死を遂げ、次弟富士太郎氏が家督相續者となつてゐる。氏は夙に青雲の志を

工務課長

明治二九年一月生、愛知縣

大正八年東京帝大工科電氣科卒業

關東廳遞信局に活躍すること多年、その練達の技と溫厚なる人格と相俟つて名聲嘖々たる氏は、明治二十九年一月二日名古屋市内に呱々の聲を揚げた。幼時より明晰なる頭腦と進取の氣魄を以て將來を囑望され、東京帝國大學に進んで電氣學を修めるに及んで其の鋒鋩は益々現はされた。拔群の好成績を以て大學の業を卒へるや、直ちに大阪遞信局に奉職し、後廣島遞信局に轉じ、更に大正十二年末關東廳に轉じた。爾來精勵恪勤以て今日に及び、現時工務課長の要職に在つて益々活躍しつゝある。

福川　忠平氏　芝區白金今里町九六　電話　高輪一三九七

トキワ鉛工業(株)取締役

明治七年三月生、靜岡縣

氏は靜岡縣人福川泉吾氏の長男として同縣下に生れ、明治三十二年その家督を相續した。敏腕達識にして夙に財界に投じ、着々產を起し名聲を馳せ、福川汽船會社を設立し、入山採炭會社を新設し、その社長として活躍し、或は朝鮮電氣興業會社の創立に參劃し同社監査役に選ばれる等、既往に於ける活躍は著しきものであつた。現時はトキワ鉛工業株式會社の取締役として專ら同社の發展に意を注ぎ、鉛工業界の發展延いて我が國產の振興に貢獻しつゝある。多年實業界に活躍したる顯著なる功勞に對し昭和二年五月紺綬褒章を下賜された。趣味として寫眞撮影を好む。

妻倭文（明治一二年生、靜岡縣中山曹一郎長女）長男陸平（同四四年生）二男正三（大正三年生）三男成平（同六年生）四男士郎（同八年生）女よし（同四一年生）女ふみ（同四二年生）女みつ（同三八年生、靜岡縣杉村七郎妻）養子壽惠（同二四年生、群馬縣中山博妻）

淺野芳五郎氏　芝區白金三光町八八

警視廳愛宕署勤務、赤十字社請願巡査

明治七年二月生、群馬縣

明治三六年東京法學院卒業

氏は群馬縣勢多郡木瀨村大字小島田淺野音次郎氏の五男として同地に生れ、幼時兩親と共に現住地に移轉した。東京法學院に學び、大正二年四月警視廳巡査を拜命し、同八年四月警部補に榮進して高輪署に勤務し、翌年十一月退職したが同十二月再び巡査を拜命して愛宕署勤務となり、赤十字社請願巡査として今日に及んでゐる。之より先き東京法學院卒業後辯護士を志し、明治三十六年以來幾度か辯護士試驗に失敗したが、不撓不屈初志を貫徹せざれば止まざる悲壯なる決心を以て試驗に臨み、遂に昭和八年二十九回目の試驗に六十歲の老齡を以て合格したその意氣、その努力は將に薄志弱行の徒輩を奮起せしむるに足る生きたる教訓として天下の稱讃を博した。信仰は天台宗及び儒教、趣味は園藝、盆栽、書畫等である。

妻トク子（秋田縣人）長男正勇（大正元年生、東京工藝專修卒）外に四男四女あり。

佐谷　台二氏　赤坂區青山高樹町八　電話　青山一七〇

從五位、勳五等、法學士、遞信監察官、東京遞信局長

明治二〇年四月生、京都府

大正二年東京帝國大學法科卒業

氏は京都府士族佐谷代氏の六男として同府加佐郡舞鶴に呱々の聲を揚げ大正十五年分家した。當家は代々舞鶴藩に仕へたる名門である。帝大卒業の大正二年文官高等試驗に合格して直ちに官界に入り遞信事務官補となり、續いて臨時電信電話建設局事務官、遞信局事務官等に歷任し、漸次その敏腕を認められるに至つた大正十四年英國に留學し、歸朝後遞信局書記官となり、爾來廣島、大阪及び東京の各遞信局監督課長を歷任して昭和七年四月遞信監察官、大臣官房監察課長に任ぜられ、更に同八年東京遞信局長に拔擢された。宗旨は淨土宗、趣味は謠曲、圍碁、乘馬、撞球等頗る廣汎である。

妻菊子（明治三二年生、理學博士坪井誠太郎妹、お茶ノ水高女卒）

澤本　與一氏　芝區白金今里町四五　電話　高輪一六三〇

衆議院議員、東京市助役

明治一三年五月生、山口縣

明治三一年早稲田大學邦語政治科卒業

氏は山口縣澤本浪平氏の長男として同縣下に生れ、大正二年家督を嗣いだ。夙に早稲田大學に學び、政治及び法律を研究し、卒業後直ちに讀賣新聞記者となり後新潟新聞主筆に聘せられて操觚界に敏腕を揮つたが、その後司法大臣秘書官に拔擢され更に鐵道大臣秘書官となるに及んで漸次政治に興味を增し、政治家として起つに至つた。昭和三年衆議院議員に選ばれて以來、代議士たること三期に及び、民政黨內に漸次重きをなし、昭和七年六月外務參與官に任ぜられた。同八年牛塚東京市長の就任後望まれて第二助役となり、市政の刷新に努力以て今日に及んでゐる。宗旨は眞宗、趣味として特に將棋を好む。

妻よね（明治一四年生、岐阜縣馬淵德右衞門四女）長男淳（大正五年生）二男義雄（同七年生）姉トミ（明治六年生、山口縣武田忠治郎妻）弟祐明（同一七年生、叔父友助養子）

坂　寅造氏　荒川區日暮里七ノ二九三　電話　下谷二二一二一

日東化學工業所（資）代表社員

明治三八年一〇月生、青森縣

昭和五年東京商工學校工業化學科卒業

氏は青森縣南津輕郡石川町字大澤の工藤彌次右衞門氏の二男として同所に呱々の聲を揚げ、昭和二年東京府坂穎三郎氏の養子となつた。同年八月合資會社日東化學工業所の設立と同時に同社に入り、代表社員たる養父を援けて其の發展に努力し、同八年四月養父の後を襲つて代表社員に就任し以て今日に及んでゐる。夙に東京商工學校工業化學科に學び、更に卒業後も絕えず研究を積んで學理的に通曉すると共に、多年同社に在りて實地經驗に富めるを以て、氏の努力に依つて社運逐年隆盛となり、遂に現在の隆況を呈するに至つた。資性溫厚篤實にして信望を博し、而も前途春秋に富み經營の才に秀で、一大飛躍を期待されてゐる。

妻タケ（明治四〇年生、養父坂穎三郎二女）

金　壁　東氏　滿洲國新京興運路公館　電話　新京三〇〇九

滿洲國新京特別市長

光緒二一年（明治二八年）生、北京

氏は清朝の末期に活躍したる肅忠親王の第七王子として北京に呱々の聲を揚げた。親王の感化を受けて幼少の頃より親日思想を抱き又滿蒙獨立の大望を有し、北京陸軍貴胄學校（幼年學校）卒業後大正四年二十歲の若冠を以て親王に代り蒙古に入り、滿蒙獨立運動に參劃し、パプチヤツプ將軍と謀り張作霖討伐に向つたが失敗した。依つて再興の機を待つため下野し同六年振武學校に入學し政治經濟を學んだが、二十三歲の時中國の暴政を見るに忍びず、其壓迫を逃れる爲日本に留學し滯日六ケ年に亘り、此の間福島大將、大木遠吉伯、川島浪速氏其他朝野の名士と交つて益々親日感を增し、同十年歸國した。爾來日本の援助に依つて滿蒙の獨立を策し、或は清室王公遺產整理辯事處を設け、或は滿蒙維持會を組織して其の機會を待つたが、容易に其の志は達せられなかつた。茲に於て直接日本の力を藉り滿蒙の資源を開發し、以て將來に備へんとし興安區屯墾公署顧問となり、滿鐵の諒解を得て每年十萬の移民を興安區に送り、百萬に達したる後之を地盤として滿蒙の獨立に進まんとし其の事業に着手した。然るに着手後一年にして滿洲事變突發し、滿蒙獨立の機熟したるを以て、直ちに吉林省長官熈洽氏等と共に獨立運動を起し、先づ長春市政籌備處長に就任し、續いて吉長吉敦鐵道管理局長となり、其烱眼敏腕を以て畫策至らざるなく、遂に克く初志を貫徹した。かくて滿洲國家成るや首都新京の特別市長に任ぜられ、又特任執政府內務官として新國家の基礎確立に努力し、以て今日に及んでゐる。

宮地　秀一氏　世田谷區北澤四ノ三七

九年生、海城中學在學）三女支那子（同元年生、府立第三高女卒）四女美津子（同三年生、女子學院卒）長女美枝子（明治三三年生、大阪梅田高女卒、福島紡績鳥取分工場長久保理一妻）二女幸子（同四三年生、東京府立第三高女卒、高砂工業社員宮崎廣夫妻）

一三年生）三女修（同一四年生）四女妙（同一五年生）六女道（昭和四年生）

鈴木彥兵衞氏　日本橋區長谷川町一九　電話　浪花四〇三七(2)

鈴彥商店主

慶應三年一二月生、愛知縣

牛塚東京市長の就任後望まれて第二助役となり、市政の刷新に努力以て今日に及んでゐる。宗旨は眞宗、趣味として特に將棋を好む。

妻よね（明治一四年生、岐阜縣馬淵德右衛門四女）長男淳（大正五年生）二男義雄（同七年生）姉トミ（明治六年生、山口縣武田忠治郎妻）弟祐明（同一七年生、叔父友助養子）

坂　寅造氏　荒川區日暮里七ノ二九三　電話　下谷二二一二

を博し、而も前途春秋に富み經營の才に秀で、一大飛躍を期待されてゐる。

妻タケ（明治四〇年生、養父坂潁三郎二女）

金　壁　東氏　滿洲國新京興運路公館　電話　新京三〇〇九

滿洲國新京特別市長

光緒二一年（明治二八年）生、北京

氏は清朝の末期に活躍したる肅忠親王の第七王子として北京に呱々の聲を揚げた。親王の感化を受けて幼少の頃より親しく、遂に克く初志を貫徹した。かくて滿洲國家成るや首都新京の特別市長に任ぜられ、又特任執政府内務官として新國家の基礎確立に努力し、以て今日に及んでゐる。

宮地　秀一氏　世田谷區北澤四ノ三七七

國產放熱器（株）支配人、煖房協會理事

明治一〇年四月生、兵庫縣

明治三七年東京法學院卒業

氏は兵庫縣士族宮地高禮氏の長男として同縣赤穗郡相生町に呱々の聲を揚げ、明治十七年家督を相續した。學業を卒へるや直ちに有馬組に入り、會計監督として其の發展に努力したが、大正二年高砂工業會社に轉じ、庶務課長となつた。昭和六年高砂工業其他煖房器製造業者が製品共同販賣の目的を以て國產放熱器株式會社を設立すると同時に、同社支配人に擧げられ、爾來引續きその職に在る傍ら煖房協會理事を兼ね、煖房業界の統制と健全なる發展に努力しつゝある。圓滿なる人格者にして、眞宗を信仰し、謠曲に趣味がある。

妻いつ（明治一二年生、兵庫縣堀端柳造女）長男京一（同三二年生、早大理工科卒、大倉土木社員）同妻千代子（大正三年生、兵庫縣立高女卒）二男平（同九年生、海城中學在學）三女支那子（同元年生、府立第三高女卒）四女美津子（同三年生、女子學院卒）長女美枝子（明治三三年生、大阪梅田高女卒、福島紡績鳥取分工場長久保理一妻）二女幸子（同四三年生、東京府立第三高女卒、高砂工業社員宮崎廣夫妻）

調　源次郎氏　豐島區高田南町二ノ四七五、電話牛込五九〇三

日本純藥研究所主、藥劑師

明治二〇年九月生、福岡縣

氏は福岡縣士族調喜策氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十三年分れて一家を創めた。夙に東京藥學專門學校に學び、卒業後藥劑師試驗に合格して內務省衛生試驗所に入り技師となつたが從來の研究を以て尙不滿とし、東京帝國大學醫學部藥學科選科に入學して研鑽を積んだ。昭和七年同校を卒業後中村醫藥研究所技師に聘せられたが、同八年之を辭し獨力を以て日本純藥研究所を設立し爾來NPC純正化學藥品一般並に普通化學藥品の製造を爲し、良品の製造に努力すると共にその發展に意を注ぎ以て今日に及んでゐる。眞宗を信仰し崇高なる人格者として信望を博してゐる。

妻庫子（明治二九年生、福岡縣藤田弘綱女）長男實（大正七年生）二女節（同一三年生）三女修（同一四年生）四女妙（同一五年生）六女道（昭和四年生）

鈴木彥兵衛氏　日本橋區長谷川町一九　電話　浪花四〇三七(2)

鈴彥商店主

慶應三年一二月生、愛知縣

氏は愛知縣鈴木重佶氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十八年分れて一家を創めた。初め醫學に志し愛知醫學校に學んだが、後實業界に雄飛すべく鄕里の特產三河木綿を材料とする手拭の販賣を開始した。是れ鈴彥商店の濫觴である。當初は業績微々として振はなかつたが、氏は信用本位の取引を以て徐々に販路の開拓を圖ると共に、日本及び米國等の大博覽會に同店獨特の製品を出品して本邦特有の染色技術を紹介することに努め、一方鄕里及び帝都各所に染工場を設けて、手拭、印判纏、風呂敷等の優秀品製出に心血を濺ぎたる効果空しからず、次第に各方面に信用を博し、遂に今日の隆況を呈するに至つた。

妻リツ（明治四年生、荒川杏造長女）二男鈴次（同四〇年生）三男大三（同四一年生）四男高四（同四三年生）

稲村　眞介氏　大森區山王二丁目一八五五　電話　大森二四九六（事務所）丸ノ内海上ビル、電話丸ノ内五二一

辯護士、法學士、稲村法律事務所主

明治二一年生、山口縣

大正五年東京帝大英法科卒業

氏は山口縣人稲村章一氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。鄕里の中學校を卒業後第五高等學校を經て東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに辯護士を開業し、在野法曹界の新進として其の敏腕を認められるに至つた。昭和二年五月英國に留學し、法律特に商法を研究後更に歐米諸國を巡遊して實地研鑽を積み、歸朝後稲村法律事務所を開いて各方面の依賴に應じ、斯界に躍進以て今日に及んでゐる。

妻敦子（明治三二年生、山口縣村瀨和一長女、下關高女卒）長男立春（大正一三年生）二男昭二（昭和二年生）長女伊律子（大正一〇年生）二女萬里子（昭和六年生）

市田彌三郎氏　京都市上京區柳馬場通三條上ル　電話　本局五五六三

市田商店(株)專務取締役、市田商店(名)代表社員

明治五年一月生、京都市

氏は京都市太田重兵衞氏の三男として同市内に呱々の聲を揚げ、明治三十一年市田しげの養子となり市田家の家督を相續した。同家は呉服商として京都市内屈指の豪商にして、氏は克くその聲望を維持し得たるのみならず、敏腕以て業務の擴張を圖り、時代の要求に合致せる經營方針に據り、遂に今日の隆況を呈するに至つた。昭和三年紺綬褒章を下賜されたるは、氏の功績の非凡なるを裏書するものにして、現時名實共に同商店の代表者として益々斯業界に潤歩しつゝある。宗旨は眞宗、趣味は謠曲等である。

妻はつ（明治一七年生、滋賀縣市田彌惣八三女）長男彌之助（同三六年生）二男彌二郎（同三八年生）三男彌吉郎（同三九年生）四男彌藏（同四〇年生）三女コト（同四三年生）長女てふ（同三三年生は京都府大原直次郎に嫁す）

稲垣爲三郎氏　京都市兩替町三條上ル　電話　本局三〇六五

京都拓殖(株)取締役、第一工業製藥(株)監査役、稲垣(名)無限社員

明治二二年一二月生、京都府

氏は京都府人稲垣貞治郎氏の二男として京都に呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督を相續した。夙に京都財界に敏腕を揮つて着々確乎たる地歩を占め、斯界一方の雄として認められるに至つた。現時稲垣合名會社を提げて活躍すると共に京都拓殖及び第一工業製藥兩社の重役を兼ね、その敏腕と業界稀れに見る人格と相俟つて各方面に信望隆々たるものがある。

母クニ（慶應三年生、京都府井澤治助養叔母）妻さだ（明治二九年生、京都府森治兵衞長女）長男泰夫（大正六年生）二男傳三（同一三年生）三男守造（昭和二年生）四男恭三（同五年生）長女明子（大正九年生）

石井彦次郎氏　東京市麻布區霞町六

正七位、勳七等、東京辯護士會書記長

元治元年九月生、東京府

氏は東京府人石井忠兵衞氏の二男として呱々の聲を揚げ、明治四十一年分れて一家を創めた。夙に法曹界に志し、東京法學院に入り、孜々として法律を學習し卒業後に於ても依然法律の研究を怠らず歐米先進諸國の法令、或は判決の實例等に深く通曉した。現時東京辯護士會書記長として同會の發展に努力しつゝあるが資性溫厚にして名利の念に淡く常に一身を犧牲にして公共の福利を圖らんとする熱心、加ふるに其の崇高なる人格等相俟つて會員間に信望を博し、對外的にも亦頗る好感を以て迎へられ、實に適材適所と稱せられてゐる。

石原米太郎氏　大森區入新井町二ノ一一九四、電話大森八六

特殊製鋼(株)社長

明治一五年九月生、群馬縣

氏は群馬縣人石原儀八氏の三男として明治一五年一月生、廣島縣

氏は廣島縣人池田福松氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。夙に實業界に投じ、奮勵努力以て自ら運命を開拓し、漸次その敏腕を認められ、關西實業界に嘖々たる名聲を博するに至つた。現時東邦瓦斯會爾來松坂屋の發展に意を注ぐ傍ら中京に於ける各種事業に關係し信望を博した。昭和七年家憲に依り隱退し、松坂屋社長を長男松之助氏に讓り第一線を退いたが依然中京財界の元老として重きをなしてゐる。

長男松之助（明治三五年）同妻靜子（同

いて各方面の依頼に應じ、期界に躍進以て今日に及んでゐる。

妻敦子（明治三二年生、山口縣村瀬和一長女、下關高女卒）長男立春（大正一三年生）二男昭二（昭和二年生）長女伊律子（大正一〇年生）二女萬里子（昭和六年生）

市田彌三郎氏　京都市上京區柳馬場通三條上ル　電話本局五五六三

市田商店(株)專務取締役、市田商店(名)代表社員

二男彌二郎（同三八年生）三男彌吉郎（同三九年生）四男彌藏（同四〇年生）三女コト（同四三年生）長女てふ（同三三年生は京都府大原直次郎に嫁す）

稲垣爲三郎氏　京都市兩替町三條上ル　電話　本局三〇六五

京都拓殖(株)取締役、第一工業製藥(株)監査役、稲垣(名)無限社員

明治二二年一二月生、京都府

氏は京都府人稲垣貞治郎氏の二男として京都に呱々の聲を揚げ、明治三十九年家督を相續した。夙に京都財界に敏腕を

氏は東京府人石井忠兵衛氏の二男として呱々の聲を揚げ、明治四十一年分れて一家を創めた。夙に法曹界に志し、東京法學院に入り、孜々として法律を學習し卒業後に於ても依然法律の研究を怠らず歐米先進諸國の法令、或は判決の實例等に深く通曉した。現時東京辯護士會書記長として同會の發展に努力しつゝあるが資性溫厚にして名利の念に淡く常に一身を犧牲にして公共の福利を圖らんとする熱心、加ふるに其の崇高なる人格等相俟つて會員間に信望を博し、對外的にも亦頗る好感を以て迎へられ、實に適材適所と稱せられてゐる。

石原米太郎氏　大森區入新井町二ノ一一九四、電話大森八四六

特殊製鋼(株)社長

明治一五年九月生、群馬縣

氏は群馬縣人石原儀八氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。夙に實業界に投じ、織物界に入りて敏腕を揮ふこと多年、漸次その地歩を進め斯業界に名聲を博するに至つたその後特殊製鋼株式會社を組織し、從來專ら輸入に仰ぎたる特殊鋼の製造に專念し、海外一流製品を凌駕する優良品の製出に苦心し、遂にその目的を達し、工業界その他に貢献以て今日に及んでゐる。資性溫厚にして覇氣に富み、加ふるに業界稀に見る人格者として信望を博してゐる。

妻ちよ（明治二六年生）長男正美（大正二年生）長女貞子（同一一年生）二女光子（昭和五年生）

池田增太郎氏　名古屋市東區千種町元古井六七、電話東三二

名古屋商工會議所議員、東邦瓦斯(株)常務取締役、東邦瓦斯證券(株)代表取締役西部瓦斯、九州耐火煉瓦、九州化學工業合同瓦斯各(株)監査役

明治一五年一月生、廣島縣

氏は廣島縣人池田福松氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。夙に實業界に投じ、奮勵努力以て自ら運命を開拓し、漸次その敏腕を認められ、關西實業界に嘖々たる名聲を博するに至つた。現時東邦瓦斯會社の常務取締役たる外、同社系統の各社重役を兼ね、一方名古屋商工會議所議員として中京商工界に重きをなしてゐる。

妻キタ（明治二七年生、廣島縣士族森戸郁三三女）男增雄（大正四年生）女ユキ（同六年生）

伊藤次郎左衛門氏　名古屋市西區茶屋町三ノ三　電話本局九三・九三

日本放送協會、日本工業倶樂部各理事、伊藤銀行、名古屋製陶所、千年殖産各(株)社長、日本貯蓄銀行、福壽火災保險、愛知物産、愛知時計電氣、福壽生命保險各(株)取締役、伊藤産業(名)代表社員、愛知銀行、中央信託、昭和毛糸紡績各(株)監査役

明治一一年五月生、愛知縣

氏は先代次郎左衛門氏の四男に生れ、大正十三年家督相續と同時に前名守松を改め次郎左衛門を襲名し、三百餘年連綿たる伊藤松坂屋第十五代當主となつた。

爾來松坂屋の發展に意を注ぐ傍ら中京に於ける各種事業に關係し信望を博した。昭和七年家憲に依り隱退し、松坂屋社長を長男松之助氏に讓り第一線を退いたが依然中京財界の元老として重きをなしてゐる。

長男松之助（明治三五年）同妻靜子（同四二年生、侯爵佐竹義春妹）男鈴三郎（同三八年生）男輝彦（大正一三年生）女鑑（同二年生）女好（同七年生）女百合子（同一五年生）

岩井勝次郎氏　兵庫縣武庫郡御影町郡家堂ノ裏一六五　電話御影二〇一四

正六位、勳四等、大阪商工會議所顧問、岩井本店(資)代表社員、岩井商店、中央毛糸紡績、德山鐵板、日本橋梁各(株)社長、山口銀行、大日本火災海上再保險、日本曹達工業各(株)取締役、大阪鐵板製造、關西ペイント各(株)相談役

文久三年四月生、京都府

氏は京都府蔭山祐次郎氏の弟に生れ、先代岩井文平氏の養子となり、明治二十三年家督を嗣いだ。岩井商店を起して直輸入を營み、業礎次第に鞏固となるや、メリヤス、セルロイド、人造絹糸、亞鉛鑛、製紙、製鐵、紡績等各種事業に關係して大成し、關西財界の雄として名聲を

博するに至つた。その功勞に依り大正五年綠綬褒章を賜はり、昭和三年紺綬褒章同四年同飾版を下賜された。

妻エイ（明治四年生、養父妹）亡長男英一郎妻茂（同三二年生）孫英夫（大正一〇年生）孫泰子（同一二年生）二男雄三郎（明治三五年生）五男松三（大正五年生）三女博子（明治四一年生）四女英子（大正二年生）二女フミ（明治二五年生、岩井豐治妻）

石川　正作氏　小石川區林町一八　電話小石川一八九一

日本製紙(株)社長、東京書籍(株)常務取締役、東洋印刷(株)取締役

慶應二年一月生、三重縣

明治一九年東京高等師範小學師範科卒業

氏は三重縣石川八郎右衛門氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十二年分れて一家を創めた。夙に教育界に志し、上京して東京高等師範學校小學師範科に學び、優秀の成績を以て卒業後教育界に活躍したが、後實業界に轉じ、印刷、出版及び製紙業等に關係して着々財界に於ける地歩を占むるに至り、現時前掲各社の重役を兼ねて益々斯界に活躍しつゝある。

妻よね（文久二年生、香川縣士族三井光慶長女）男正夫（明治三六年生）同妻雪子（同四一年生、東京府大島金太郎長女）孫幸子（昭和五年生）

石川　弘氏　荏原區戸越一二〇〇　電話高輪二五七七

石川製陶所々主

明治一七年九月生、石川縣

明治四一年京都高等工藝學校卒業

氏は石川縣士族石川太郎次氏の長男として同縣金澤市に呱々の聲を揚げた。當家は代々前田藩に任へたる名門である。昭和二年家督を嗣いだが、夙に京都高等工藝學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに農商務省に奉職し、精勵恪勤次第にその手腕を認められるに至つた。然るに胸中秘かに期する所ある氏は徒らにその職に戀々たらずして、大正六年之を辭して野に下り、直ちに獨立して化學陶磁器の製造を開始した。爾來奮鬪努力以て萬人未踏の境地を開拓し、幾多の優秀品を續々江湖に送つて好評を博し業績逐年向上以て今日に及んでゐる。

妻キクエ（明治二七年生、石川縣山崎忠康長女）長男正（大正二年生）長女捷江（大正三年生）二女三枝（同五年生）

今宮　新氏　目黒區下目黒四ノ九七

文學士、慶應義塾大學講師

明治三三年五月生、茨城縣

大正一二年慶應義塾大學文學部卒業

氏は茨城縣故今宮牧之助氏の長男として同縣新治郡美並村に呱々の聲を揚げた當家は同地に於ける屈指の豪家として知られてゐる。夙に慶應義塾大學に學び、卒業後直ちに同大學豫科講師に聘せられ後大學部法學部講師となり、日本政治史の講座を擔當した。昭和六年同大學文學部留學生に選ばれ、佛、獨、英等に留學し、特に獨逸伯林大學に於て歴史學を深く研究し、同八年八月歸朝した。以來引續き同大學に教鞭を執り、前途洋々たる少壯學者として大いに嘱望されてゐる。宗旨は曹洞宗、趣味は讀書、文學及史學の研究等である。

妻郁子（明治三七年生、茨城縣矢口新平二女、土浦高女卒）長男俊一郎（昭和二年生）二男謙二（同四年生）

濱田　敬一氏　豐島區南長崎町二丁目

正八位、陸軍三等主計、立教大學圖書館主任

明治三二年三月生、群馬縣

氏は群馬縣人濱田覺太郎氏の長男として、同縣多野郡藤岡町に呱々の聲を揚げた。夙に成蹊實業專門學校に學び、同校第一期卒業生として社會に送られるや、陸軍に入り三等主計となり、或は栃内商店に勤務し、實業界に敏腕を揮つたが、現時立教大學圖書館主任として活躍しつゝある。資性溫厚にして公共奉仕の念厚く、身を持すること謹嚴にして而も人に對するに寛恕の態度を失はず、常に後進の指導に努め各方面に信望を博してゐる昭和三年には鐵道省最高の名譽たる功績賞を授與され、無上の光榮に浴した。資性溫厚にして省内に信望を博し、後進者より慈父の如く仰がれてゐる。宗旨は日蓮宗、趣味はスポーツ、大弓等である。

父粂太郎（文久二年生）妻ヨシ子（明治二四年二月生、淺草區高橋愛三氏妹）中學卒）長女よね（同二二年生、山口縣士族丸山新介に嫁す）

堀川　周次氏　品川區北品川四ノ七八（製作所）同町四ノ五二　電話高輪三七〇九

ケーオー眞空管製作所主、ケーオーラヂオ研究會長、東京ラヂオ商組合評議員

氏は三重縣石川八郎右衛門氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治二十二年分れて一家を創めた。夙に教育界に志し、上京して東京高等師範學校小學師範科に學び、優秀の成績を以て卒業後教育界に活躍したが、後實業界に轉じ、印刷、出版及び製紙業等に關係して着々財界に於ける地歩を占むるに至り、現時前掲各社の重役を兼ねて益々斯界に活躍しつゝある。

妻よね（文久二年生、香川縣士族三井光慶長女）男正夫（明治三六年生）同年之を辭して野に下り、直ちに獨立して化學陶磁器の製造を開始した。爾來奮闘努力以て萬人未踏の境地を開拓し、幾多の優秀品を續々江湖に送つて好評を博し業績逐年向上以て今日に及んでゐる。

妻キクエ（明治二七年生、石川縣山崎忠康長女）長男正（大正二年生）長女捷江（大正三年生）二女三枝（同五年生）

今宮　新氏　目黒區下目黒四ノ九七四

文學士、慶應義塾大學講師

妻郁子（明治三七年生、茨城縣矢口新平二女、土浦高女卒）長男俊一郎（昭和二年生）二男謙二（同四年生）

濱田　敬一氏　豐島區南長崎町二丁目

正八位、陸軍三等主計、立教大學圖書館主任

明治三二年三月生、群馬縣

氏は群馬縣人濱田覺太郎氏の長男として、同縣多野郡藤岡町に呱々の聲を揚げた。夙に成蹊實業專門學校に學び、同校第一期卒業生として社會に送られるや、陸軍に入り三等主計となり、或は栃内商店に勤務し、實業界に敏腕を揮つたが、現時立教大學圖書館主任として公共奉仕の念厚く、身を持すること謹嚴にして而も人に對するに寛恕の態度を失はず、常に後進の拔導に努め各方面に信望を博してゐる

父覺太郎（明治五年生）母キヨ（同七年生）妻タネオ（同三四年生、愛媛縣木村清之妹）長女秀子（大正一四年生）

橋本　由松氏　荒川區日暮里町九ノ五一鐵道官舍内

從七位、勳六等、鐵道局書記、日暮里驛長

明治一八年三月生、東京市

氏は橋本条太郎氏の二男として下谷區車坂町に呱々の聲を揚げた。父は現に淺草に於て餞職を營んでゐる。氏は十四歳の時日本鐵道株式會社に入社し、庶務課に勤務し、後營業詰となり、同社が國營となるや鐵道作業局運轉課に移り、大正八年仙臺作業局運轉課に轉じ、同十年上野運輸事務所運轉係となつた。その後昭和二年三月日暮里驛長に榮轉以て今日に及んでゐる。多年鐵道界に盡したる功績に依り、大正四年勳八等旭日章を下賜され、同十二年八月勳七等瑞寶章を賜はり更に昭和八年八月勳六等に叙せられ、又昭和三年には鐵道省最高の名譽たる功績賞を授與され、無上の光榮に浴した。資性溫厚にして省内に信望を博し、後進者より慈父の如く仰がれてゐる。宗旨は日蓮宗、趣味はスポーツ、大弓等である。

父条太郎（文久二年生）妻ヨシ子（明治二四年二月生、淺草區高橋愛三氏妹）長男彌太郎（大正一〇年生）長女由喜（同七年生）二女はる（同一四年生）三女由利（同七年生）四女由利

林　武平氏　豐島區駒込三ノ四三〇　電話　小石川八八四

關双物（株）社長、昭和商會（資）代表社員日本劇場（株）社長

明治四年七月生、岐阜縣

氏は岐阜縣先代武平氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、幼名を松太郎と呼び、明治二十年家督を相續すると同時に武平を襲名した。夙に實業界に投じ明治三十二年山下汽船會社に入社以來精勵恪勤して克く同社の發展に貢献し、社内外の信望を博した。その後同社を辭して關双物株式會社を創立し、昭和商會を組織し、醫療機及洋食器等の販賣に從事し多年斯界の發展に盡したる功績に依り昭和五年紺綬褒章を授けられた。

妻まさ（明治一七年生、愛知縣吉田畝彦叔母）長男健藏（同三三年生、濟美中學卒）長女よね（同二二年生、山口縣士族丸山新介に嫁す）

堀川　周次氏　品川區北品川四ノ七八（製作所）同町四ノ五三　電話　高輪三七〇九

ケーオー眞空管製作所主、ケーオーラヂオ研究會長、東京ラヂオ商組合評議員

明治二〇年九月生、長野縣

氏は長野縣北安曇郡大町堀川和作氏の二男として同町に生れた。生家は菓子商にして、氏も長野縣立大町中學校を卒業後暫らく家業に從事してゐたが、邊鄙の地事を成すに足らずとし大正二年上京した。爾來渡邊倉庫株式會社に勤務し、傍ら大正十五年八月以來眞空管製作に從事したが、昭和二年渡邊倉庫株式會社を辭し眞空管製作を專業とし、以て今日に及んでゐる。此の間業務次第に繁榮し、現時技術員及職工五十餘名を擁し年産額十五萬圓を超える盛況を呈してゐる。一方ラヂオ研究會を組織し、或は昭和八年四月「眞空管と其應用」なる著書を公刊し或は東京ラヂオ商組合役員として、斯界の啓發に多大の貢献をなし、我がラヂオ界に嘖々たる名聲を博してゐる。宗旨は眞宗、趣味は野球其他一般スポーツ等。

妻ふく子（明治二八年生、群馬縣野澤氏二女）長男周平（大正一二年生）二

男潤二（昭和四年生）長女豐子（大正六年生、頌榮高女在學）

鳥越　實士氏

豐島區巢鴨町三ノ三〇
（事務所）京橋區銀座西二ノ一有樂橋會館內
電話　京橋一四〇〇

辯護士、東京辯護士會員
明治二一年五月生、岡山縣
大正一〇年明治大學卒業

氏は岡山縣鳥越建次郎氏の長男として同縣後月郡高屋町に呱々の聲を揚げた。夙に上京して明治大學に學び、後更に研究を重ねて辯護士試驗に合格し、辯護士を開業した。爾來各方面の依賴を受けて活躍し、東京辯護士會に屬する敏腕家として今日の名聲を博するに至つた。資性豪放濶達にして覇氣に富み、先天的に藝術乃至スポーツ等に獨特の才能を有し、ダンス、スキー、寫眞等何れもその奧儀を究めたる老練家として知られ、特にスキーは之を我が國に輸入したる元勳として著名である。

父鳥越建次郎（嘉永三年生）母小良（同五年生）妻キシノ（明治二三年生、岡山縣內藤幸十郎三女）長男俊雄（大正四年生、明治中學卒）

沼間　敏朗氏

麹町區中六番町四六
電話　九段二二八
（營業所）日本橋區江戸橋一丁目
電話　日本橋二八三〇

八王子瓦斯、觀音劇場、相模鐵道、開運ビル各（株）取締役、東京株式取引所一般短期實物取引員
明治九年五月生、東京府

氏は舊幕臣永山敬三氏の長男、同美定氏の兄として下谷區御徒町に生れ、後沼間イトの養子となり、明治四十五年その家督を嗣いだ。夙に埼玉師範學校に學び後法律を修め、東京每日新聞に入社し、後第一銀行に轉じ預金、計算、爲替の各課長として敏腕を揮ひ、伊勢町支店副支配人に擧げられた。大正五年十二月沼間敏朗商店を創設以來證券界に雄飛し、斯界の雄として今日に及び、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。

妻ハナ（明治一六年生、東京府伊藤方成四女）長男敏一（同三九年生、早大法科卒）二男富彥（同四二年生）

大島　正一氏

淀橋區戸塚町二ノ三〇七
電話　牛込一三六二

早稻田大學庶務課長
明治一九年一月生、栃木縣
明治三九年早稻田大學政治經濟科卒業

氏は栃木縣大島錄郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に上京して早稻田大學に學び、同大學卒業後實業界に志して古河鑛業株式會社に入社したが同四十四年米國に航してフイラデルフイヤ大學に學び、卒業後米國各地を見學して大正五年歸朝した。その後同十三年母校早稻田大學に奉職し、庶務課主事となり、爾來克く煩雜なる庶務を攝理して母校の健全發展に貢獻し、以て今日に及んでゐる。

妻喜久子（明治二一年生、栃木縣今井金五郎三女）長男銳男（昭和二年生）

大西　一三氏

世田谷區代田二ノ七〇
電話　松澤二七

鹽水港製糖（株）常務取締役、花蓮港木材（株）取締役、臺灣生藥、安部幸商店各（株）監査役
明治二三年一月生、大阪市

氏は大阪市大西多三郎氏の長男として同市北區に生れ、後家督を相續した。夙に臺灣銀行に入り、精勵恪勤して漸次其の手腕を認められ、大阪倫敦、神戸、大連、東京等の各支店に歷勤して地位も亦次第に進んだ。その後同行を辭して神戸鈴木商店に入り、同店監査役、日本製粉會社取締役等として活躍し、昭和三年六月鹽水港製糖會社取締役に選ばれた。爾來同社に在りて手腕を揮ふ傍ら、前掲各社の重役を兼ね、臺灣產業の開發に貢獻以て今日に及んでゐる。趣味としてゴルフを好み、寶塚ゴルフ倶樂部會員として同好者間に知られてゐる。

妻禎子（明治二八年生、東京府安村喜富三女）長男公一（大正一二年生）二男英爾（同一四年生）長女愛子（昭和豫備步兵少尉）同妻ケイ（同三七年生）二男英（同四一年生、中央大學卒）

大金益次郎氏

麹町區紀尾井町三、官舍內、電話九段三七〇
從五位、勳五等、法學士、宮內書記官、宮內省庶務課長、侍從
大正八年東京帝大法科卒業

々の聲を揚げ、幼名を益之助と稱したが明治四十二年家督相續と同時に當家累代の久七を襲名した。當家は「萬久」の商號を以て名聲を博せる老舗にして、慶應年間の創業以來味噌醬油商を營み、氏は四代目當主である。夙に幼時より家業に携はり、父を援けて家業の發展に努力し

して今日の名聲を博するに至つた。資性豪放濶達にして覇氣に富み、先天的に藝術乃至スポーツ等に獨特の才能を有し、ダンス、スキー、寫眞等何れもその奥儀を究めたる老練家として知られ、特にスキーは之を我が國に輸入したる元勳として著名である。

父鳥越建次郎（嘉永三年生）母小良（同五年生）妻キシノ（明治二三年生、岡山縣内藤幸十郎三女）長男俊雄（大正四年生、明治中學卒）

敏朗商店を創設以來證券界に雄飛し、斯界の雄として今日に及び、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。

妻ハナ（明治一六年生、東京府伊藤方成四女）長男敏一（同三九年生、早大法科卒）二男富彦（同四二年生）

大島　正一氏

淀橋區戸塚町二ノ二〇七
電話　牛込一三六二

早稲田大學庶務課長

明治一九年一月生、栃木縣

明治三九年早稲田大學政治經濟科卒業

氏は栃木縣大島錄郎氏の長男として同社の重役を兼ね、臺灣産業の開發に貢献以て今日に及んでゐる。趣味としてゴルフを好み、寶塚ゴルフ倶樂部會員として同好者間に知られてゐる。

妻禎子（明治二八年生、東京府安村喜富三女）長男公一（大正一二年生）二男英爾（同一四年生）長女愛子（昭和二年生）

小倉　喜作氏

東京市芝區琴平町二
電話　芝七七八・一六六五

食料品商、小倉ビルディング經營主

慶應三年一〇月生、千葉縣

氏は千葉縣人小倉文藏氏の長男として同縣長生郡高根本郷村に呱々の聲を揚げ後その家督を相續した。夙に青雲の志を抱いて上京し、奮闘努力以て着々産を興し信用を博し、現時食料品商を營む傍らビルディングを經營し、家業益々隆盛に赴きつゝある。夙に區内の信望高く芝區會議員として活躍すること十餘年に及んだが、現在に於ても琴平町會長、芝區信用組合長、芝區神社會理事、芝區兵事議會幹事、芝區學務委員、芝區教育會評議員、芝區衞生會評議員等の公職を兼ねて奔走盡瘁し、芝區内の有力者として尊敬されてゐる。信仰は日蓮宗。

妻栗惠（明治一一年生、愛國婦人會並芝婦人會幹事）長男禧一（同三四年生豫備歩兵少尉）同妻ケイ（同三七年生）二男英（同四一年生、中央大學卒）

大金益次郎氏

麹町區紀尾井町三、官舍内、電話九段三七八〇

從五位、勳五等、法學士、宮内書記官、宮内省庶務課長、侍從

大正八年東京帝大法科卒業

氏は栃木縣の出身にして、幼少の頃より秀才の譽れ高く、長じて東京帝國大學法科に學び英法科を拔群の成績を以て卒業した卒業後直ちに内務省に入り、地方事務官として活躍したが、後宮内省に轉じ、精勵奉仕して次第に擢じられ、現在の地位に進んだ。此の間東北地方の大海嘯の際畏くも勅使として差遣され、その狀況を具さに調査して御奉答申上げ克くその大任を完うしたることを始めとし功績頗る顯著にして、省内の信望を博してゐる。資性謹嚴簾直、風姿端麗にして大宮人として相應はしき崇高なる人格者である。趣味は音樂、旅行、讀書等である

本所區向島須崎町一七七
電話　墨田六〇一
（店舗）淺草區馬道四ノ二〇、電話淺草三七

太田　久七氏

太田商店主、東京府多額納税者

明治一二年九月生、東京市

氏は先代久七氏の四男として現所に呱々の聲を揚げ、幼名を益之助と稱したが明治四十二年家督相續と同時に當家累代の久七を襲名した。當家は「萬久」の商號を以て名聲を博せる老舗にして、慶應年間の創業以來味噌醤油商を營み、氏は四代目當主である。夙に幼時より家業に携はり、父を援けて家業の發展に努力し大正八年十月先代の病歿後は經營主として健闘以て今日に及んでゐる。趣味として謡曲、書畫骨董等を好む。

妻むめ（明治二五年生、埼玉縣平林朝之助妹）嗣子脩一（同四二年生）四男善治（大正二年生）五男益造（同五年生）長女てい（同一〇年生）

若松幸次郎氏

品川區南品川五ノ一九七
電話　高輪六八二一

若松製作所主、南品川協親自治會幹事

明治二〇年五月生、愛媛縣

氏は愛媛縣人若松市右衞門氏の二男として横濱市に呱々の聲を揚げた。父はパン製造を業とし、英、佛人等に其の製法を學び加ふるに多年の經驗を積み、當時斯業界に於ける第一人者として名聲を博した。氏は幼時より頭腦頗る緻密にして機械類を好み、夙に機械製作業界に投じて斯業に關する研究を積みたる後、大正元年獨立して若松製作所を起した。爾來專ら當所の經營に意を注ぎ、優良品の製

出と信用本位の取引をモットーとして健闘の効果空しからず、漸次各方面の信用を博し、斯業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。現時自動車及飛行機部分品、乾電池附屬品タアミナル類等を製造し、益々活況を呈してゐる。成田不動を信仰し、其の世話役として、或は南品川協親自治會幹事等として盡瘁し、各方面に信望がある。

妻まん、長男直吉（明治四四年生、家業に從事）長女勝江（昭和元年生）

鹿島　英二氏　中野區鷺宮四ノ四一九

從四位、勳四等、東京高等工藝學校教授同圖案科長、共立女子專門學校講師、帝展四部審査員、商工省工藝展覽會審査員帝國工藝會評議員、松屋呉服店・關東流行織物研究所各顧問

明治七年一月三日生、鹿兒島縣

明治三四年東京工業教員養成所卒業

氏は舊鹿兒島藩士孫兵衛守治氏の長男として同縣川邊郡枕崎町に呱々の聲を揚げた。四歳の時西南の役起り、父君は西郷の軍に從ひ陣歿した。氣丈なる母に育てられ長じて鹿兒島師範に學び、卒業後約二ヶ年半同地に教鞭を執つたが、後上京して東京工業大學の前身工業教員養成所に學び、卒業後富山縣立工藝學校教諭となつた。明治四十年農商務省實業練習生として紐育に派遣され、滯留二ヶ年にして歸朝後母校東京高等工業學校に任ぜられ、同年歐米出張を命ぜられ、歸朝後引續き同校に教鞭を執つた。大正五年東京美術學校教授に任じ、同十一年東京高等工藝學校の創立と同時に同校教授となり、昭和二年以來圖案科長として今日に及んでゐる。昭和二年文部省より支那工藝視察を命ぜられ、同三年北京美術學校圖案講習會講師に招聘され、同七年には滿洲國を巡遊視察した。多年の研究と先天の才相俟つて圖案及び染色の權威として夙に普く知られ、氏の考案及び指導に成る着尺の色柄は常に流行の先驅をなし又染色臘纈に於てもバットの多色染を天鵞絨に應用することに成功し、斯界に一新紀元を劃したるが如きは特に顯著なる功績である。大正二年より八年迄六年間雜誌圖案新集を發行して斯界を啓發し、又著書「支那工藝圖鑑」に染織編を擔當し、「刺繍圖案集」等は斯界の一大文献として尊重され、現時前掲の職を兼ねて益々美術工藝界に貢献しつゝある。能書能畫にして信仰は佛教、趣味は小鳥、園藝、染色、圖案等である。

妻てい（明治二〇年生）長男守久（二一歳、帝國美術學校在學）二男達郎（一一歳）長女禮子（一九歳）三女輝子（一五歳）三女福子（八歳）

金子　光利氏　淀橋區角筈三ノ二〇八

日本化工ペンキ(株)常務取締役

明治一五年三月生、山梨縣

明治四一年早稲田大學政治經濟科卒業

氏は山梨縣金子信良氏の五男として同縣下に生れ、明治四十三年分れて一家を創めた。早稲田大學を優秀の成績を以て卒業後直ちに江之島電氣鐵道株式會社に入社し、その手腕を認められて會計主任に擧げられ、更に運輸主任として活躍した。その後同社を辭し東京朝日新聞社に入り、政治部記者として活躍すること八年に及び、大正十二年再び實業界に轉じ日本化工ペンキ株式會社に入社した。爾來常務或は專務として同社の發展に努力以て今日に及んでゐる。宗旨は佛教、趣味は釣魚、旅行等である。

妻てい（明治二三年生、原島政五郎姉淑德高女卒）長男汎利（大正三年生）二男任利（同一二年生）三男彰利（同一三年生）長女由利江（同元年生）二女茂利代（同五年生）三女滿利香（同六年生）

吉川　坂一氏　品川區五反田一ノ四三七　電話　高輪三四六八

大崎金屬工業所々主

して同縣射水郡小杉町に呱々の聲を揚げ大正十三年仙右衛門氏の隱居と同時に家督を嗣いだ。鄕里の工藝學校卒業後更に東京高等工業學校選科に入り圖案科を專攻し、大正四年東京印刷株式會社に入社し圖案部に勤務したが、同九年之を辭し人八丈彌吉氏の兄として同府下に呱々の聲を揚げ、後先代高津久右衛門氏の養子となり、明治三十八年その家督を相續した。夙に實業界に敏腕を揮ひ斯界に確乎たる地歩を占め、特に大正十年三月歐米各國を巡遊し取引所の實狀を視察歸朝以來、會員組織に依る大阪砂糖取引所の創

展四部審査員、商工省工藝展覽會審査員
帝國工藝會評議員、松屋呉服店・關東流
行織物研究所各顧問
明治七年一月三日生、鹿兒島縣
明治三四年東京工業教員養成所卒業

氏は舊鹿兒島藩士孫兵衛守治氏の長男として同縣川邊郡枕崎町に呱々の聲を揚げた。四歳の時西南の役起り、父君は西郷の軍に從ひ師に招聘され、同七年には滿洲國を巡遊視察した。多年の研究と先天の才相俟つて圖案及び染色の權威として夙に普く知られ、氏の考案及び指導に成る着尺の色柄は常に流行の先驅をなし又染色、臘纈に於てもバットの多色染を天鵞絨に應用することに成功し、斯界に一新紀元を劃したるが如きは特に顯著なる功績である。大正二年より八年迄六年間雜誌圖案新集を發行して斯界を啓發し、又著書「支那工藝圖鑑」に染織編を擔當し、「刺繍圖案集」等は斯界の一大文献として尊重され、現時前掲の職を兼ねて益々美術工藝卒業後直ちに江之島電氣鐵道株式會社に入社し、その手腕を認められて會計主任に擧げられ、更に運輸主任として活躍した。その後同社を辭し東京朝日新聞社に入り、政治部記者として活躍すること八年に及び、大正十二年再び實業界に轉じ日本化工ペンキ株式會社に入社した。爾來常務或は專務として同社の發展に努力以て今日に及んでゐる。宗旨は佛教、趣味は釣魚、旅行等である。

妻てい（明治二三年生、原島政五郎姉淑德高女卒）長男汎利（大正三年生）二男任利（同一二年生）三男彰利（同一三年生）長女由利江（同元年生）二女茂利代（同五年生）三女滿利香（同六年生）

吉川　坂一氏

品川區五反田一ノ四三七
電話　高輪三四六八

大崎金屬工業所々主
明治二二年二月生、山口縣

氏は山口縣の出身にして、夙に上京して實業界に投じ、大正十二年十一月現在の地に大崎金屬工業所を設立し、爾來その經營に努力以て今日に及んでゐる。該工業所は電氣鍍金を專門とし、創業當初は諸施設完からず、業績亦微々たるを免れなかつたが、氏は一意内容の整備に努め、製法の研究に餘念なく、孜々として其の擴張發展に邁進したる効果空しからず、漸次各方面に信用を增し、注文逐年增加し、斯業界に牢乎たる地歩を占めるに至つた。現時銀、ニツケル、錫、銅、眞鑄、ブロンズ、亞鉛等各種金屬の電氣鍍金に於て、同所獨特の長所を有し絶大の信用を博してゐる。

高畠　勝多氏

淀橋區百人町三ノ二六〇

松屋(株)意匠部長
明治二八年八月生、富山縣
大正三年富山縣立工藝學校卒業

氏は富山縣故高畠仙右衛門氏の長男として同縣射水郡小杉町に呱々の聲を揚げ大正十三年仙右衛門氏の隱居と同時に家督を嗣いだ。鄕里の工藝學校卒業後更に東京高等工業學校選科に入り圖案科を專攻し、大正四年東京印刷株式會社に入社し圖案部に勤務したが、同九年之を辭して松屋呉服店意匠部に移り、漸次その手腕を認められ同十一年意匠部主任に拔擢された。昭和八年四月市俄古博覽會視察の爲め同店より派遣され、その途次英、佛、獨、墺、白、和、伊等諸國を巡遊し、主として意匠に關する調査を遂げて同年九月歸朝し、爾來意匠部長の要職に在つて同店の發展に努力しつゝある。信仰は日蓮宗、趣味はゴルフ、觀劇、旅行等。

妻キミ子（明治三六年生、富山縣開保津嘉七郎二女、高岡高女卒）長男迪（大正一三年生）二男昭（昭和元年生）三男薫（同四年生）長女千枝子（同六年生）二女萬里子（同八年生）

高津久右衛門氏

大阪市住吉區天下茶屋三ノ一三〇
電話　戎三二〇

日本砂糖貿易(株)社長、日本住宅(株)取締役、臺南製糖(株)監査役、大阪商工會議所常議員、大阪砂糖取引所理事長
明治元年四月生、大阪府

我が砂糖業界の長老たる氏は、大阪府人八丈彌吉氏の兄として同府下に呱々の聲を揚げ、後先代高津久右衛門氏の養子となり、明治三十八年その家督を相續した。夙に實業界に敏腕を揮ひ斯界に確乎たる地歩を占め、特に大正十年三月歐米各國を巡遊し取引所の實狀を視察歸朝以來、會員組織に依る大阪砂糖取引所の創設に奔走し、成立後その理事長として斯業界に偉大なる功績を貽し、現に其の任に在る傍ら前掲の要職を兼ねて關西財界に益々活躍しつゝある。

妻よね（明治二年生、先代久右衛門長女）長男久次（同三三年生）五男豐久（同四一年生）二男久三郎（同三七年生、波多野イシ養子）三男久四郎（同三九年生、分家）四男俊久（同四〇年生、同上）長女品子（同三一年生、醫學博士藪添宗雄妻）

田中　操氏

神奈川縣逗子町
電話　逗子三七七
（事務所）丸ノ内仲五號館　電話　丸ノ内四七三七

辯護士、辯理士、日本公債、日本採炭、森永製菓販賣、增島商事、帝國火藥工業日本博善社各(株)法律顧問
明治二七年五月生、千葉縣
大正七年中央大學卒業

氏は千葉縣人田中源三郎氏の二男とし

て同縣夷隅郡千町村に呱々の聲を揚げた夙に中央大學に於て法律を學び、卒業後更に研究を重ねて辯護士試驗に合格し、大正九年辯護士及び辯理士を登錄して直ちに開業した。本所區向島小梅町及び下谷區上野櫻木町に事務所を設けて一般の依賴に應じ、獨特の辯護を以て忽ち人氣を呼び、帝都法曹界に確乎たる地歩を占むるに至つた。現時前記の職に在る傍ら日本公債其他數社の法律顧問として活躍しつゝある。

妻愛子（東京府日比野長次郎女、山脇高女卒）長女千惠子（昭和四年生）二女壽美子（同七年生）

田熊　常吉氏　神戸市大石町一五　電話　御影八七二

勳五等、汽車製造業

明治五年二月生、鳥取縣

氏は鳥取縣田熊豐藏氏の二男として同縣東伯郡東園村に呱々の聲を揚げた。廣谷皇學塾に學び、後鄕里に於て製材事業を始めたが、意に滿たざる爲め之を廢して汽罐の製作販賣に轉業した。當時舶用及び陸用各種汽罐は內地に於ける製造振はず、優秀なるもの乃至大型汽罐は殆んど全部海外より輸入に仰ぐ外なき狀態であつた。氏は深く之を遺憾とし輸入防遏の見地より奮然蹶起し、優秀汽罐の製造に着手し、爾來辛酸具に嘗めて研究の結果、遂に特許タクマ式汽罐を發明し、本邦斯界に一新紀元を劃し、昭和四年その顯著なる功績に依り勳五等瑞寶章を授けられた。爾來益々考案改良を加へ世界的逸品を提供して廣く江湖の需要に應じ、又現時汽車製造を業とし或は大阪汽車製造會社囑託等を兼ねて活躍しつゝある。

妻隈子（慶應三年生）

田中　穗積氏　牛込區辨天町一七〇　電話　牛込九八八

法學博士、早稻田大學總長

明治九年二月生、長野縣

明治二九年早稻田大學邦語政治科卒業

氏は長野縣の素封家田中周之助氏の長男として同縣下に生れ、明治三十年家督を相續した。早稻田大學に學び秀才の譽れを博し、卒業後同大學より歐米に派遣され、財政及び經濟學を研究し、歸朝後同大學教授として後進の指導をなす傍ら東京日々新聞記者として活躍し、後東京毎日新聞主筆として操觚界に名聲を博した。而も此の間絕えず財政學を研究し、明治四十三年法學博士の學位を授與された。爾來專ら早稻田大學の發展に努力し漸次信望を高めて商科々長となり、理事に推され、更に昭和六年總長に選ばれ以て今日に及んでゐる。

妻まつ（明治一九年生、長野縣士族鎌原仲次郎長女）長男和夫（同三七年生）同妻壽枝（同四二年生、東京府森田俊彥妹）孫秀人（昭和四年生、和夫長男）二男綱夫（明治四四年生）四女くに（大正五年生）五女美枝（同六年生）

高橋　幸吉氏　荒川區日暮里町、鐵道官舍內

從七位、勳八等、鐵道局書記、秋葉原驛首席助役

明治二〇年三月生、東京市

氏の嚴父高橋喜次郎氏は鹿兒島の鄕士にして、後年吳海軍工廠技工長として名聲を博した。氏は其の長男として牛込區東五軒町に生れ、夙に鐵道局運輸事務講習所に學び、明治三十六年同所卒業後直ちに三宮驛小荷物係となり、爾來馬場驛詰、神崎驛助役、大阪驛助役、綾部驛助役、馬場驛助役等を歷任し、大正二年名立驛長となつた。同三年九月田端驛助役に轉じ、同六年九月秋葉原驛貨物係となり爾來同驛の助役兼任、貨物主任等を經同十五年五月鐵道司法警察吏を命ぜられ昭和二年首席助役に昇進し、東洋一の稱ある大貨物驛に活躍以て今日に及んでゐる。此の間勳功に依り從七位、勳八等に叙せられ、大正及昭和兩度の大禮記念章を賜はり、更に昭和七年十月鐵道界最高の榮譽たる功績章を下賜された。信仰は神道、趣味として讀書を好む。

妻ひさ（明治二一年生、京都府津田淺次郎女）三男三郎（大正六年生）五男五郎（同八年生）長女千代（同一三年生）

塚田　實則氏　名古屋市中區白川町二

明治一二年三月生、大分縣

明治三七年大阪高等工業學校機械科卒業

氏は大分縣都留音平氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に青雲の志を抱いて鄕閭を辭し、同志社に學び、明治三十三年同校を卒業後更に大阪高等工業學校に進み機械科を修め、優秀の成績界に確乎たる地歩を占めるに至つた。

妻ヒサ（明治七年生、養父儀兵衞養子村本豐吉長女）養嗣子進（同三六年生福岡縣平岡浩男）養子花子（進妻、東京府村本政次郎長女）

中野美知麿氏　東京市外砧村字奈根七九〇

勳五等、汽車製造業
明治五年二月生、鳥取縣
氏は鳥取縣田熊豐藏氏の二男として同縣東伯郡東園村に呱々の聲を揚げた。廣谷皇學塾に學び、後鄉里に於て製材事業を始めたが、意に滿たざる爲め之を廢して汽罐の製作販賣に轉業した。當時舶用及び陸用各種汽罐は內地に於ける製造振はず、優秀なるもの乃至大型汽罐は殆んど全部海外より輸入に仰ぐ外なき狀態であつた。氏は深く之を遺憾とし輸入防遏の見地より奮然蹶起し、優秀汽罐の製造を相續した。早稻田大學に學び秀才の譽れを博し、卒業後同大學より歐米に派遣され、財政及び經濟學を研究し、歸朝後同大學教授として後進の指導をなす傍ら東京日々新聞記者として活躍し、後東京毎日新聞主筆として操觚界に名聲を博した。而も此の間絕えず財政學を研究し、明治四十三年法學博士の學位を授與された。爾來專ら早稻田大學の發展に努力し漸次信望を高めて商科々長となり、理事に推され、更に昭和六年總長に選ばれ以て今日に及んでゐる。

の榮譽たる功績章を下賜された。信仰は神道、趣味として讀書を好む。
妻ひさ（明治二一年生、京都府津田淺次郎女）三男三郎（大正六年生）五男五郎（同八年生）長女千代（同一三年生）

塚田　實則氏　名古屋市中區白川町二ノ一八、電話本局三三〇八
東邦瓦斯(株)取締役
明治一九年一二月生、愛知縣
氏は愛知縣塚田八重吉氏の長男として同縣下に生れた。夙に名古屋市に於て實業界に入り、克くその職務に精勵し、漸次經驗を積むに伴れて敏腕家として認められ、聲望を博するに至つた。その後東邦瓦斯株式會社に入るに及んで、鋒鋩は益々發揮され、現に同社取締役として同社の發展に努力しつゝある。敏腕と崇高なる人格は相俟つて夙に各方面に信望を博し、名聲嘖々たるものがある。
妻久（明治三〇年生、愛知縣西川幸造姉）男裕三（大正一一年生）男泰造（同一四年生）

都留　信郎氏　名古屋市中區御器所町天神東九七、電話南三〇九
東邦瓦斯(株)常務、東京瓦斯、東京瓦斯副產、東邦瓦斯證券各(株)取締役、西部瓦斯、合同瓦斯各(株)監査役
明治一二年三月生、大分縣
明治三七年大阪高等工業學校機械科卒業
氏は大分縣都留音平氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に青雲の志を抱いて鄉閭を辭し、同志社に學び、明治三十三年同校を卒業後更に大阪高等工業學校に進み機械科を修め、優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに實業界に投じ、刻苦努力克くその地步を開拓し現時前揭諸會社の重役を兼ねて瓦斯事業界一方の重鎭として活躍しつゝある。
妻いよ（明治二〇年生、三重縣志田貞三二女）女俊子（同四四年生）同壽子（大正四年生）同澄子（同一二年生）

中西儀兵衞氏　日本橋區葺屋町七　電話浪花一八三(3)
手布問屋、名花印手巾製造元、中西儀兵衞商店(株)社長
明治元年一月生、東京市
氏は小林源七氏の長男として東京に呱々の聲を揚げ、幼名を兼太郎と呼んだ。夙に先代儀兵衞氏の店に入り孜々として職務に精勵し同店の興隆に努力したる効果空しからず、先代に望まれて明治二十五年その養子となり、同四十三年家督を相續すると同時に前名兼太郎を改め儀兵衞を襲名した。爾來同店經營の衝に當り益々その發展に努力以て今日に及び斯業界に確乎たる地步を占めるに至つた。
妻マス（明治三七年生、福岡縣井田德夫長女、中津高女卒）長男道夫（大正一四年生）二男恭介（昭和六年生）三男洋介（同八年生）長女博子（同三年

中野美知麿氏　東京市外砧村宇奈根七九〇
工學博士、東京メタノール(株)技師
明治二七年八月生、福岡縣
大正七年東京帝大工學部應用化學科卒業
氏は福岡縣人故中野音次郎氏の二男として同縣築上郡椎田町湊三二五に呱々の聲を揚げた。大學卒業後直ちに東北帝大理學部講師に聘せられたが、大正九年八月之を辭して三菱製紙會社に入社し、超えて昭和六年同社の傍系會社江戸川工業所に轉じた。之より先きパルプに關する研究を積み、同年工學博士の學位を授與された。同八年三月渡獨し、I・G會社にメタノール機械裝置の設計並購入の爲め約半歲滯留し、同年九月歸朝し、同時に設立されたる東京メタノール會社に入社し以て今日に及んでゐる。信仰は神道趣味は庭球、釣魚等である。
妻マス（明治三七年生、福岡縣井田德夫長女、中津高女卒）長男道夫（大正一四年生）二男恭介（昭和六年生）三男洋介（同八年生）長女博子（同三年

ちに三宮驛小荷物係となり、爾來馬場驛詰、神崎驛助役、大阪驛助役、綾部驛助役、馬場驛助役等を歷任し、大正二年名立驛長となつた。同三年九月田端驛助役に轉じ、同六年九月秋葉原驛貨物係となり爾來同驛の助役兼任、貨物主任等を經同十五年五月鐵道司法警察吏を命ぜられ昭和二年首席助役に昇進し、東洋一の稱ある大貨物驛に活躍以て今日に及んでゐる。此の間勳功に依り從七位、勳八等に叙せられ、大正及昭和兩度の大禮記念章を賜はり、更に昭和七年十月鐵道界最高

生）

中村吉右衛門氏　牛込區中町八　電話牛込七九六

歌舞伎俳優
明治一九年三月生、東京市

氏は本名を波野辰次郎と謂ひ、名優中村歌六の長男として淺草區象潟町に呱々の聲を揚げた。十一歳の時團藏一座に加はり「越後騒動」の仙千代を勤めたるを初舞臺とし、二十歳の時歌舞伎座に於ける「石切梶原」に出演して名題に昇進し後歌舞伎座幹部準技藝員に選ばれ歌舞伎座附として活躍した。大正元年尾上菊五郎、故守田勘彌等と共に市村座附となるに及んで人氣を博し、更にその後本郷座新橋演舞場、歌舞伎座等に出演し、入神の技と名調子を以て滿都の人氣を負ひ、歌舞伎劇界一流の名手として謳はれるに至つた。當り藝は「地震加藤」の加藤清正、「石切梶原」の梶原、「夏祭」の團七、「陣屋」の熊谷直實、或は樋口兼光、盛綱、大藏卿等にして其の至藝は夙に定評がある。定紋は揚羽蝶、家號は播磨屋、俳名は秀山、宗旨は日蓮宗、趣味として繪畫、釣魚、小唄等を好み、就中小唄は頗る巧みである。

妻千代（明治三〇年生、東京府小林長三郎女）長女正子（大正一二年生）弟聖司（明治四二年生）

中根平三郎氏　淀橋區下落合町一ノ四三

東京鐵道局經理課勤務、隅田川倉庫時計修繕掛主任
明治一三年八月生、東京市

氏は東京市中根平次郎氏の長男として市内芝區愛宕下町に生れた。父は時計商にして氏も亦斯業に志し鞆小學校卒業後松苗氏に英語、數學を學び、時計師岡本菊三郎氏に時計修繕を學び、明治三十二年大阪市奈良部鐵二郎氏方に時計職として入り、同三十六年我が鐵道界最初の時計修繕師たる武藤氏辭任の後任として日本鐵道運輸課時計修繕掛となつた。爾來上野出納事務所、新橋工場汽車部等に勤務し大正二年東京鐵道管理局倉庫課に轉じ、同九年鐵道局雇となり、同十二年上野倉庫に移り、昭和五年九月現職に就いた。此の間その功績に依り、鐵道精勤章御大禮記念章、鐵道功績章其他を下賜され、又各方面より屢々表彰された。現時鐵道省に使用される時計は全部氏を經ざるはなく、新規採用に或は修繕に最高權威者として貢献し、斯界の至寶と仰がれてゐる。佛教を信仰し、一致團結以て事に當ることを處世訓とし、職務そのものを趣味とする稀に見る人格者である。

妻ハナ（東京市高林波次郎長女）長男勇（大正六年生、時計學校在學）長女タエ子（同一三年生）

中野留吉氏　芝區芝浦町二ノ三　電話三田六四五・六四六

中野冷凍機製作所主
明治一八年五月生、大阪府

氏は大阪府中野荏二郎氏の二男に生れ明治四十五年分家した。夙に上京して芝浦製作所に入り、孜々として職務に精勵すると共に冷凍機に關する研究を積み、大正六年同所を辭して獨立し麻布區新廣尾町に工場を設けて中野式冷凍機の製造を開始した。爾來その製作販賣に努力し漸次各方面に好評を博して業績逐年向上し、昭和三年株式組織に改めると同時に氏は代表取締役となり、同四年十二月現地に工場を設立すると同時に再び個人經營に改め、機械部、鐵工部、木工部の三部制を設けて内容の充實を圖るに及んで業績益々活況を呈し、以て今日に及んでゐる。

長男一雄（大正二年生、高等專修學校卒、家業に從事）二男秀司（同四年生、高輪商業卒、高等專修學校在學）三男律（同七年生、同上在學）長女とし子（同一〇年生）

中西伸次氏　赤坂區靈南坂町二四　電話赤坂一三六

再製樟腦（株）常任監査役、日本香料藥品（株）監査役
明治二六年二月生、福岡縣
明治四四年下關商業學校卒業

氏は福岡縣田川郡同所村大字中西利平氏同縣赤穗町に呱々の聲を揚げた。夙に上京して學業を修め、大正九年文官高等試驗に合格し、同十一年内務省に奉職し地方局屬を拜命した。同十三年茨城縣に轉じ理事官となり、同十四年靜岡縣事務官に轉じ、昭和四年京都府事務官として赴任後幾何もなく内務省事務官に昇進した

に襲爵を仰付けられた。夙に東京帝國大學に學び、獨逸法律を專攻し、大學卒業の年文官高等試驗に合格し直ちに農商務省に奉職した。爾來保險事務官兼農商務省參事官、特許局事務官兼水産講習所教授等を經て特許局長に昇進し、更に水産局長に任ぜられた。後官界を去つて水産

の技と名調子を以て滿都の人氣を負ひ、歌舞伎劇界一流の名手として謳はれるに至つた。當り藝は「地震加藤」の加藤清正、「石切梶原」の梶原、「夏祭」の團七、「陣屋」の熊谷直實、或は樋口兼光、盛綱、大藏卿等にして其の至藝は夙に定評がある。定紋は揚羽蝶、家號は播磨屋、俳名は秀山、宗旨は日蓮宗、趣味として繪畫、釣魚、小唄等を好み、就中小唄は頗る巧みである。

妻千代（明治三〇年生、東京府小林長三郎女）長女正子（大正一二年生）弟

務し大正二年東京鐵道管理局倉庫課に轉じ、同九年鐵道局雇となり、同十二年上野倉庫に移り、昭和五年九月現職に就いた。此の間その功績に依り、鐵道精勤章御大禮記念章、鐵道功績章其他を下賜され、又各方面より屢々表彰された。現時鐵道省に使用される時計は全部氏を經ざるはなく、新規採用に或は修繕に最高權威者として貢獻し、斯界の至寶と仰がれてゐる。佛教を信仰し、一致團結以て事に當ることを處世訓とし、職務そのものを趣味とする稀に見る人格者である。

し　昭和三年株式組織に改めると同時に氏は代表取締役となり、同四年十二月現地に工場を設立すると同時に再び個人經營に改め、機械部、鐵工部、木工部の三部制を設けて內容の充實を圖るに及んで業績益々活況を呈し、以て今日に及んでゐる。

長男一雄（大正二年生、高等專修學校卒、家業に從事）二男秀司（同四年生、高輪商業卒、高等專修學校在學）三男律（同七年生、同上在學）長女とし子（同一〇年生）

中西　伸次氏

赤坂區靈南坂町二四
電話　赤坂一三六

再製樟腦（株）常任監査役、日本香料藥品（株）監査役

明治二六年二月生、福岡縣

明治四四年下關商業學校卒業

氏は福岡縣田川郡銅所村故中西利平氏の四男として同地に呱々の聲を揚げた。下關商業學校卒業後上京し、後藤新平伯增田次郎氏等の知遇を受け、同四十五年滿鐵に入社し中村總裁の秘書役となつたが、大正二年神戸鈴木商店に轉じた。同七年之を辭して獨立し、中西伸次商店を創立し滿洲、印度方面との貿易に從事したが、財界反動の爲め同十年之を閉鎖した。翌十一年鮮氷汽船株式會社を創立しその常務取締役に就任し、翌十二年辭任し、爾來暫らく閑地に在つたが、代議士松野鶴平氏の推輓に依り現職に就き以て今日に及んでゐる。禪宗を信仰し「强く生き、耐え忍ぶ」ことを以て處世訓とし敏腕達識にして前途の飛躍を期待されてゐる。趣味の尤たるものは謠曲である。

永安　百治氏

世田谷區弦卷町二ノ三八
電話　世田谷三七七八

正六位、內務事務官、內務省地方局勤務

明治二八年四月生、兵庫縣

氏は兵庫縣永安松太郎氏の二男として同縣赤穗町に呱々の聲を揚げた。夙に上京して學業を修め、大正九年文官高等試驗に合格し、同十一年內務省に奉職し地方局屬を拜命した。同十三年茨城縣に轉じ理事官となり、同十四年靜岡縣事務官に轉じ、昭和四年京都府事務官として赴任後幾何もなく內務省事務官に昇進した爾來同省地方局に勤續して漸次その敏腕を認められ、昭和八年同省より歐米出張を命ぜられ、先進諸國に於ける地方行財政及び衞生等を調査研究して同年九月歸朝し、新知識を傾注して地方行財政の刷新に努力以て今日に及んでゐる。宗旨は眞宗、趣味として圍碁を好む。

妻キミ子（明治三五年生、兵庫縣野田實也三女、赤穗高女卒）長男宏（大正十五年生）二男輝夫（昭和三年生）三男敏雄（同六年生）長女淑子（大正一二年生）

村上　隆吉氏

小石川區茗荷谷町五七
電話　小石川四二二

從三位、勳三等、法學士、男爵、全國淡水漁業聯合會、中央水產協會各會長、日本輸出冷凍鮪水產組合取締役

明治一〇年三月生、東京府

明治三五年東京帝國大學法科卒業

氏は故男爵海軍主計中將村上敬次郎氏の長男に生れ、大正十五年家督相續と共に襲爵を仰付けられた。夙に東京帝國大學に學び、獨逸法律を專攻し、大學卒業の年文官高等試驗に合格し直ちに農商務省に奉職した。爾來保險事務官兼農商務省參事官、特許局事務官兼水產講習所教授等を經て特許局長に昇進し、更に水產局長に任ぜられた。後官界を去つて水產業界に入り、現時前揭の任に在つて本邦水產業の發達に貢獻しつゝある。

妻梅子（明治二三年生、東京府士族宮部修妹）長女昭子（大正三年生）二女慶子（同四年生）三女由喜子（同七年生）四女美枝（同九年生）五女清江（同一二年生）

村元政次郎氏

日本橋區箱崎町四ノ一
電話　茅場町三一八

中西儀兵衞商店（株）支配人

明治一五年一月生、東京市

氏は村元吉之進氏の二男として東京市京橋區に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に中西儀兵衞商店に入り、孜々として店務に勵み、正直勤勉をモットーとして同店の發展に努力すること實に四十餘年に及び、店主及び取引先に絕大の信用を博した。現に同店支配人の要職に在つて益々活躍し、同店の柱石として重んぜられてゐる。日蓮宗を信仰し、圍碁、將棋、謠曲等に趣味がある。

妻壽惠（明治一九年生、滋賀縣吉田耕作女）長男信雄（大正一一年生）二男義雄（同一四年生）長女文子（同二年生、市立第一高女卒）二女貞子（同五年生）三女光子（同八年生）四女千代子（昭和二年生）

黑川　渉氏　赤坂區青山南町五ノ二四　電話　青山二六九二

從五位、勳六等、法學士、司法書記官兼檢事、大臣官房會計課長、營繕管財局事務官

明治二五年五月生、東京府

大正六年東京帝國大學法科獨法科卒業

氏は東京府黑川穰氏の七男として呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。大學卒業後檢事に任ぜられ、神戸地方裁判所、同區裁判所、東京地方裁判所、同區裁判所等に檢事として敏腕を揮ふこと約十ケ年にして、大正十五年司法書記官となり、昭和四年歐米各國に出張を命ぜられ、歸朝後法制審議會幹事に任ぜられた。現時前掲の職に在り、才腕と人格と相俟つて信望を博してゐる。

母千春（明治三年生、男爵黑川秀雄伯母）妻かね代（同三四年生、東京府西鄕佐姉）嗣子洸（昭和六年生、長女冲子（同二年生）

工藤　莊平氏　淀橋區下落合一ノ四五　電話　大塚二一四六

從四位、勳四等、法學士、內大臣秘書官宮內省御用掛

明治一三年一二月生、岡山縣

明治四一年東京帝大法科政治科卒業

氏は岡山縣工藤民治氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十四年分れて一家を創めた。學業を卒へるや直ちに朝鮮總督府に奉職し、事務官となり、後關東廳に轉じて秘書官兼事務官として活躍すること數年にして更に宮內省に移り宮內省御用掛兼內大臣府御用掛を命ぜられ、漸次累進して現時前掲の職に在り、此の間多年の功勞に依り從四位、勳四等に叙せられた。溫厚篤實なる人格者として省內に信望を博してゐる。佛敎を信ずること厚く、讀書に趣味がある。

妻泰（明治二九年生、岡山縣太田一太三女）長男道也（大正一〇年生）二男知夫（同一二年生）長女博子（同六年生）二女聿子（昭和二年生）

隈部　一雄氏　本鄕區駒込曙町二五　電話　大塚四七四八

從五位、工學博士、東京帝國大學助敎授、東京工業大學敎授、內務省囑託

明治三〇年二月生、東京府

大正九年東京帝國大學工學部卒業

氏は幼時より頭腦頗る緻密にして創造の才に富み、小學校より大學迄常に優秀の成績を以て一貫した。大學卒業後母校に敎鞭を執る傍ら益々研究を重ね、大正十五年工學博士の學位を授與され、現時前掲の任に在つて活躍しつゝある。趣味として音樂、繪畫等を好み、十數年前より趣味的に蓄音器の研究に沒頭し、遂に蓄音器の製造に志し、昭和六年稍々完全なる蓄音器の創造に成功したが、その後名曲堂主比良氏の依賴に應じ、純國產高級蓄音器の製作に着手し、苦心研究の結果昭和八年之を完成した。是れ卽ちアポロン蓄音器にして、名曲堂より廣く販賣され、國產蓄音器の代表的逸品として好評を博してゐるが、氏は益々研究改良を加へて劃期的蓄音器を完成せんとし目下研究中にして、各方面より頗る期待されてゐる。

久保田貫一郎氏　澁谷區青葉町一五　電話　青山四五〇

從六位、外務事務官、外務省條約局勤務

明治三五年三月生、和歌山縣

氏は和歌山縣那賀郡北野上村久保田廣助氏の三男として同所に呱々の聲を揚げた。夙に上京して東京商科大學に學んだが後外交界に志し、外務省在外研究員に選ばれて佛國に留學し、法律經濟を專攻すること三ケ年にして、昭和二年九月外交官補に任ぜられた。同三年二月歸朝以來外務省條約局に勤務して漸次その手腕を認められ、同八年經濟會議全權隨員として英京倫敦に航し、克くその使命を完うして同年十月歸朝し、現時同局第二課に勤務中である。資性溫厚にして語學に

常務取締役に擧げられ、同社の發展に努力し、一方山爲硝子製造所及び山三商會を經營し、關西實業界に雄飛以て今日に及んでゐる。

母よね（明治二年生）妻幸（同二七年生、大阪府平井孫三郎六女）長女春子（明治四五年生）二女光子（大正三年三四年生）四男徹（同三八年生）五男孝（同四一年生）三女富士子（同四三年生）七男七郎（同四四年生）四女田鶴子（大正元年生）五女美子（同三年生）八男恒（同五年生）六女和子（同八年生）二男兼二郎（明治三〇年生、妻文子と共に分家）長女園子（同三六

大學卒業後檢事に任ぜられ、神戸地方裁判所、同區裁判所、東京地方裁判所、同區裁判所等に檢事として敏腕を揮ふこと約十ケ年にして、大正十五年司法書記官となり、昭和四年歐米各國に出張を命ぜられ、歸朝後法制審議會幹事に任ぜられた。現時前掲の職に在り、才腕と人格と相俟つて信望を博してゐる。

母千春（明治三年生、男爵黑川秀雄伯母）妻かね代（同三四年生、東京府西郷佐姉）嗣子洸（昭和六年生、長女冲子（同二年生）

て省内に信望を博してゐる。佛教を信ずること厚く、讀書に趣味がある。

妻泰（明治二九年生、岡山縣太田一太三女）長男道也（大正一〇年生）二男知夫（同一二年生）長女博子（同六年生）二女聿子（昭和二年生）

隈部一雄氏 本郷區駒込曙町二五 電話 大塚四七四八

從五位、工學博士、東京帝國大學助教授東京工業大學教授、內務省囑託

明治三〇年二月生、東京府

大正九年東京帝國大學工學部卒業

加へて劃期的蓄音器を完成せんとし目下研究中にして、各方面より頗る期待されてゐる。

久保田貫一郎氏 澁谷區青葉町一五 電話 青山四五〇

從六位、外務事務官、外務省條約局勤務

明治三五年三月生、和歌山縣

氏は和歌山縣那賀郡北野上村久保田廣助氏の三男として同所に呱々の聲を揚げた。夙に上京して東京商科大學に學んだが後外交界に志し、外務省在外研究員に選ばれて佛國に留學し、法律經濟を專攻することと三ケ年にして、昭和二年九月外交官補に任ぜられた。同三年二月歸朝以來外務省條約局に勤務して漸次その手腕を認められ、同八年經濟會議全權隨員として英京倫敦に航し、克くその使命を完うして同年十月歸朝し、現時同局第二課に勤務中である。資性溫厚にして語學に通じ法律に明るく、外交的手腕に秀で、前途を囑望されてゐる。眞言宗を信仰しスポーツに趣味がある。

妻清子（明治四二年生、東京府石井菊次郎三女、學習院修、スイス及佛國女學校卒）長女紀子（昭和七年生）

山本爲三郎氏 大阪市北區與力町二ノ四一七、電話堀川一五六

山爲硝子製造所（株）代表取締役、山三商會主、日本麥酒鑛泉（株）常務取締役兼大阪支店長

明治二六年四月生、大阪府

氏は大阪府人山本爲藏氏の長男として呱々の聲を揚げ、大正九年その家督を相續した。夙に實業界に投じ、大正六年渡米して半自動式製壜機の特許權を獲得し歸朝後故和田豐治氏及び濱口吉右衛門氏等と共に日本製罐會社を創立し、その專務取締役となつた。同十年同社が加富登麥酒、帝國鑛泉兩社と合併し日本麥酒鑛泉株式會社が設立されるに及んで、同社常務取締役に擧げられ、同社の發展に努力し、一方山爲硝子製造所及び山三商會を經營し、關西實業界に雄飛以て今日に及んでゐる。

母よね（明治二年生）妻幸（同二七年生、大阪府平井孫三郎六女）長女春子（明治四五年生）二女光子（大正三年生）四女慶子（同八年生）

松本健次郎氏 戸畑市中原一〇七一 電話 戸畑二

正六位、勳四等、嘉穗鑛業、留萌鐵道、黑崎窯業、若松築港各（株）取締役會長、九州製鋼（株）社長、幸袋工作所、三井信託各（株）取締役、安川電機製作所（株）監査役、明治紡績（資）代表社員

明治三年一〇月生、福岡縣

氏は男爵安川敬一郎氏の二男として福岡縣に生れ、明治二十四年叔父に當る舊福岡藩士松本潛氏の養子となり、同二十六年その家督を相續した。父敬一郎、實弟清三郎兩氏等と共に夙に實業界に雄飛し、安川財閥の基礎を築いた。多年實業界に盡したる功績に依り昭和三年正六位に叙せられ、現時前掲各社重役を兼ねて九州財界に重きを爲してゐる。趣味として特に乘馬を好む。

妻秀子（明治八年生、子爵井上良馨長女）長男幹一郎（同二七年生）三男馨（同三四年生）四男徹（同三八年生）五男孝（同四一年生）三女富士子（同四三年生）七男七郎（同四四年生）四女田鶴子（大正元年生）五女美子（同三年生）八男恒（同五年生）六女和子（同八年生）二男兼二郎（明治三〇年生、妻文子と共に分家）長女園子（同三六年生、男爵黑田瑜妻）二女眞佐子（同三九年生、大迫勝妻）

松本幹一郎氏 赤坂區青山南町六ノ一一八、電話 青山一四七〇

明治鑛業（株）取締役、安川電機製作所（株）東京出張所長、安川松本商店東京支店長

明治二七年六月生、福岡縣

大正七年神戸高等商業學校卒業

氏は福岡縣士族松本健次郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。神戸高商を卒業後米國フイラデルフイヤ大學に學び、大正九年歸朝後直ちに明治鑛業株式會社に入社し、實務を習熟後昭和三年安川松本商店神戸出張所主任となり、同五年東京支店長に轉じ、以て今日に及んでゐる。傍ら安川電機製作所東京出張所長及び明治鑛業會社重役をも兼ねて敏腕の聞え高く、安川系の直系者として將來の大飛躍を期待されてゐる。宗旨は眞宗趣味はゴルフ、野球、寫眞、旅行等頗る

廣汎である。

父健次郎（明治三年生、現戸主）妻花子（同三四年生、理學博士佐々木忠次郎五女）長男道雄（昭和二年生）長女眞喜子（大正一二年生）二女百世（昭和四年生）三女尙子（同六年生）

横濱市鶴見區下末吉町九七五（事務所）神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル　電話　神田三六三五・三六八一

松尾黃楊夫氏

勳七等、辯護士

明治二九年一〇月生、大分縣

昭和五年中央大學法科卒業

氏は大分縣大分郡瀧尾村の出身にして大正三年裁判所書記試驗に合格して直ちに大分地方裁判所に奉職し、同七年兵役に服し、シベリヤに出征して偉功を樹て勳七等に叙せられた。同八年復職したが同十年九月鐵道省に轉じ、信濃川電業事務所、千葉改良事務所等に勤務し昭和四年東京鐵道局工務課に移つた。此の間絶えず勉學して昭和二年專檢試驗に合格し更に中央大學に進んで法律を研究し、同六年司法科試驗に合格し多年の宿望を達したるを以て、同八年九月鐵道省を辭し現在の地に辯護士を開業した。爾來日尙ほ淺きに拘らず、本所區兩國ビルにも出張所を設けて盛んに活躍し、大いに前途を期待されてゐる。

古川貞治郎氏

芝區金杉町四ノ二二　電話　三田三五一二

日本ラヂエーター製作所主

明治三〇年九月生、新潟縣

氏は新潟縣人故古川鐵五郎氏の五男として、同縣西蒲原郡吉田町に呱々の聲を揚げた。夙に上京して自動車工業界に投じ、只管技術を磨くと共に修養怠らず、遂に大正十二年獨立して古川ラヂエーター製作所を創設した。爾來國產振興、輸入防遏の大抱負の下に優秀品の製出に努めると共に販路の擴張を圖りたる効果空しからず、當所製品は歐米一流品を凌駕する逸品として定評を得、各方面よりの注文逐年增加して今日の隆況を呈するに至つた。昭和七年日本ラヂエーター製作所と改稱以來益々發展し、今や陸海軍省其他の官廳並に民間自動車會社等確乎たる販路を擁し、業況益々活氣を呈してゐる。

妻のぶ、長女京子、二女安子、三女里子、四女連子。

福島　茂富氏

麻布區市兵衞町二ノ六三　電話　赤坂九〇九

丸玉商店(株)取締役、日本觀光啓成社、液化炭酸各(株)監査、日本麥酒鑛泉(株)取締役兼營業課長

明治二一年一一月生、東京府

氏は東京府人須田宣氏の弟として呱々の聲を揚げ、後先代福島りやうの養子として迎へられ、大正十二年福島家の家督を相續した。夙に實業界に投じ、精勵恪勤以て次第に地歩を進め、日本麥酒鑛泉株式會社に入社後は、營業課長の要職に擧げられ、販賣戰の激烈なる斯業界に在りて敏腕を揮ふこと多年、克く同社の發展に貢獻し、麥酒業界に名聲を博した。資性濶達にして進取の意氣に富み、而も業界稀れに見る溫厚篤實家として夙に聲望がある。

古田　慶三氏

大森區田園調布二ノ五五　電話　田園調布三三一

昭和石炭(株)專務取締役、共立汽船(株)取締役、北海道炭礦汽船(株)常任監査役

夕張鐵道(株)監査役

慶應三年五月生、長野縣

明治二四年東京高等商業學校卒業

當家は代々信州高遠藩に仕へたる名門にして、氏は先代古川重威氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に東京高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに三井に入社し、漸次その手腕を認められて累進し、三井鑛山商務部長に擧げられた。爾來基隆炭礦會社常務、石狩石炭會社取締役等を經て今日に至り現在前掲の要職を兼ねて財界に重きをなしてゐる。

妻しげ（明治一〇年生、東京府佐渡啓一二女）長男義一（同三八年生）四男長雄（大正一〇年生）四女三代子（昭和元年生）二男忠夫（明治四一年生、分家）三男憲郎（分家）二女君子（同ラグビー等を好み、學生時代は選手として活躍した。

兄正夫（明治三三年生、京美商業卒）

同文夫（同三六年生、東京帝大法學部卒）姉恒子（同三〇年生、在羅府、新野氏妻）同八千代（同四〇年生、東京朝日新聞社員加納幾男妻）

妻スマ（明治二〇年生、東京府農工銀行頭取鈴木茂兵衞妹）長女暉子（大正四年生）二女方子（同七年生）

名古屋市東區東芳野町二ノ八四　電話　東一六三三

藤本　憲治氏

東邦瓦斯(株)取締役

に服し、シベリヤに出征して偉功を樹て勳七等に叙せられた。同八年復職したが同十年九月鐵道省に轉じ、信濃川電業事務所、千葉改良事務所等に勤務し昭和四年東京鐵道局工務課に移つた。此の間絶えず勉學して昭和二年專檢試驗に合格し更に中央大學に進んで法律を研究し、同六年司法科試驗に合格し多年の宿望を達したるを以て、同八年九月鐵道省を辭し現在の地に辯護士を開業した。爾來日尚ほ淺きに拘らず、本所區兩國ビルにも出張所を設けて盛んに活躍し、大いに前途

至つた。昭和七年日本ラヂエーター製作所と改稱以來益々發展し、今や陸海軍省其他の官廳並に民間自動車會社等確乎たる販路を擁し、業況益々活氣を呈してゐる。

妻のぶ、長女京子、二女安子、三女里子、四女連子。

福島　茂富氏　麻布區市兵衛町二ノ六三　電話　赤坂九〇九

丸玉商店(株)取締役、日本觀光啓成社、液化炭酸各(株)監査、日本麥酒鑛泉(株)取締役兼營業課長

昭和石炭(株)專務取締役、共立汽船(株)取締役、北海道炭礦汽船(株)常任監査役、夕張鐵道(株)監査役

慶應三年五月生、長野縣

明治二四年東京高等商業學校卒業

當家は代々信州高遠藩に仕へたる名門にして、氏は先代古川重威氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に東京高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに三井に入社し、漸次その手腕を認められて累進し、三井鑛山商務部長に擧げられた。爾來基隆炭礦會社常務、石狩石炭會社取締役等を經て今日に至り

現在前掲の要職を兼ねて財界に重きをなしてゐる。

妻しげ（明治一〇年生、東京府佐渡啓一二女）長男義一（同三八年生）四男長雄（大正一〇年生）四女三代子（昭和元年生）二男忠夫（明治四一年生、分家）三男德郎（分家）二女君子（同三三年生、他家に嫁す）

藤山　一郎氏　目黑區下目黑四ノ九九三　電話　高輪一三五五

聲樂家、日本ビクター蓄音器(株)文藝部員兼專屬歌手

明治四四年四月生、東京市

昭和八年東京音樂學校聲樂科卒業

氏は本名を增永丈夫と謂ひ、增永信三郎氏の三男として日本橋區蠣殼町三ノ一に生れた。藤山一郎はその藝名である。幼少の頃より音樂を好み、日本女子音樂學校長山田源一郎氏に親しむに及んで益々音樂に趣味を持ち遂に音樂を以て起つに至つた。音樂學校聲樂科在學中よりその天才は普く認められ、卒業後直ちに日本ビクターの專屬として聘せられ、レコードを通じて全國的に名聲を博するに至つた。就中「酒は涙か溜息か」「丘を越えて」「僕の青春」等に依つて益々眞價を發揮し、最も前途ある聲樂家として囑望されてゐる。宗旨は眞宗、趣味として水泳

ラグビー等を好み、學生時代は選手として活躍した。

兄正夫（明治三三年生、京美商業卒）同文夫（同三六年生、東京帝大法學部卒）姉恒子（同三〇年生、在羅府、新野氏妻）同八千代（同四〇年生、東京朝日新聞社員加納幾男妻）

福本　榮作氏　大森區田園調布二ノ七〇六　電話（店舗）田園調布八五三　日本橋區箱崎町一ノ五　電話　茅場町二〇一六

全國鹽元賣捌人組合聯合會參事、東京地方鹽業(株)常務取締役、三東商會總本店代表者

明治一三年一〇月生、石川縣

明治四一年京都法政大學法律科卒業

氏は石川縣福本磯右衛門氏の長男として同縣松任町に生れ、明治三十年分れて一家を樹てた。夙に京都法政大學（立命館大學の前身）に學び、卒業後直ちに實業界に志し鈴木茂兵衛商店に入り鹽、油及び肥料等の販賣に從事すること多年に及び、此の間鹽業に關する研究を積んだ大正十一年東京地方鹽業會社の創立と同時に常務取締役となり、爾來同社の發展に努力する傍ら、我が鹽業界の啓發に貢献し、現時前掲の任を兼ね鹽業界の功勞者として信望を博してゐる。

妻スマ（明治二〇年生、東京府農工銀行頭取鈴木茂兵衛妹）長女暉子（大正四年生）二女方子（同七年生）

藤本　憲治氏　名古屋市東區東芳野町二ノ八四　電話　東一六三三

東邦瓦斯(株)取締役

明治一八年七月生、奈良縣

明治四〇年大阪高工應用化學科卒業

氏は奈良縣藤本信了氏の長男として同縣下に生れた。鄕里の中學卒業後大阪高等工業學校に進み、應用化學科に於て專心研修し、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに實業界に入り、實地經驗を積む傍ら益々研鑽を重ねたる効果空しからず、優秀なる技術家として名聲を博するに至つた。現時東邦瓦斯會社の取締役として活躍しつゝあるが、卓拔なる技術と經營の才相俟つて社內に重きをなし益々同社の發展に貢献しつゝある。

妻桐枝（明治二六年生、奈良縣岩井清五郎長女）男一雄（同四四年生）男武大正七年生）男勇（同一〇年生）女憲子（同三年生）

福岡　秀而氏　荒川區南千住町一ノ五　電話　淺草一三一二

福岡鐵工所々主

明治一五年二月生、千葉縣

明治三三年明治大學法科卒業

氏は千葉縣久保田長八氏の三男として同縣山武郡に呱々の聲を揚げ、明治三十九年福岡正介氏の養子となり、同四十四年福岡家より分れて一家を創めた。夙に上京して明治大學法科に學び、卒業後實業界に投じ福岡鐵工所を設立し、爾來その經營に努力以て今日に及んでゐる。志操頗る堅固にして初志を貫徹せざれば止まざる意氣燃ゆるが如く、當所建設後幾度か難關に遭遇しながらも克く之を突破して今日の隆盛に導き、今や帝都に於ける鐵工業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。又國勢調査委員等として公共的に盡したる功績も顯著にして、各方面に信望を博してゐる。

母うた（文久二年生）妻ミツ子（明治一八年生、養父正介女）長男正秀（同四〇年生）長女美惠子（大正四年生）二女智惠子（同六年生）

小池直太郎氏　四谷區南町鐵道官舍內

勳七等、鐵道局書記、信濃町驛長

明治二〇年一一月生、埼玉縣

明治四一年岩倉鐵道學校卒業

氏は埼玉縣比企郡平村小池茂十郎氏の二男として同所に呱々の聲を揚げた。夙に岩倉鐵道學校に學び、卒業後直ちに東部鐵道管理局に奉職し、新橋驛車掌所詰となつた。幾何もなく鐵道聯隊に入營し大正三年日獨戰に出征して同年十二月凱旋し、戰功に

依り同四年十一月勳八等白色桐葉章及び戰捷記念章、從軍記念章を下賜された。同五年三月代々木驛助役となり、續いて横濱驛助役、鶴見驛助役を經て再度横濱驛助役となり、昭和三年七月東京驛車掌詰所助役に任ぜられ、同四年九月中央線三鷹驛長に昇進し、後同線信濃町驛長に榮轉した。此の間昭和三年五月、多年の功績に依り勳七等瑞寶章を下賜され、又大禮記念章を授けられた。現時神宮外苑を控へて樞要なる信濃町驛長として敏腕を揮ひ、稀に見る人格者として信望を博してゐる。信仰は淨土宗、趣味は讀書、旅行等である。

妻マサ（明治二五年生、埼玉縣柳瀨輪吉長女）長男正一（大正五年生）二男清（同九年生）四男英夫（昭和二年生）五男丈夫（同四年生）長女タキ（大正三年生、神奈川縣立第一高女卒）二女タミ（同七年生）

黑正巖氏　京都市左京區淨土寺萬橋町

經濟學博士、京都帝國大學教授

明治二八年一月生、岡山縣

大正九年京都帝大經濟學部卒業

氏は岡山縣中山丈五郎氏の三男として同縣上道郡可知村に呱々の聲を揚げた。夙に岡山の第六高等學校を經て京都帝國大學に學び、經濟學を專攻し、優秀の成績を以て同大學卒業後更に研究を重ね大正十二年歐米に留學し、諸大家に就いて經濟學を研究する傍ら歐米諸國に於ける經濟界の實情を調査して同十四年歸朝した。翌十五年母校京都帝國大學教授に任ぜられ、後進を指導すると共に益々研鑽したる効果空しからず、昭和四年經濟學博士の學位を授けられた。同六年再度歐洲に出張し、歸朝後引續き母校に教鞭を執り、以て今日に及んでゐる。

古仁所豐氏　豐島區巢鴨六丁目三二〇　電話大塚一〇五六

法學士、鑛山並金融業

明治四三年東京帝大法科政治科卒業

氏は東京府古仁所仁兵衞氏の二男として巢鴨町に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに日本銀行に入り計算局に於て實務を習熟し、調査局秘書役に移り、更に國庫局に轉じた。その後海外代理店監査役として英京倫敦に赴任し、歸朝後營業局の要職に進んだが、幾何もなく南滿洲鐵道株式會社に轉じ經理部會計課長となつた。爾來參事兼監査課長、東京支店經理課長兼庶務課長案內所長事務取扱等を經て本社經理部長に進み、傍ら撫順炭販賣株式會社監査役始した。爾來專ら同商會の經營に意を注ぎ以て今日に及び、現時東印度木材公司の代表社員をも兼ねて活躍しつゝある。

長男清（大正二年生）二男明（同一〇年生）三男謙吉（同一二年生）四男四郎（同一三年生）長女孝子（明治四三年生）二女信子（大正元年生）三女操（同一三年生）五男博（同一四年生）長女公子（同一五年生）

榎本重治氏　澁谷區松濤五　電話青山七二八

正五位、勳四等、法學士、海軍書記官兼教官

母うた（文久二年生）妻ミツ子（明治一八年生、養父正介女）長男正秀（同四〇年生）長女美惠子（大正四年生）二女智惠子（同六年生）

小池直太郎氏　四谷區南町鐵道官舍内

勳七等、鐵道局書記、信濃町驛長

明治二〇年一一月生、埼玉縣

明治四一年岩倉鐵道學校卒業

氏は埼玉縣比企郡平村小池茂十郎氏の二男として同所に呱々の聲を揚げた。夙に岩倉鐵道學校に學び、卒業後直ちに東

功績に依り勳七等瑞寶章を下賜され、又大禮記念章を授けられた。現時神宮外苑を控へて樞要なる信濃町驛長として敏腕を揮ひ、稀に見る人格者として信望を博してゐる。信仰は淨土宗、趣味は讀書、旅行等である。

妻マサ（明治二五年生、埼玉縣柳瀨輪吉長女）長男正一（大正五年生）二男清（同九年生）四男英夫（昭和二年生）五男丈夫（同四年生）長女タキ（大正三年生、神奈川縣立第一高女卒）二女タミ（同七年生）

博士の學位を授けられた。同六年再度歐洲に出張し、歸朝後引續き母校に教鞭を執り、以て今日に及んでゐる。

古仁所　豐氏　豐島區巢鴨六丁目三一〇　電話　大塚一〇五六

法學士、鑛山並金融業

明治四三年東京帝大法科政治科卒業

氏は東京府古仁所仁兵衛氏の二男として巢鴨町に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに日本銀行に入り計算局に於て實務を習熟し、調査局秘書役に移り、更に國庫局に轉じた。

その後海外代理店監査役として英京倫敦に赴任し、歸朝後營業局の要職に進んだが、幾何もなく南滿洲鐵道株式會社に轉じ經理部會計課長となつた。爾來參事兼監査課長、東京支店經理課長兼庶務課長案内所長事務取扱等を經て本社經理部長に進み、傍ら撫順炭販賣株式會社監査役を兼ね、滿洲產業の開發に貢献する所甚大であつた。その後滿鐵を去ると同時に撫順炭會社をも辭し、獨立して鑛山業並に金融業を創始し、以て今日に及んでゐる。溫厚篤實の人格者として夙に各方面に信望を博してゐる。

長男智、外に三男三女。

小池義一郎氏　大森區調布鵜ノ木町（營業所）京橋區銀座三ノ五、電話京橋ニ三六二

アメリカン電氣商會主、東印度木材公司（資）代表社員

明治二四年一〇月生、靜岡縣

氏は靜岡縣小池義三郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に志し、濱松中學卒業後直ちに上京して大和メタル會社に入社し、精勤實に二十年に及び、同社の功勞者として社内の信望を博した。後同社を辭し獨立してアメリカン電氣商會を創立し、配線照明器具類の製作販賣を開始した。爾來專ら同商會の經營に意を注ぎ以て今日に及び、現時東印度木材公司の代表社員をも兼ねて活躍しつゝある。

長男清（大正二年生）二男明（同一〇年生）三男謙吉（同一二年生）四男四郎（同一三年生）長女孝子（明治四三年生）二女信子（大正元年生）三女操（同六年生）四女萬壽子（同七年生）五女五四子（昭和二年生）

纐纈　彌三氏　上海公共租界黃浦路三五號、上海領事館内

從六位、勳六等、法學士、上海領事兼内務書記官

明治二六年一二月生、岐阜縣

大正九年京都帝國大學法科政治科卒業

氏は岐阜縣纐纈秋三郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。大學卒業後直ちに愛知縣屬となり、後内務屬、北海道廳警視石狩支廳長、空知支廳長、兵庫縣警視、同外事課長、警視廳警視、同特別高等課長兼外事課長等を經て茨城縣警察部長となり、更に靜岡縣警察部長を經て昭和六年三重縣書記官警察部長に就任し、後現職に轉じ現時上海に在りて活躍しつゝある。

父秋三郎（明治六年生）母ひろ（同七年生）妻しま子（同三六年生、秋田縣宮越惣兵衛二女）二男利男（大正一〇年生）三男道男（同一二年生）四男嚴（同一三年生）五男博（同一四年生）長女公子（同一五年生）

榎本　重治氏　澁谷區松濤五電話　青山七二八

正五位、勳四等、法學士、海軍書記官兼教官

明治二三年一月生、東京市

大正三年東京帝大法科英法科卒業

氏は榎本善治氏の四男として東京市に呱々の聲を揚げた。大學卒業後直ちに鐵道院に奉職したが、翌大正四年海軍省に轉じ參事官に任ぜられた。同六年南洋群島を視察し、同十一年華府會議に隨員として派遣され、同十二年ヘーグの戰時法規改正委員會にも隨員として出席し、昭和二年の壽府三國海軍會議にも亦隨員として列席した。昭和六年海軍教官兼任を命ぜられ、同年壽府の一般軍縮會議に派遣され、同八年九月その大任を果して歸朝し、爾來海軍省に在つて活躍以て今日に及ぶ。宗旨は淨土宗、趣味は讀書等である。

妻孝子（明治三一年生、岡山縣杉山岩三郎妹、岡山縣立高女卒）長男一郎（大正九年生）二男賢二郎（同一一年生）長女豐子（同六年生）二女繁子（同八年生）

寺尾　芳男氏　小石川區水道町四一　電話　小石川三五五八

正八位、東京乘合自動車、幸保山莊各(株)取締役、自動車工業(株)顧問、京都均一タクシー商會主

明治二四年二月生、新潟縣

氏は新潟縣新發田町に呱々の聲を揚げた。夙に語學校に學び、後實業界に投じて著々擡頭し、大正十年新潟市街自動車株式會社を創立して、專務取締役となり同十三年大阪乘合自動車株式會社を設立して常務取締役となり、或は東洋製綱株式會社取締役、灘乘合自動車株式會社々長等として漸次その名聲を認められるに至つた。その後更に帝都に進出して東京乘合自動車株式會社重役となり、東西業界に活躍以て今日に及んでゐる。事業經營は氏の生命とする所であり同時に唯一の趣味である。

妻賢子（明治二九年生、新潟縣士族宇野欽次郎長女）長男俊一（大正四年一月生）外に五男五女。

赤木夘一郎氏　澁谷區原宿二ノ一七〇　電話　青山二五七一

東京佐々木商店(株)專務取締役兼營業部東京支店代表

明治二七年一二月生、大阪府

氏は大阪府赤木市松氏の長男として呱々の聲を揚げた。明治四十二年十六歳の時佐々木商店に入り、爾來專ら職務に精勵して漸次店主の信任を得、重要なる職に拔擢され、同店必須の人材として認められるに至つた。同店の發展が氏の努力に負ふ所尠なからざるは夙に普く認める所である。現時その專務取締役として經營の衝に當るのみならず東京支店代表者として益々同店の躍進に努力しつゝある

妻房子（明治三四年生、植田友二郎長女）長男欣一郎（大正一一年生）二男慶二郎（同一四年生）長女悅子（同一三年生）二女和子（昭和三年生）

安東　正臣氏　神田區表猿樂町二一　電話　神田三二三〇

辯護士、東京辯護士會副會長

明治一九年一月生、神奈川縣

明治四一年明治大學卒業

氏は神奈川縣安東忠兵衞氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に明治大學に於て法律を研究し、辯護士試驗に合格し、大正四年辯護士として登錄し同五年獨立開業した爾來一般辯護の依賴に應じ、その該博なる知識と明快にして理路整然たる辯論を以て着々斯界に擡頭し、幾多の事件に當つて克く辯護の實を擧げ、帝都法曹界に重きをなすに至つた。一方東京市會議員及び神田區會議員等として帝都自治界に敏腕を揮ひ、現時東京辯護士會副會長たる外東京足袋商組合法律顧問等を兼ねてゐる。宗旨は眞言宗、趣味は義太夫、圍碁等である。

妻たか（明治二四年生、東京府相山平太郎長女）長男潤一郎（大正元年生）

作間　耕逸氏　神田區佐久間町三ノ二　電話　下谷三〇一〇　（事務所）日本橋區小傳馬町一ノ五　電話　浪花一八〇〇

勳四等、辯護士、辯理士、東京辯護士會々長、東京質屋組合、金萬證券、高橋保全、福井樓各(株)顧問

明治一三年五月生、山口縣

明治三五年關西大學法律科卒業

氏は山口縣士族音羽清逸氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後實母の生家作間キミの家跡を嗣いだ。夙に上京して東京郵便電信學校行政科に學んだが、同校卒業後關西大學に入學して法律を學び、更に日本大學高等專攻科に於て法律を研修し、明治三十九年辯護士試驗に合格直ちに辯護士及辯理士を開業した。爾來在野法曹界に活躍すると共に或は衆議院議員、東京市會議員、同參事會員等として政界に驥足を伸べ、嘖々たる名聲を博し、現時前揭の職に在つて益々活躍し法曹界の長老として信望を博してゐる。

妻チヨコ（明治二五年生、山口縣村岡百千代長女）男正雄（大正六年生）長女タミ（同五年生）二女すみ（同一一年生）（同六年生）

菊池　契月氏　京都市中京區錦小路新町東、電話本局一三三

正五位、京都市立繪畫專門學校長兼教授京都市立美術工藝學校長、帝國美術院會員、後素協會委員、六合會々員

三輪　壽壯氏　中野區住吉町三　電話　中野三三二一　（事務所）丸ノ內仲四號館六號　電話　丸ノ內三〇〇六

辯護士、法學士

明治二七年一二月生、福岡縣

大正九年東京帝大法科獨法科卒業

界に活躍以て今日に及んでゐる。事業經營は氏の生命とする所であり同時に唯一の趣味である。

妻賢子（明治二九年生、新潟縣士族宇野欽次郎長女）長男俊一（大正四年一月生）外に五男五女。

赤木外一郎氏　澁谷區原宿二ノ一七〇　電話　青山二五七一

東京佐々木商店（株）專務取締役兼營業部東京支店代表

明治二七年一二月生、大阪府

氏は大阪府赤木市松氏の長男として呱呱の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に明治大學に於て法律を研究し、辯護士試驗に合格し、大正四年辯護士として登錄し同五年獨立開業した。爾來一般辯護の依頼に應じ、その該博なる知識と明快にして理路整然たる辯論を以て着々斯界に擡頭し、幾多の事件に當つて克く辯護の實を擧げ、帝都法曹界に重きをなすに至つた。一方東京市會議員辯護士會副會長

明治一九年一月生、神奈川縣

明治四一年明治大學卒業

氏は神奈川縣安東忠兵衛氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に明治大學に於て法律を研究し、辯護士試驗に合格し、大正四年辯護士として登錄し同五年獨立開業した爾來一般辯護の依頼に應じ、その該博なる知識と明快にして理路整然たる辯論を以て着々斯界に擡頭し、幾多の事件に當つて克く辯護の實を擧げ、帝都法曹界に重きをなすに至つた。一方東京市會議員

明治一三年五月生、山口縣

明治三五年關西大學法律科卒業

氏は山口縣士族晉羽清逸氏の三男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後實母の生家作間キミの家跡を嗣いだ。夙に上京して東京郵便電信學校行政科に學んだが、同校卒業後關西大學に入學して法律を學び、更に日本大學高等專攻科に於て法律を研修し、明治三十九年辯護士試驗に合格直ちに辯護士及辯理士を開業した。爾來在野法曹界に活躍すると共に或は衆議院議員、東京市會議員、同參事會員等として政界に驥足を伸べ、嘖々たる名聲を博し、現時前掲の職に在つて益々活躍し法曹界の長老として信望を博してゐる。

妻チヨコ（明治二五年生、山口縣村岡百千代長女）男正雄（大正六年生）長女タミ（同五年生）二女すみ（同一一年生）

木下　道雄氏　麹町區紀尾井町三官舍內、電話九段一一一〇

正五位、勳三等、法學士、宮內事務官、大臣官房總務課長、侍從職皇后宮職各御用掛

明治二六年六月生、熊本縣

明治四五年京都帝國大學法科政治科卒業

嚴父故木下廣次氏は京都帝國大學總長として名聲を馳せた。氏はその二男、木下正雄氏の實弟として呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。夙に京都帝國大學に學び、卒業後直ちに官界に入り、岡山縣警部、同縣和氣郡長を歷任して中央に移り、內閣書記官に任ぜられ、後宮內省に轉じ、東宮職事務官、同庶務課長等を經て現職に昇進した。此の間昭和元年十二月大喪使事務官に任ぜられ、同二年大禮使事務官を仰付けられる等功績多く正五位、勳三等に叙せられた。

妻シヅ（明治三一年生、熊本縣士族木下彌八郎三女）長男廣雄（大正一二年生）二男公雄（同一四年生）長女淳子（同六年生）

菊池　契月氏　京都市中京區錦小路新町東、電話本局一三三

正五位、京都市立繪畫專門學校長兼教授、京都市立美術工藝學校長、帝國美術院會員、後素協會委員、六合會々員

明治一二年一一月生、長野縣

氏は長野縣下高井郡中野町細野勝太郎氏の二男に生れ、後菊池常次郎氏の養子となり、大正七年その家督を嗣いだ。本名を完爾と稱し、契月は畫號である。夙に兒玉果亭氏に師事して南宗畫を學び、更に內海吉堂氏に師事し、菊池芳文氏に就いて四條派を究め、漸次我が畫壇に認められるに至つた。大正七年文部省美術展覽會審査員に選ばれ、同十年斯道研究の爲め歐米に航し、同十一年歸朝するや翌十二年京都に開催されたる日本美術展覽會の審査員に選ばれ、同十四年帝國美術院會員に推薦された。現時前掲の重職に在つて本邦美術界の發展と後進の教導に貢獻しつゝある。作品中「供燈」「茄子」「鐵漿蜻蛉」「ゆうべ」「浦島」「花野」「蓮華」「庭の池」「水汲む女」等は特に著名である。

妻あき（明治二二年生、養父芳文長女）長男一雄（同四一年生、東京帝大文學部卒）二男隆（同四四年生）

三輪　壽壯氏　中野區住吉町三　電話　中野三三二一（事務所）丸ノ內仲四號館六號　電話　丸ノ內三〇〇六

辯護士、法學士

明治二七年一二月生、福岡縣

大正九年東京帝大法科獨法科卒業

氏は明治二十七年十二月十五日福岡縣糟屋郡席內村に呱々の聲を揚げた。鄕里の中學卒業後直ちに上京し、第一高等學校を經て東京帝國大學に進み、卒業後辯護士を開業した。此の間社會問題を研究して實際運動に携はり、辯護士開業後は日本勞働總同盟及び日本農民組合の法律顧問として活躍し、大正十五年十一月日本勞農黨の創立に奔走し、設立後同黨書記長に擧げられ、全國勞農大衆黨の創立後その書記長となり、一時之を辭したが昭和五年再度書記長に就任した。勞働問題に關しては造詣頗る深く、且つ常に無產階級の爲めに盡瘁し、譯書としてカウツキーの「社會民主黨綱領說」等がある趣味は柔道。

妻總子（明治三三年生）長男正弘（大正一四年生）二男史朗（昭和二年生）

三宅發士郎氏　小石川區水道端町一ノ七五、電話小石川七〇九六

法學士、農林書記官、同省經濟更生部總

務課長
明治二五年五月生、岡山縣
大正六年東京帝大法科獨法科卒業
氏は岡山縣岸本力三郎氏の三男として同縣下に生れ、明治四十四年三宅順祐氏の養子となつた。夙に第六高等學校を經て東京帝國大學に進み、卒業後文官高等試驗に合格し、直ちに農商務省に奉職した。爾來同省に在つて敏腕を揮ひ、特許局事務官、水産局北洋課長、水産課長、山林局公私林課長兼林務課長等に歴任し昭和五年山林局監理課長となり、後經濟更生部總務課長に擧げられた。資性溫厚篤實にして省内に信望厚く前途を囑望されてゐる。宗旨は眞言宗、趣味はスポーツ、義太夫等。
養父順祐（元治元年生）養母かつ（明治九年生）妻一枝（同三六年生、京都府草場末彦長女）長男順一郎（大正十三年生）二女和子（昭和四年生）

三上　香哉氏　牛込區二十騎町二七平尾邸内
古錢研究家
明治元年八月生、東京市
氏は市内深川區に呱々の聲を揚げた。長ずるに及んで和歌、連歌等に趣味を持ち、熱心に研究して斯道の奥儀を窮め、又平家琵琶等に關する研究を積み、斯界に名聲を馳せた。明治二十三年頃より古錢の研究に趣味を覺えて以來、或は古書を漁り、或は斯道の大家に就き、或は遠近各地に古錢を蒐集する等、專ら古錢研究に心血を濺ぐと共に、同二十六年頃より寛永錢研究會を組織し後之を大日本貨幣研究會と改め、雜誌を發行して古錢知識の普及に努め、同好者と共に益々研究を重ね、遂に斯界の權威として普く認められるに至つた。著書には「寛永泉志」「皇朝泉志」等がある。
淀橋區上落合一ノ四一八

三村鶴太郎氏
足立區々長
明治一二年五月生、岡山縣
氏は岡山縣三村新太郎氏の長男として同縣上房郡巨瀬村に呱々の聲を揚げ、大正十一年その家督を相續した。夙に關西學院に學び、後上京して日本大學に入り法科を優秀の成績を以て卒業し、直ちに京橋區吏員となつた。その後實業界に轉じ玉置商會、日本ヒラメント、山形木材等各社の監査役として敏腕を揮つたが、大正十年再び本所區に奉職し、戸籍係長に擧げられた。爾來同區に在つて精勵、漸次累進して昭和三年同區主事となり、昭和七年大東京實現と同時に城東區長に就任、新區の發展革新に盡瘁し令名を馳せ、其後同八年十月足立區長に轉じ今日に及んでゐる。區民の進歩向上に献身的努力を爲し信望を博してゐる。
妻貞子（明治一八年生、兵庫縣三浦芳夫二女）二男達磨（同四三年生）
目黒區上目黒五ノ二四二五（事務所）京橋區銀座西八ノ五高三ビル　電話　銀座八四

島崎　一勝氏
正六位、勳四等、法學士、辯護士、辯理士、海軍主計少佐
明治一八年四月生、茨城縣
明治四五年東京帝大獨法科卒業
氏は茨城縣島崎武文氏の長男として同縣多賀郡南中郷村に呱々の聲を揚げた。大學卒業後海軍に入り、海軍中主計に任ぜられ、爾來累進して主計少佐となつた此の間吳海軍工廠、横須賀鎭守府經理部軍艦榛名等に勤務して功績を擧げ、正六位勳四等に叙せられた。大正十三年軍界を去つて辯護士及び辯理士を開業し、一般の依頼に應じ、今や帝都法曹界に嘖々たる名聲を博するに至つた。神道を信仰し、趣味として謠曲に巧みである。
妻千代子（明治二六年生、多湖實敏長女、三輪田高女卒）長女樹子（大正三年生、山脇高女卒）二女澄子（同五年生、府立第三高女卒）三女禎子（同九年生、調布高女在學）四女節子（同一五年生）
大森區新井宿一ノ三〇一（事務所）麹町區内幸町人阪ビル　電話　銀座二九九六

平岡　靖章氏
受驗界社、警察新報社、刑務界社各社長
妻ノブ子（明治三三年四月生、秋田縣鹿角郡小坂町小坂湯谷地士族齋藤政也妹、小坂高女卒）長女ふじ子（大正一〇年生、山脇高女在學）
世田谷區松澤赤堤四五七

森　秀氏
正七位、文部省屬託
帝國書院（株）院主、關東商業學校、武藏野音樂學校、吉備商業學校各理事
明治五年五月生、岡山縣
氏は岡山縣守屋鶴松氏の男として同縣淺口郡西阿知町に呱々の聲を揚げた。夙
牛込區矢來町一三九　電話　牛込四一七六

守屋荒美男氏

養父順祐（元治元年生）養母かつ（明治九年生）妻一枝（同三六年生、京都府草場末彦長女）長男順一郎（大正十三年生）二女和子（昭和四年生）

三上　香哉氏　牛込區二十騎町二七平尾邸內

古錢研究家

明治元年八月生、東京市

氏は市內深川區に呱々の聲を揚げた。長ずるに及んで和歌、連歌等に趣味を持ち、熱心に研究して斯道の奧儀を窮め、又平家琵琶等に關する研究を積み、斯界

氏は岡山縣三村新太郎氏の長男として同縣上房郡巨瀨村に呱々の聲を揚げ、大正十一年その家督を相續した。夙に關西學院に學び、後上京して日本大學に入り法科を優秀の成績を以て卒業し、直ちに京橋區吏員となつた。その後實業界に轉じ玉置商會、日本ヒラメント、山形木材等各社の監査役として敏腕を揮つたが、大正十年再び本所區に奉職し、戶籍係長に擧げられた。爾來同區に在つて精勵、漸次累進して昭和三年同區主事となり、昭和七年大東京實現と同時に城東區長に就任、新區の發展革新に盡瘁し令名を馳

縣多賀郡南中郷村に呱々の聲を揚げた。大學卒業後海軍に入り、海軍中主計に任ぜられ、爾來累進して主計少佐となつた此の間吳海軍工廠、橫須賀鎭守府經理部軍艦榛名等に勤務して功績を擧げ、正六位勳四等に叙せられた。大正十三年軍界を去つて辯護士及び辯理士を開業し、一般の依賴に應じ、今や帝都法曹界に嘖々たる名聲を博するに至つた。神道を信仰し、趣味として謠曲に巧みである。

妻千代子（明治二六年生、多湖實敏長女、三輪田高女卒）長女樹子（大正三年生、山脇高女卒）二女澄子（同五年生、府立第三高女卒）三女禎子（同九年生、調布高女在學）四女節子（同一五年生）

平岡　靖章氏　大森區新井宿一ノ三〇一（事務所）麴町區內幸町人阪ビル　電話　銀座二九九六

受驗界社、警察新報社、刑務界社各社長

明治三三年一一月生、福岡縣

大正九年東京植民貿易語學校卒業

氏は本名を平岡保と呼び福岡縣平岡英吉氏の二男として同縣朝倉郡三奈木村大字城二三四番地に呱々の聲を揚げた。明治四十五年上京し、學業を修め、大正十一年叔父平岡繁樹氏（故英吉實弟）の經營せる受驗界社、警察新報社及刑務界社に入社し、同十二年十月繁樹氏の逝去後實兄壽氏と共に同社の經營に當つたが、昭和六年三月壽氏も亦他界せる爲め自ら社長として起ち、敏腕以てその發展に努力し今日に及んでゐる。宗旨は金光敎、趣味は讀書、野球、演劇、映畫等にして法政經濟社會敎育其他各方面の書を愛讀し、博識家として知られてゐる。

妻ノブ子（明治三三年四月生、秋田縣鹿角郡小坂町小坂湯谷地士族齋藤政也妹、小坂高女卒）長女ふじ子（大正一〇年生、山脇高女在學）

森　秀氏　世田谷區松澤赤堤四五七

正七位、文部省囑託

明治二五年三月生、德島縣

大正六年東京高等師範學校卒業

氏は德島縣森市之助氏の二男として同縣德島市に呱々の聲を揚げ、大正四年家督を相續した。夙に敎育界に志し、東京高等師範學校に學び、卒業後東京府立第四中學校に奉職し、後東京府視學に拔擢され、府敎育界の進步向上に貢獻する所甚大であつた。その後文部省囑託となり體育課に勤務し以て今日に及んでゐる。體育に關しては夙に多年の經驗と研究を積んで造詣頗る深く、昭和六年文部省の命を受け歐米諸國に出張以來益々知識を廣め、斯界の權威として仰がれてゐる。宗旨は日蓮宗、趣味はスポーツ、讀書等である。

妻キク（明治三〇年生、東京府粕谷福太郎長女、東京府女子師範卒）長男康（大正一二年生）二男崇（同一五年生）三男朗（昭和五年生）長女喜美（大正一一年生）二女嘉代（昭和三年生）

守屋荒美男氏　牛込區矢來町一三九　電話　牛込四一七六

帝國書院（株）院主、關東商業學校、武藏野音樂學校、吉備商業學校各理事

明治五年五月生、岡山縣

氏は岡山縣守屋鶴松氏の男として同縣淺口郡西阿知町に呱々の聲を揚げた。夙に敎育界に志し、郷里の小學校及び中學校に敎鞭を執り、後上京して法政大學及び日本大學に學び、學成るや再び郷里の敎育界に活躍した。明治二十九年再度上京し獨逸協會學校に奉職し、敎鞭を執る傍ら中等敎員の爲め每月三種の講義錄を發行し好評を博した。同三十八年敎職を辭して著述に專念し、中等學校地理敎科書等を發行して斯界に一新機軸を出し、爾來斯業を以て今日に及んでゐる。著書の主たるものは「動的世界大地理」「動的支那地理」「法令上より觀察したる小學校敎員」等にして、從來の地理書が動的方面を等閑に附したるに反し、氏の地理書は政治、經濟、產業其他凡ゆる動的方面に意を注げる點に於て異彩を放つてゐる

茂木惣兵衞氏　橫濱市中區辨天通二丁目　東京市芝區白金三光町二五一　電話　高輪一三〇九

橫濱貯蓄銀行（株）取締役

明治二六年三月生、横濱市

當家の先々代保平氏は上州高崎に於て古着商を營んでゐたが、後横濱に移つて生糸貿易を業とし當家の基礎を築き、先代保平氏亦その業を繼ぎ、家運隆々として横濱財界の王座を占めるに至つた。氏は先代保平氏の長男に生れ、大正二年姉まつの家督を相續すると同時に前名良太郎を惣兵衛と改めた。夙に第八高等學校に學んだが、家業を繼ぐや若冠の身を以て財界に敏腕を揮ひ、七十四銀行、横濱貯蓄銀行の頭取を兼ね、財界の好況に乘じて盛んに飛躍したが、その後財界反動の爲め一敗地に塗れた。爾後英國に去り、財界を離れ、倫敦に於て專ら社會問題、勞働問題等を研究し、新知識を齎して昭和七年歸朝し、甦生の第一歩を踏出した豪放にして頭腦明晰、研究心に富み大いに前途を囑望されてゐる。

母そう（元治元年生）弟泰次郎（明治三三年生）

千田　宗氏　芝區高輪南町五一　電話　高輪五二〇四

岩井商店(株)東京支店支配人

明治二〇年一月生、福井縣

氏は福井縣士族千田壯藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、昭和二年家督を相續した。十五歳の時實業界に志して大阪に出で、岩井商店に入り、只管業務を見習ひ、精勵恪勤して年と共に重用せられ、勤續實に三十年に及んで同店販賣主任に拔擢された。爾來益々同店の發展に奔命し、大正七年東京支店支配人に擧げられ、以て今日に及んでゐる。岩井商店は關西屈指の巨商にして、業績日に向上し、有力社員も尠くないが、氏の如きは實にその模範として信望を博してゐる。

母とり（文久二年生）妻光子（明治三二年生、埼玉縣竹内經太郎長女）長男隆（大正一二年生）長女澄子（同九年生）二女美奈子（昭和二年生）

清　計太郎氏　瀧野川區田端三八〇官舍内、電話小石川七四三

從五位、勳五等、東京鐵道局副參事、上野驛長

明治七年二月生、靜岡縣

明治二七年電信教習所卒業

氏は靜岡縣清甚兵衛氏の孫として同縣富士郡に生れた。夙に電信教習所に學び卒業後日本鐵道株式會社に入り、鐵道電信技術員として活躍し、同社が官營に移つて後も引續き勤務し、明治四十一年東京鐵道局に轉じ桐生、黒磯、高崎、大宮、秋葉原等各驛に歷勤して漸次その敏腕を認められ、大正十三年十二月上野驛長に榮進し以て今日に及んでゐる。此の間大正十一年七月功績章を下賜されたる外屢々表彰され鐵道界の功勞者として仰がれてゐる。佛教を信仰し、「希望に起きて感謝に眠る」ことを家憲とし、趣味として習字、旅行演劇、讀書等を好む。

妻つた、長男潤夫（早稲田大學法科卒松坂屋勤務）二男潤二郎（明治四四年生、慶大在學）三男廉平（大正二年生早大高等學院在學）長女文子（高崎高女卒、吉川氏妻）二女和江（大正六年生、京華高女卒）

瀬川　秀雄氏　四谷區花園町一〇七　電話　四谷二七九〇

正三位、勳二等、文學博士、學習院名譽教授、東京文理科大學講師、四谷區第七小學校後援會代表

明治六年八月生、山口縣

明治二九年東京帝大文科史學科卒業

氏は山口縣舊岩國藩士瀬川成器氏の長男として同縣岩國町に生れ、明治二十六年家督を相續した。大學卒業後更に大學院に進みて戰國時代の中國史を研究し明治三十二年學習院講師となり、同三十五年同教授に任ぜられた。同三十八年歐米に留學し、歸朝後陸軍大學講師となり大正三年以來毛利公爵家三卿傳編纂所長に聘せられた。同十一年再度歐米を巡遊し爾來益々研究を積み、昭和五年文學博士の學位を授けられた。著書には「西洋通功績に依り後年綠綬褒章を下賜された。一方調味料味之素を創製發賣して世界的に名聲を博し、或は東信電氣、昭和肥料鈴木三榮の各社長として財界に驥足を伸べ、巨萬の富を積み、又公共事業に貢献せる所多く、其の功に依り紺綬褒章を賜はり、勳四等瑞寶章を下賜され、更に昭留學し、同大學卒業後大學院に於て研究を積み、哲學博士の學位を授與されたが其の研究心は尚ほ熄まず、進んでフイラデルフイヤ神學院に轉じて宗教學を研鑽し、神學博士の學位を授けられた。その後歸朝して母校立教大學に教鞭を執つてゐたが、明治三十六年陸軍教官に拔擢さ

勞働問題等を研究し、新知識を齎して昭和七年歸朝し、甦生の第一歩を踏出した豪放にして頭腦明晰、研究心に富み大いに前途を囑望されてゐる。

母そう（元治元年生）弟泰次郎（明治三三年生）

千田　宎氏

芝區高輪南町五一
電話　高輪五二〇四

岩井商店(株)東京支店支配人

明治二〇年一月生、福井縣

氏は福井縣士族千田壯藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、昭和二年家督を相續した。十五歳の時實業界に志し

道株式會社に入り、鐵道電信技術員として

清　計太郎氏

瀧野川區田端三八〇官舍內、電話小石川吉三五

從五位、勳五等、東京鐵道局副參事、上野驛長

明治七年二月生、靜岡縣

明治二七年電信教習所卒業

氏は靜岡縣清甚兵衛氏の孫として同縣富士郡に生れた。夙に電信教習所に學び卒業後日本鐵

早大高等學院在學）長女文子（高嶋高女卒、吉川氏妻）二女和江（大正六年生、京華高女卒）

瀨川　秀雄氏

四谷區花園町一〇七
電話　四谷二七九〇

正三位、勳二等、文學博士、學習院名譽教授、東京文理科大學講師、四谷區第七小學校後援會代表

明治六年八月生、山口縣

明治二九年東京帝大文科史學科卒業

氏は山口縣舊岩國藩士瀨川成器氏の長男として同縣岩國町に生れ、明治二十六年家督を相續した。大學卒業後更に大學院に進みて戰國時代の中國史を研究し明治三十二年學習院講師となり、同三十五年同教授に任ぜられた。同三十八年歐米に留學し、歸朝後陸軍大學講師となり大正三年以來毛利公爵家三卿傳編纂所長に聘せられた。同十一年再度歐米を巡遊し爾來益々研究を積み、昭和五年文學博士の學位を授けられた。著書には「西洋通史」「新撰西洋歷史地圖」「歐洲諸國民發達史」等がある。

妻久可（明治一三年生、男爵井上惺三郎叔母）長男素雄（同三一年生）同妻惠子（同三九年生、靜岡縣野崎彥左衞門二女）三男俊雄（同四一年生）四男光雄（同四四年生）五男正雄（大正一〇年生）四女澄子（同三年生）五女壽子（同五年生）六女淑子（同七年生）孫信彥（昭和五年生、素雄長男）

鈴木三郎助氏

麹町區下二番町六〇
電話　九段三〇三三

味之素本舗鈴木商店(株)專務取締役、鈴木三榮、吉野屋商店各(株)社長

明治二三年六月生、神奈川縣

先代三郎助氏は神奈川縣の出身にして夙に實業界に投じ、國產振興の見地より沃度の製造に着手し、萬難を排して其の製法に成功したるのみならず、海外諸會社の激烈なる競爭に堪えて遂に輸入品を驅逐し、國產沃度の基礎を確立し、その功績に依り後年綬褒章を下賜された。一方調味料味之素を創製發賣して世界的に名聲を博し、或は東信電氣、昭和肥料鈴木三榮の各社長として財界に驥足を伸べ、巨萬の富を積み、又公共事業に貢獻せる所多く、其の功に依り紺綬褒章を賜はり、勳四等瑞寶章を下賜され、更に昭和六年特旨を以て從五位に叙せられた。氏は先代の長男として神奈川縣葉山町に生れ、昭和六年先代の逝去と同時に家督を嗣ぎ、前名三郎を改め三郎助を襲名した。京華商業の出身にして夙に家業に携はり、大正六年歐米を巡遊後漸次要職に就き、更に先考の歿後克くその遺業を繼承し以て今日に及んでゐる。

母てる（明治元年生）妻公（同三〇年生、石川縣麻生雄之輔長女）長男重明（大正一一年生）長女榮（同六年生）二女禎（同八年生）

杉浦貞二郎氏

麻布區廣尾町七四
電話　高輪五六四四

從四位、勳三等、立教大學々長

明治三年一〇月生、福井縣

氏は若狹國小濱藩士杉浦愃藏氏の三男として、小濱町に呱々の聲を揚げ、明治四十三年分れて一家を創めた。夙に青雲の志を抱いて上京し、立教大學に學び、同大學卒業後米國ペンシルバニヤ大學に留學し、同大學卒業後大學院に於て研究を積み、哲學博士の學位を授與されたが其の研究心は尙ほ熄まず、進んでフイラデルフイヤ神學院に轉じて宗教學を研鑽し、神學博士の學位を授けられた。その後歸朝して母校立教大學に教鞭を執つてゐたが、明治三十六年陸軍教官に拔擢され、陸軍大學教官として活躍すること二十餘年に及び、その功績に依り從四位、勳三等に叙せられた。大正十二年之を辭し再び立教大學に迎へられ、その學長として同大學の發展に努力以て今日に及んでゐる。著書には「印度倫理」「新舊約外典」等ありて夙に宗教學界の權威として聲望を博してゐる。

妻チカ（明治九年生、東京府高木新助長女）長男義典（大正四年生）三女文女（明治四三年生）

杉本新左衞門氏

京都市下京區綾小路新町西入
電話　下七二四

三丘園（茶舗）店主、吳服及洋服商經營、京都府多額納稅者

明治六年八月生、京都府

氏は京都府人杉本爲七氏の長男に生れ幼名を爲一と呼んだが、長じて先代新左衞門氏の養子となり、明治十六年その家督を相續すると同時に新左衞門を襲名し

た。夙に家業たる茶商として活躍し、多年の信用に加ふるに氏獨特の敏腕に依つて家運を益々隆盛ならしめ、現に斯業を營む傍ら呉服及洋服商をも兼營し、巨萬の富を擁して京都財界に信望を博してゐる。宗旨は眞宗。

妻たつ（明治一一年生、愛知縣岡田良右衛門二女）養子みき（同四〇年生、妻たつ妹）同夫郁太郎（同三五年生、杉本米三郎長男）養弟平吉（同八年生、分家）

杉田　精二氏　大阪市天王寺區眞法院町八四

東京美術學校講師、商工省工藝指導所囑託、大阪府商工技師、帝展審査員

明治一九年八月生、東京府

明治四五年東京美術學校鑄造科卒業

氏は雅號を禾堂と稱し、陸軍歩兵少佐杉田豐實氏の三男に生れ、明治三十七年成城學校中學科を卒へて東京美術學校に進み、同校卒業の翌大正二年四月香川縣立工藝學校教諭となり、同六年之を辭し同八年東京美術學校講師となつた。昭和三年七月商工省工藝指導所囑託となり、同七年大阪府商工技師を兼任し、以て今日に及んでゐる。此の間氏の作品は内外博覽會等に出品して數回授賞し、昭和四年帝展に於て特選となり、同年帝展推薦となり、同八年九月帝展審査員に選ばれた。正義誠實を處世訓とし、教育勅語の御主旨を以て家憲とし、勤勉を以て子女訓となす崇高なる人格者にして、佛教を信仰し、讀書、音樂等に趣味がある。

妻トク（明治二六年生、川村金次郎長女）長女夏子（大正三年生）二女水無子（同六年生）三女冬子（昭和三年生）

石川角三郎氏　芝區田村町六ノ一一　電話　芝二九〇六

建築家具彫刻請負、東京木彫々進會々員

氏は石川赤吉氏の三男として横濱市内に呱々の聲を揚げたが、幼時一家と共に東京に移住した。幼少の頃より彫刻に趣味を有し、上京後彫刻家として起たんとして斯道の大家小澤稻太郎氏に師事すること十餘年に及び、漸次その技倆を認められるに至つた。大正三年獨立して現在の地に斯業を開き、爾來奮闘努力以て着々斯界に擡頭し、今や有數の名手として認められるに至つた。此の間宮内省、華族會館、東京株式取引所、三井邸等の新築に其の妙技を發揮して名聲を博し、更に議事堂新築に際してその彫刻師に選ばれる等、その力作は隨所に異彩を放つてゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は演藝、野球釣魚等である。

妻シン、長男清作（明治四五年生）二男喜八（大正四年生）

伊藤　雄治氏　杉並區上荻窪二九三（學校）四谷區三光町四七、電話四谷空八三

從七位、四谷第五小學校長、同實業補習學校長

明治一四年九月生、千葉縣

明治三八年青山師範學校卒業

當校は初め華園小學校と稱し、明治十一年現所に移轉し、大正九年東京市に編入と同時に現名に改めた。昭和二年創立五十年記念式を擧げたる市内屈指の古校にして、福田大將其他の名士を出し、現時生徒數一千六百名に垂んとし隆盛を極めてゐる。氏は青山師範學校を卒業後同校附屬小學校、麻布笄町小學校、下谷西町小學校等に歴勤し、大正八年下谷竹町小學校長となり、昭和二年當校長に轉じ以て今日に及んでゐる。宗旨は眞言宗、趣味は文學、圍碁等である。

妻キタ（野口親治叔母）長男行（明治三三年生）四男利三郎（大正七年生）五男敏郎（昭和三年生）長女春江（大正元年生）

井上小五郎氏　大阪府茨木町一七八五　電話　茨木一二

井上帶革製造所主

明治三三年二月生、大阪府

大正一三年東京帝大經濟學部卒業

氏は井上元吉氏の長男として現住所に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學に經濟學を修め、優秀の成績を以て卒業後直ちに家業に携はり、以て今日に及んでゐる。井上帶革製造所は明治二十八年嚴父元吉氏の創設に係り、調革、靴底革等獨立して晴山製作所を起し自動車部分品の製造を開始した。爾來、車軸、齒車、エンヂンバルブ等の各部分品を製出して漸次各方面に認められ、今や從業員五十名を擁し、大阪に支店を設けて業績殷盛を極むるに至つた。又國産自動車部分品製作組合と組織し、優秀國産品の發展に努力すると共に、曩に佛國藝術紹介の目的を以て佛國より家具セットを輸入し我が洋家具界に貢献し、或は自ら主催者となり波滿澄會を毎月一回自宅に開催し斯界の權威者を招いて美術界の向上に資する等、營利を離れた美擧頗る多く、

博してゐる。氏も亦家業を繼ぎその發展

託、大阪府商工技師、帝展審査員
明治一九年八月生、東京府
明治四五年東京美術學校鑄造科卒業
氏は雅號を禾堂と稱し、陸軍歩兵少佐杉田豐實氏の三男に生れ、明治三十七年成城學校中學科を卒へて東京美術學校に進み、同校卒業の翌大正二年四月香川縣立工藝學校教諭となり、同六年之を辭し同八年東京美術學校講師となつた。昭和三年七月商工省工藝指導所囑託となり、同七年大阪府商工技師を兼任し、以て今日に及んでゐる。此の間氏の作品は内外博覽會等に出品して數回授賞し、昭和四年帝展に於て特選となり、同年帝展推薦

味を有し、上京後彫刻家として起たんとして斯道の大家小澤稻太郎氏に師事すること十餘年に及び、漸次その技倆を認められるに至つた。大正三年獨立して現在の地に斯業を開き、爾來奮鬪努力以て着々斯界に擡頭し、今や有數の名手として認められるに至つた。此の間宮内省、華族會館、東京株式取引所、三井邸等の新築に其の妙技を發揮して名聲を博し、更に議事堂新築に際してその彫刻師に選ばれる等、その力作は隨所に異彩を放つてゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は演藝、野球釣魚等である。
妻シン、長男清作（明治四五年生）二

校附屬小學校、麻布笄町小學校、下谷西町小學校等に歷勤し、大正八年下谷竹町小學校長となり、昭和二年當校長に轉じ以て今日に及んでゐる。宗旨は眞言宗、趣味は文學、圍碁等である。
妻キタ（野口親治叔母）長男行（明治三三年生）四男利三郎（大正七年生）五男敏郎（昭和三年生）長女春江（大正元年生）

井上小五郎氏　大阪府茨木町一七八五　電話　茨木一二
井上帶革製造所主
明治三三年二月生、大阪府

大正一三年東京帝大經濟學部卒業
氏は井上元吉氏の長男として現住所に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學に經濟學を修め、優秀の成績を以て卒業後直ちに家業に携はり、以て今日に及んでゐる。井上帶革製造所は明治二十八年嚴父元吉氏の創設に係り、調革、靴底革等を製造し、創業以來優秀品を製出して漸次各方面に信用を博し、斯業界に確乎たる地歩を占めるに至つた。氏は父君と共に其の經營に當り、現時所主として益々活躍しつゝある。趣味は圍碁、撞球等。
妻照子（明治三六年生、奈良縣住野英二長女、奈良女高師附屬高女卒）長男勝太郎（大正一二年生）二男元哉（昭和四年生）三男利康（昭和六年生）長女華子（大正一四年生）

石野　力藏氏　日本橋區濱町一ノ一五　電話　浪花四五七五
山澄商店（茶器商）店主
明治一一年三月生、東京市
當家は諸大名其他の婚儀一式を請ふ婚禮師を業とし十數代連綿たる舊家である四代前の當主は嘉永年間江戸に移り、始め婚禮師であつたが骨董に趣味深く遂に茶器專門の骨董商として起つに至つた。爾來江戸に於ける唯一の茶器專門商として今日に及び、同好者間には夙に信望を

博してゐる。氏も亦家業を繼ぎその發展に努力すると共に、曩に佛國藝術紹介の目的を以て佛國より家具セットを輸入し我が洋家具界に貢献し、或は自ら主催者となり波滿澄會を毎月一回自宅に開催し斯界の權威者を招いて美術界の向上に資する等、營利を離れたる美擧頗る多く、名聲嘖々たるものがある。
妻たま（明治二一年生、坂上音吉長女）長男享一（同三九年生）二男政二（同四〇年生）三男清三（大正五年生）四男長四郎（同一三年生）五男欣五（昭和二年生）長女愛子（同四五年生）二女壽子（大正七年生）三女君子（同一年生）

晴山　直吉氏　芝區白金三光町一五九　電話　高輪五四六〇
晴山製作所々主
明治一八年五月生、岩手縣
氏は岩手縣晴山定吉氏の長男として同縣下に生れ、大正十年家督を嗣いだ。夙に工業界に志し、明治三十八年岩手縣立工業學校を卒業後、更に米國ミシガン州立大學自動車專門部に學び、卒業後同地のB・I・C・K自動車會社に入社して實地經驗を積み、自動車製作の蘊奥を窮めた。歸朝後株式會社エビス製作所に入り技師長として活躍したが、大正十二年

獨立して晴山製作所を起し自動車部分品の製造を開始した。爾來、車軸、齒車、エンヂンバルブ等の各部分品を製出して漸次各方面に認められ、今や從業員五十名を擁し、大阪に支店を設けて業績殷盛を極むるに至つた。又國産自動車部分品製作組合を組織して優秀國産品の發展普及に努力し、斯界の功勞者として名聲を博してゐる。
妻スミ子（明治二七年生、三田高女卒）長男太郎（昭和三年生）長女ミチ子（大正一五年生）二女チエ子（昭和五年生）

本多　長利氏　豐島區巢鴨町新田一三七　電話　大塚三二一二
清水浮ドック、東神興業、三福各（株）社長、清水商事、清水倉庫、清水瓦斯各（株）專務取締役、相生瓦斯（株）取締役、千葉瓦斯工業（株）監査役、前川太郎兵衛顧問
明治三〇年一一月生、大分縣
大正一〇年上智大學商科卒業
氏は大分縣士族土田兵吉氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後本多節子の養子となり其の家督を嗣いだ。夙に上京して錦城中學校に學び、更に上智大學に進み、優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに大藏省に奉職したが、後之を辭して前川太郎兵衛氏の顧問となり、實業界に驥足を伸べ、今や前掲各社の重役

を兼任して敏腕至らざるなく、その崇高なる人格と相俟つて各方面に信望隆々たるものがある。趣味としてゴルフを好み霞ケ關カンツリー、鴻ノ臺カンツリー兩倶樂部會員である。

妻茂子（明治四〇年生、福島縣本多運平女）長女惠美子（昭和七年生）

小幡　重一氏　豐島區巢鴨町三ノ二六

從四位、勳三等、理學博士、東京帝國大學教授、帝大航空研究所圖書主任

明治二一年五月生、大分縣

明治四三年東京帝國大學理科卒業

氏は大分縣士族小幡英之助氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學理科に於て物理學を研究し、卒業後同大學に教鞭を執る傍ら益々研鑽怠らず理學博士の學位を授與された。而もその後彌々熱心なる研究を續け、最近「東洋の言語及び音樂の音響學的研究」を以て學士院より推薦され、有栖川宮家記念奬學資金を下賜され、後進の教導に當る傍ら研究に勵んでゐる。資性溫厚稀れに見る篤學者として學界に普く認められ、信望を博してゐる。

妻ふみ（明治二八年生、東京商大教授村上龍英妹、お茶ノ水高女卒）二女ちづ（大正一二年生）三男英三（同一三年生）

小原　芳樹氏　神田區錦町三ノ四　電話　神田三七三五

從七位、醫學博士、小原小兒科醫院長

明治二五年二月生、長野縣

大正七年東京帝國大學醫科卒業

氏は長野縣士族花岡和嘉助氏の二男として同縣諏訪郡に呱々の聲を揚げ、後小原賴之氏の養子となつた。夙に第二高等學校を經て東京帝國大學醫科に學び、卒業後更に研究を重ねて千葉醫科大學教授となり、後大正十三年東京女子醫學專門學校教授に轉じたが、此の間教鞭を執る傍ら熱心に研究を積み、同十四年醫學博士の學位を授けられた。昭和六年東京女子醫學專門學校を辭し、現地に小兒科專門の醫院を開業し、專ら診療に從事し、都下有數の名醫として信望を博してゐる。神道を信仰し、趣味として讀書、圍碁、乘馬等を嗜む。

妻綏枝（明治三二年生、養父賴之長女鎌倉高女卒）長男正樹（大正四年生）二男建樹（昭和元年生）三男直樹（同七年生）長女ゆき子（大正八年生）二女照子（同一〇年生）三女弘子（昭和四年生）養女榮子（元治元年生）

大岡　吉邑氏　品川區大井町鈴ケ森三六三、電話大森二四六〇

大井製作所主、工政會特別會員、機械學會正會員、日本學術協會、火兵會各會員

明治二二年三月生、愛媛縣

明治四三年工學院機械科卒業

氏は愛媛縣大岡又一氏の長男として同縣喜多郡五城村に生れ、昭和二年家督を相續した。夙に上京して工學院の前身工手學校に學び、卒業後直ちに吳海軍工廠に奉職し、翌四十四年戶畑鑄物會社に轉じ、大正二年園池製作所に移り、同五年東京計器製作所第一工場主任となり、同六年千代田組機械係主任心得となり、同九年日本特殊鋼株式會社技手となつた。此の間絕えず研究を重ね技術を練磨し、同十一年獨立して大井製作所を起し、爾來精密機械類の製造に專念したる効果空しからず、戶畑鑄物、東京瓦斯電氣、宮田製作所、日本光學工業其他の各社、遞信省、海軍省等の信任を得、今や年產額十萬圓を突破する盛況を呈するに至つた。

妻みね子（明治二七年生、愛媛縣岡田和吉二女、宇和島高女卒）二男吉郎（大正一三年生）三男鐵男（昭和四年生）長女芳枝（大正六年生）二女敏子（同一一年生）

沖田　穩氏　牛込區早稻田鶴卷町三〇四、電話牛込二四二三

醫學博士、沖田醫院長、東京市社會局囑託

明治二七年五月生、鳥取縣

大正七年慈惠醫科大學卒業

氏は鳥取縣沖田茂治氏の二男として鳥取市內に呱々の聲を揚げた。鳥取第一中學校を經て慈惠醫大に學び、卒業後麴町

脇田　信吾氏　靜岡縣田方郡田中村三福、電話　大仁三

東洋釀造(株)專務取締役、駿河銀行、東海自動車各(株)取締役

明治一一年三月生、靜岡縣

氏は靜岡縣小松忠右衞門氏の三男として同縣下二三九、脇田源八氏の養子

査役

明治一八年七月生、石川縣

當家は本多佐渡守正信の二男安房守政重の後裔にして、政重が前田利長に仕へ家老上席に拔擢されて以來代々同藩家老職を勤め、五萬石を領した。明治維新前

して呱々の聲を擧げた。夙に東京帝國大學理科に於て物理學を研究し、卒業後同大學に教鞭を執る傍ら益々研鑽怠らず理學博士の學位を授與された。而もその後彌々熱心なる研究を續け、最近「東洋の言語及び音樂の音響學的研究」を以て學士院より推薦され、有栖川宮家記念奬學資金を下賜され、後進の教導に當る傍ら研究に勵んでゐる。資性溫厚稀れに見る篤學者として學界に普く認められ、信望を博してゐる。

妻ふみ（明治二八年生、東京商大教授村上龍英妹、お茶ノ水高女卒）二女ちづ（大正一二年生）三男英三（同一三

子醫學專門學校を辭し、現地に小兒科專門の醫院を開業し、專ら診療に從事し、都下有數の名醫として信望を博してゐる神道を信仰し、趣味として讀書、圍碁、乘馬等を嗜む。

妻綏枝（明治三二年生、養父賴之長女鎌倉高女卒）長男正樹（大正四年生）二男建樹（昭和元年生）三男直樹（同七年生）長女ゆき子（大正八年生）二女照子（同一〇年生）三女弘子（昭和四年生）養女榮子（元治元年生）

大岡　吉邑氏　品川區大井町鈴ヶ森三六三、電話大森二四六〇

來精密機械類の製造に專念したる効果空しからず、戸畑鑄物、東京瓦斯電氣、宮田製作所、日本光學工業其他の各社、遞信省、海軍省等の信任を得、今や年產額十萬圓を突破する盛況を呈するに至つた

妻みね子（明治二七年生、愛媛縣岡田和吉二女、宇和島高女卒）二男吉郎（大正一三年生）三男鐵男（昭和四年生）長女芳枝（大正六年生）二女敏子（同一一年生）

沖田　穩氏　牛込區早稻田鶴卷町三〇四、電話牛込二四二三

醫學博士、沖田醫院長、東京市社會局囑託

明治二七年五月生、鳥取縣

大正七年慈惠醫科大學卒業

氏は鳥取縣沖田茂治氏の二男として鳥取市內に呱々の聲を揚げた。鳥取第一中學校を經て慈惠醫大に學び、卒業後麴町區の木澤病院に勤務して實地經驗を積み大正十年同院を辭し三菱鑛山會社の囑託醫となり、翌十一年現地に開業した。爾來營利主義を離れて懇切に診療に從事する傍ら益々研鑽し、「ファゴリジン血精に就て」なる論文に依つて醫學博士の學位を授與された。現時前揭の任に在ると共に中南定太郎氏の「スマトミン」及び島一郎健久會の「スコヤカ」の處方主任として活躍し、醫學界の偉材として前途を囑望されてゐる。佛教を信じ「親切にして禮儀正しく」を家憲とし、趣味として運動競技を好む。因みに嚴父は三十有餘年鄕里教育界に活躍し、現時牛込區學務委員、鶴卷町會長等として貢獻し、區內に信望を博してゐる。

父茂治（明治二年生）妻雅子（同三七年生、東京府頓寓屋雄藏長女、日本高女卒）長男滋（昭和三年生）二男汪（同六年生）長女經子（大正一五年生）二女愛子（昭和二年生）

脇田　信吾氏　靜岡縣田方郡田中村三福、電話大仁三

東洋釀造（株）專務取締役、駿河銀行、東海自動車各（株）取締役

明治一一年三月生、靜岡縣

氏は靜岡縣小松忠右衞門氏の三男として同縣下に生れ、先代脇田源八氏の養子となり明治四十四年その家督を相續した夙に酒造業を營み、奮鬪努力以て家業の發展を圖ると共に、駿河銀行、東海自動車株式會社等の重役を兼ねて活躍すること多年、靜岡縣下屈指の實業家として信望を博してゐる。令息信次氏も亦夙に家業に携はり、克く父君を翼けて活躍し、前途を囑望されてゐる。

妻よし（靜岡縣湯山一妹）二男信次（明治三四年生、早大商科卒、東洋釀造株式會社東京支店長）同妻登美（同四〇年生）女極（明治三八年生）女德子（同四〇年生、靜岡縣野方正作養子）孫喜久子（昭和五年生、信次長女）孫國嗣（同七年生、同長男）孫健義（同八年生、同二男）

本多　政樹氏　金澤市本多町三番丁五　電話金澤二三七

從四位、男爵、加州銀行、尾小屋水力電氣、倉庫精練各（株）取締役、日本勸業銀行（株）地方顧問、內國貯金（株）監

託

明治二七年五月生、鳥取縣

大正七年慈惠醫科大學卒業

氏は鳥取縣沖田茂治氏の二男として鳥取市內に呱々の聲を揚げた。鳥取第一中學校を經て慈惠醫大に學び、卒業後麴町區の木澤病院に勤務して實地經驗を積み大正十年同院を辭し三菱鑛山會社の囑託醫となり、翌十一年現地に開業した。爾來營利主義を離れて懇切に診療に從事する傍ら益々研鑽し、「ファゴリジン血精に就て」なる論文に依つて醫學博士の學位を授與された。現時前揭の任に在ると共に中南定太郎氏の「スマトミン」及び島一郎健久會の「スコヤカ」の處方主任として活躍し、醫學界の偉材として前途を囑望されてゐる。佛教を信じ「親切にして禮儀正しく」を家憲とし、趣味として運動競技を好む。因みに嚴父は三十有餘年鄕里教育界に活躍し、現時牛込區學務委員、鶴卷町會長等として貢獻し、區內に信望を博してゐる。

父茂治（明治二年生）妻雅子（同三七年生、東京府頓寓屋雄藏長女、日本高女卒）長男滋（昭和三年生）二男汪（同六年生）長女經子（大正一五年生）二女愛子（昭和二年生）

脇田　信吾氏　靜岡縣田方郡田中村三福、電話大仁三

東洋釀造（株）專務取締役、駿河銀行、東海自動車各（株）取締役

明治一一年三月生、靜岡縣

氏は靜岡縣小松忠右衞門氏の三男として同縣下に生れ、先代脇田源八氏の養子となり明治四十四年その家督を相續した夙に酒造業を營み、奮鬪努力以て家業の發展を圖ると共に、駿河銀行、東海自動車株式會社等の重役を兼ねて活躍すること多年、靜岡縣下屈指の實業家として信望を博してゐる。令息信次氏も亦夙に家業に携はり、克く父君を翼けて活躍し、前途を囑望されてゐる。

妻よし（靜岡縣湯山一妹）二男信次（明治三四年生、早大商科卒、東洋釀造株式會社東京支店長）同妻登美（同四〇年生）女極（明治三八年生）女德子（同四〇年生、靜岡縣野方正作養子）孫喜久子（昭和五年生、信次長女）孫國嗣（同七年生、同長男）孫健義（同八年生、同二男）

本多　政樹氏　金澤市本多町三番丁五　電話金澤二三七

從四位、男爵、加州銀行、尾小屋水力電氣、倉庫精練各（株）取締役、日本勸業銀行（株）地方顧問、內國貯金（株）監

査役

明治一八年七月生、石川縣

當家は本多佐渡守正信の二男安房守政重の後裔にして、政重が前田利長に仕へ家老上席に拔擢されて以來代々同藩家老職を勤め、五萬石を領した。明治維新前後の功に依り先代政以氏は明治三十三年特に男爵を授けられた。氏はその長男にして大正十年襲爵仰付けられた。夙に京都帝大法科選科に學び、後實業界に入り機業を營んで巨萬の財を積み、更に各方面に飛躍すること多年、現時前揭各社重役を兼ね、金澤財界の重鎭として名聲を博してゐる。

妻泰子（明治三〇年生、石川縣時岡市太郎三女）長男政一（大正八年生）三男樹（同一〇年生）長女已智子（同六年生）弟桃多郎（明治三六年生）弟克人（同三七年生）

川村兼五郎氏　品川區大崎本町一ノ五三（學校）同町二ノ三九四　電話高輪六一五八

勳八等、第一日野小學校長

第一日野小學校は明治十一年八月寺院の一部を借受けて開校され、第一大學區第二中學區第十番公立小學校日野學校と稱したが、同二十四年單に日野小學校と改稱し、同三十四年第一日野尋常小學校

となつた。同四十四年第二日野小學校と合併されたが、大正六年再び獨立して舊名に復し以て今日に及んでゐる。氏は岩手縣和賀郡の出身にして夙に教育界に活躍し、昭和五年五月東調布小學校より當校へ轉任した。爾來專ら當校の發展に努力し、教育上幾多の改良を加へ、功績頗る顯著である。教育に關する學識經驗共に豐富にして、氏が心血を濺いで著述したる「法規活用小學校の實際經營と管理法」(上下二卷)の如きは頗る有益なる文献として各方面に好評を博してゐる。溫厚篤實なる君士人にして部下及び兒童より慈父の如く慕はれてゐる。

川原林順治郎氏　大阪市住吉區住吉町九三三　電話　住吉二一四九

明治生命保險(株)專務取締役
明治五年九月生、滋賀縣
明治二九年東京高等商業學校卒業

氏は滋賀縣川原林德明氏の三男として同縣下に生れ、明治三十五年家督を相續した。學業を卒へるや直ちに日本鐵道會社に入社したが、明治三十二年同社を辭し明治生命保險會社に入社した。爾來年と共にその敏腕を認められ、仙臺支店長心得を經て名古屋支店長に擧げられ、續いて京都支店長となり大阪支店長に轉じ後專務取締役に選ばれ、以て今日に及んでゐる。才腕人格相俟つて保險界に信望を博してゐる。

妻まさ(明治一五年生、山形縣藏田國治五女)長男德雄(同三七年生)二男次郎(同四五年生)三男三雄(大正三年生)長女しづ(明治三九年生、岡山縣戸田濟に嫁す)

川口芳太郎氏　芝區芝浦三ノ二　電話　三田八〇一

川口印刷所々主
明治二九年一二月生、靜岡縣

氏は靜岡縣川口喜代次郎氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に印刷業界に投じ、奮鬪努力以て今日に及んでゐる。川口印刷所は技術の優秀なる點に於て夙に異彩を放ち、各官廳及び一般民間に絶大の信望を博し、業績逐年向上の一路を辿つてゐる。滿洲國の成立以來、同國政府及び一流會社等よりの註文激增せる爲め其の便を圖るべく昭和八年同國首都新京に川口印刷所分店を設け、百餘坪の敷地に優秀設備を施して同年十一月末開業した。氏は開業を兼ねて同地に航し滿洲國各地を巡遊歸朝し、爾來益々同方面への躍進を圖り大いに前途の飛躍を期待されてゐる。

氏は廣島縣金行九郎兵衛氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十九年分れて一家を創めた。夙に上京して慶應義塾に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに實業界に入り、恪勤以て次第に地歩を進めた。昭和五年十二月大日本製糖會社取締役兼大黒工場理事を辭し

風見　章氏　赤坂區青山南町一ノ三　電話　青山五一一一

衆議院議員
明治一九年二月生、茨城縣

氏は茨城縣風見力三郎氏の二男として同縣水海道町に生れ、後分家した。夙に早稲田大學に學び、卒業後操觚界に志し大阪朝日新聞記者となり、後國際通信社主筆、信濃毎日新聞社取締役兼主筆等として多年斯界に活躍し嘖々たる名聲を馳せた。その後昭和五年二月鄕里茨城縣第三區より衆議院議員に選ばれ、續いて同七年再度當選し、民政黨所屬として活躍したが、同八年安達氏が國民同盟を結黨するに及んで其の傘下に馳せ、以て今日に及んでゐる。佛教を信仰し、趣味として讀書を好む。

妻ヨシノ(明治二六年生、茨城縣木村喜郎妹、麴町高女卒)長男博太郎(府立九中學卒)二男精二(大正一〇年生)三男三郎(同一五年生)

金行　一郎氏　品川區五反田五ノ六〇　電話　高輪三二七二

新高製糖(株)常務取締役、臺灣炭業(株)取締役
明治九年九月生、廣島縣
明治三〇年慶應義塾別科卒業

長男正興(大正三年生)二男正泰(同六年生)三男正美(同一一年生)

加藤鎌三郎氏　品川區大井瀧王子町四六六〇

正七位、勳六等、鐵道省事務官、鐵道省運輸局國際課聯絡課長
明治二〇年一〇月生、愛知縣

氏は東京市會議員となり、同時に目黑區會議員に當選し、同八年再度市會議員に當選した。現時前揭の任に在り、益々市區政の刷新向上に努力しつゝある。

甲斐莊楠香氏　横濱市中區御所山町七　電話　長者町一七八六

川原林順治郎氏　九三三　電話　住吉二一四九

明治生命保險(株)專務取締役
明治五年九月生、滋賀縣
明治二九年東京高等商業學校卒業

氏は滋賀縣川原林德明氏の三男として同縣下に生れ、明治三十五年家督を相續した。學業を卒へるや直ちに日本鐵道會社に入社したが、明治三十二年同社を辭し明治生命保險會社に入社した。爾來年と共にその敏腕を認められ、仙臺支店長心得を經て名古屋支店長に擧げられ、續いて京都支店長となり大阪支店長に轉じ奮闘努力以て今日に及んでゐる。川口印刷所は技術の優秀なる點に於て夙に異彩を放ち、各官廳及び一般民間に絶大の信望を博し、業績逐年向上の一路を辿つてゐる。滿洲國の成立以來、同國政府及び一流會社等よりの註文激增せる爲め其の便を圖るべく昭和八年同國首都新京に川口印刷所分店を設け、百餘坪の敷地に優秀設備を施して同年十一月末開業した。氏は開業を兼ねて同地に航し滿洲國各地を巡遊歸朝し、爾來益々同方面への躍進を圖り大いに前途の飛躍を期待されてゐる。

妻ヨシノ（明治二六年生、茨城縣木村喜郎妹、麴町高女卒）長男博太郎（府立九中學卒）二男精二（大正一〇年生）三男三郎（同一五年生）

金行　二郎氏　品川區五反田五ノ六〇　電話　高輪三二七二

新高製糖(株)常務取締役、臺灣炭業(株)取締役
明治九年九月生、廣島縣
明治三〇年慶應義塾別科卒業

氏は廣島縣金行九郎兵衛氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十九年分れて一家を創めた。夙に上京して慶應義塾に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに實業界に入り、恪勤以て次第に地歩を進めた。昭和五年十二月大日本製糖會社取締役兼大里工場理事を辭し同六年新高製糖會社常務取締役に選ばれ以來引續き其の任に在る傍ら臺灣炭業會社重役をも兼ねて活躍しつゝある。

妻カメヲ（明治一七年生、京都府寶光井顯次氏妹）長男一造（同四〇年生）二男幸一郎（同四二年生）

神山錠五郎氏　目黑區上目黑三ノ一九四〇　電話　青山七九〇三

東京市會議員、目黑區會議員、地主
明治一九年三月生、東京府

氏は現住地に於て呱々の聲を揚げた。明治三十九年習志野騎兵聯隊に入營し、同四十二年退營後騎兵伍長に任ぜられた同四十四年帝國在鄕軍人會目黑分會常務理事に擧げられて以來、大正十五年迄評議員或は副長として同分會の爲めに活躍し、又此の外目黑町青年團、同町消防組同町會議員、同町助役、三田用水普通水利組合會議員等として、同町の發展に貢献し次第に信望を博した。昭和七年十一月大東京の實現と共に衆望を負ひ無投票を以て東京市會議員となり、同時に目黑區會議員に當選し、同八年再度市會議員に當選した。現時前揭の任に在り、益々市區政の刷新向上に努力しつゝある。

甲斐莊楠香氏　横濱市中區御所山町壱　電話　長者町一七八六

正七位、理學士、高砂香料(株)社長
明治一三年五月生、京都市
明治三七年京都帝國大學理科卒業

氏は京都府士族甲斐莊正秀氏の長男として京都市內に生れ、後その家督を相續した。京都帝國大學理科を優秀の成績を以て卒業後直ちに同大學の教授に拔擢されたが、明治四十二年之を辭して歐洲に留學し、佛國及び瑞西に於て主として香料に關する研究を積むこと四ケ年に及んだ。歸朝後三輪化學研究所に聘せられたが、大正八年之を辭し、翌九年自ら高秒香料株式會社を設立し、爾來その社長として活躍以て今日に及び、香料界の權威として信望を博してゐる。宗旨は眞言宗、趣味は香料に關する研究、讀書等。

妻ふみ（明治二四年生、三輪田高女卒）長男正興（大正三年生）二男正泰（同六年生）三男正美（同一一年生）

加藤鎌三郎氏　品川區大井瀧王子町四六六〇

正七位、勳六等、鐵道省事務官、鐵道省運輸局國際課聯絡課長
明治二〇年一〇月生、愛知縣
明治四四年東京外國語學校支那語科卒業

氏は愛知縣加藤鎌吉氏の長男に生れ、明治四十五年家督を相續した。夙に東京外國語學校に學び、卒業後直ちに鐵道省に奉職し、名古屋鐵道局、本省運輸局等に歷勤し、大正八年支那北京に留學を命ぜられ、同年十一月歸朝後引續き鐵道省に勤務し、累進して現職に就いた。昭和七年九月萬國鐵道會議に出席し、同八年一月歸朝以來、國際課に在つて益々活躍しつゝある。宗旨は淨土宗、趣味は漢文の研究、讀書等。

妻しづ（明治三一年生、愛知縣磯部小介女、愛知縣立第一高女卒）長男光春（大正一四年生）長女亮子（同九年生）二女幸子（同一一年生）

米澤　英之氏　横濱市中區伊勢町官舍內、電話(3)三三一〇

正七位、神奈川縣警察部健康保險課長
明治二五年八月生、富山縣

氏は富山縣米澤三郎氏の二男として同

縣上新川郡山室村に呱々の聲を揚げた。夙に上京して中央大學商科に學び、大正九年內務省に奉職し、社會局に勤務して漸次その手腕を認められるに至つた。その後昭和四年七月和歌山縣に轉じ警察部健康保險課長として敏腕を揮ひ、同七年長崎縣に轉じ、更に八年九月神奈川縣に移り、警察部健康保險課長として今日に及んでゐる。溫厚篤實にして而も敏腕の聞え高く、廳內外に信望がある。宗旨は眞宗、趣味として野球、庭球等を好む。

妻とみ子（明治三二年生、富山縣澤木又八三女、富山縣立高女卒）長男二之（昭和四年生）長女進子（大正十二年生）二女玲子（昭和元年生）三女容子（同二年生）

横川孫一郎氏　澁谷區櫻丘町五ノ二　電話　青山二四六六

正六位、勳四等、小穴製作所（株）取締役

明治一一年一月生、長野縣

明治三六年東京高工電氣科卒業

氏は長野縣南安曇郡豐科町に呱々の聲を揚げた。松本中學卒業後上京して東京高工に入り、電氣科を優秀の成績を以て卒業し、直ちに海軍省に奉職し、吳海軍工廠に勤務すること多年、その功績に依り正六位、勳四等に敍せられ、又曩に英國より勳四等を賜はつた。大正九年小穴製作所に入るや、社長小穴秀一氏と共に同社の發展に努力し、續々優秀品を製出して各方面の需要に應じ、社業逐年隆盛となり、遂に斯界の權威として認められるに至つた。電氣に關する學識經驗共に深く、崇高なる人格と相俟つて信望隆々たるものがある。

横山武一郎氏　横濱市鶴見區東寺尾町一三六五　電話　鶴見一四七四

正五位、工學士、昭和肥料（株）理事兼川崎工場長、學士會、工業化學會、燃料協會、日本學術協會各會員

明治二六年九月生、青森縣

大正六年東京帝大工科卒業

氏は青森縣士族横山兼吉氏の四男として青森市內に生れた。生家は代々津輕藩に仕へたる名門である。青森中學、第一高等學校を經て東京帝大工科應用化學科に進み、卒業後直ちに商工省工業試驗所に入り、大正八年同省目黑窒素研究所に轉じ、後再び工業試驗所技師となつた。大正九年及び十一年、昭和二年の三回に亘つて歐米に出張し、窒素、硝酸、窒素工業及び硫安製造等に關する研究を積み昭和四年昭和肥料會社に入社し、以て今日に及んでゐる。宗旨は禪宗、趣味はゴルフ、スポーツ等。

妻トキ（明治三六年生、青森縣士族井上豐作三女、青森縣立高女卒）男功（大正一二年生）男信（同一四年生）

高山　誠一氏　芝區白金三光町四五〇　電話　高輪四八三四

田端屋商店（株）取締役兼總務部長

明治三五年八月生、群馬縣

大正一三年明治大學政治經濟科卒業

氏は群馬縣高山豐策氏の長男として生れた。大學卒業後直ちに富士瓦斯紡績會社に入り同社小山工場、本社調査部等に歷勤し、昭和三年田端屋商店に轉じた。同四年英、米、獨、佛、白、蘭等の諸國を巡遊し、チェイン・ストーアに就て研究し、特に米國に於てはコロンビヤ大學教授ナイスレグ氏の教へを受け、昭和五年八月歸朝した。同年田端屋商店取締役に擧げられ、續いて同七年事業部長に就任し、更に現時總務部長の要職に在つて活躍しつゝある。敏腕達識而も春秋に富み、大いに前途を期待されてゐる。宗旨は曹洞宗、趣味はゴルフ、野球、庭球等

父豐策（慶應二年生）母やす（同三年生）妻雅樂子（明治四四年生、關東水力電氣取締役野村孝二女、双葉高女及家政學院卒）外に一子あり。

竹田　彌藏氏　豐島區巢鴨六ノ一三九（事務所）麹町區丸ビル七階　電話　丸ノ內三〇五八

辯護士、辯理士、辨理士會常務理事

明治二五年六月生、三重縣

大正八年日本大學法科卒業

竹內金庫店（資）社員、東京府多額納稅者

明治三四年七月生、東京府

當家は代々鍛冶職を營んでゐたが、時勢の趨向に鑑み金庫製造業に移り、漸次發展して斯業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。氏は先代善次郎氏の三男、栗

氏は長野縣武居乙吉氏の長男として同縣東筑摩郡片丘村に生れた資性豪放にして覇氣に富み夙に操觚界に

（同二年生）

横川孫一郎氏　澁谷區櫻丘町五ノ二　電話　青山二四六六

正六位、勳四等、小穴製作所（株）取締役

明治一一年一月生、長野縣

明治三六年東京高工電氣科卒業

氏は長野縣南安曇郡豐科町に呱々の聲を揚げた。松本中學卒業後上京して東京高工に入り、電氣科を優秀の成績を以て卒業し、直ちに海軍省に奉職し、吳海軍工廠に勤務すること多年、その功績に依り正六位、勳四等に敍せられ、又曩に英國より勳四等を賜はつた。大正九年小穴氏は青森縣士族横山兼吉氏の四男として青森市内に生れた。生家は代々津輕藩に仕へたる名門である。青森中學、第一高等學校を經て東京帝大工科應用化學科に進み、卒業後直ちに商工省工業試驗所に入り、大正八年同省目黑窒素研究所に轉じ、後再び工業試驗所技師となつた。大正九年及び十一年、昭和二年の三回に亘つて歐米に出張し、窒素、硝酸、窒素工業及び硫安製造等に關する研究を積み昭和四年昭和肥料會社に入社し、以て今日に及んでゐる。宗旨は禪宗、趣味はゴルフ、スポーツ等。

竹田彌藏氏　豐島區巢鴨六ノ一三九（事務所）麹町區丸ビル七階　電話　丸ノ内三〇五八

辯護士、辯理士、辨理士會常務理事

明治二五年六月生、三重縣

大正八年日本大學法科卒業

氏は三重縣竹田金次氏の長男として同縣安濃郡辰水村高座原に生れた。夙に法曹界に志し、明治四十四年裁判所書記試驗に合格し直ちに上京して辯護士磯部尙氏の門下生となつた。大正元年近衞騎兵聯隊に入營し、除隊後大正五年石特許事務所に入所し傍ら日本大學に於て法律を學び、卒業後大正十一年辯理士及辯護士試驗に合格した。その後引續き石特許事務所に勤務し、その支配人として活躍したが、昭和七年之を辭し獨立して辯護士を開業し、現所に事務所を設けて一般の依頼に應じ、着々斯界に發展しつゝある宗旨は天臺宗、趣味は義太夫。

妻縫子（明治三二年生、關口一大郎長女、東京府立第一高女卒）長女靜江（大正一一年生）

竹内善次郎氏　麹町區元園町一ノ五六　電話　九段二四〇〇（店舗）日本橋區馬喰町二ノ一　電話　浪花五一六〇

竹内金庫店（資）社員、東京府多額納稅者

明治三四年七月生、東京府

當家は代々鍛冶職を營んでゐたが、時勢の趨向に鑑み金庫製造業に移り、漸次發展して斯業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。氏は先代善次郎氏の三男、栗山善之助氏の實弟にして、善輔と呼んだが、大正元年家督相續と同時に善次郎を襲名した。夙に家業に携はつて其の發展に努力し以て今日に及んでゐるが、此の間大正十三年より昭和二年迄英國に留學して經濟學を研究し、學識才腕兼備の士として大いに前途を囑望されてゐる。佛教を信仰し、趣味の尤なるものはゴルフにして藤澤、ムツミ、佐上各倶樂部員として同好者に知られてゐる。

妻クラ子（明治四〇年生、大分縣士族半田貢三女、香蘭高女卒）長女範子（昭和四年生）二女愛子（同五年生）三女ヨシ子（同七年生）母クメ（明治元年生）兄善太郎（同二八年生、分家）姉テル（同二九年生、同夫太郎と共に分家）姉ツヤ（同三〇年生、東京府島田善助妻）

武居佐源次氏　下谷區上野櫻木町一　電話　下谷一七六五

タケイ耐酸火防水社々長

明治十六年一二月生、長野縣

氏は長野縣武居乙吉氏の長男として同縣東筑摩郡片丘村に生れた資性豪放にして覇氣に富み夙に操觚界に投じ樺太新聞社長等として敏腕を揮つたが、後實業界に轉じた。コンクリート建築工事に於ける耐酸火防水マグナーを研究して昭和二年之を完成し、專賣特許を受けると共に耐酸火防水株式會社を設立し、その專務取締役としてマグナーの普及に努力し、社運隆盛を極めたが、策士に乘ぜられ他社と合併するに至りし爲め氏は斷然同社を辭し、獨立してタケイ耐酸火防水社を創設した。爾來タケイ式混凝土法の施工、タケイ液、タケイ强素液等の販賣に從事し以て今日に及んでゐるが、斯界に於ける氏の手腕と信望は夙に定評ある爲め、創業以來各方面の注文殺到の盛況を呈し、社運隆盛を極めてゐる。宗旨は眞言宗、趣味は化學工業に關する研究等である。

妻コト（明治二七年生、佐藤仙三郎氏三女）嗣子一郎（大正一二年生）長女愛子（同四年生）二女美惠子（同六年生）三女清子（同一〇年生）四女光子

（同一四年生）五女靜子（昭和四年生）

蘭川　武氏　品川區大井出石町五一四三　電話　大森一四八八

辯理士、東京特許代理局技術部主任、辯理士協會理事、東京商業學校、東京工業補習學校各教師

明治八年一一月生、三重縣

明治三二年東京高等工業學校機械科卒業

氏は三重縣蘭川專太郎氏の長男として同縣阿山郡河合村圓德院に生れた。同縣立津中學を經て東京高工に進み、卒業後直ちに內務省土木監督署に奉職し、明治三十六年農商務省に轉じ、同三十七年東京機械製造會社技師長に就任した。同四十二年同社を辭し、大正十年特許辯理士となり、爾來一意專心斯界に活躍以て今日に及ぶ。現時前揭の職に在つて益々盡瘁し、辯理士界の長老として尊敬されてゐる。著書には「應用機械學」「工業概論」等あり、趣味として日本音樂、南畫習作等を特に好む。

妻きく（明治一七年生、東京府鈴木勤藏長女）嗣子龜郎（同三四年生、海軍大尉）同妻富士子（岡山縣出身）孫昌子（昭和七年生）

園部　濟氏　赤坂區青山南町六ノ一四七　電話　青山一四七九

安田銀行（株）常務取締役、昭和銀行（株）取締役、保善商工教育財團監事

明治一五年一二月生、三重縣

明治三七年東京高等商業學校卒業

氏は三重縣園部卯吉氏の三男として同縣飯南郡櫛田村豐原に生れ、後分れて一家を創めた。學業を卒へるや直ちに日本銀行に入り、大正五年同行ニューヨーク代理店詰となり、滯米中コロンビヤ大學ウイルス博士、及びプリストン大學ケムラー博士等に師事して銀行業務の指導を受け、歸朝後同行檢査役、調査役等を經て松江支店長となつた。同十二年同行を辭して安田保善社調査部長となり、同年十一月同社財理部長に轉じ、同十五年八月安田銀行常務取締役兼任となり、昭和三年常務取締役專任となつた。現時その任に在る傍ら前揭の職を兼ね、我が金融界に重きをなしてゐる。

妻鋪子（明治二二年生、工藤光太郎長女）長男達郎（同四五年生）二男秀男（大正九年生）三男茂雄（同一一年生）四男富士夫（同一三年生）五男和生（昭和二年生）長女美治子（大正三年生）

鶴友彥氏　臺北市書院町二ノ二

正六位、法學士、臺灣總督府交通局參事同局遞信部海事課長

明治三一年一月生、大阪市

大正一二年東京帝大法學部政治科卒業

氏は故鶴丈一郎氏の三男として大阪市に生れた。大學卒業の大正十二年四月臺灣總督府屬として殖產局農務課に奉職し同十三年一月事務官となり、同年十二月地方警視臺南州警務課長兼理蕃課長に任ぜられ、昭和二年八月地方理事官臺北州勸業課長に進み、同三年九月臺中州勸業課長に轉じ、同五年臺北州地方課長となり、同六年總督府交通局參事に進み、同七年七月歐米に出張を命ぜられ、同八年五月歸朝、現時前揭の任に在る。宗旨は禪宗、趣味は圍碁、謠曲、登山等。

妻禮子（明治三五年四月生、宮城縣桑島逸覺女、東京市京華高女卒）長男友一郎（大正一五年九月生）二男健次郎（昭和七年六月生）長女ふみ子（大正一三年一〇月生）

津村　良平氏　目黑區上目黑八ノ五〇五　電話　青山二四七〇

理學士、東京計器（株）取締役、津村化學研究所々員

明治二二年八月生、神奈川縣

大正四年東京帝國大學理科卒業

氏は神奈川縣人二見福右衛門氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後津村重舍氏の養子となり、分家した。夙に東京帝國大學理科に入り實驗物理科を優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに津村順天堂に入り精勵恪勤次第に信望を博し、後津村化學研究所に轉じ、傍ら東京計器の取締役として活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は眞言宗、趣味は寫眞、旅行等である。

讀書等。

母わか（慶應二年生）妻みつ（明治三二年生、兵藤治作三女）長女靜江（大正一三年生）弟榮五郎（明治三三年生同製作所工場長）同妻かずゑ（同三九年生）同長男利男（昭和三年生）

從六位、醫學博士、橫濱市十全病院眼科部長

明治二七年六月生、島根縣

大正一一年東京帝大醫學部卒業

氏は島根縣中島淸太郎氏の長男として同縣美濃郡益田町に生れた。第六高等學校を經て東京帝大に進み、卒業後同醫學

となり、爾來一意專心斯界に活躍以て今日に及ぶ。現時前掲の職に在つて益々盡瘁し、辯理士界の長老として尊敬されてゐる。著書には「應用機械學」「工業概論」等あり、趣味として日本音樂、南畫習作等を特に好む。

妻きく（明治一七年生、東京府鈴木勤藏長女）嗣子龜郎（同三四年生、海軍大尉）同妻富士子（岡山縣出身）孫昌子（昭和七年生）

園部　濟氏　赤坂區青山南町六ノ一四七　電話　青山一四七九

安田銀行(株)常務取締役、昭和銀行(株)三年常務取締役專任となつた。現時その任に在る傍ら前掲の職を兼ね、我が金融界に重きをなしてゐる。

妻鋪子（明治二二年生、工藤光太郎長女）長男達郎（同四五年生）二男秀男（大正九年生）三男茂雄（同一一年生）四男富士夫（同一三年生）五男和生（昭和二年生）長女美治子（大正三年生）

鶴　友彥氏　臺北市書院町二ノ二

正六位、法學士、臺灣總督府交通局參事同局遞信部海事課長

明治三一年一月生、大阪市

一郎（大正一五年九月生）二男健次郎（昭和七年六月生）長女ふみ子（大正一三年一〇月生）

津村　良平氏　目黑區上目黑八ノ五〇五　電話　青山二四七〇

理學士、東京計器(株)取締役、津村化學研究所々員

明治二二年八月生、神奈川縣

大正四年東京帝國大學理科卒業

氏は神奈川縣人二見福右衛門氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後津村重舍氏の養子となり、分家した。夙に東京帝國大學理科に入り實驗物理科を優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに津村順天堂に入り精勵恪勤次第に信望を博し、後津村化學研究所に轉じ、傍ら東京計器の取締役として活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は眞言宗、趣味は寫眞、旅行等である。

妻仁子（明治三二年生、津村岩吉長女津村重舍養女、山脇高女卒）長男順太郎（大正九年生）二男正治（同一三年生）長女良子（同一〇年生）

鶴岡　瀧吉氏　芝區愛宕町二ノ一五　電話　芝一七四八

鶴岡スプリング製作所主

明治二二年七月生、東京市

氏は故鶴岡奥松氏の長男として東京市內に呱々の聲を揚げ、大正十一年その家督を嗣いだ。夙に芝區眞島機械工場に入り機械製造の技を磨くこと八ケ年に及んだが、後之を辭し父君の創始せる自動車用スプリング製作業を繼承し、實弟榮五郎氏と共に家業の發展に努力以て今日に及んでゐる。當初は微々たる製作所に過ぎなかつたが、氏の奮鬪に依つて着々發展し、現在に於ては切斷機其他の優秀機械整備し、熟練工二十餘名を使役して優良品を製造し、日華商會、眞商會、森田商會其他確乎たる取引先を有し、活況を呈してゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は旅行讀書等。

母わか（慶應二年生）妻みつ（明治三二年生、藤治作三女）長女靜江（大正一三年生）弟榮五郎（明治三三年生同製作所工場長）同妻かずゑ（同三九年生）同長男利男（昭和三年生）

永井勘太郎氏　澁谷區櫻丘町四一　電話　青山五六七

澁谷區會議員

辯護士、辯理士、澁谷區會議員

大正二年明治大學法科卒業

氏は佐賀縣人故永井清六氏の長男として同縣小城郡東多久村別府に呱々の聲を揚げた。明治四十一年上京し警視廳巡査を拜命し、勤務の餘暇を以て明治大學に學ぶと共に寸陰を惜しんで只管法律を研究した。大學卒業後鄕里に於て益々研鑽し、大正十年辯護士試驗に合格して多年の宿望を達した。爾來現在の地に事務所を設けて廣く一般の依賴に應じ、帝都法曹界に活躍する一方越野製綿株式會社監査役等を兼ねて實業界にも驥足を伸べ、或は町治に盡瘁し、公共事業に貢獻し各方面に信望を博した。昭和七年大東京の實現に伴ひ、澁谷區民より推されて區會議員に當選し、現時その職に在つて區政の刷新向上に努力しつゝある。

中島　肇氏　大森區田園調布二ノ八三二

從六位、醫學博士、橫濱市十全病院眼科部長

明治二七年六月生、島根縣

大正一一年東京帝大醫學部卒業

氏は島根縣中島淸太郎氏の長男として同縣美濃郡益田町に生れた。第六高等學校を經て東京帝大に進み、卒業後同醫學部眼科教室に於て副手として研究を積み大正十四年六月、鳥取市日本赤十字社支部病院眼科醫長に就任し、昭和三年六月京城帝國大學醫學部助教授となつた。爾來益々研鑽し、主論文「人眼及家兎眼角膜神經の臨床的並に實驗的研究」を提出して昭和七年九月醫學博士の學位を受け同八年九月橫濱市十全病院に轉じ、以て今日に及ぶ。宗旨は神道、趣味は喜多流謠曲、スポーツ等。

妻美佐於（明治三三年生、廣島縣淺原多三郎女、倉敷高女卒）長男淳（昭和元年生）長女浩子（大正一〇年生）二女保子（同一三年生）三女サチ子（昭和八年生）

中島文之助氏　（本店）麻布區六本木一〇、電話赤坂九六四（支店）京橋區銀座七ノ一

同　銀座西四ノ五

オリエンタル婦人帽子店々主

明治一五年五月生、長野縣
明治三六年ヘイトグランマースクール卒
氏は長野縣中島喜代松氏の長男として同縣下伊那郡鼎村に生れた。明治三十二年渡米し桑港のヘイトグランマースクールに學び、卒業後レキシントンに於て料理店を開き、傍ら食料品を販賣し、更に桑港に婦人帽子店キングバードを經營し大正五年歸朝した。同六年横濱にオリエンタル婦人帽子店を開き、同十二年上海閔行路に支店を設けたが、同十三年本店を麻布に移し同十四年銀座に支店を設け昭和七年十二月銀座支店を增設した。創業以來逐年發展し、各宮家、大公使館大百貨店等の需要に應じ、今や年賣上高數萬圓を突破する盛況を呈するに至り、斯界に信望を博してゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は書畫、釣魚等。
妻太壽子（明治一九年生、熊本縣渡邊惣次郎四女）長男文雄（大正五年生、正則中學在）

上田　英雄氏　赤坂區表町二ノ一三（店舗）芝區田村町二丁目、電話　銀座七三一
筧商會東京支店長
明治三六年一〇月生、京都市
氏は京都市故上田周亮氏の二男として同市下京區下鳥羽に呱々の聲を揚げた。

上京して學業を修め、神田稅務所收稅吏となつたが、後之を辭して青木堂を起し煙草、洋酒及食料品を商ひ、爾來その發展に努力以て今日に及んでゐる。現時その經營主たる傍らマンロー商會社長をも兼ねて活躍し、敏腕と崇高なる人格と相俟つて各方面に信望を博してゐる。宗旨

夙に株式會社千代田組大阪支店に入社し漸次その手腕を認められるに至つたが、昭和五年之を辭して筧商會に移り、同六年三月東京支店新設と同時に支店長に拔擢された。筧商會は大阪市北區忠心町に本店を有し、印度の天然マイカ、英、米及び獨逸の電機部分品等を輸入し、之を加工販賣することを業とし、夙に關西方面に於ては確乎たる地盤を有してゐる。帝都進出は日尚ほ淺きに拘らず、氏の努力に依つて販路着々開拓され、勢ひ氏に對する社內外の信望は日に加はりつゝある。趣味は機械の分解、油繪等。
妻益枝（明治三五年生、高知縣出身）長男亮（昭和四年生）長女英子（同七年生）

野中　謙一氏　牛込區加賀町二ノ三〇　電話　牛込四一六
萬成汽船(株)社長、野中(資)代表社員
明治三八年生、東京府
昭和三年青山學院高等部商學部卒業
先代野中萬助氏は商船學校卒業後實業界に飛躍すること多年に亘り、萬成汽船會社、明治製革會社各社長、野中合資會社代表社員等として敏腕を揮ひ、我が財界に嘖々たる名聲を馳せた。氏は其の長男にして、夙に青山學院中等部を經て同高等部商學部に學び、卒業後直ちに先代

氏は舊金澤藩士倉知行德氏の四男に生れ、明治二十七年家督を嗣いだ。同年大學を卒業して直ちに內務省に入り、爾來內務省參事官、公使館書記官、外務省參事官、農商務省參事官、同書記官、朝鮮統監府書記官、外務省政務局長、外務次官等に歷任し、大正二年官を辭し貴族院議員に勅撰せられ、同年二十九年歸朝し、

て秋田市に生れ、後家督を嗣いだ。舊名を禮吉と呼んだが、後現名に改めた。先々代忠兵衞氏は秋田藩山林掛として治績顯はれ、先代宗明氏は藩校明德館副館長を勤め廢藩後私塾天開館を經營し、又勤王家として名聲を博した。氏は夙に上京して醫學を修めたが、後米國に留學する

の事業に携はり、昭和六年貨物船の一乘組員としてボンベイ、シドニー其他印度濠洲各地を巡遊視察し將來の活躍に備へた。不幸先代の長逝に遭ひ、加ふるに經濟界不況の爲め社運頓に悲境に陷つたが氏は若冠克く先代の遺業を繼承し、不撓不屈克く此の難關に處し、着々整理の實を擧げて徐ろに雄飛の機を待ちつゝある敏腕達識にして而も人格高邁、前途春秋に富み、各方面より擧つて將來の大飛躍を期待されてゐる。佛敎及び基督敎を信仰し、趣味はスポーツ、旅行、觀劇等である。
母とよ（明治九年生、東京府芥川忠七三女）弟伸二（同四一年生）妹とよ（同三九年生、跡見女學校卒、穗高義三郎妻）妹あき（同四三年生）姉喜久（同三六年生、跡見女學校卒、高橋善司妻）

久保田金五郎氏　麴町區中六番町四五　電話　九段五三一・八五五（店舗）日本橋區茅場河岸二六號
青木堂店主、マンロー商會社長
慶應三年一月生、岐阜縣
氏は岐阜縣人先代久保田金五郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、幼名を桑次郎と呼び、明治三十二年家督を相續すると同時に金五郎を襲名した。夙に

萬國為衆研究する盛況を呈するに至り、斯界に信望を博してゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は書畫、釣魚等。

妻太壽子（明治一九年生、熊本縣渡邊惣次郎四女）長男文雄（大正五年生、正則中學在）

上田　英雄氏　赤坂區表町二ノ一三（店舗）芝區田村町二丁目、電話　銀座ニ三一

筧商會東京支店長

明治三六年一〇月生、京都市

氏は京都市故上田周亮氏の二男として同市下京區下鳥羽に呱々の聲を揚げた。

野中　謙一氏　牛込區加賀町二ノ三〇　電話　牛込四一六

萬成汽船(株)社長、野中(資)代表社員

明治三八年生、東京府

昭和三年青山學院高等部商學部卒業

先代野中萬助氏は商船學校卒業後實業界に飛躍すること多年に亘り、萬成汽船會社、明治製革會社各社長、野中合資會社代表社員等として敏腕を揮ひ、我が財界に嘖々たる名聲を馳せた。氏は其の長男にして、夙に青山學院中等部を經て同高等部商學部に學び、卒業後直ちに先代三九年生、跡見女學校卒、穂高義三郎妻）妹あき（同四三年生）姉喜久（同三六年生、跡見女學校卒、高橋善司妻）

久保田金五郎氏　麹町區中六番町四五　電話　九段三一・八五五（店舗）日本橋區茅場河岸二六號

青木堂店主、マンロー商會社長

慶應三年一月生、岐阜縣

氏は岐阜縣人先代久保田金五郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、幼名を桑次郎と呼び、明治三十二年家督を相續すると同時に金五郎を襲名した。夙に上京して學業を修め、神田稅務所收稅吏となつたが、後之を辭して青木堂を起し煙草、洋酒及食料品を商ひ、爾來その發展に努力以て今日に及んでゐる。現時その經營主たる傍らマンロー商會社長をも兼ねて活躍し、敏腕と崇高なる人格と相俟つて各方面に信望を博してゐる。宗旨は眞宗。

妻やゑ（明治五年生、岐阜縣石原尙秀二女）二男英吉（同三一年生、慶大卒）同妻ヤエ子（同四〇年生、愛知縣高野氏長女、名古屋高女卒）三男敏三（同三三年生）四男敬四郎（同三五年生）五男益之助（同四〇年生）七男金之助（同四二年生）八男恭八郎（同四三年生）三女ふみ（同三六年生）四女信（大正三年生）

倉知　鐵吉氏　澁谷區原宿二ノ一七〇　電話　青山三三三

正四位、勳二等、法學士、錦鷄間祗候、貴族院議員、對露輸出組合理事長、日露協會幹事、資源審議會委員、錦華紡績、金剛山電氣鐵道、北海道炭礦汽船、木村商店、中日實業、日本硬質陶器、太平洋海上火災保險、日興商事、大日本電力硫安各(株)取締役

明治三年一二月生、石川縣

明治二七年東京帝大法科卒業

氏は舊金澤藩士倉知行德氏の四男に生れ、明治二十七年家督を嗣いだ。同年大學を卒業して直ちに內務省に入り、爾來內務省參事官、公使館書記官、外務省參事官、農商務省參事官、同書記官、朝鮮統監府書記官、外務省政務局長、外務次官等に歷任し、大正二年官を辭し貴族院議員に勅任せられ、錦鷄間祗候を仰付けられ以て今日に及ぶ。此の間實業界にも雄飛し、現時前揭諸社の重役である。宗旨は禪宗、趣味として俳句、謠曲、將棋等を好み、特に俳句は鬼仙の號を以て知られてゐる。

嗣子善一（明治四四年生）長女光子（同三一年生、神奈川縣三留喜之養子）二女英子（同三五年生、同縣上野芳三郎妻）三女雅子（同三八年生、和歌山縣木下義謙妻）四女敦子（同四〇年生、鹿兒島縣田中明妻）

黑澤　仁雄氏　澁谷區青葉町二一　電話　青山四五六九

勳六等、支那公使館、支那赤十字社各顧問、日米協會、日佛協會、日露協會、日印協會、東亞同文書院、汎太平洋會各會員、著述業

明治三年六月生、秋田縣

明治二八年米國太平洋大學卒業

氏は秋田縣士族黑澤宗明氏の長男として秋田市に生れ、後家督を嗣いだ。舊名を禮吉と呼んだが、後現名に改めた。先々代忠兵衞氏は秋田藩山林掛として治績顯はれ、先代宗明氏は藩校明德館副館長を勤め廢藩後私塾天開館を經營し、又勤王家として名聲を博した。氏は夙に上京して醫學を修めたが、後米國に留學すること十ケ年にして明治二十九年歸朝し、一時中等學校に教鞭を執り、同三十二年支那に招聘され、清國總稅務司ロバート・ハート氏の秘書として活躍し、更に營口大連、岳州、蘇州等の各稅關長を歷任後歸朝し現時前揭の職に在る。蘇山と號し著書に「支那歷代皇帝皇后御筆書畫集」等がある。基督教を信仰し、趣味は俳句スポーツ等である。

妻織子（明治二四年生、東京府青木正太郎姪、跡見女學校卒）長男禮太郎（大正四年生）二男正明（同六年生）長女愛子（明治四二年生）二女純子（同四四年生）

山本　定壽氏　本所區松井町二ノ五　本所區林町一ノ九

東京市小梅尋常小學校長

明治一五年四月一七日生、神奈川縣

大正九年三月青山師範學校卒業

氏は神奈川縣人山本定信氏の長男として同縣小田原町に生れた。夙に教育界に

志し、國語傳習所、正則英語學校、東京府教育會教員練習所等に學び、尋常科本科準教員となり明治三十二年東京私立開發尋常高等小學校に奉職し、同三十五年小學校英語專科正教員試驗に合格し同四十年尋常小學本科正教員となり、同三十八年より本所區教育會附屬私立補習夜學校教員を兼ね大正四年外手小學校訓導に轉じ、同年小學校商業專科正教員となり、同六年青山師範第二種講習科に入學し同九年卒業、小學校本科正教員となつた。此の間明治三十五年より大正七年迄本所區教育會附屬水泳部事務取扱を兼任した。昭和五年六月小梅小學校長に榮轉し今日に至る。多年教育界に盡瘁せる功勞に依り大正十一年功績章を授與された。宗旨は淨土宗趣味は讀書等。

妻うめ（明治二一年生、實科高女卒）長男定倫（同三九年生、實業に從事）二男俊夫（同四一年生、同）四男四郎（大正五年生、府立第三商業在學）長女茂子（明治四四年生、市立高女卒）二女富美（大正七年生、高女在學）

山內　幾馬氏

華太元泊郡知取町王子製紙社宅
電話　知取二三〇

王子製紙(株)知取工場長

明治一八年八月生、福島縣

明治三九年東京高工機械科卒業

氏は福島縣山內熊三郎氏の長男として同縣若松市に呱々の聲を揚げた。夙に東京高等工業學校機械科に學び、卒業後直ちに鐵道省に奉職し、北海道鐵道管理局に勤務した。明治四十一年鐵道省を辭して北海道炭礦汽船會社に轉じ、同社夕張炭坑に技師として活躍した。大正二年富士製紙會社に轉じ、江別、池田、落合各工場に歷勤し、大正十二年知取工場の建設に從事し、完成後同工場長に擧げられ其後合同王子製紙成るや現職に就任、社內外に信望を博し以て今日に至る。宗旨は日蓮宗、趣味は讀書等。

妻キタ（明治二一年生、新潟縣堀三郎三女、函館高女卒）長男愼一郎（同四一年生、札幌中學卒、牧場經營主）三男三郎（大正一三年生）二女キヌ（大正元年生、札幌高女卒）三女タカ（同五年生、札幌北星高女卒）長女キク（明治四三年生、札幌高女卒、醫學博士三宅演妻）

大和　茂樹氏

品川區大井町四五〇〇
電話　大森一二九〇〇

正六位、法學士、關東國士團、大日本彌榮會各理事長

明治二一年一〇月生、鹿兒島縣

大正三年東京帝國大學法科卒業

氏は鹿兒島縣大和直繹氏の四男として同縣大島郡大和村に生れた。大學卒業後直ちに內務省に奉職し、爾來內務屬、警視廳囑託、貴族院及衆議院書記官等を經て司法省に轉じ、東京區裁判所判事、同地方裁判所檢事、東京控訴院檢事等を歷任し、大正十五年野に下つた。夙に皇室中心主義を奉じ、同年十一月立憲維新黨を創立して「政治の惟神化」を唱導し、爾來或は關東國士團、大日本彌榮會等を組織し、或は雜誌「維新」「國士新聞」等を發刊し凡ゆる機會に於て皇室中心主義の普及と皇威の宣揚に盡瘁し、又曩に文部省より精神科學奬勵費の支給を受けて「天皇現人神論」を起稿する等、純眞なる國士として活躍以て今日に及んでゐる「惟神」を以て處世訓とし「神政成就」を以て家憲とし、神ながらの道を信仰し、慨世憂國の熱情溢るゝ如く、各方面より尊崇されてゐる。

妻登美子（明治三三年生、女子學習院卒）長男隆行（昭和六年生）

松永　直衞氏

王子區袋町一ノ一一六
五

從七位、勳六等、日本導火線作業所長

明治一〇年六月生、福島縣

日本導火線作業所長として名聲嘖々たる氏は、福島縣の出身にして、夙に造兵廠に奉職し精勵恪勤する事多年、その努呼び、明治三十七年家督相續と同時に淸を襲名した。當家は同地方屈指の名門にして、氏は二十二歲の若冠を以て家業を繼ぎ、克く父祖の遺業を維持し得たるのみならず、更に敏腕以て同縣下の實業界に進出し、遂に縣下屈指の有力者として聲望を博するに至つた。現時前揭の任に育に重きを置いてゐる。水泳にも亦熟達し昭和七年文部省より水上聯盟指導員に任命された。現に本所區體育部長として區內兒童の體育の向上革新に貢獻しつゝある。信仰は禪宗、趣味は劍道、水泳、繪畫等である。

妻亮子（金澤市高瀨氏四女、東京府師

小學校本科正教員となつた。此の間明治三十五年より大正七年迄本所區教育會附屬水泳部事務取扱を兼任した。昭和五年六月小梅小學校長に榮轉し今日に至る。多年教育界に盡瘁せる功勞に依り大正十一年功績章を授與された。宗旨は淨土宗趣味は讀書等。

妻うめ（明治二一年生、實科高女卒）
長男定倫（同三九年生、實業に從事）
二男俊夫（同四一年生、同）四男四郎（大正五年生、府立第三商業在學）長女茂子（明治四四年生、市立高女卒）二女富美（大正七年生、高女在學）

設に從事し、完成後同工場長に擧げられ其後合同王子製紙成るや現職に就任、社內外に信望を博し以て今日に至る。宗旨は日蓮宗、趣味は讀書等。

妻キタ（明治二一年生、新潟縣堀三郎三女、函館高女卒）長男愼一郎（同四一年生、札幌中學卒、牧場經營主）三男三郎（大正一三年生）二女キヌ（大正元年生、札幌高女卒）三女タカ（同五年生、札幌北星高女卒）長女キク（明治四三年生、札幌高女卒、醫學博士三宅演妻）

爾來或は關東國士團、大日本彌榮會等を組織し、或は雜誌「維新」「國士新聞」等を發刊し凡ゆる機會に於て皇室中心主義の普及と皇威の宣揚に盡瘁し、又曩に文部省より精神科學奬勵費の支給を受けて「天皇現人神論」を起稿する等、純眞なる國士として活躍以て今日に及んでゐる「惟神」を以て處世訓とし「神政成就」を以て家憲とし、神ながらの道を信仰し、慨世憂國の熱情溢るゝ如く、各方面より尊崇されてゐる。

妻登美子（明治三三年生、女子學習院卒）長男隆行（昭和六年生）

松永　直衞氏　王子區袋町一ノ一一六　五

從七位、勳六等、日本導火線作業所長
明治一〇年六月生、福島縣

日本導火線作業所長として名聲嘖々たる氏は、福島縣の出身にして、夙に造兵廠に奉職し精勵怜勤する事多年、その努力と練達の技は次第に認められて重用され、工場長に拔擢された。爾來益々奉仕精神を發揮して部下を督勵し、優秀なる各種製品の製作に努力し、その顯著なる功績に依つて從七位、勳六等に叙せられた。大正七年造兵廠を辭して東京火工品製造所に入り、同所の發展に努力しつゝあつたが、大正十二年六月同所は日本導火線と合併したる爲め之に移り、爾來健闘以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實業界稀れに見る人格者として信望を博してゐる。

見目　清氏　栃木縣鹽谷郡北高根澤村

下野中央銀行(株)頭取、下毛貯蓄銀行、宇都宮瓦斯、東野鐵道各(株)取締役、栃木縣農工銀行、下野印刷、下野新聞各(株)監査役、栃木縣多額納稅者
明治一六年一一月生、栃木縣

氏は栃木縣先代見目清氏の長男として現住所に呱々の聲を揚げ、幼名を清三と呼び、明治三十七年家督相續と同時に清を襲名した。當家は同地方屈指の名門にして、氏は二十二歳の若冠を以て家業を繼ぎ、克く父祖の遺業を維持し得たるのみならず、更に敏腕以て同縣下の實業界に進出し、遂に縣下屈指の有力者として聲望を博するに至つた。現時前揭の任に在つて益々活躍しつゝある。

妻ミチ（明治二二年生、栃木縣宇津赳藏長女）長男清三（大正八年生）二男明（同一一年生）三男學（同一三年生）女秀子（同三年生）女友子（同五年生）

福士直次郎氏　杉並區阿佐ケ谷一ノ十八　本所區綠町二丁目

本所區綠尋常小學校長、同區體育部長
明治一四年一月生、青森縣
明治三四年青森師範學校卒業

氏は青森縣福士建直氏の二男として同縣南津輕郡黑石町に生れた。青森師範を卒業後多年同地小學校に教鞭を執り、後大正二年上京して東京高等師範學校體育專修科に學び、業を卒へるや帝都教育界に入り、綠尋常小學校長として今日に及んでゐる。氏の嚴父は小野派一刀流の師範にして、氏は幼時より親しくその教へを受け、更に上京後高野範士に師事して斯道の妙諦を究め、常に劍道を奬勵すると共に古武士的精神の涵養に努め精神教育に重きを置いてゐる。水泳にも亦熟達し昭和七年文部省より水上聯盟指導員に任命された。現に本所區體育部長として區內兒童の體育の向上革新に貢献しつゝある。信仰は禪宗、趣味は劍道、水泳、繪畫等である。

妻亮子（金澤市高瀨氏四女、東京府師範卒）長男義辰（昭和三年生）長女靖子（大正一一年生）二女棡子（同一三年生）三女仁子（同一四年生）

藤島亥治郎氏　中野區江古田一ノ一二　七

正六位、工學博士、東京帝國大學助教授
明治三二年五月生、東京市
大正一二年東京帝國大學工學部卒業

氏は東京市藤島啓八氏の二男である。夙に第六高等學校を經て東京帝國大學に入り、工學部建築科を優秀の成績を以て卒業後直ちに朝鮮京城高等工業學校教授に任ぜられた。その後歐米に留學し昭和四年歸朝後母校東京帝國大學工學部助教授となり「東洋特に日本建築技術に關する歷史的研究」に對し有栖川宮家記念奬學資金を授與され、熱心に研究を積み、昭和八年四月工學博士の學位を獲た。著書頗る多く、特に「日本建築史」「支那建築史」「朝鮮建築史論」等は權威ある著述として名聲を博してゐる。宗旨は眞宗、

趣味は旅行、繪畫、音樂等頗る廣汎である。

妻初瀨（明治三六年生、小野寺氏女）
長女美子（大正一三年六月生）

近藤　耕藏氏　淀橋區戸塚町三ノ九三　電話　牛込九〇二

從四位、勳三等、東京女子高等師範學校教授兼教諭、日本女子大學教授
明治六年八月生、神奈川縣
明治三四年東京高等師範學校卒業

氏は神奈川縣近藤錄郎氏の四男として同縣中郡國分村に生れた。夙に教育界に志し、東京高等師範學校に學び、卒業後直ちに福井縣師範學校教諭となり、明治三十七年東京女子高等師範學校助教授に轉じ、後教授に進んだ。同三十八年日本女子大學教授を兼任し、爾來兩校に教鞭を執り今日に至つた。此の間大正十四年文部省海外留學生として派遣され、歐米各國の教育界を視察し、昭和元年歸朝した多年の功勞に依り勅任待遇となり、教育界の長老として仰がれてゐる。趣味として庭球を好む。

妻テウ（明治一一年生、神奈川縣佐藤政吉長女）長男俊雄（同三五年生、霞浦航空技術研究所員、造兵大尉）同妻あさ（茨城縣、東京女子高師卒）二男正夫（同四四年生、東京帝大工學部在學）長女しづ（同三〇年生、府立第二高女卒、小田原町中平氏妻）二女らく（同四〇年生、お茶ノ水高女卒、學習院幼稚部教諭鈴木氏妻）三女千枝（同四二年生、同上卒）四女なほ（大正三年生、お茶ノ水高女卒、自由學院在學）三男恭三（同一一年生）

幸島基太郎氏　栃木縣下都賀郡皆川村（別宅）小石川區駕籠町二二四　電話　大塚二六〇

大日本山林會評議員、東京府立第五中學理事、同市立第一中學常任理事、神宮奉賛會員、下野免囚保護會理事、栃木縣多額納稅者
明治七年三月生、栃木縣

氏は栃木縣故幸島幸平氏の長男として現住地に呱々の聲を揚げ、明治三十八年家督を相續した。同家は同地方屈指の名門にして、氏は夙に地主として、植林家として、或は金融業者として活躍し、小山八十一銀行、東海銀行等の重役として名聲を馳せ、又大正十年より同十三年迄皆川村長として敏腕を揮つた。就植林業界に於ける功績は顯著にして一再ならず表彰された。其の他下野山林會評議員下野三樂園理事、栃木養考園幹事、栃木縣曹洞宗檀家總代、大和村幼稚園理事等としての功績も多く、縣下屈指の名望家である。禪宗を信仰し、座禪、園藝等に趣味を有してゐる。

妻キク（明治一三年生、栃木縣永倉良平妹、跡見女學校卒）長男淳一（同四〇年生、慶大法科卒）二男敏夫（大正四年生、東京市立一中在學）三男善彌（大正七年生、東京府立五中在學）二女富美（明治四三年生、跡見女學校高等部及府立第一高女英文科卒）三女庸（同四四年生、双葉高女及惠泉學院高等部卒）薫（大正一二年生）長女陸子（明治二六年生、跡見女學校卒、工學博士日高鑛山所長鈴木富治妻）

手塚　信吉氏　（自宅）四谷區左門町一四、電話四谷三九五（工業所）四谷區忍町一八、電話四谷三九四五

丸電工業所主、日高電燈（株）專務取締役
明治二五年六月生、愛知縣

氏は愛知縣八名郡山吉田村黃柳野の農家に生れたが、夙に青雲の志を抱いて上京し、高田商會に入りて電氣事業の經驗を積み、大正二年獨立して丸電工業所を起し、東京電燈會社特約店として電燈電氣工事請負及電氣器具類の販賣を營み、着々發展した。昭和二年日高電氣株式會社を起し專務取締役となつたが、翌三年新に日高電燈株式會社（資本金六十五萬圓）を設立して其の專務取締役に就任し社長岡崎將次氏等と共に經營の衝に當り以て今日に及んでゐる。幼時より奮鬪努力克く空拳を以てその運命を開拓したる立志傳中の士にして、著書に「體驗を透に在る。昭和七年歐米に出張を命ぜられ同八年一月歸朝以來、新知識を傾注して刷新向上に努力しつゝある。人格崇高にして夙に局內外の信望を博し前途を囑望されてゐる。

妻ユキ（明治三八年生、成女高女卒）女俊子（同二年生）

赤井　日蘇氏　牛込區榎町五七宗柏寺　電話　牛込五八八七

宗柏寺住職
明治九年三月生、新潟縣
明治二九年中山譚林卒業

三十七年東京女子高等師範學校助教授に轉じ、後教授に進んだ。同三十八年日本女子大學教授を兼任し、爾來兩校に教鞭を執り今日に至つた。此の間大正十四年文部省海外留學生として派遣され、歐米各國の教育界を視察し、昭和元年歸朝した多年の功勞に依り勅任待遇となり、教育界の長老として仰がれてゐる。趣味として庭球を好む。

妻テウ（明治一一年生、神奈川縣佐藤政吉長女）長男俊雄（同三五年生、霞浦航空技術研究所員、造兵大尉）同妻あさ（茨城縣、東京女子高師卒）二男正夫（同四四年生、東京帝大工學部在

額納稅者

明治七年三月生、栃木縣

氏は栃木縣故幸島幸平氏の長男として現住地に呱々の聲を揚げ、明治三十八年家督を相續した。同家は同地方屈指の名門にして、氏は夙に地主として、植林家として、或は金融業者として活躍し、小山八十一銀行、東海銀行等の重役として名聲を馳せ、又大正十年より同十三年迄皆川村長として敏腕を揮つた。就植林業界に於ける功績は顯著にして一再ならず表彰された。其の他下野山林會評議員下野三樂園理事、栃木養考園幹事、栃木縣曹洞宗檀家總代、大和村幼稚園理事等と

手塚　信吉氏　（自宅）四谷區左門町一四、電話四谷三九五（工業所）四谷區忍町一八、電話四谷三九四五

丸電工業所主、日高電燈（株）專務取締役

明治二五年六月生、愛知縣

氏は愛知縣八名郡山吉田村黃柳野の農家に生れたが、夙に青雲の志を抱いて上京し、高田商會に入りて電氣事業の經驗を積み、大正二年獨立して丸電工業所を起し、東京電燈會社特約店として電燈電氣工事請負及電氣器具類の販賣を營み、著々發展した。昭和二年日高電氣株式會社を起し專務取締役となつたが、翌三年

新に日高電燈株式會社（資本金六十五萬圓）を設立して其の專務取締役に就任し社長岡崎將次氏等と共に經營の衝に當り以て今日に及んでゐる。幼時より奮鬪努力克く空拳を以てその運命を開拓したる立志傳中の士にして、著書に「體驗を透して新日本青年に告ぐ」がある。才腕兼備、人格亦崇高にして眞に實業界の典型として仰がれてゐる。趣味は旅行、讀書等。

妻カネ（明治二五年生）長男太郎（大正七年生）二男義郎（同一五年生）三男哲郎（昭和六年生）長女たみ子（大正一一年生）

寺田　浩作氏　淀橋區西大久保三ノ三三　電話四谷二六五〇

從六位、工學士、內閣印刷局總務部工作課長

明治二六年六月生、埼玉縣

大正七年東京帝國大學工科船機科卒業

氏は埼玉縣清村清十郎氏の四男に生れ後寺田長吉氏の養子となり、大正十年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て同大學を卒業するや直ちに神戸製鋼所に入社し、後東北帝國大學工學部講師に聘せられ、更に昭和三年內閣印刷局に轉じた。爾來專ら同局に在りて活躍し、現に工作課長の要職に在る。昭和七年歐米に出張を命ぜられ同八年一月歸朝以來、新知識を傾注して刷新向上に努力しつゝある。人格崇高にして夙に局內外の信望を博し前途を囑望されてゐる。

妻ユキ（明治三八年生、成女高女卒）長男謙一（昭和三年生）長女キヨ子（大正一四年生）二女幸子（昭和六年生）

青田　瀧藏氏　杉並區馬橋三ノ三五七　電話荻窪七〇四

計理士、東洋商業專務理事、昭和高等女學校理事、東京出版印刷（株）監査役

明治二三年一月生、大分縣

大正五年小樽高等商業學校卒業

氏は大分縣青田嘉十郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に同縣立實業學校、大成中學校を經て小樽高等商業學校に學び、學業を卒へるや直ちに富士瓦斯紡績株式會社に入社し、大正八年臺灣銀行に轉じた。昭和四年東洋商業理事に擧げられ、後專務理事に就任爾來その職に在つて活躍以て今日に及び、傍ら前掲の職を兼ねてゐる。資性溫厚、稀に見る人格者として信望を博してゐる。佛教を信仰し、趣味として撞球を好む。

妻秀子（明治三二年生、富山縣藤野清秀長女、富山高女卒）長女房子（大正一三年生）二女淑子（昭和元年生）三女俊子（同二年生）

赤井　日蘇氏　牛込區榎町五七宗柏寺　電話牛込五八八七

宗柏寺住職

明治九年三月生、新潟縣

明治二九年中山檀林卒業

氏は新潟縣故赤井信章氏の二男にして同縣高田市に生れた。幼少にして佛門に入り、同市長遠寺の小倉文承氏に就いて修業する事八ケ年、後上京し小石川白山宗學林に入り、更に千葉縣中山の中山檀林に學び、卒業後布教師となり臺北に於て布教すること五ケ年、明治四十年單獨布教師として北海道に出張し、後志國に布教場を設けて布教に從事した。同四十二年上京して宗柏寺に入り再び舊師小倉氏に仕へ、昭和四年文承氏の入寂後同寺住職となり今日に及ぶ。敬虔なる篤信家にして「日々に聖き道へと蘇り幾億年の末や變らじ」の心境を以て世に處し、大衆の教化濟度に努力しつゝある。趣味として讀書を好む。

妻ヨネ（明治二五年生、北海道故小川富三郎三女）長男文正（大正二年生、立正大學在）二男文乘（同四年生、立正中學在）三男文晴（同一二年生）長女蓮子（同八年生、成女高女在）

新井　堯爾氏　大森區新井宿町二ノ一五八八　電話　大森二六五〇

正五位、勳四等、法學士、東京鐵道局長

明治一九年五月生、埼玉縣

明治四五年東京帝國大學法科卒業

氏は埼玉縣新井啓一郎氏の三男に生れ大正元年分家した。明治四十五年大學卒業の年文官高等試驗に合格し、直ちに鐵道院に奉職した。爾來同院書記、參事補副參事、鐵道局參事、鐵道書記官と漸次昇進し、監督局業務課長、門司東京各鐵道局運輸課長、運輸局國際課長、同配車課長等を經て昭和五年觀光局長に擧げられ、更に東京鐵道局長の榮位に就き現にその職に在つて活躍しつゝある。趣味として盆栽、狩獵、乘馬等を好む。

妻鶴子（明治二八年生、山口縣揚井清八四女）男聰（大正九年生）男宏（同一〇年生）女清美（同一三年生）女昭子（昭和二年生）女和子（同四年生）

安部龜太郎氏　芝區琴平町三九　電話　芝一五五六

安部酸素工業所主

明治一七年八月生、島根縣

氏は島根縣安部由平氏の五男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に九州八幡製鐵所に入り、後海軍省に轉じ吳及び橫須賀海軍工廠に技を磨き、更に鐵道院に移つた。鐵道院に於ては特にその手腕を認められ、依託生として東京高等工業學校に入り機械製圖、及び數學を學び、學術技倆相俟つて漸次重用された。その後鐵道院を辭し牧野工場に入つたが、大正五年之を辭して獨立し安部酸素工業所を開設し、酸素鎔接、旋盤工業等を營み以て今日に及んでゐる。宗旨は日蓮宗、趣味は旅行、狩獵等である。

妻るい（明治二八年生）長男勉、二男宗昌（大正一四年生）三男伊勢一（昭和二年生）長女道子（大正六年生、東京府立第六高女卒）二女康子（同七年生）三女豐子（同一一年生）

澤　誠二氏　麹町區紀尾井町三　電話　九段二九四五

辯護士、東京府社會事業囑託

明治二八年一月生、弘前市

大正七年明治大學法科卒業

氏は青森縣士族澤用次郎氏の二男として弘前市に生れた。澤家は舊幕時代津輕藩に仕へ代々家老職を勤め、同藩の柱石と仰がれたる名門である。學業を卒へるや直ちに朝鮮銀行に入り累進して調査課主任となつたが、後之を辭して大正十年四谷區信濃町に辯護士を開業した。爾來帝都法曹界に活躍する傍ら、昭和不動產株式會社々長等として實業界にも驥足を伸べ、名聲を博した。昭和八年二月現地に堂々たる邸宅を新築移轉し、現時前揭の任に在つて益々活躍しつゝある。

妻千代（明治三四年生、神田高女卒）長男敏男（大正一〇年生）二男繁（同一二年生）三男誠（昭和三年生）長女百合子（大正一四年生）

齋藤　末吉氏　麹町區元園町一ノ九　電話　九段一一三一

不動信用組合代表

明治一八年七月生、埼玉縣

氏は埼玉縣齋藤酉五郎氏の五男に生れた。幼にして父を喪ひ母に伴はれて上京し新橋驛前に貸車業を營める長兄の下に育てられ、十三歲の時築地活版所少年工となつた。當初日給僅かに三錢五厘であつたが、少年ながらも確乎たる精神を以て不撓不屈その職務に精勵して技倆日に上達し、後秀英舍に轉じて職長格となり更に膽龍堂總支配人に聘せられた。後獨立して印刷業を開始し傍ら手形の割引等をなし、之に習熟するに及んでビルブローカーとして立ち傍ら手形割引信託業を營み、漸次產を興した。その後成明商事株式會社取締役となつたが現時不動信用組合代表として活躍しつゝある。不動尊を信仰すること篤く、成田山に鹽原山中雄飛瀑を摸したる瀑布を寄進し、或は鄉里小學校々舍及講堂を建設寄附する等公共的功績頗る顯著である。趣味は書畫骨董、刀劍、角力等である。

妻仙子（栃木縣澤德彌長女）男光成（大正七年生）男友成（同九年生）男明照高女卒）長女富美子（大正一二年生）

木原峰次郎氏　福岡縣宗像郡池野村三七〇〇　電話赤間四七

木原鑛業（株）社長

明治二一年二月生、廣島縣

明治四三年熊本高工採鑛冶金科卒業

火災保險倶樂部（社團）書記長

明治二七年生、石川縣

大正六年關西學院高等商學部卒業

氏は石川縣下に呱々の聲を擧げた。長じて實業界に飛躍すべく青雲の志を抱いて關西學院に學び、高等商學部を優秀の

その職に在つて活躍しつゝある。趣味として盆栽、狩獵、乘馬等を好む。

妻鶴子（明治二八年生、山口縣揚井清八四女）男聰（大正九年生）男宏（同一〇年生）女清美（同一三年生）女昭子（昭和二年生）女和子（同四年生）

安部龜太郎氏　芝區琴平町三九　電話　芝一五五六

安部酸素工業所主

明治一七年八月生、島根縣

氏は島根縣安部由平氏の五男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に九州八幡製鐵所に入り、後海軍省に轉じ吳及び横

澤　誠二氏　麴町區紀尾井町三　電話　九段二九四五

辯護士、東京府社會事業囑託

明治二八年一月生、弘前市

大正七年明治大學法科卒業

氏は青森縣士族澤用次郎氏の二男として弘前市に生れた。澤家は舊幕時代津輕藩に仕へ代々家老職を勤め、同藩の柱石と仰がれたる名門である。學業を卒へるや直ちに朝鮮銀行に入り累進して調査課主任となつたが、後之を辭して大正十年四谷區信濃町に辯護士を開業した。爾來帝都法曹界に活躍する傍ら、昭和不動產

し親族駐南に貸事業を營ぶる長兄の一育てられ、十三歳の時築地活版所少年工となつた。當初日給僅かに三錢五厘であつたが、少年ながらも確乎たる精神を以て不撓不屈その職務に精勵して技倆日に上達し、後秀英舍に轉じて職長格となり更に膽龍堂總支配人に聘せられた。後獨立して印刷業を開始し傍ら手形の割引等をなし、之に習熟するに及んでビルブローカーとして立ち傍ら手形割引信託業を營み、漸次產を興した。その後成明商事株式會社取締役となつたが現時不動信用組合代表として活躍しつゝある。不動尊を信仰すること篤く、成田山に鹽原山中

雄飛瀑を摸したる瀑布を寄進し、或は鄉里小學校々舍及講堂を建設寄附する等公共的功績頗る顯著である。趣味は書畫骨董、刀劍、角力等である。

妻仙子（栃木縣澤德彌長女）男光成（大正七年生）男友成（同九年生）男明照（同一〇年生）女初榮（明治四三年生）女君子（大正四年生）女田和子（同一一年生）

佐上　富造氏　赤坂區青山南町六ノ六一

王子製紙（株）社員、王子健康保險組合理事

明治一九年七月生、廣島縣

明治四二年東京高等商業學校卒業

氏は廣島縣佐上甚三郎氏の三男として同縣下に生れた。夙に上京して東京高等商業學校に學び、卒業後更に同校專攻部に進んで研究を重ね、後大倉商業學校教諭となり、後進の教導に精勵した。その後實業界に轉じ、王子製紙會社に入社し同社苫小牧工場に勤務して實地經驗を積み、大正八年同社東京出張所調査課に移り、以て今日に及んでゐる。宗旨は眞言宗、趣味はスポーツ、俳句、將棋等頗る廣汎である。

母ひさ（安政二年生）妻津彌子（明治三〇年生、山口縣辻川寅助四女、岩國高女卒）長女富美子（大正一二年生）

木原峰次郎氏　福岡縣宗像郡池野村三七〇〇　電話赤間四七

木原鑛業（株）社長

明治二一年二月生、廣島縣

明治四三年熊本高工採鑛冶金科卒業

氏は廣島縣故木原完次郎氏の長男として廣島市內に呱々の聲を揚げた。學業を卒へるや直ちに貝島鑛業株式會社に入社し、技師として活躍し、後神戸鈴木商店經營の帝國炭業株式會社に轉じ、同社の各鑛業所長として敏腕を揮ひ、その後之を辭し自ら木原鑛業所を起した。當初は福岡炭坑及び池田炭坑を經營したが、漸次發展するに及んで昭和二年池田炭坑と江口炭坑とを併せて木原鑛業株式會社を設立し、自ら社長となり重役は全部一族を以て固め、一致協力以て同社の發展を圖りつゝ今日に及んでゐる。今や本社を福岡縣赤間町、出張所を若松市海岸通に設け、江口、池田兩炭坑を經營し、社運隆盛を極めてゐる。

妻明代（明治二八年生）男敏夫（大正六年生）男康雄（同一二年生）女幸子（同九年生）女經子（昭和元年生）女雅子（同五年生）

水芦俊一郎氏　杉並區高圓寺町三五

火災保險倶樂部（社團）書記長

明治二七年生、石川縣

大正六年關西學院高等商學部卒業

氏は石川縣下に呱々の聲を擧げた。長じて實業界に飛躍すべく青雲の志を抱いて關西學院に學び、高等商學部を優秀の成績を以て卒業後直ちに藤田組に入り、精勵恪勤して社內に信望を博するに至つた。昭和二年海上火災保險倶樂部一木會書記長となり、同倶樂部の爲めに盡瘁したが、同六年社團法人組織の火災保險倶樂部が設立されるに及んで、一木會も該倶樂部に合流したる爲め、氏は倶樂部に推されて書記長に就任し、以て現在に及んでゐる。資性溫厚にして世故に通じ圓滿なる人格者として倶樂部員間に於ては勿論、對外的にも好感を以て迎へられ適材適所として頗る信望がある。

白石　莊藏氏　栃木縣下都賀郡富山村

栃木銀行（株）取締役、栃木縣多額納稅者

明治元年六月生、栃木縣

氏は栃木縣白石精一郎氏の長男、關謙吉氏の實兄として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十三年その家督を相續した。夙に實業界に入り、精勵恪勤して次第に栃木縣下に名聲を博するに至つた。現時栃木銀行の取締役として同縣金融界に重

きをなしてゐる。資性溫厚篤實にして而も才腕秀で、社會公共事業に盡したる功績顯著にして各方面に信望隆々たるものがある。

妻テウ（明治三年生、埼玉縣野中平助妹）養子貞吉（同一四年生、亡父精一郎四男）同妻テル（同二六年生、貞吉妻、栃木縣原田金三郎二女）孫卯太郎（大正四年生、貞吉二男）同己代治（同六年生、同三男）同酉夫（同一〇年生同四男）同祥子（同八年生、同長女）同依子（同一二年生、同二女）

斯波　貞吉氏　澁谷區代々木一六六　電話四谷七八

文學士、衆議院議員、臨時國語調査會委員、寺院境內地讓與審査會委員

明治二年八月生、福井縣

明治二九年東京帝國大學文科卒業

氏は福井縣士族斯波有造氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。明治二十四年英國オックスフオード大學卒業後歸朝して東京帝國大學に學び、同大學卒業後盛岡中學、高輪佛教大學等に教鞭を執り、明治三十二年萬朝報記者となつた。同四十年同社編輯長となり、爾來多年同社の發展に努力し、大正十四年東京大勢新聞社長兼主筆となり、操觚界の長老として名聲を馳せた。後政界に志し、衆議院議員に當選すること四回に及び、立憲民政黨所屬として重きをなしてゐる。宗旨は眞宗、趣味は寫眞、書畫等を好み、著書には「勇三の腕」等がある。

妻ヤス（明治九年生、福井縣橋本知貞長女、東京女子高師卒、文華高女學監）養嗣子隆義（明治三〇年生、福井縣士族、水戸高校卒）

關岡　豐治氏　荒川區南千住七ノ一二二

王子製紙（株）千住工場長

明治一四年一一月生、東京府

氏は東京府士族關岡尚志氏の三男として呱々の聲を揚げ、明治二十六年その家督を相續した。夙に實業界に投じ、富士製紙會社に於て其の敏腕を認められ、漸次重用されて千住工場長となり、其の後王子製紙と合併されるや引續き其任に在り今日に及び精勵克く同社の發展に貢献しつゝある。技術的才腕に長け又經營に秀で、資性溫厚にして稀に見る人格者として信望がある。

母たか（弘化元年生）妻カツ（明治二三年生、東京府加島新助二女）長女紀美（同四五年生）二女富士（大正四年生）三女愛子（同六年生）四女靜（同一二年生）五女三千子（同一四年生）六女美枝子（同一五年生）姉こう（明治七年生）

關口　兼松氏　杉並區方南町三五〇　四谷區花園町一〇

勳八等、四谷第七小學校長、四谷圖書館監事、東京市小學教員會幹事兼社會部長、防護團評議員、四谷區教育會幹事、同區兒童就學奬勵會評議員、同區學務委員

明治一四年四月生、東京市

明治三六年青山師範學校卒業

氏は東京市關口兼經氏の長男として市內深川區富吉町一六に呱々の聲を揚げた夙に教育界に志し青山師範學校に學び、同校を優秀の成績を以て卒業以來、都下各小學校に教鞭を執ること三十年、現に四谷第七小學校長たる外前掲の職を兼ねて都下教育界に活躍し、斯界の功勞者として信望を博してゐる。「仁俠的精神」を以て家憲とし、眞言宗を信仰し、趣味としては植木、釣魚、音樂、運動、旅行等頗る廣汎である。

妻茂登（明治一八年六月生、廣島縣木村菊雄長女、渡邊裁縫女學校卒）長女壽子（大正四年七月生、堀越高女卒）

須田　鋤治氏　目黑區下目黑三ノ六九〇　電話高輪一六三三

東京市會議員、目黑區會議員

須田家は目黑區內屈指の大地主として同店の發展は著しく、遂に今日の盛況を呈するに至つたが、此の間に於ける氏の功績は特に顯著にして、昭和六年同社代表取締役に擧げられ、現にその任に在つて益々發展に貢献しつゝある。趣味は相撲に及んで、工場長に拔擢され、各種の優秀化粧品を製出して同社の發展に貢献し其の功績頗る顯著であつた。後取締役に選ばれ、工場長を兼ねて益々活躍以て今日に及んでゐる。趣味は撞球。

員、寺院境內地讓興審査會委員
明治二年八月生、福井縣
明治二九年東京帝國大學文科卒業
氏は福井縣士族斯波有造氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。明治二十四年英國オックスフオード大學卒業後歸朝して東京帝國大學に學び、同大學卒業後盛岡中學、高輪佛教大學等に教鞭を執り、明治三十二年萬朝報記者となつた。同四十年同社編輯長となり、爾來多年同社の發展に努力し、大正十四年東京大勢新聞社長兼主筆となり、操觚界の長老として名聲を馳せた。

壽子（大正四年七月生、堀越高女卒）

須田　鋤治氏　目黑區下目黑三ノ六九〇　電話　高輪一六三三

東京市會議員、目黑區會議員

須田家は目黑區內屈指の大地主として知られてゐる。氏は此の名門に生を享け克くその產を維持すると共に公共的事業に關與して信望を博し、衆望を負ふて目黑町助役に推され、或は目黑町會議員として多年同町の發展に盡瘁し町內の功勞者として尊崇されてゐた。昭和七年大東京市の實現に伴ひ、目黑區會議員に當選し、翌八年三月新市域最初の市會議員選擧に際しては、同區內の有志高木正年氏等に推され民政黨公認として立候補し、當選の榮を擔つた。爾來公正なる市會議員として市政に參與し、又區政の刷新に盡瘁し、自治界の功勞者として名聲を博してゐる。

伊佐野義晃氏　中野區沼袋南三ノ三七八

阪川牛乳店(株)代表取締役
明治一八年九月生、鳥取縣
氏は鳥取縣伊佐野範治氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。大正二年阪川牛乳店に入り、爾來精勵恪勤して漸次信用を高め、同八年會計部長の要職に擧げられた。社員一同の熱誠努力に依つて同店の發展は著しく、遂に今日の盛況を呈するに至つたが、此の間に於ける氏の功績は特に顯著にして、昭和六年同社代表取締役に擧げられ、現にその任に在つて益々發展に貢獻しつゝある。趣味は相撲、野球等にして特に野球は一家を擧げて熱心なるファンである。因みに父母共に健在にして、昭和五年金婚式を擧げ家庭は頗る圓滿である。
父範治（安政五年生）母利（嘉永二年生）妻松枝（明治三二年生）弟豪象（同二四年生、製藥業）同節（同二七年生鐵道省技手、鐵道省講習所講師）同輝（同三四年生、日本美術學校卒、邦樂座勤務）同蔚（同三八年生、鐵道省上野運輸事務所勤務）

伊藤定治郎氏　下谷區上野櫻木町四三　電話　下谷五二五三

資生堂(株)取締役兼工場長
明治二五年一二月生、愛知縣
大正元年明治藥學專門學校卒業
氏は愛知縣伊藤松太郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に藥業界に志して明治藥學專門學校に學び、優秀の成績を以て同校卒業後直ちに資生堂に入社し、その銀座藥局に勤務し、勵精恪勤して漸次重んぜられるに至つた。大正五年同社が化粧品の製造販賣を開始するに及んで、工場長に拔擢され、各種の優秀化粧品を製出して同社の發展に貢獻し其の功績頗る顯著であつた。後取締役に選ばれ、工場長を兼ねて益々活躍以て今日に及んでゐる。趣味は撞球。
妻綾子（明治三六年生、愛知縣加藤勘三郎三女、裁縫女學校卒）長男貞雄（昭和二年生）長女照子（大正一一年生）二女夏子（同一二年生）三女榮子（昭和五年生）

今村　眞彥氏　葛飾區金町三ノ一八九〇　電話　新宿二〇四

江戸川工業所(資)支配人
明治二五年二月生
大正五年東京帝國大學法科卒業
氏は今村眞橘氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に第四高等學校を經て東京帝國大學法科に進み、優秀の成績を以て同大學を卒業した。卒業後直ちに三菱製紙株式會社に入社し、爾來同社に在りて職務に精勵すること十數年に及んだが、昭和五年同社を辭して江戸川工業所に移り、其の支配人として同所の發展に努力以て今日に及ぶ。資性溫厚にして才腕兼備はり、各方面に信望がある。趣味は旅行、寫眞、戶外運動、音樂其他頗る廣汎である。
妻鈴子（東京比家由嘉藏長女、跡見女

學校卒）長男久壽彥（大正七年生）二男秀彥（同一五年生）

今井　常一氏　芝區芝公園第七號地八　電話　芝　六八

辯護士、法學士

明治二七年四月生、東京市

大正一二年東京帝大法學部卒業

氏は幼時より頭腦頗る明晰にして秀才の譽れ高く、大正九年第一高等學校を優秀の成績を以て卒業後東京帝國大學に進み、法學部獨逸法科に於て孜々として學業に勵み、卒業後更に研鑽して辯護士となつた。辯護士を開業後に於ても絶えず研究を積みたる効果空しからず、廣く列國の法規に通曉し、判例に明るく、而も辯論の雄として次第に人氣を博し、各方面よりの依頼逐年增加して遂に今日の盛況を呈するに至つた。現時第一東京辯護士會に屬し、都下在野法曹界有數の敏腕家として信望を博し、前途を囑望されてゐる。

長谷川太郎吉氏　小石川區江戸川町一八　電話　小石川三三〇〇

大島製鋼所（株）專務取締役、大川田中事務所、鴨綠江製紙、朝鐵自動車、朝鮮電氣興業、朝鮮鐵道、熊本電氣軌道、熊本電氣、球磨川電氣、鳳城炭鑛、共同洋紙各（株）取締役、大同洋紙店、上毛電力、東海鋼業各（株）監査役

明治六年一月生、新潟縣

氏は新潟縣加藤寅太郎氏の三男として同縣下に生れ、明治十七年長谷川三藏の絶家を興した。同二十二年上京して田島爲吉商店に入り機械輸入業に從事し、同二十四年支配人に擧げられたが、同年同店を辭して獨立し機械商を始めた。同三十三年大川平三郎氏と共に九州製紙會社を起して以來、常に大川氏と共に各種事業に關係し、敏腕克く業界に進出して今日の大成を爲すに至つた。現時前揭諸社の重役として財界に重きをなしてゐる。

妻啓子（明治一四年生、東京府松崎循三女）男祐之助（同三九年生）女信子（大正二年生）

早川芳太郎氏　牛込區市ケ谷船河原町　電話牛込一六二二

日本倉庫（株）社長、早川ビルブローカー横濱生命、多摩川砂利木材鐵道各（株）取締役、大東證券、レイボルド商館各（株）監査役、東京米穀商品取引所理事長

明治一六年一〇月生、東京府

氏は舊幕以來刀劍商として名聲を博したる苗村金治氏の長男に生れたが、後早川億利氏の先代松之助氏の養子となり、大正七年同家より分れて一家を樹てた。夙に慶應義塾に學び、卒業後直ちに東海銀行に入り、行務に勵精して貸付課長に擧げられたが、此の間ビルブローカーに就いて深く研究し、遂に大正七年早川ビルブローカー銀行を創立した。（後早川ビルブローカー株式會社と改名された。）爾來同社の經營に專念して都下金融界に確乎たる地歩を占むるに至り、現に前揭の職を兼ねて活躍し各方面に聲望を博してゐる。

男滋雄（明治四五年生）長女和子（大正六年生）二女治子（同八年生）

林　季彥氏　東京府下砧村大藏西山野一八三　電話砧一三七

正五位、勳四等、法學士、帝國海上火災保險（株）常務取締役、東京火災保險（株）監査役

明治一五年一月生、熊本縣

明治三九年東京帝大法科獨法科卒業

氏は熊本縣林兼八氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正九年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學法科に學び、卒業後直ちに大藏省に奉職し、爾來專賣局事業部煙草課長、專賣局理事等を經て東京地方專賣局長に進み、敏腕を揮ふこと多年、その功に依り正五位、勳四等に陞叙せられた。後官を辭して實業界に轉じ、着々その地歩を開拓し現時前揭の重役として信望を博してゐる。

妻登茂子（明治二〇年生、東京府本尾敬三郎二女）男邦彥（同四三年生）女敬子（大正五年生）

林　健藏氏（自宅）芝區下高輪町五六　電話　高輪六七〇

常務取締役、越木岩鑛泉、日本ABC特許製版、日本手帳印刷、日本印刷材料各（株）取締役

明治一一年一月生、岡山縣

氏は岡山縣林正馨氏の二男、同幸夫氏學習院に學び、後渡英してケンブリッヂ大學に入り、研鑽を重ねて同四十一年歸朝した。爾來漸次財界に進出して名聲を博し、現時前揭諸社の重役として信望を博してゐる。

妻久子（明治一二年生、新潟縣無木竹

辯論の雄として次第に人氣を博し、各方面よりの依頼逐年增加して遂に今日の盛況を呈するに至つた。現時第一東京辯護士會に屬し、都下在野法曹界有數の敏腕家として信望を博し、前途を囑望されてゐる。

長谷川太郎吉氏 小石川區江戸川町一八 電話 小石川三三〇〇

大島製鋼所(株)專務取締役、大川田中事務所、鴨綠江製紙、朝鐵自動車、朝鮮電氣興業、朝鮮鐵道、熊本電氣軌道、熊本電氣、球磨川電氣、鳳城炭鑛、共同洋紙各(株)取締役、大同洋紙店、上毛電力、(大正二年生)

早川芳太郎氏 牛込區市ケ谷船河原町一一 電話牛込一六二二

日本倉庫(株)社長、早川ビルブローカー横濱生命、多摩川砂利木材鐵道各(株)取締役、大東證券、レイボルド商館各(株)監査役、東京米穀商品取引所理事長 明治一六年一〇月生、東京府

氏は舊幕以來刀劍商として名聲を博したる苗村金治氏の長男に生れたが、後早川億利氏の先代松之助氏の養子となり、大正七年同家より分れて一家を樹てた。夙に慶應義塾に學び、卒業後直ちに東海監査役 明治一五年一月生、熊本縣 明治三九年東京帝大法科獨法科卒業

氏は熊本縣林兼八氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正九年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學法科に學び、卒業後直ちに大藏省に奉職し、爾來專賣局事業部煙草課長、專賣局理事等を經て東京地方專賣局長に進み、敏腕を揮ふこと多年、その功に依り正五位、勳四等に陞叙せられた。後官を辭して實業界に轉じ、着々その地歩を開拓し現時前掲の重役として信望を博してゐる。

妻登茂子（明治二〇年生、東京府本尾敬三郎二女）男邦彦（同四三年生）女敬子（大正五年生）

林 健藏氏 (自宅)芝區下高輪町五六 電話 高輪六七〇 (商會)神田區旅籠町一ノ二 電話 下谷六一〇

昭和商會(資)社長 明治三三年生、東京府

氏は林武平氏の二男にして、夙に濟美中學に學び、卒業後父の事業に携はつて業界の經驗を積みたる後、昭和三年合資會社昭和商會を起し、その代表社員となつた。爾來關双物の發賣元として活躍する傍ら、同四年よりアクメ太陽燈の代理店となり、更に自家製作に係る赤外線燈及びレントゲンを發賣して名聲を博し今や大阪、札幌、福岡、京城、金澤等の各地に支店を設けて醫療機械界に確乎たる地歩を占むるに至つた。敏腕潤達にして而も業界稀に見る人格者として前途を囑望されてゐる。趣味は美術、演藝等。

長男松生（昭和八年生）長女和子（同四年生）二女弘子（同五年生）

林 理夫氏 大阪府泉北郡濱寺町船尾七〇五

精版印刷(株)專務取締役、凸版印刷(株)常務取締役、越木岩鑛泉、日本AB特許製版、日本手帳印刷、日本印刷材料各(株)取締役 明治一一年一月生、岡山縣

氏は岡山縣林正馨氏の二男、同幸夫氏の實弟として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十二年分れて一家を創めた。夙に上阪して印刷業界に入り、奮鬪努力以て着々斯業界に擡頭し、確乎たる地歩を占めるに至つた。現時關西印刷界に名聲嘖々たる凸版印刷株式會社及び精版印刷株式會社の經營の衝に當ると共に、各印刷製版會社に關係し、更に越木岩鑛泉株式會社等の重役を兼ねてゐる。

妻ヒデ（明治一七年生、岡山縣士族竹内達而姉）

西脇濟三郎氏 小石川區關口臺町一 電話 牛込二〇四〇

生氣嶺粘土石炭、太陽生命保險各(株)社長、日本石油、第四銀行、日本製鍊、磐城電氣各(株)取締役、日興證券、三光紡績各(株)監査役、西脇銀行頭取、新潟縣多額納稅者 明治一三年一二月生、新潟縣

當家は越後國屈指の豪族にして、數百年連綿として傳はれる舊家である。氏は先代國三郎氏の長男にして、明治十九年此の名門の當主となつた。夙に上京して學習院に學び、後渡英してケンブリッヂ大學に入り、研鑽を重ねて同四十一年歸朝した。爾來漸次財界に進出して名聲を博し、現時前掲諸社の重役として信望を博してゐる。

妻久子（明治一二年生、新潟縣蕪木竹治郎妹）男孝三郎（同四五年生）男敬之助（大正三年生）女菊子（同四年生）

西脇 健治氏 牛込區若松町七六 電話牛込 三〇〇三

生氣嶺粘土石炭(株)專務取締役、日本硫黃、西脇銀行、太陽生命保險、三光紡績各(株)取締役、富山紡績(株)監査役、西脇(名)無限社員 明治一五年八月生、新潟縣

氏は新潟縣下屈指の名門西脇國三郎氏の二男、同濟三郎氏の實弟として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正六年分れて一家を創めた。夙に令兄と共に實業界に入り各方面に活躍して着々擡頭し、縣下財界に重きをなすに至つたが、その後更に縣外に進出して益々地歩を進め、今や前記各社の重役として名聲嘖々たるものがある。

妻淑子（明治二三年生、伯爵酒井忠良再從妹）長男昌治（大正四年生、二男敎二郎（同七年生）三男奎三郎（同八年生）女嘉代子（同九年生）女澄子

（同一一年生）女史子（同一五年生）

西池　正顯氏　淀橋區下落合一三八四
（店舗）日本橋區伊勢町三
電話　日本橋二八五六

藥劑士、鹽野義商店（株）東京支店支配人
明治一八年一二月生、京都府
明治三八年東京藥學校卒業

氏は京都府西池里顯氏の二男として同地に呱々の聲を揚げた。夙に上京して東京藥學校に學び、卒業の翌明治三十九年藥劑師試驗に合格した。その後東京市養育院に勤務し大正七年二月藥局長となつたが、同年四月之を辭し鹽野義商店に轉じた。同店に於ては書記として勤務後主事を經て支配人に進み、更に同八年株式組織に變更と同時に東京支店支配人に擧げられ、以て今日に及んでゐる。此の間大正十四年朝鮮、滿洲、支那等を視察歸朝し、爾來益々同店の發展に努力し今や社內外に普く信望を博してゐる。神道を信仰し、趣味はスポーツ、歌澤等。

妻とよ（明治三五年生、東京市安井七太郎妹、神田高女卒）長男伸顯（昭和四年生）長女幸枝（明治四三年生、自由學院高等科卒）

寶來　市松氏　澁谷區代々木初臺四六七
電話　四谷六二〇一

法學士、日本興業銀行（株）理事、共立鑛業、共立モスリン各（株）取締役、日興證券（株）監査役
明治一四年一一月生、大阪府
明治四〇年東京帝大法科政治科卒業

氏は大阪府寶來滿洋の息として呱々の聲を揚げ、明治四十一年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學法科に入り孜々として學業を修め、優秀の成績を以て卒業後直ちに日本興業銀行に奉職し、爾來二十餘年引續き同行に在つて精勵し、その功績に依つて參事に擧げられ更に理事に進み、以て今日に及んでゐる。此の間日本共同汽船株式會社の取締役を兼ねたが、現時は前揭の職に在つて活躍しつゝある。

妻つね（明治一八年生、大阪府陸田新兵衞妹）女孝（同四三年生）女節（大正元年生）女和（大正七年生）

本間　好茂氏　牛込區拂方町二七
電話牛込三一〇二

第一相互貯蓄銀行專務取締役
明治五年一一月生、新潟縣
明治三二年東京帝大法科英法科卒業

氏は新潟縣士族本間好兼氏の長男として同縣高田市に生れ、大正九年家督を相續した。大學卒業後直ちに大藏省に奉職したが、病氣の爲め之を辭し明治三十四年第四高等學校教授となつた。同四十一年日本銀行に轉じ、調査局に於て日本銀行沿革史編纂等に從事し、大正三年松本支店の創設と同時に其の次席として赴任し、同七年大阪支店次席に轉じ、支店長結城豐太郎氏を輔けて敏腕を揮つた。後本店に移り文書局次席として五代の局長に仕へ、文書局の至寶と謳はれた。後同行を去り昭和七年一月後藤德太郎氏の後任として第一相互貯蓄銀行に入り以て今日に及んでゐる。趣味は讀書等。

妻汐子（明治一八年生、東京府豐住秀堅四女、稻田醫學博士夫人妹、學習院女學部卒）

堀越　勘治氏（自宅）麴町區四番町二
電話九段一四一六
（店舗）日本橋區通旅籠町一二
電話　浪花三三七

堀越（名）代表社員
明治二三年一月生、東京市
大正二年慶應義塾大學卒業

足利時代伊豆國堀越御所の茶々丸は上州吉井に遁れ、同地に土着して堀越姓を名乘つた。是れ當家の鼻祖にして、爾來その子孫同地に住み、德川時代には代々吉井藩に仕へた。先代勘治氏は維新後實業に志し、明治七年上京して堀越角次郎商店に入り、後獨立して洋反物問屋を開いた。同二十九年東洋モスリン會社を起して其の取締役となり、同三十九年東京キャラコ製織會社を創立して專務取締役たる傍ら堀越商店を經營し斯界に名聲を博した。氏はその長男に生れ前名を安太郎と呼び、大正十四年家督相續と共に勘次を襲名した。夙に學業を卒へて家業に携はり、大正八年同店を合名組織に改めと多年、斯業界の權威として信望を博し以て現在に及んでゐる。

妻よし（明治一二年生、東京府笠井庄兵衞三女）男卓（同三二年生、千葉醫專藥學科卒、大木合名出資社員）同妻春（同三七年生、東京府木內伊之助長女）男章二（同三四年生）

渡瀨　完三氏　大森區山王一ノ二四五三
昭和肥料（株）商務課長
明治三三年二月生、鳥取縣

氏は鳥取縣渡瀨幾次郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。大正七年鳥取中學を卒業後直ちに實業界に志して上

組織に變更と同時に東京支店支配人に擧げられ、以て今日に及んでゐる。此の間大正十四年朝鮮、滿洲、支那等を視察歸朝し、爾來益々同店の發展に努力し今や社内外に普く信望を博してゐる。神道を信仰し、趣味はスポーツ、歌澤等。

妻とよ（明治三五年生、東京市安井七太郎妹、神田高女卒）長男伸顯（昭和四年生）長女幸枝（明治四三年生、自由學院高等科卒）

寶來　市松氏　澁谷區代々木初臺四六七　電話　四谷六二〇一

法學士、日本興業銀行（株）理事、共立鑛兵衛妹）女孝（同四三年生）女節（大正元年生）女和（大正七年生）

本間　好茂氏　牛込區拂方町二七　電話牛込三一〇二

第一相互貯蓄銀行專務取締役

明治五年一一月生、新潟縣

明治三二年東京帝大法科英法科卒業

氏は新潟縣士族本間好兼氏の長男として同縣高田市に生れ、大正九年家督を相續した。大學卒業後直ちに大藏省に奉職したが、病氣の爲め之を辭し明治三十四年第四高等學校教授となつた。同四十一

（店舗）日本橋區通旅籠町一二　電話　浪花三三七

堀越（名）代表社員

明治二三年一月生、東京市

大正二年慶應義塾大學卒業

足利時代伊豆國堀越御所の茶々丸は上州吉井に遁れ、同地に土着して堀越姓を名乘つた。是れ當家の鼻祖にして、爾來その子孫同地に住み、德川時代には代々吉井藩に仕へた。先代勘治氏は維新後實業に志し、明治七年上京して堀越角次郎商店に入り、後獨立して洋反物問屋を開いた。同二十九年東洋モスリン會社を起して其の取締役となり、同三十九年東京キヤラコ製織會社を創立して專務取締役たる傍ら堀越商店を經營し斯界に名聲を博した。氏はその長男に生れ前名を安太郎と呼び、大正十四年家督相續と共に勘次を襲名した。夙に學業を卒へて家業に携はり、大正八年同店を合名組織に改めて以來その社員として益々活躍し、先代の歿後代表社員として今日に及ぶ。宗旨は眞言宗、趣味は讀書、音樂等。

母もと（明治元年生、東京府堀越角次郎姉）弟泰次郎（同二六年生、早稻田實業卒）

大木　良輔氏　神田區鍋町一六　電話神田二一三

大木（名）代表社員、應用製藥（株）社長、日本賣藥（株）監査役

明治一一年七月生、東京府

當家は舊幕以來藥種商を營み、斯界の老舗として夙に名聲を博してゐる。先代口哲氏は家業を繼承して益々發展せしめ時世に鑑み合名組織に改めて當社今日の基礎を築きたるのみならず、或は東京製鹽會社々長として、或は起業銀行頭取として、都下財界に活躍し驍名を馳せた。氏はその長男に生れ、夙に家業に携はり嚴父を翼けて家業の發展に努力し、嚴父亡き後は自ら陣頭に立つて敏腕を揮ふこと多年、斯業界の權威として信望を博し以て現在に及んでゐる。

妻よし（明治一二年生、東京府笠井庄兵衛三女）男卓（同三二年生、千葉醫專藥學科卒、大木合名出資社員）同妻春（同三七年生、東京府木内伊之助長女）男章二（同三四年生）

荻野　正孝氏　中野區中野一五五七

第一銀行（株）營業部次長

明治二六年九月生、岡山縣

大正八年東京帝大經濟學部卒業

氏は岡山縣人荻野幸平氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て同大學を卒業後直ちに第一銀行に入社し、累進して本店預金係長に擧げられ、更に支配人代理を經て日比谷支店長に拔擢され、後現職に就任し活躍以て今日に及んでゐる。資性溫厚篤實にして而も才腕兼備し、熱心に同行の發展に努力すること既に十餘年に及び、行内外に信望を博してゐる。

妻充子（明治三六年生、小野俊夫長女）男知孝（大正一五年生）女絢子（昭和四年生）

渡瀨　完三氏　大森區山王一ノ二四五三

昭和肥料（株）商務課長

明治三三年二月生、鳥取縣

氏は鳥取縣渡瀨幾次郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。大正七年鳥取中學を卒業後直ちに實業界に志して上阪し、大阪島田商會に入店した。資性濶達にして進取の意氣に富み、加ふるに入店以來一意その職務に精勵したる爲め漸次認められ、營業部長の要職に拔擢され敏腕以て同店の發展に貢獻し、功績頗る顯著であつた。昭和四年昭和肥料株式會社に轉じ、現時その商務課長として活躍しつゝあるが、敏腕にして經驗に富み加ふるに春秋多く、大いに前途の飛躍を期待せられてゐる。

妻君代（明治三八年生、鳥取縣三島千藏長女）

川田佐門次氏　京橋區銀座西三ノ三　電話　京橋七二七

明治製版所主、甲子商店主

元治元年五月生、長野縣

明治二〇年明治法律學校卒業

氏は東京府鹽野崎喜重氏の三男として長野縣松本市に呱々の聲を揚げ、後川田わかの養子となり、明治三十七年その家督を相續した。夙に明治法律學校に學び

卒業後操觚界に入り、都新聞社に於て敏腕を揮ひ、後黑岩涙香氏と共に萬朝報を創始し、更に東京日々新聞社に轉じ大いに斯界に名聲を謳はれた。明治三十八年操觚界を去り、寫眞銅版製作所を起し後之を明治製版所と稱し、獨力經營以て今日に及んでゐる。傍ら大正十三年甲子商店を創設し、以來工業化學用藥品の製造販賣を兼營してゐる。

妻わか(明治三年生、川田忠兵衞四女)男正明(同三〇年生)同妻はな(同三七年生、窪田彌一郎長女)孫忠雄(大正一五年生、正明長男)男芳麿(明治三三年生)同妻いと子(同三九年生、平野幸吉長女)男右文(同三五年生)男文平(同三八年生)女光枝子(同四〇年生)女ひろ子(同四二年生)男古己(同四四年生)

川崎友之介氏　小石川區林町三〇　電話小石川八〇〇

東信電氣、木曾川電力、東京倉庫、矢作水力各(株)取締役、東京搾油、南洋貿易日清紡績、常盤銀行各(株)監査役

明治九年九月生　東京府

氏は東京府川崎左衞門氏の長男として呱々の聲を揚げ、川崎ことの養子となり明治四十年その家督を嗣いだ。川崎財閥の一門にして、夙に川崎第百銀行の前身たる川崎銀行に入り、累進して營業部長の要職に就き、更に同行取締役に選ばれその發展に貢献する所甚大であつた。此の間川崎一門の代表者として同財閥の直系及び傍系諸事業に關係し、敏腕を揮ふこと多年に及び、現時前掲各銀行會社の重役を兼ねて活躍し信望を博してゐる。

妻つね(明治一五年生、川崎八左衞門妹)長男芳男(同三三年生)二男猛(同三六年生)三男精良(大正一一年生)五女文子(同四年生)

河野坦之輔氏　牛込區若松町五九　電話牛込三二五八

東京德田銀行(株)常務取締役、中央冷藏製氷、金萬證券各(株)取締役、日本染色(株)監査役

明治一三年一〇月生、東京府

氏は東京府士族河野通德氏の二男として東京に生れ、明治四十二年分れて一家を創立した。夙に日本大學等に於て學業を修め、後足立銀行に入社して實業界活躍の第一歩を踏み、爾來漸次擡頭して德田銀行監査役となり、更に青島株式商品信託會社取締役、青島物産會社取締役、相模鐵道會社理事等として敏腕を謳はれるに至つた。現時東京德田銀行常務取締役として同行經營の衝に當る傍ら、各社重役を兼ねて帝都財界に雄飛しつゝある妻よし(明治一八年生、玉村庄三郎長女)

吉田　義輝氏　芝區高輪南町四五　電話高輪一〇六三

富國徵兵保險(五)常務取締役、太平生命保險(株)專務取締役、昭和火災保險(株)取締役、昭和土地、關東瓦斯各(株)監査役

明治七年二月生、山梨縣

氏は山梨縣人吉田義久氏の二男として同縣下に生れ、大正十年分れて一家を創めた。夙に實業界に投じ、敏腕以て着々斯界に擡頭し、同鄕の先輩根津嘉一郎氏の經營する諸會社に關係し、同系の中堅として今日の地歩を占むるに至つた。敏腕達識にして而も溫厚なる人格者として信望を博してゐる。

妻生野(明治二八年生、東京府小林順一郎妹)養子貢(同三二年生、埼玉縣伊豫田襄三男)養子繁子(同三九年生東京府石垣貫三長女、貢妻)孫絹子(昭和四年生、貢長女)

吉井桃磨呂氏　大森區山王町二ノ三西　電話大森一〇五三

横濱火災海上保險(株)專務取締役、大成(株)常務取締役、朝日スレート、日本ビルヂング、日本香料各(株)取締役、日本カーボン(株)監査役

明治一二年一二月生、宮城縣

明治三九年京都帝大英法科卒業

氏は宮城縣吉井震太郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に京都帝國大學法科に入り、英法科を優秀の成績を以て卒業した。卒業後實業界に投じ、年にして明治三十四年辭し、同三十九年チエルベルジス繼續會社に入社し、以來同社の發展に努力以て今日に及んでゐる資性溫厚篤實にして、社内外に普く信望を博してゐる。

長男英治(明治四一年生、東京帝大法科卒)二男昌夫(大正八年生)三男克館卒)女喜美子(同六年生、同上在學)長女富美子(明治四三年生、同上卒、神奈川縣鈴木松雄妻)妹ふさ(同二四年生、廣島縣小林八十七未亡人)弟金藏(同一〇年生、分家)

高橋　保氏　麻布區笄町一三四　電話青山三六二二

貴族院議員、昭和肥料、東信電

男文平（同三八年生）女光枝子（同四〇年生）女ひろ子（同四二年生）男古己（同四四年生）

川崎友之介氏　小石川區林町三〇　電話小石川八〇〇

東信電氣、木曾川電力、東京倉庫、矢作水力各(株)取締役、東京搾油、南洋貿易日清紡績、常盤銀行各(株)監査役

明治九年九月生　東京府

氏は東京府川崎左衛門氏の長男として呱々の聲を揚げ、川崎ことの養子となり明治四十年その家督を嗣いだ。川崎財閥の一門にして、夙に川崎第百銀行の前身製氷金融諸券各(株)取締役(株)監査役

明治一三年一〇月生、東京府

氏は東京府士族河野通德氏の二男として東京に生れ、明治四十二年分れて一家を創立した。夙に日本大學等に於て學業を修め、後足立銀行に入社して實業界活躍の第一歩を踏み、爾來漸次擡頭して德田銀行監査役となり、更に青島株式商品信託會社取締役、青島物産會社取締役、相模鐵道會社理事等として敏腕を謳はれるに至つた。現時東京德田銀行常務取締役として同行經營の衝に當る傍ら、各社重役を兼ねて帝都財界に雄飛しつゝあるとして今日の地歩を占むるに至つた。敏腕達識にして而も溫厚なる人格者として信望を博してゐる。

妻生野（明治二八年生、東京府小林順一郎妹）養子貢（同三二年生、埼玉縣伊豫田襄三男）養子繁子（同三九年生東京府石垣貫三長女、貢妻）孫絹子（昭和四年生、貢長女）

吉井桃磨呂氏　大森區山王町二ノ三西　電話大森一〇五三

横濱火災海上保險(株)專務取締役、大成(株)常務取締役、朝日スレート、日本ビルヂング、日本香料各(株)取締役、日本カーボン(株)監査役

明治一二年一二月生、宮城縣

明治三九年京都帝大英法科卒業

氏は宮城縣吉井震太郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に京都帝國大學法科に入り、英法科を優秀の成績を以て卒業した。卒業後實業界に投じ、其の豐富なる學識と努力に依つて着々地歩を開拓し、今や横濱火災海上保險會社の專務たる外前掲各社の重役を兼ねて業界に雄飛しつゝある。

妻きぬ（明治二三年生、宮城縣錦戸景訓孫）男震介（同四三年生）男有道（大正元年生）男弘道（同四年生）男從道（同七年生）男孝麿（同九年生）女貞子（同一二年生）女淑子（同一五年生）女和子（昭和二年生）

田中　昌英氏　蒲田區矢口町道塚一八一

チエルベルジス繼續(株)取締役

明治八年五月生、山梨縣

明治二九年横濱高等商業學校卒業

氏は山梨縣中巨摩郡三田村に呱々の聲を揚げ、明治二十九年家督を相續した。夙に實業界に志して横濱高等商業學校に入り、孜々として學業に勵み、優秀の成績を以て同校を卒業するや直ちに三菱合資會社に入社した。同社に在ること五ケ年にして明治三十四年辭し、同三十九年チエルベルジス繼續會社に入社し、以來同社の發展に努力以て今日に及んでゐる資性溫厚篤實にして、社内外に普く信望を博してゐる。

長男英治（明治四一年生、東京帝大法科卒）二男昌夫（大正八年生）三男克彌（同一一年生）長女富美子（同四年生）

田中　文藏氏　澁谷區羽澤町六六　電話青山二八三一

三井物産(株)取締役兼人事課長兼文書課長、日東製粉(株)取締役、中央大學監事

明治七年七月生、東京府

明治二四年東京法學院卒業

氏は東京府田中熊吉氏の長男、同千吉氏の實兄にして、大正十二年家督を相續した。夙に東京法學院に學び、卒業後直ちに同校の編輯員となつたが、後三井物産會社に入り、爾來同社に勤續以て今日に及び、此の間次第に陞進して現時取締役として社内に重きを爲し、傍ら日東製粉會社重役等を兼ねて活躍しつゝある。

母シカ（嘉永五年生、福井縣士族前田久七三女）妻良（明治二二年生、山口縣士族勝津莊太郎二女）男守文（同四四年生、東京帝大在）男武文（大正四年生）女惠美子（同二年生、東京女學館卒）女喜美子（同六年生、同上在學）長女富美子（明治四三年生、同上卒、神奈川縣鈴木松雄妻）妹ふさ（同二四年生、廣島縣小林八十七未亡人）弟金藏（同一〇年生、分家）

高橋　保氏　麻布區笄町一三四　電話青山三六二二

工學士、衆議院議員、昭和肥料、東信電氣各(株)常務取締役、信濃水電(株)專務取締役、犀川電力、東洋水力、諏訪電氣秩父電氣工業、長野電燈、梓川電力各(株)取締役、日本沃度(株)監査役、安曇電氣(株)相談役

明治一五年三月生、長野縣

明治四三年京都帝大工科電氣科卒業

氏は長野縣高橋澄彌氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正十二年家督を嗣いだ。夙に京都帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに電氣事業界に入り、技師として活躍し、後次第に擡頭して斯界に確乎たる地歩を占めるに至つた。現時前記各社の重役たる一方、長野縣第四區選出政友會所屬代議士として政界にも驥足を伸べつゝある。

妻むつ（明治二五年生、長野縣牧茂助四女）女貞子（大正六年生）

竹内悌三郎氏　豐島區駒込一ノ二八　電話小石川二五八一

安田銀行(株)常務取締役、正隆銀行(株)副頭取、日本酸素、淺野セメント各(株)取締役、安田保善社(名)理事

明治八年一〇月生、北海道

氏は北海道深瀬嘉右衛門氏の三男として同地に呱々の聲を揚げ、後竹内幸輔氏の養子となり、明治四十三年その家督を嗣いだ。夙に安田銀行に入り、同行の發展に努力すること多年、現にその常務取締役として金融界に重きをなすと共に、前掲各社の重役を兼ねて業界に活躍しつゝある。才腕兼備、溫厚篤實の人格者として夙に信望を博してゐる。

妻トシ（明治一五年生、秋田縣七条平六二女）男幸策（同三八年生）男悌三（同四一年生）男節郎（同四五年生）男重正（大正一〇年生）女里子（同一二年生）

高山　省吾氏　小石川區高田老松町二八　電話　牛込四一八九

大榮商會(株)取締役兼支配人

明治一七年四月生、群馬縣

明治四〇年明治大學商科卒業

氏は群馬縣人高山繁吉氏の長男として同縣吾妻郡原町に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に志して明治大學商科に學び、大正三年帝國火災保險會社に入社し營業課に勤務した。同七年三共製藥會社經理部に轉じたが、再び保險界に移り、同八年仁壽生命保險會社囑託となり、更に同十年早川商會に入り東京支店長等として敏腕を揮つた。後大榮商會に入り主事となり、同社の發展に貢獻する所尠なからず、昭和八年取締役に選ばれ、且つ支配人を兼ねて今日に及んでゐる。

父繁吉（文久二年生）母かね（元治元年生）妻よう（明治二一年生、中條重平妹）長男三郎（大正四年生、本郷中學卒、國學院大學在）二男正義（大正九年生、本郷中學在）

筒井　潔氏　目黑區下目黑三ノ一九八　電話　高輪三一〇一

法學士、外務書記官、外務省情報部第二課長

明治二九年一一月生、千葉縣

大正九年東京帝大法科卒業

氏は三重縣人醫學博士筒井八百珠氏の二男として千葉縣に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。嚴父は岡山醫學專門學校長等として學界並に教育界に嘖々たる令名を馳せた。氏は東京帝國大學法科に入り獨逸法科を專攻し、優秀の成績を以て同大學を卒業後、直ちに三菱商事株式會社に入社したが、幾何もなく之を辭し、大正十年外務省に奉職した。同十二年白耳義大使館員として彼地に派遣されたが、昭和二年歸朝して本省詰となり累進して現職に就き以て今日に及んでゐる。

妻綾子（明治四〇年生、福田回三郎長女）

津村　重舍氏　目黑區上目黑五丁目　電話　青山一七七

貴族院議員、第一製藥、江東製藥、東亞公司各(株)社長、日本賣藥、八王子瓦斯各(株)取締役、東京府農工銀行、上海油脂工業各(株)監査役、津村順天堂主、東京府多額納稅者

明治四年七月生、奈良縣

氏は奈良縣山田安次郎氏の二男、同安民氏の實弟として同縣下に生れ、後津村磯次郎氏の養子となり、明治二十九年分家した。夙に上京して當家の家傳藥中將湯を發賣し、本舗津村順天堂を創設して刻苦奮勵以て今日の大成をなし、藥業界の覇者たる地歩を占むるに至つた。又此の間東京市會議員、同市參事會員、日本橋區會議員、或は貴族院議員等として活躍し、或は歐米を巡遊後我が業界の發達に資する等、功績頗る顯著にして大正十一年紺綬褒章を下賜された。立志傳中の人として、又業界の師表として仰がれてゐる。

妻ジョウ（明治九年生、養父磯次郎長女）男甚太郎（同四一年生）男幸男（大正五年生）女節子（同二年生）女豐子（同三年生）

四〇年生）女恭（同四二年生）女清（同四四年生）孫俊一（大正一五年生）

中村　鎌雄氏　澁谷區金王町四四　電話青山二一四六

東京貯蓄銀行(株)常務取締役

慶應二年五月生、千葉縣

當家は舊幕時代下總國古河藩に仕へたスエレベーター、東洋バブコック、東洋キアリア工業各(株)取締役會長、三井物產(株)常務取締役、東洋レーヨン(株)取締役、東京計器製作所(株)監査役

明治六年七月生、群馬縣

明治二五年東京高等商業學校卒業

氏は群馬縣士族南條新六郎氏の長男と

ある才腕兼備、温厚篤實の人格者として夙に信望を博してゐる。
妻トシ（明治一五年生、秋田縣七条平六二女）男幸策（同三八年生）男悌三（同四一年生）男節郎（同四五年生）男重正（大正一〇年生）女里子（同一二年生）

高山　省吾氏　小石川區高田老松町二八　電話　牛込四一八九
大榮商會（株）取締役兼支配人
明治一七年四月生、群馬縣
明治四〇年明治大學商科卒業
氏は群馬縣人高山繁吉氏の長男として同縣吾妻郡原町に呱々の聲を揚げた。夙に學究、國學院大學在）二男正義（大正九年生、本郷中學在）

筒井　潔氏　目黒區下目黒三ノ一九八　電話　高輪三一〇一
法學士、外務書記官、外務省情報部第二課長
明治二九年一一月生、千葉縣
大正九年東京帝大法科卒業
氏は三重縣人醫學博士筒井八百珠氏の二男として千葉縣に呱々の聲を揚げ、後分れて一家を創めた。嚴父は岡山醫學專門學校長等として學界並に教育界に嘖々たる令名を馳せた。氏は東京帝國大學法科に入り獨逸法科を專攻し、優秀の成績を以て同大學を卒業後、直ちに三菱商事脂工業各（株）監査役、津村順天堂主、東京府多額納稅者
明治四年七月生、奈良縣
氏は奈良縣山田安次郎氏の二男、同安民氏の實弟として同縣下に生れ、後津村磯次郎氏の養子となり、明治二十九年分家した。夙に上京して當家の家傳藥中將湯を發賣し、本舗津村順天堂を創設して刻苦奮勵以て今日の大成をなし、藥業界の覇者たる地歩を占むるに至つた。又此の間東京市會議員、同市參事會員、日本橋區會議員、或は貴族院議員等として活躍し、或は歐米を巡遊後我が業界の發達に資する等、功績頗る顯著にして大正十一年紺綬褒章を下賜された。立志傳中の人として、又業界の師表として仰がれてゐる。
妻ジョウ（明治九年生、養父磯次郎長女）男甚太郎（同四一年生）男幸男（大正五年生）女節子（同二年生）女豐子（同三年生）

中村房次郎氏　横濱市中區月岡町九　電話　長者町一八八
松尾鑛業（株）社長、スタンダードガソリン商會（株）代表取締役、京濱電氣鐵道、湘南電氣鐵道、横濱火災海上保險、大成各（株）取締役、南成公司（株）監査役、增田屋（資）業務社員
明治三年一〇月生、神奈川縣
氏は神奈川縣增田嘉兵衛氏の二男、同增藏氏の實弟にして、後中村初太郎氏の養子となり、明治十六年その家督を相續した。夙に横濱商業學校に學び、同校卒業後直ちに實業界に入り、明治三十八年歐米を巡遊歸朝後盛んに活躍して横濱財界に確乎たる地歩を占めるに至つた。此の間横濱商工會議所常議員に選ばれて同市商工業界の發達に貢献し、現時前掲の職に在つて益々活躍しつゝある。
妻あい（明治三年生、神奈川縣茂木惣兵衛養叔母）男長太郎（同二六年生）男正雄（同三〇年生）同妻京（同三一年生、東京府安部磯雄二女）女富士（同四〇年生）女恭（同四二年生）女清（同四四年生）孫俊一（大正一五年生）

中村　鎌雄氏　澁谷區金王町四四　電話　青山二一四六
東京貯蓄銀行（株）常務取締役
慶應二年五月生、千葉縣
當家は舊幕時代下總國古河藩に仕へた名門である。氏は先代中村弘人氏の二男、同啓氏の實弟にして、明治三十六年分れて一家を創立した。夙に上京して實業界に投じ、奮鬪努力主義を以て斯界に馳驅すること多年、その敏腕は次第に各方面に認められるに至つた。現時東京貯蓄銀行常務取締役として庶民金融界に貢献し、老練なる手腕と斯界稀れに見る崇高なる人格と相俟つて信望隆々たるものがある。
妻季（慶應三年生、館德三女）長男直男（明治二六年生）同妻操（同三二年生、島根縣勝田松太郎長女）三男榮明（同三六年生）同妻俊（同四〇年生、東京府大野富雄四女）孫房子（大正九年生、長男直男長女）同弘毅（同一二年生、同長男）同速雄（同一五年生、同二男）同富士子（昭和四年生、同二女）

南條　金雄氏　赤坂區新坂町一四　電話　青山四〇〇〇
大正海上火災保險（株）社長、東洋オーチスエレベーター、東洋バブコック、東洋キアリア工業各（株）取締役會長、三井物産（株）常務取締役、東洋レーヨン（株）取締役、東京計器製作所（株）監査役
明治六年七月生、群馬縣
明治二五年東京高等商業學校卒業
氏は群馬縣士族南條新六郎氏の長男として同縣下に生れ、大正九年家督を相續した。夙に東京高等商業學校に學び、卒業後直ちに三井物産會社に入社し、多年本支店に勤務して大阪支店長に進み、更に倫敦支店長を經て本社詰となり、現時常務取締役として同社に重きをなす傍ら各社重役を兼ねてゐる。
妻敬（明治一六年生、高知縣齋藤利西長女）女勝代（同三八年生、東洋英和女學校卒）女道代（同四〇年生、同校卒）妹うめ（同一一年生、石川縣東野十治郎妻）同たけ（同一五年生、岐阜縣武田信一妻）同ちせ（同一七年生、東京府竹村弟二妻）

潮　道佐氏　荏原區中延一一二五　電話　荏原三〇〇二
從六位、法學士、判事、東京地方裁判所司法部長
明治二七年七月生、島根縣
大正九年京都帝國大學法科卒業
氏は島根縣人山根道敎氏の五男として

同縣下に呱々の聲を揚げ、大審院檢事として嘖々たる名聲を馳せたる故潮恒太郎氏の養子となり、後その家督を嗣いだ。夙に京都帝國大學に學び、優秀の成績を以て同大學を卒業後司法省に奉職し、後判事に任ぜられ、各裁判所に歷勤して敏腕を認められた。昭和四年司法書記官となり、同省刑事局に勤務し、爾來累進して現に東京地方裁判所司法部長として活躍しつゝある。

妻靜子（明治三五年生、養父恒太郎長女）男恒郎（大正一四年生）

柳田　直吉氏　小石川區駕籠町一五二　電話　大塚二一三一

臺灣銀行(株)理事

明治二〇年一〇月生、鹿兒島縣

明治四一年神戸高等商業學校卒業

氏は鹿兒島縣柳田直太郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に志し、鄕里の中學校を卒業後神戸高等商業學校に入り、孜々として學業に勵んだ。卒業後直ちに臺灣銀行に入り、本店に勤務して漸次地歩を進め、後香港支店長に拔擢され、更に上海支店長に轉じて同行の海外發展に貢献し、遂に同行理事の榮職に就き以て今日に及んでゐる。

妻歌（明治二八年生、鹿兒島縣山下盛之助二女）長男誠一（大正五年生）二男雄二（同一〇年生）三男三郎（同一一年生）長女可津子（同八年生）二女豐子（同一五年生）

山田　肇氏　淀橋區上落合一ノ四七八　電話　大塚三七四八

磐城セメント(株)支配人

明治二二年七月生、山梨縣

氏は山梨縣山田久兵衞氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正七年分れて一家を創立した。夙に明治四十二年二十歳の時磐城セメント株式會社に入り、爾來只管その職務に精勵し、同社の發展に努力し、以て今日に及んでゐる。その熱誠と才腕は次第に認められて社内に信望を博し、累進して支配人の要職に擧げられ、現時その職に在つて益々同社の爲めに活躍しつゝある。神道を信仰し、趣味は頗る高雅にして文學、短歌等を特に好み、共に造詣が深い。

妻美保子（明治三二年生、東京府吉永武藏長女、神奈川縣立高女卒）男富司（大正一一年生）男裕久（同一五年生）女順子（同一三年生）

前田　利乘氏　四谷區三光町一六　電話　四谷一〇八

帝國出産共濟會常務理事、東北鐵道鑛業(株)常務取締役

明治一三年九月生、東京府

氏は名門前田家の一族にして、子爵前田利定氏の實弟、侯爵前田利爲氏の實兄子爵前田利滿氏の叔父に當り、明治四十年分れて一家を創めた。門閥家に拘らず頗る公共博愛の念に富み、庶民階級に同情と理解を有し、犧牲心强く、夙に各方面に信望を博してゐる。帝國出産共濟會は中産階級以下の姙産婦の便宜を圖ることを目的として設立されたるものにして出産、及び育兒等に一時に巨額の費用支出困難なる者を救濟する機關として、創立以來庶民階級より絶大の歡迎を受け逐年發展しつゝあるが、氏は營利心を離れて其の經營に努力し、傍ら東北鐵道鑛業會社常務取締役として業界にも確乎たる地歩を占めてゐる。

養子武（大正元年生、弟利彭庶子）庶子富美子（同一五年生）

增田　東吉氏　四谷區須賀町二八　電話四谷三〇七六

有馬洋行(株)社員

明治三二年三月生、東京府

氏は先代增田貫一氏の二男、同貫之助氏の實弟として呱々の聲を揚げ、昭和四年貫之助の跡を受けて家督を相續した。夙に有馬洋行に入り、精勵恪勤以て今日に及び次第に社内に信望を博するに至つた。當家は區内屈指の素封家であるが、氏は毫も之を誇らず、況んや之に賴つて業務を怠り遊蕩に耽るが如きことなく身を持すること頗る謹嚴にして而も人に對して寛大、又公共奉仕の念に强く博愛慈善心に富み、稀れに見る人格者として各方面より尊敬されてゐる。

藤野　幹氏　臺灣臺南州曾文郡麻豆街麻豆四二九　電話總爺二

從五位、法學士、明治製糖(株)常務取締役、臺灣倉庫(株)取締役、臺灣總督府評議會員

明治一六年七月生、廣島縣

明治四一年東京帝大法科政治學科卒業

製糖(株)社長、武藏中央電鐵、東京印刷、大日本セルロイド、三亞製紙、帝國劇場、三井信託、安田信託、日本火災保險、日本洗料製造、集成社、東洋製鐵、第三銀行各(株)取締役、東京株式取引所(株)理事、三越、中日實業、共同信託各(株)相談役

臺灣銀行(株)理事
明治二〇年一〇月生、鹿兒島縣
明治四一年神戸高等商業學校卒業
氏は鹿兒島縣柳田直太郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に志し、鄕里の中學校を卒業後神戸高等商業學校に入り、孜々として學業に勵んだ。卒業後直ちに臺灣銀行に入り、本店に勤務して漸次地歩を進め、後香港支店長に拔擢され、更に上海支店長に轉じて同行の海外發展に貢献し、遂に同行理事の榮職に就き以て今日に及んでゐる。
妻歌（明治二八年生、鹿兒島縣山下盛之助二女）長男誠一（大正五年生）二

電話　大塚二一三一

熱誠と才腕は次第に認められて社内に信望を博し、累進して支配人の要職に擧げられ、現時その職に在つて益々同社の爲めに活躍しつゝある。神道を信仰し、趣味は頗る高雅にして文學、短歌等を特に好み、共に造詣が深い。
妻美保子（明治三二年生、東京府吉永武藏長女、神奈川縣立高女卒）男富司（大正一一年生）男裕久（同一五年生）女順子（同一三年生）

前田　利乘氏　四谷區三光町一六　電話　四谷一〇八
帝國出産共濟會常務理事、東北鐵道鑛業(株)常務取締役

た。當家は區内屈指の素封家であるが、氏は毫も之を誇らず、況んや之に賴つて業務を怠り遊蕩に耽るが如きことなく身を持すること頗る謹嚴にして而も人に對して寛大、又公共奉仕の念に强く博愛慈善心に富み、稀れに見る人格者として各方面より尊敬されてゐる。
妻タマ（明治三五年生、神奈川縣小川權太郎六女）女恭子（昭和三年生）

町田　唯介氏　淺草區千束町二ノ一四　電話　淺草三六五六
松竹キネマ、常盤興業各(株)常務取締役
日本運輸倉庫、新潟松竹館各(株)取締役
新興キネマ、松竹興業、札幌松竹座各(株)監査役
明治二〇年二月生、山梨縣
氏は山梨縣人町田佐左衞門氏の六男として同縣下に生れ、大正十年分れて一家を創めた。町田啓作、同儀正兩氏の實弟である。夙に上京して興行界に入り、淺草ルナパーク等を根據として淺草興行界に確乎たる地歩を占め、後松竹キネマに轉じて同社の發展に貢献すること既に多年、現時前掲の要職を兼ねて興行界に重きをなしてゐる。敏腕潤達にして而も稀れに見る高潔なる人格者として夙に各方面に信望を博してゐる。

藤野　幹氏　臺灣臺南州曾文郡麻豆街　麻豆四二九　電話總爺二
從五位、法學士、明治製糖(株)常務取締役、臺灣倉庫(株)取締役、臺灣總督府評議會員
明治一六年七月生、廣島縣
明治四一年東京帝大法科政治學科卒業
氏は廣島縣藤野玖三氏の長男にして大正十一年家督を相續した。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに臺灣總督府に奉職し專賣局書記となり、翌明治四十二年文官高等試驗に合格し、總督府事務官兼專賣局事務官、專賣局腦務課長、殖産局糖務課長、糖業試驗場長、蔗苗養成所長等に歷任し、又此の間歐米に出張し多年の功に依り從五位に叙せられた。大正八年實業界に轉じ、明治製糖會社取締役に選ばれ、爾來同社の發展に努力以て今日に及び、傍ら前掲の任を兼ねて臺灣産業界に活躍しつゝある。
妻銀子（明治二七年生、東京府天野謹爾妹、學習院女學部卒）長男篤（大正一二年生）二女美智子（同七年生）三女則子（同一五年生）

藤山　雷太氏　芝區白金今里町一四　電話　高輪一五四五
從五位、勳三等、貴族院議員、新高製糖千代田信託各(株)取締役會長、大日本製糖(株)社長、武藏中央電鐵、東京印刷大日本セルロイド、三亞製紙、帝國劇場三井信託、安田信託、日本火災保險、日本洗料製造、集成社、東洋製鐵、第三銀行各(株)取締役、東京株式取引所(株)理事、三越、中日實業、共同信託各(株)相談役
文久三年八月生、佐賀縣
氏は佐賀縣士族藤山覺左衞門氏の三男として同縣下に生れ、明治二十四年分家した。夙に同十三年長崎師範學校を卒業後慶應義塾に學び、同校卒業後歸鄕して縣會議員及議長として縣政界に活躍したが、後實業界に轉じ、三井銀行に入社し後芝浦製作所長、王子製紙及東京市街鐵道各專務取締役等に擧げられ、明治四十二年大日本製糖社長となつた。當時同社は亂脈を極めてゐたが、氏は奮鬪努力以て今日の隆盛に導き、此の間各社に關係し、或は東京商業會議所會頭等として活躍し、我が財界の雄として名聲を博し以て今日に及んでゐる。
妻みね（明治九年生、東京府士族江川常之助二女、神戸高女卒）男愛一郎（同三〇年生）男勝彦（同三八年生）男照彦（同四一年生）女櫻子（同四三年生）

増田　東吉氏　四谷區須賀町二八　電話四谷三〇七六
有馬洋行(株)社員
明治三二年三月生、東京府
氏は先代増田貫一氏の二男、同貫之助氏の實弟として呱々の聲を揚げ、昭和四年貫之助の跡を受けて家督を相續した。夙に有馬洋行に入り、精勵恪勤以て今日に及び次第に社内に信望を博するに至つて其の經營に努力し、傍ら東北鐵道鑛業會社常務取締役として業界にも確乎たる地歩を占めてゐる。
養子武（大正元年生、弟利彭庶子）庶子富美子（同一五年生）

古河虎之助氏　牛込區若宮町三〇　電話牛込五六〇三

從四位、勳三等、男爵、古河鑛業(株)取締役會長、古河合名、古河林業部各社長

明治二〇年一月生、東京府

明治四〇年コロンビヤ大學卒業

當家の先々代市兵衛氏は京都府下に生れ、小野組に入り、生糸貿易業に從事したが、後獨立して鑛山業を營み足尾銅山等を經營して巨萬の富を積み、當家の基礎を確立した。先代潤吉氏は伯爵陸奥宗光氏の次弟にして、克く守成の人として活躍した。氏は市兵衛氏の息にして同三十八年家督を相續したが、夙に慶應義塾普通部を卒業後米國コロンビヤ大學に於て採鑛冶金地質及び鑛山行政等を學び、卒業後歐米諸國を巡遊して歸朝し、爾來家業を繼承以て今日に至つた。此の間古河銀行、古河商事、古河合名等を起して家運を隆盛ならしめ、多年我が實業界に盡し國家に貢献せる功勞に依り、明治四十三年勳三等に叙せられ、大正四年男爵に列せられた。現時前揭の職に在つて益々活躍しつゝある。

母せい（文久三年生、東京府長谷川きよ長女）妻不二子（明治二四年生、侯爵西郷從德妹、學習院女學部卒）

小林一三氏　大阪府豐能郡池田町　電話五五

阪神急行電鐵、東京電燈、寶塚劇場各(株)社長、山陽中央水電、目黒蒲田電鐵、東信電氣、東京横濱電鐵、飯山鐵道各(株)取締役、昭和肥料、戸畑製罐各(株)監査役、第一生命保險(互)監査役、阪神國道自動車、東洋製罐各(株)相談役

明治六年一月生、山梨縣

明治二五年慶應義塾大學卒業

氏は山梨縣小林甚八氏の長男として同縣下に生れ、明治八年家督を嗣いだ。夙に慶應義塾に學び、卒業後三井銀行に入社して敏腕を揮ひ、同四十年阪神急行電鐵株式會社を設立し其の專務取締役に就任、以來同社を根據として各方面に驥足を伸べ、遂に我が財界の重鎭として名聲を博するに至つた。趣味頗る廣く就中書畫骨董、茶事等を嗜み急山人の雅號を以て同好者間に知られてゐる。

妻コウ（明治一五年生、大阪府丹羽市藏養子）長男富佐雄（同三四年生）同妻富士子（同三七年生、東京府平賀敏長女）二男米三（同四二年生）二女春子（同四四年生）長女とめ（同三六年生、梅花高女卒、佐賀縣吉原政智妻）二男辰雄（同三七年生、兵庫縣松岡潤吉養子）

五島喜久郎氏　葛飾區金町三ノ一八九〇　電話新宿九〇

江戸川工業所(資)業務執行社員、燃料協會、電氣化學協會各會員

明治一八年八月生、東京府

明治三八年東京高工電氣化學科卒業

氏は東京府五島德三郎氏の長男として呱々の聲を揚げた。夙に東京高等工業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに三菱製紙株式會社に入社し、技師として活躍すること十餘年に及んだが大正七年同社を辭して江戸川工業所を設立し、その業務執行社員となつた。爾來多年の經驗を基礎とし、氏一流の敏腕を揮つて同社の發展に努力したる効果空しからず、社礎次第に鞏固を加へ、遂に今日の隆況を呈するに至つた。現時その任に在る傍ら燃料協會、電氣化學協會等の會員として都下工業界に名聲嘖々たるものがある。宗旨は眞宗、趣味は旅行等。

越田佐一郎氏　ジヤバ、バタヴイア領事館内

從五位、勳四等、バタヴイア總領事

明治一六年二月生

明治三五年東京郵便電信學校行政科卒業

氏は東京郵便電信學校を卒業後直ちに通信書記に任ぜられ、翌三十六年遞信屬となつたが、勤務の餘暇を利して益々研學し、同四十年外務書記生試驗に合格し天津に派遣された。その後孟買、伊太利等に轉勤して大正三年外務屬となり、外務省通商局第二課に勤務し、同四年外交官及領事官試驗に合格し、同年十一月外交官補として支那在勤を命ぜられた。同代理となつた。その後横濱出張所支配人に轉じ、更に東京支店支配人に拔擢され後ニューヨーク出張所長を經て再び本店詰となり、理事に擧げられた。入行以來二十數年專ら同行の爲めに活躍以て今日に至り、同行の功勞者として信望を博し

妻ムメ（明治一四年生、福島縣士族金田貞幹長女）

水澤保吉氏　埼玉縣鴻巣町二八二六　東京市外吉祥寺一八八一

正七位、勳六等、東京市立深川工業學校々長、同第二實業學校々長

十八年家督を相續したが、夙に慶應義塾普通部を卒業後米國コロンビヤ大學に於て採鑛冶金地質及び鑛山行政等を學び、卒業後歐米諸國を巡遊して歸朝し、爾來家業を繼承以て今日に至つた。此の間古河銀行、古河商事、古河合名等を起して家運を隆盛ならしめ、多年我が實業界に盡し國家に貢献せる功勞に依り、明治四十三年勳三等に叙せられ、大正四年男爵に列せられた。現時前掲の職に在つて益々活躍しつゝある。

母せい（文久三年生、東京府長谷川きよ長女）妻不二子（明治二四年生、侯爵西郷從德妹、學習院女學部卒）

社して敏腕を揮ひ、同四十年阪神急行電鐵株式會社を設立し其の專務取締役に就任、以來同社を根據として各方面に驥足を伸べ、遂に我が財界の重鎭として名聲を博するに至つた。趣味頗る廣く就中書畫骨董、茶事等を嗜み急山人の雅號を以て同好者間に知られてゐる。

妻コウ（明治一五年生、大阪府丹羽市藏養子）長男富佐雄（同三四年生）同妻富士子（同三七年生、東京府平賀敏長女）二男米三（同四二年生）二女春子（同四四年生）長女とめ（同三六年生、梅花高女卒、佐賀縣吉原政智妻）二男辰雄（同三七年生、兵庫縣松岡潤吉養子）

多年の經驗を基礎とし　氏一流の敏腕を揮つて同社の發展に努力したる効果空しからず、社礎次第に鞏固を加へ、遂に今日の隆況を呈するに至つた。現時その任に在る傍ら燃料協會、電氣化學協會等の會員として都下工業界に名聲嘖々たるものがある。宗旨は眞宗、趣味は旅行等。

越田佐一郎氏　ジヤバ、バタヴイア領事館内
從五位、勳四等、バタヴイア總領事
明治一六年二月生
明治三五年東京郵便電信學校行政科卒業
氏は東京郵便電信學校を卒業後直ちに通信書記に任ぜられ、翌三十六年遞信屬となつたが、勤務の餘暇を利して益々研學し、同四十年外務書記生試驗に合格し天津に派遣された。その後孟買、伊太利等に轉勤して大正三年外務屬となり、外務省通商局第二課に勤務し、同四年外交官及領事官試驗に合格し、同年十一月外交官補として支那在勤を命ぜられた。同八年講和全權委員隨員として巴里に出張し、同年六月大使官二等書記官に進み、同十年九月領事に任ぜられ、同十二年七月外務事務官となり爾來通商局移民課に勤務し、昭和二年二月多年の功績に依り從五位、勳四等に陞叙された。その後アルゼンチン、ヴエノスアイレス、モンデヴイデオ、パラグアイ、ウルグアイ等に領事として出張し、同三年總領事に任ぜられマニラ在勤を命ぜられ、更に昭和八年バタヴイア總領事として赴任し、現にその任に在つて活躍しつゝある。

荒木正次郎氏　臺北市南門町二ノ一五
法學士、臺灣銀行(株)理事
明治一四年五月生、熊本縣
明治四〇年東京帝大法科獨法科卒業
氏は熊本縣士族荒木正夫氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正三年その家督を相續した。夙に東京帝國大學に學び、卒業後直ちに臺灣銀行に入社し、精勵恪勤次第に陞進して神戸支店支配人代理となつた。その後横濱出張所支配人に轉じ、更に東京支店支配人に拔擢され後ニューヨーク出張所長を經て再び本店詰となり、理事に擧げられた。入行以來二十數年專ら同行の爲めに活躍以て今日に至り、同行の功勞者として信望を博してゐる。

妻ヒサ（明治一九年生、東京府士族高道竹雄長女）男浩（大正元年生）男正久（同五年生）女蔦子（明治四三年生）

佐々木秀司氏　麻布區森元町一ノ二七
電話　赤坂一〇八〇
從四位、勳四等、法學士、安田生命保險(株)常務取締役、安田保善社(名)參事、太平火災海上保險(株)取締役
明治一三年一一月生、福島縣
明治四〇年東京帝大法科獨法科卒業
氏は福島縣人故佐々木一二氏の二男、同鐵太郎氏の實弟にして、同縣下に生れ大正十三年分家した。明治四十年大學卒業の年文官高等試驗に合格して直ちに警視廳に奉職し、爾來四谷警察署長、栃木縣事務官、石川、群馬、新潟各縣警察部長、山形、神奈川兩縣内務部長、香川縣知事等に歷任し、その功績に依り從四位勳四等に陞叙された。大正十二年野に下つて實業界に入り、現時前掲の職に在つて活躍しつゝある。

妻ムメ（明治一四年生、福島縣士族金田貞幹長女）

水澤保吉氏　埼玉縣鴻巣町二八二六
東京市外吉祥寺一八八
正七位、勳六等、東京市立深川工業學校々長、同第二實業學校々長
明治二三年三月生、埼玉縣
大正九年東京高等工業學校卒業
氏は埼玉縣水澤亨雄氏の長男として同縣比企郡玉川村に呱々の聲を揚げ、明治二十四年家督を相續した。夙に上京して東京高等工業學校に學び、同校卒業後岩手縣立工業學校教諭となり、後東京市立第一實業學校に轉じ、昭和五年同市立深川工業學校長に榮轉した。現時其の任に在る傍ら市立第二實業學校長をも兼ねて後進の指導に努力しつゝある。資性溫厚にして生徒より慈父の如く仰がれ、又校内外に信望を博してゐる。

妻とら子（明治二七年生、埼玉縣彦久保廣吉二女、埼玉女子師範卒）長男健二（大正一二年生）二男昭三（昭和三年生）長女清江（同八年生）二女靜江（同一五年生）

三井守之助氏　麻布區永坂町一
電話赤坂八〇二
三井(名)監査役
明治八年一月生、京都府

三井家の長老たる氏は、三井高生氏の三男として京都に生れ、後先代三井篤太郎氏の養子となり、大正十四年その家督を嗣いだ。三井元之助氏の實弟、三井高光氏の叔父である、夙に三井系の諸事業に關係し、三井銀行取締役、横濱正金銀行取締役、芝浦製作所社長、三井物産社長等として敏腕を揮ひ、現時三井財閥の統轄機關たる三井合名に在つて、三井系の發展に貢献しつゝある。

妻栖光（明治一三年生、男爵住友吉左衛門叔母）長男高篤（同三三年生、經濟學士）同妻禮子（同三八年生、三井八郎右衛門四女）女倭子（同四一年生聖心女子學院卒）孫幸子（大正一五年生、高篤長女）二男生雄（明治三六年生、經濟學士、分家）同妻文（同三六年生、伯爵小村鐵太郎三女）長女英子（同三七年生、東京府人經濟學士三井高經妻）

下坂藤太郎氏　神奈川縣鎌倉町長谷一八二　電話鎌倉三六〇

法學士、東洋海上火災保險、日商各(株)社長

明治元年一〇月生、福島縣

明治二七年東京帝大法科政治科卒業

氏は福島縣士族下坂藤次郎氏の長男として同縣下に生れ、明治三十一年家督を相續した。大學卒業後直ちに官界に入り秋田縣收稅長、大藏省參事官、同書記官等に歷任した。同三十二年官を辭して臺灣銀行に移り、理事を經て副頭取兼總務部長となつたが、後實業界に轉じ、東洋製糖株式會社々長となり、爾來漸次實業界に地歩を占め、今日に至つた。

母ヨシ（嘉永三年生、福島縣下坂源内長女）長男源太郎（明治三七年生、立教大學卒）同妻藤枝（同四一年生、東京女子大卒）二男誠次郎（同四一年生）東京帝大卒）三男正藏（大正四年生）女芳枝（明治三四年生、日本女子大附屬高女卒）女英（同四四年生、日本女子大卒）女花枝（大正二年生、同上在學）長女美知子（明治三一年生、日本女子大附屬高女卒、三重縣法學博士神川彦松妻）三女久江（同三五年生、同上卒、福岡縣高瀨莊太郎妻）

白石　恒二氏　群馬縣北甘樂郡青倉村　電話　下仁田二三

白石工業(株)常務取締役兼技師長

明治一九年三月生、廣島縣

明治四三年工學院卒業

氏は廣島縣白石喜平氏の長男として同縣下に生れ、後その家督を嗣ぐと同時に前名恒三を改名した。夙に工學院に學び卒業後工業界に投じて技術を研磨したる後大正八年白石工業株式會社を設立した。爾來その常務取締役として經營の衝に當ると共に、技師長として敏腕を揮ひ以て今日に及んでゐる。傍ら同業組合理事、化學工業協會及護謨協會議員等として斯業界の發達向上に貢献し或は村會議員として自治に盡瘁し、各方面に信望がある。

妻アサヨ（明治二六年生、廣島縣士族竹内勝太郎三女）長男恒正（大正九年生）二男恒悳（昭和二年生）長女淑美（大正三年生、分家）三女德衛（同六年生）四女彌衛（同一三年生）六女一衛（昭和五年生）

清水　釘吉氏　神田區駿河臺三ノ一一　電話　神田二一

正七位、勳五等、工學士、陸軍歩兵大尉

清水組(資)社長、　東京鐵骨橋梁製作所(資)社員、沖電氣(株)取締役

慶應三年一一月生、東京府

明治二四年東京帝大工科建築科卒業

氏は東京府士族小野高永氏の二男に生れ、後清水家の養子となり、分家した。清水滿之助、同一雄、同揚之助三氏の養兄である。學業を卒へるや直ちに清水組に入り、爾來その發展に努力以て今日に及んでゐる。此の間日清、日露の兩役に出征して偉功を樹て、正七位、勳五等に叙せられた。土木建築に關する敏腕は夙に學生時代より其の鋒鋩を現はし、明治三十四年歐米を視察研究後益々異彩を放ち、斯界の權威として、又清水組の柱石として名聲を博するに至つた。

妻たけ（明治八年生、清水滿之助姉之介長女）女松子（昭和二年生）女淑子（同三年生）

島田　茂氏　品川區上大崎長者丸二七五　電話高輪一六七五

從四位、勳六等、法學士、陸軍二等主計

臺灣銀行(株)頭取、中華運業銀行理事

勤めたる名門である。氏は同藩士西村茂兵衛氏の弟として前橋市に生れ、後先代政彬氏の養子となり、明治三十九年此の名門を繼いだ。夙に軍界に入り明治三十三年工兵少尉に任ぜられ、爾來屢々武功を樹て累進して昭和四年陸軍中將に進

聖心女子學院卒）孫寺子（大正一五年生、高篤長女）二男生雄（明治三六年生、經濟學士、分家）同妻文（同三六年生、伯爵小村鐵太郎三女）長女英子（同三七年生、東京府人經濟學士三井高經妻）

下坂藤太郎氏　神奈川縣鎌倉町長谷一八二　電話鎌倉三六〇

法學士、東洋海上火災保險、日商各（株）社長

明治元年一〇月生、福島縣

明治二七年東京帝大法科政治科卒業

氏は福島縣士族下坂藤次郎氏の長男として同縣下に生れ、明治三十一年家督を叙せられた。土木建築に關する敏腕は夙に學生時代より其の鋒鋩を現はし、明治三十四年歐米を視察研究後益々異彩を放ち、斯界の權威として、又清水組の柱石として名聲を博するに至つた。

妻たけ（明治八年生、清水滿之助姉）

嗣子俊雄（同二七年生）同妻イクヨ（同三二年生、東京府尺秀三郎長女）男壽雄（同四二年生）女總（同四四年生）孫惠美子（大正一二年生、長男俊雄長女）孫夏雄（同一五年生、同長男）孫達雄（昭和三年生、同二男）

清水　康雄氏　下谷區中根岸四一　電話下谷三一

清水組（資）有限社員、東京鐵骨橋梁製作所（資）出資社員

明治三四年生、東京府

氏は清水組社長清水釘吉氏の三男として呱々の聲を揚げ、釘吉氏の養弟清水滿之助氏の養子となり、昭和四年その家督を相續した。夙に早稻田大學に學び、卒業後清水組に入り、我が土木建築界の王座を占むる同社の發展に努力し、現在清水組社員たる傍ら東京鐵骨橋梁製作所社員をも兼ねて活躍しつゝある。資性溫厚にして才腕亦凡ならず、前途春秋に富み將來の飛躍を囑望されてゐる。

妻貞子（明治三九年生、東京府川崎友子大卒）女花枝（大正二年生、同上在學）長女美知子（明治三一年生、日本女子大附屬高女卒、三重縣法學博士神川彥松妻）三女久江（同三五年生、同上卒、福岡縣高瀨莊太郎妻）

白石　恒二氏　群馬縣北甘樂郡青倉村　電話下仁田二三

白石工業（株）常務取締役兼技師長

明治一九年三月生、廣島縣

明治四三年工學院卒業

氏は廣島縣白石喜平氏の長男として同縣下に生れ、後その家督を嗣ぐと同時に前名恒三を改名した。夙に工學院に學び卒業後工業界に投じて技術を研磨したる之介長女）女松子（昭和二年生）女淑子（同三年生）

島田　茂氏　品川區上大崎長者丸二七五　電話高輪一六七五

從四位、勳六等、法學士、陸軍二等主計

臺灣銀行（株）頭取、中華滙業銀行理事

明治一八年九月生、岡山縣

明治四五年東京帝大法科經濟科卒業

氏は岡山縣島田秀和氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に上京して東京帝國大學に學び、卒業の年文官高等試驗に合格し、直ちに大藏省に入つた。爾來累進して鳥取稅務署長となり、更に永代橋稅務署長、名古屋及東京稅務監督局關稅部長、大藏書記官特別銀行課長等を經て昭和二年臺灣銀行頭取となり、克く難關に處して名聲を博し、現にその任に在つて活躍しつゝある。

妻綠（明治三一年生、大分縣山下松三二女）男秀夫（大正四年生）男哲夫（同六年生）男弘夫（同一二年生）女和子（同一三年生）男恒夫（同一五年生）

四王天延孝氏　世田谷區世田谷三ノ一四三　電話世田谷三三六七

從四位、勳二等、功五級、在鄉陸軍中將

帝國飛行協會總務理事

明治一二年九月生、群馬縣

當家は代々上州前橋藩に仕へ家老職を勤めたる名門である。氏は同藩士西村茂兵衞氏の弟として前橋市に生れ、後先代政彬氏の養子となり、明治三十九年此の名門を繼いだ。夙に軍界に入り明治三十三年工兵少尉に任ぜられ、爾來屢々武功を樹て累進して昭和四年陸軍中將に陞進し、同年豫備役に編入された。至誠奉公の念燃ゆるが如く、現役を退いて後も常に國家的事業に關係して貢献尠なからず現に帝國飛行協會總務理事として航空界の發達に盡瘁しつゝある。

妻美壽（明治一七年生、茨城縣江戸守三郎三女）男政信（大正三年生）女義子（明治四三年生）男長政（大正一三年生）

清水　釘吉氏　神田區駿河臺三ノ一一　電話神田二一

正七位、勳五等、工學士、陸軍步兵大尉

清水組（資）社長、東京鐵骨橋梁製作所（資）社員、沖電氣（株）取締役

慶應三年一一月生、東京府

明治二四年東京帝大工科建築科卒業

氏は東京府士族小野高永氏の二男に生れ、後清水家の養子となり、分家した。清水滿之助、同一雄、同揚之助三氏の養兄である。學業を卒へるや直ちに清水組に入り、爾來その發展に努力以て今日に及んでゐる。此の間日清、日露の兩役に出征して偉功を樹て、正七位、勳五等に

斯波孝四郎氏　牛込區納戸町二六　電話牛込五三五六

工學士、日本光學工業、三菱航空機各（株）取締役會長、三菱造船（株）會長、三菱電機（株）取締役

明治八年一月生、東京府

明治三二年東京帝大工科造船科卒業

氏は工學博士男爵斯波忠三郎氏の實弟にして、大正十一年分れて一家を創立した。實兄と共に幼時より秀才の譽れを博し、東京帝國大學を優秀の成績を以て卒業後直ちに三菱造船に入社し、その博識と練達の技術を以て同社の發展に貢献し

漸次社內に重きを爲すに至つた。現時同社會長たる外前揭各社の重役を兼ねて益々業界に活躍しつゝある。

妻アイ子（明治一八年生、男爵白根松介姉）長男悌一郎（同四二年生）二男信二郎（大正三年生）女登世子（明治四四年生）

日向利兵衞氏　麻布區本村町一四二　電話　高輪五四八五

東洋海上火災保險(株)常務取締役、交詢社常議員

明治七年一月生、東京府

明治二八年東京高等商業學校卒業

氏は東京府人先代利兵衞氏の長男にして、前名を利三郎と呼び、明治二十八年家督相續と同時に利兵衞を襲名した。夙に實業界に志し東京高等商業學校に入り孜々として學業を修め、卒業後直ちに實業界に投じ努力健闘以て着々その地歩を進め、漸次その敏腕を認められるに至つた。現時東洋海上火災保險會社の常務取締役として益々活躍しつゝある。

妻正代（明治一五年生、東京府三宅榮壽養母）男紀三（同四一年生）男正三（大正三年生）　長女千代（明治三三年生岡山縣田村喜作養子剛に嫁す）

樋口　春吉氏　日本橋區田所町九　電話　浪花四三五

樋口商店(株)代表取締役、助六裏地製造元、織物問屋

明治一四年一月生、東京市

當家は先代春吉氏が木綿商を創めて以來逐年發展し、都下織物業界に名聲を博するに至つた。氏は先代の長男にして前名を辛之助と呼び、大正十五年家督相續と同時に春吉を襲名した。夙に家業に携はり先代を翼けて同店の發展に努力すること多年に及び、先代の歿後は自ら經營の衝に當り、先代以來の信用と良品廉賣主義に依つて益々名聲を博し、以て今日に及んでゐる。資性溫厚、稀れに見る人格者として同業界に信望がある。

妻タマ（明治二一年生、東京府野本茂兵衞姉）男勝（明治四〇年生）女芳子（同四二年生）

平沼　亮三氏　横濱市神奈川區青木町　澤渡谷一六六三　電話　本局三八四二

勳四等、貴族院議員、横濱市會議長、神奈川縣多額納稅者、玉川電氣鐵道、南進公司、青島製粉、目黑玉川電氣鐵道各(株)社長、南和公司、麒麟麥酒各(株)取締役、古河電氣工業、帝國劇場、スタンダードガソリン商會、ホテルニューグランド各(株)監査役、日本タイプライター(株)相談役

明治一二年二月生、横濱市

明治三一年慶應義塾大學卒業

氏は先代平沼九兵衞氏の長男として横濱に生れ、明治四十三年家督を相續した夙に慶應義塾に學び、卒業後直ちに實業界に投じ、着々その地歩を進め今や前記各社の重役を兼ねて信望を博してゐる。一方政界にも驥足を伸べ、衆議院議員として出馬すること二期に及び、又現に横濱市會議長として、或は貴族院議員として活躍しつゝある。趣味としてスポーツを好み、多年運動競技界の發達に貢献し現に日本陸上競技聯盟會長、東京野球聯盟會長等として斯界に盡瘁しつゝある。

妻婦美（明治二一年生、東京府高木健養女）男九郎（同四〇年生）男七郎（同四三年生）男五郎（大正四年生）女千鶴（同四一年生）女苫舍（大正二年生）

望月龍太郎氏　淀橋區柏木三ノ三五三　電話　四谷一七七

生氣嶺粘土石炭(株)專務取締役、東興實業(株)監査役

元治元年一二月生、東京府

氏は東京府士族望月新兵衞氏の長男として呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に投じ、奮闘努力主義を以て着々斯界に擡頭し、各方面に信望を博するに至つた。その後生氣嶺粘土石炭株式會社を起し、其の專務取締役に就任するや、堅實主義を以て徐々に同社の發展を圖りたる効果空しからず、社運日

社の重役を兼ね、財界の重鎭として信望を博してゐる。

妻みつ（明治一七年生、鳥取縣士族奥田操從妹）男幸雄（同四四年生）女節子（同四二年生）女久子（大正四年生）

守屋　長藏氏　大森區谷島九七二

天理教麴町教會大森分教會々長代理、麴町中教會理事兼會計、東京大森蒲田支會長、大講義

家督相續と同時に利兵衛を襲名した。夙に實業界に志し東京高等商業學校に入り孜々として學業を修め、卒業後直ちに實業界に投じ努力健闘以て着々その地歩を進め、漸次その敏腕を認められるに至つた。現時東洋海上火災保險會社の常務取締役として益々活躍しつゝある。

妻正代（明治一五年生、東京府三宅榮壽養母）男紀三（同四一年生）男正三（大正三年生）長女千代（明治三三年生岡山縣田村喜作養子剛に嫁す）

格者として同業界に信望がある。

妻タマ（明治二一年生、東京府野本茂兵衛姉）男勝（明治四〇年生）女芳子（同四二年生）

平沼　亮三氏

横濱市神奈川區青木町
澤渡谷一六六三
電話　本局三八四二

勳四等、貴族院議員、横濱市會議長、神奈川縣多額納税者、玉川電氣鐵道、南進公司、青島製粉、目黒玉川電氣鐵道各(株)取締役、古河電氣工業、帝國劇場、スタンダードガソリン商會、ホテルニューグラ

を以て著々斯界に擡頭し、各方面に信望を博するに至つた。その後生氣嶺粘土石炭株式會社を起し、其の專務取締役に就任するや、堅實主義を以て徐々に同社の發展を圖りたる効果空しからず、社運日に隆盛となり以て今日に及んでゐる。現在依然同社經營の衝に當ると共に、東興實業株式會社の重役を兼ねて帝都業界に活躍しつゝある。

妻タヅ（明治一一年生、東京府牧山震太郎長女）

森　廣藏氏

芝區高輪南町四七
電話　高輪一〇三

安田銀行(株)副頭取、安田保善社(名)理事、三井信託、安田ビルヂング、安田信託各(株)取締役、日本無線電信、東京興信所各(株)監査役

明治六年二月生、鳥取縣

明治三〇年東京高等商業學校卒業

氏は鳥取縣森甚十郎の四男、同勝藏の弟として同縣下に生れ、明治三十七年分れて一家を創めた。夙に東京高商に學び卒業後直ちに横濱正金銀行に入社し、累進して神戸支店支配人となり、更に本店支配人に榮轉し、後取締役に擧げられた大正十二年臺灣銀行に轉じ副頭取を經て頭取となつたが、昭和二年辭して安田銀行に入り、同行の發展に努力する傍ら各社の重役を兼ね、財界の重鎭として信望を博してゐる。

妻みつ（明治一七年生、鳥取縣士族奥田操從妹）男幸雄（同四四年生）女節子（同四二年生）女久子（大正四年生）女泰子（同七年生）

森　矗昶氏

豐島區駒込一ノ一二
電話小石川四一〇六

日本沃度、森興業各(株)社長、昭和肥料東信電氣各(株)專務取締役、犀川電力、秩父電氣工業各(株)取締役

明治一七年一〇月生、千葉縣

氏は千葉縣森爲吉氏の長男、岩瀨亮氏の實兄にして、同縣夷隅郡興津町に呱々の聲を揚げ、大正十二年家督を嗣いだ。資性豪放濶達にして覇氣に富み、夙に實業界に投じて着々その驥足を伸べると共に、大正十三年以來千葉縣第三區より出馬して衆議院議員に當選すること四期に及び、政界に於ても亦嘖々たる名聲を馳せた。現時前掲各社の重役を兼ねて益々活躍しつゝある。

妻いね（明治一九年生、千葉縣山口清治長女）男曉（同四〇年生）男茂（大正三年生）男清（同四年生）男美秀（同八年生）男祿郎（同一一年生）女滿江（明治四二年生）女八重子（同一四年生）

守屋　長藏氏

大森區谷島九七二

天理教麹町教會大森分教會々長代理、麹町中教會理事兼會計、東京大森蒲田支會長、大講義

明治二四年一二月生

當家は祖母の時代より熱心なる天理教信者にして、祖母寸々は大講義、母よし子は少講義に任ぜられ、共に天理教の布教に從事すること多年に及び、功勞者として知られてゐる。氏も亦幼時より天理教を信仰すること篤く、明治四十二年以來布教師として同教の勢力扶植に活躍して今日に及んでゐる。大森分教會は明治四十一年祖母の創始に係り、爾來熱心なる布教に依つて信者逐年增加し、昭和六年十二月分教會として本部より許可された。氏は母よし子（會長、少講義）を翼け、臼田、松井、內藤、茨田、田中、稻葉、和泉諸氏の理事と共に同分教會の發展に努力すると共に、前掲の任を兼ねて都下に於ける天理教の普及に貢献し、同教界に名聲を博し信徒間に頗る信望がある。

末次　保氏

世田谷區北澤三ノ九二四
（勤務先）神田區表神保町
電話　神田一一二六

法學士、三省堂(株)取締役兼營業部長

盟會長等として斯界に盡瘁しつゝある。

妻婦美（明治二一年生、東京府高木健養女）男九郎（同四〇年生）男七郎（同四三年生）男五郎（大正四年生）女千鶴（同四一年生）女苦舍（大正二年生）

望月龍太郎氏

淀橋區柏木三ノ三五三
電話　四谷一七七

生氣嶺粘土石炭(株)專務取締役、東興實業(株)監査役

元治元年一二月生、東京府

氏は東京府士族望月新兵衛氏の長男として呱々の聲を揚げ、後その家督を相續した。夙に實業界に投じ、奮闘努力主義

明治二五年二月生、島根縣
大正五年東京帝大法科獨法科卒業
氏は佐賀縣人末次勝輔氏の長男として島根縣下に呱々の聲を揚げ、大正十四年その家督を嗣いだ。大學卒業後直ちに三菱商事會社に入社し、大正八年米國に出張し同十二年歸朝後神戸支店に勤務し同十四年本店總務部に轉じた。同十五年五月之を辭して三省堂に移り、後吉見書店東都書籍、盛文堂の各株式會社の重役を兼ねて敏腕を揮つたが、現時三省堂取締役に擧げられ、且つ營業部長の要職に在りて專ら同社の發展に努力しつゝある。宗旨は眞宗、趣味としてスポーツ、旅行等を好む。
妻知可（明治三四年生、東京府士族福岡清一郎長女、學習院女學部卒）二男雄輔（昭和二年生）長女佐和（大正一五年生）

石渡　吉治氏　小石川區大塚町三三　電話　小石川二六〇
法學士、東信電氣、信濃水電、日本沃度犀川電力、國際製藥各(株)取締役、諏訪電氣(株)監査役
明治二二年八月生、神奈川縣
大正三年京都帝大法科卒業
氏は神奈川縣石垣坦豐氏の二男として同縣横須賀市に呱々の聲を揚げた。嚴父は横須賀市長等として名聲を馳せたが、氏は實業界に志し、大學卒業後直ちに斯界に投じ、奮闘努力以て電氣事業界に確乎たる地歩を占め、更に各方面に驥足を伸べ、今や前掲各社重役を兼ねて益々業界に進出しつゝある。
父坦豐（慶應元年生、現戸主）母タマエ（明治二年生）妻千瀨（同三二年生三重縣士族綾野大助女）長女佳子（大正一〇年生）二女和子（同一一年生）三女宏子（昭和四年生）

飯森　梅男氏　淀橋區下落合二ノ六三五　電話　大塚三八六七
火藥工業、日本導火線、中外投資、日本雷管製造各(株)取締役、朝日レザー、帝國染料製造、日本針布各(株)監査役、日本火藥製造(株)支配人
明治一六年二月生、石川縣
氏は石川縣士族飯森則正氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十一年その家督を嗣いだ。當家は代々前田藩に仕へたる名門である。夙に日本火藥製造會社に入り、漸次その才腕を認められて支配人に擧げられ、現時その職に在ると共に前掲各社の重役を兼ね、火藥工業其他各種工業界に敏腕を揮ひ、各方面に嘖々たる名聲を馳せてゐる。
妻道子（明治二七年生、東京府坪野平太郎長女）長男正康（大正九年生）二男義康（同一二年生）三男忠康（同一五年生）長女正子（同四年生）二女義子（同五年生）三女則子（昭和四年生）

板倉喜三馬氏　日本橋區北新堀町二〇　電話　茅場町一八二六
東京精糖、中野商店各(株)代表取締役、東京砂糖(資)代表社員
明治二七年七月生、愛知縣
氏は愛知縣板倉藤助氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に志し太田平右衛門商店に入り、孜々として業務に勵み店主の信任を得たが、大正三年大阪の中野常次郎商店に轉じた。爾來專ら同店の發展に努力し、同八年以來同商店の支店詰めとして活躍し、昭和三年二月同店が從來の組織を改め株式會社となし躍進を圖るに當つて、氏は其の代表取締役に選ばれた。爾來同店經營の衝に當つて敏腕至らざるなく、今日の隆盛に導きたるのみならず、糖業界に確乎たる地歩を占め、現時前掲の要職を兼ねて益々斯界に躍進を續けてゐる。
妻里（明治三三年生、愛知縣杉浦與四郎長女）長男太喜郎（大正一三年生）長女登志子（同九年生）二女登喜子（同一五年生）

石田信之助氏　埼玉縣北足立郡鳩ヶ谷町
東京株式取引所取引員、埼玉縣多額納稅者
明治二〇年生、埼玉縣
當家は埼玉縣下屈指の豪家にして、氏同縣下に呱々の聲を揚げ、後先代井上藤兵衛氏の養子となり、大正十四年家督を嗣いだ。夙に攻玉社、海軍兵學校、早稻田大學等に學び、更に渡歐して維納大學及び伯林大學に入り殖民及び經濟等を研究した。歸朝後遞信省囑託として聘せら

氏は栃木縣先代清七氏の長男にして前名を清吉と稱し、明治十六年家督相續と同時に清七を襲名した。夙に實業界に投じ、米穀、肥料及び醬油釀造業を基礎として各方面に驥足を伸べ、特に東京瓦斯株式會社々長として敏腕を揮ふこと多年

岡清一郎長女、學習院女學部卒）二男雄輔（昭和二年生）長女佐和（大正一五年生）

石渡　吉治氏　小石川區大塚町三三　電話　小石川二六〇

法學士、東信電氣、信濃水電、日本沃度犀川電力、國際製藥各（株）取締役、諏訪電氣（株）監査役

明治二二年八月生、神奈川縣

大正三年京都帝大法科卒業

氏は神奈川縣石垣坦豐氏の二男として同縣横須賀市に呱々の聲を揚げた。嚴父本火藥製造（株）支配人

明治一六年二月生、石川縣

氏は石川縣士族飯森則正氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十一年その家督を嗣いだ。當家は代々前田藩に仕へたる名門である。夙に日本火藥製造會社に入り、漸次その才腕を認められて支配人に擧げられ、現時その職に在ると共に前掲各社の重役を兼ね、火藥工業其他各種工業界に敏腕を揮ひ、各方面に嘖々たる名聲を馳せてゐる。

妻道子（明治二七年生、東京府坪野平同商店の支店詰めとして活躍し、昭和三年二月同店が從來の組織を改め株式會社となし躍進を圖るに當つて、氏は其の代表取締役に選ばれた。爾來同店經營の衝に當つて敏腕至らざるなく、今日の隆盛に導きたるのみならず、糖業界に確乎たる地歩を占め、現時前掲の要職を兼ねて益々斯界に躍進を續けてゐる。

妻里（明治三三年生、愛知縣杉浦與四郎長女）長男太喜郎（大正一三年生）長女登志子（同九年生）二女登喜子（同一五年生）

石田信之助氏　埼玉縣北足立郡鳩ヶ谷町

東京株式取引所取引員、埼玉縣多額納稅者

明治二〇年生、埼玉縣

當家は埼玉縣下屈指の豪家にして、氏は先代石田彦一郎氏の二男に生れ、大正十二年その家督を相續した。夙に實業界に投じ、煙草元賣捌業を營み大いに產を興したが、後證券市場に轉じ、現時東京株式取引所取引員として活躍しつゝある、資性溫厚篤實にして而も才腕兼備し、商機を見るに敏にして、盛衰常なき斯界に於て克く確乎たる地位を保持し、夙に同業者間に信望を博してゐる。

妻愛子（明治二六年生、埼玉縣船津熊次郎三女）長男一郎（大正一〇年生）女美智子（同五年生）女敏子（同一二年生）女照代（同一五年生）妹きみ子（同九年生）

井上　雅二氏　豐島區目白三ノ三五三　電話　大塚三六一七

墨西哥產業、秘露棉花、海外興業各（株）社長、南亞公司（株）取締役、海南產業、スマトラ興業各（株）監査役、東洋拓殖（株）常務顧問

明治九年六月生、兵庫縣

氏は兵庫縣足立多兵衛氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後先代井上藤兵衛氏の養子となり、大正十四年家督を嗣いだ。夙に攻玉社、海軍兵學校、早稻田大學等に學び、更に渡歐して維納大學及び伯林大學に入り殖民及び經濟等を研究した。歸朝後遞信省囑託として聘せられ、更に農商務省囑託、韓國政府財務官及び同宮內府書記等に歷任し、後朝鮮日々新聞社長、東亞同文會幹事、海外協會中央會副會長、東亞同文會海外移住組合聯合會理事、日土、日墨、日本蘭領印度各協會理事、帝國經濟會議員、人口食糧調査會委員、或は衆議院議員等として活躍し、現時前掲各社重役を兼ねて實業界に名聲を博してゐる。著書には「改造途上の世界」等著名なるものが尠くない。

妻ひで（明治八年生、養父藤兵衛長女日本女子大學校長、櫻楓會、日本婦人平和協會各理事長）長男陽一（同四五年生）女幽子（大正二年生）

岩崎　清七氏　小石川區小日向臺町二ノ八　電話小石川古六六

岩崎清七商店、磐城セメント、日本坩堝七尾セメント各（株）社長、東京廻米信用東京搾油、東神火災保險、東京精米各（株）取締役、安部幸商店、日清紡績、白山水力各（株）監査役、栃木縣多額納稅者

元治元年一二月生、栃木縣

氏は栃木縣先代清七氏の長男にして前名を清吉と稱し、明治十六年家督相續と同時に清七を襲名した。夙に實業界に投じ、米穀、肥料及び醬油釀造業を基礎として各方面に驥足を伸べ、特に東京瓦斯株式會社々長として敏腕を揮ふこと多年に及び、名聲を博した。現時前掲各社重役を兼ねて財界に雄飛しつゝある。

妻千代（明治六年生、埼玉縣原繁長女）長男清一郎（同二九年生）同妻かね（同四〇年生、愛知縣中尾十郎長女）二男角之助（同三六年生）三男三郎（同三八年生）女君代（同四〇年生）

岩崎恒二郎氏　日本橋區濱町三ノ一　電話　浪花四一六八

帝國海上火災保險（株）副社長、東洋火災保險（株）取締役、安田ビルディング（株）監査役、大多喜天然瓦斯（株）相談役

明治四年一〇月生、東京府

明治三〇年東京高等商業學校卒業

氏は東京府士族岩崎守正氏の二男として呱々の聲を揚げた。夙に東京高等商業學校に入り孜々として學業を修め、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに實業界に入り、爾來斯界に敏腕を揮ふこと四十年に垂んとし、此の間その烱眼敏才に依つて着々地歩を開拓し、今や帝國海上火災保險株式會社副社長として保險界に嘖

々たる名聲を馳せ、傍ら各社重役を兼ねて帝都財界に活躍しつゝある。
妻タミ（明治二〇年生、東京府東條九一郎姉）男登喜雄（同三八年生）

原田駒之助氏　兵庫縣武庫郡大社村森具北蓮毛九五九　電話　西宮五六五

日清生命保險(株)常務取締役
明治三年六月生、秋田縣
明治二五年東京專門學校英語行政科卒業
氏は秋田縣士族鈴木慶之助氏の二男として同縣下に生れ、後先代原田杢右衞門氏の養子となり、その家督を相續した。夙に東京專門學校に學び、卒業後直ちに操觚界に入り、東洋經濟雜誌記者等として活躍したが、後東京商業會議所に轉じて庶務主任となり、更に釜山商業會議所顧問に聘せられ、後朝鮮總督府に移り鐵道局經理課に勤務した。その後日清生命保險會社に入り、累進して大阪支店長となり、更に本社支配人を經て取締役に選ばれ、現に常務取締役として活躍しつゝある。
妻ムメ（明治一六年生、大阪府西松常松長女）男駿一（大正四年生）男駒男（同五年生）男篤也（同七年生）

波多野義男氏　麹町區富士見町五ノ七　電話　九段二八五〇

日本光學工業(株)支配人
明治一七年八月生、山口縣
明治三九年東京高等商業學校卒業
氏は山口縣波多野毅氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正八年その家督を相續した。夙に實業界に雄飛すべく青雲の志を抱いて上京し、東京高等商業學校に學び、卒業後直ちに川崎造船所に入社し、後三菱造船に轉じ、累進して參事となり、更に同社長崎造船所營業課長に轉じ、後兵器製作所總務課長となり、更に神戸造船所總務課長に擧げられ同社の發展に貢献する所甚大であつた。後同社を辭し、昭和六年七月日本光學工業株式會社支配人となり、以て今日に及んでゐる。
妻ます子（明治三五年生、山口縣英葉秋造女）男泰男（大正八年生）女幸子（同六年生）男重男（同一二年生）

橋井鶴次郎氏　大森區入新井町新井宿二八五〇ノ一七　電話　大森二六八七

警醒社(株)常務取締役
明治二一年三月生、富山縣
氏は富山縣宇尾安左衞門氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後橋井家を嗣いだ。夙に神戸高等商業學校に入り孜々として學業を修め、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに貿易業界に投じ、敏腕達識而も克く其の業務に勵精して着々斯界に擡頭し、信望を博するに至つた。その後大正十一年警醒社に轉じて以來專ら同社の發展に努力し、同社が漸次隆盛となり、昭和三年株式組織に變更されると同時に常務取締役に選ばれ、爾來益々その進展に盡瘁以て今日に及んでゐる。
妻ミヤ（明治二八年生、神奈川縣本田了典三女）女光惠（大正七年生）女千鶴子（同一一年生）女美代子（昭和四年生）

林原彌太郎氏　品川區上大崎中丸三九〇　電話　高輪八一七七　臺灣臺中市高砂町一〇

帝國製糖(株)常務取締役、報國興業、臺灣炭業各(株)取締役、南北商事(株)監査役
明治元年九月生、鳥取縣
氏は鳥取縣林原庄三郎氏の二男にして大正十二年分れて一家を創めた。夙に松江中學に學び、同校卒業後直ちに實業界に投じ、三五公司源成農場囑託として活躍したが、大正四年帝國製糖會社に轉じた。爾來同社經理部長、主事、總務部長兼經理部長等に歷任して其の敏腕を發揮し、大正十一年取締役に擧げられた。以來同社重役として活躍以て今日に至り、傍ら他社の重役をも兼ねて各方面に名聲を博してゐる。
妻テツ（明治九年生、香川縣吉田保次長女）長男修太郎（同三一年生）同妻喜世（同四〇年生、東京府古澤春雄妹）二男英夫（同三四年生）同妻和子、女年生）

細山太七氏　京橋區新川町二ノ六　電話　京橋九九一

細山太七商店主
明治八年九月生、新潟縣
氏は廣島縣星埜禎二郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正四年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學に入り孜々として學業を修め、拔群の成績を以て同大學を卒業後直ちに日本銀行に奉

て活躍したが、後東京商業會議所に轉じて庶務主任となり、更に釜山商業會議所顧問に聘せられ、後朝鮮總督府に移り鐵道局經理課に勤務した。その後日清生命保險會社に入り、累進して大阪支店長となり、更に本社支配人を經て取締役に選ばれ、現に常務取締役として活躍しつゝある。

妻ムメ（明治一六年生、大阪府西松常松長女）男駿一（大正四年生）男駒男（同五年生）男篤也（同七年生）

波多野義男氏　麹町區富士見町五ノ七　電話九段二八五〇

妻ます子（明治三五年生、山口縣英葉秋造女）男泰男（大正八年生）女幸子（同六年生）男重男（同一二年生）

橋井鶴次郎氏　大森區入新井町新井宿二八五〇ノ一七　電話大森二六八七

警醒社（株）常務取締役

明治二一年三月生、富山縣

氏は富山縣宇尾安左衛門氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後橋井家を嗣いだ。夙に神戸高等商業學校に入り孜々として學業を修め、優秀の成績を以て帝國製糖（株）常務取締役、報國興業、臺灣炭業各（株）取締役、南北商事（株）監査役

明治元年九月生、鳥取縣

氏は鳥取縣林原庄三郎氏の二男にして大正十二年分れて一家を創めた。夙に松江中學に學び、同校卒業後直ちに實業界に投じ、三五公司源成農場囑託として活躍したが、大正四年帝國製糖會社に轉じた。爾來同社經理部長、主事、總務部長兼經理部長等に歴任して其の敏腕を發揮し、大正十一年取締役に擧げられた。以來同社重役として活躍以て今日に至り、傍ら他社の重役をも兼ねて各方面に名聲を博してゐる。

妻テツ（明治九年生、香川縣吉田保次長女）長男修太郎（同三一年生）同妻喜世（同四〇年生、東京府古澤春雄妹）二男英夫（同三四年生）同妻和子、女靜枝（同四四年生）孫初穂（昭和三年生、長男修太郎長男）孫像二（同五年生、同二男）

蓮沼　大三氏　小石川區小日向水道町一〇四　電話小石川一〇四〇

常盤生命保險（株）營業課長兼大阪支社長兼秘書役

明治二八年一〇月生、群馬縣

大正一〇年中央大學商業經濟科卒業

氏は群馬縣蓮沼凱平氏の五男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正六年分れて一家を創めた。夙に中央大學に學び、優秀の成績を以て卒業したが、之より先き大正八年常盤生命保險株式會社に入社し契約、調査、庶務等の各課に勤續して其の敏腕を認められ、後秘書役に拔擢され更に營業課長の要職に擧げられ、現時大阪支社長をも兼ねて同社の發展に努力しつゝある。

妻トシ（明治三四年生、東京府岩谷榮三二女、東京女子美術學校卒）長女澄子（大正一三年生）二女匡子（昭和二年生）

細山　太七氏　京橋區新川町二ノ六　電話京橋九九一

細山太七商店主

明治八年九月生、新潟縣

氏は新潟縣細山清七氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十一年家督を相續した。夙に實業界に入り、奮鬪努力着々斯界に進出し以て今日の大成を爲すに至つた。細山太七商店は油類商として夙に斯業界に確乎たる地歩を占め、寺田屋の屋號を以て名聲を博してゐる。氏はその店主として活躍する傍ら千代田石油株式會社取締役、大日本チタニウム株式會社監査役或は日本瓦斯風呂商會主等を兼ねて敏腕を揮つたが、現時は專ら細山太七商店の經營に意を注いでゐる。

妻みつ（明治一五年生、東京府黑沼勘之助養妹）養子武夫（同三一年生、長野縣紀浦次郎二男）養子眞希（同三七年生、新潟縣堀徹也妹、養子武夫妻）孫昭治郎（昭和五年生、武夫長男）

星埜　章氏　芝區白金三光町四八一　電話高輪五五二四

勳六等、法學士、川崎第百銀行（株）頭取

東京興信所（株）監査役

明治九年二月生、廣島縣

明治三八年東京帝大法科卒業

氏は廣島縣星埜禎二郎氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正四年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學に入り孜々として學業を修め、拔群の成績を以て同大學を卒業後直ちに日本銀行に奉職し、金融界活躍の第一歩を踏んだ。入行以來奮鬪努力以て次第に行内の信望を高め、累進して大阪支店長の要職に拔擢された。後同行を辭して民間金融界に移り、川崎第百銀行頭取として今日に及んでゐる。

妻トミ（明治二〇年生、子爵田尻喜通叔母）男晴章（同四一年生）男保夫（大正二年生）男定通（同五年生）女きみ（同九年生）

本多貞次郎氏　千葉縣市川町眞間二〇　電話市川二〇

衆議院議員、東京商工會議所常議員、京成電氣軌道、成田鐵道、大同電氣、渡良瀬水電各（株）社長、大同信號（株）取締役會長、武州鐵道（株）取締役、帝國鐵道協會、電氣協會各評議員、鐵道同志會理事

安政五年一月生、栃木縣

氏は栃木縣士族本多昌信氏の二男として同縣下に生れ、明治十年分れて一家を創めた。夙に實業界に投じて着々擡頭し京成電氣軌道會社の社長たる外前掲各社の重役を兼ねて今日に及び、斯界一方の

雄として信望隆々たるものがある。又此の間政界にもその驥足を伸べ、先に縣會議員、同議長等として敏腕を揮ひ、更に千葉縣第一區より代議士に選出されること既に四期、現に政友會所屬議員として活躍し、或は東京商工會議所議員として帝都商工業界の發展に貢献し、各方面に名聲を博してゐる。

妻さだ（明治三六年生、千葉縣近藤せい養子）男安仁（大正一三年生）長女千代子（同一〇年生）二女直子（昭和二年生）

橡尾　道氏　大森區新井宿三ノ一三六六　電話　大森二五四

東京復興無盡(株)常務取締役
明治一六年一〇月生、三重縣

氏は三重縣桑名町の出身にして、夙に早稲田大學に學び、卒業後明治四十一年同郷の先輩堀井卯之助氏の主宰せる東京興信所に入つた。爾來名古屋出張所主任等として活躍したが、堀井氏が千代田生命保險會社重役に就任と同時に同所を辭し淺野同族會社に轉じ、淺野家が全盛を極めたる好況當時諸種の事業企畫の樞機に參與し、大正八年先代總一郎翁が理想事業の一としたる電氣化學工業日本ウーリット株式會社を設立し、その支配人に擧げられた。同十二年同社は淺野セメント會社に合併の爲め之を辭し、當時東京市民が大震災の爲め大打擊を蒙り悲慘を極めつゝあるを目擊し、罹災民の經濟的復興に貢献すべく決然奮起し、同十三年東京復興無盡會社を設立した。爾來專ら同社の發展と市民の經濟的復活に盡瘁、努力し、以て今日に至つた。

妻美知子（明治二九年生、日本女學校卒）長男健（大正八年生）長女富喜子（同二年生）二女登志子（同六年生）三女貞子（同一一年生）

富田　敷純氏　中野區宮前町一　電話中野二〇七八

新義眞言宗豐山派管長、寶仙寺住職、中野高等女學校長、感應幼稚園長
明治八年五月生、長野縣

氏は長野縣人故松尾仲右衛門氏の二男として同縣上水内郡水内村に呱々の聲を揚げ、後同縣更級郡更級村長勝寺の住職故富田容純氏の養子となり、其の家督を嗣いだ。夙に僧籍に入り、後豐山大學林に學び、卒業後新義眞言宗々會議員、同宗務長、豐山大學長、大正大學教授等として活躍し、中野寶仙寺の住職となりて以來同寺の經營に當る傍ら、寺院境内に中野高等女學校及び感應幼稚園を設立し、教化濟度に努力以て今日に及んでゐる。雅號を古堂と稱し、博學多才の名知識として夙に信望を博し、著書には「眞言宗史綱」「新義眞言宗史」「行者須知」等がある。

大山鷹之介氏　目黑區上目黑八ノ五六九　電話　青山二四六八

從四位、勳三等、功四級、海軍少將、東京復興無盡(株)代表取締役
明治二年八月生、茨城縣
明治二三年海軍兵學校卒業

氏は茨城縣士族大山勝算氏の長男にして、水戸市に生れ、後その家督を嗣いだ夙に海軍兵學校に學び、卒業後日清日露の役に出征して偉功を樹て、或は兵學校教官、各艦長等に歷任し、多年の功績に依り大正八年海軍少將に任ぜられ、從四位勳三等に叙せられた。後豫備役に編入され帝國在郷軍人會本部理事等として活躍したが、大正十五年東京復興無盡株式會社監査役となり、昭和六年代表取締役に就任し、同七年全國無盡集會所理事長に擧げられた。爾來庶民金融の便を圖り勤儉貯蓄の美風涵養に努め、以て今日に及んでゐる。

妻とし（明治一一年生、茨城縣塙載三女）長男義年（同三六年生）同妻芳江（同四三年生、廣島縣天野保二郎二女）二男勝（同三八年生）

太田　光熙氏　大阪府北河内郡川越田宮　電話　枚方一五

從五位、勳五等、法學士、京阪電氣鐵道合同電氣各(株)社長、大同電力、阪和電氣鐵道、新阪神土地、東洋電機製造、國東鐵道各(株)取締役、濃勢電力、昭和電力、奈良電氣鐵道、大同土地興業、東洋第一銀行(株)常務取締役兼檢査部長、有終會(資)有限社員
明治六年九月生、岐阜縣

氏は岐阜縣大澤正交氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十五年分れて一家を創めた。夙に上京して第一銀行に入り、行務に勤精の餘暇を以て學業後三井銀行に入社して實地經驗を積み後同社を辭して渡米し、紐育に於て金融に關する研究を重ねたる後、米國を始め英、佛其他歐洲諸國の金融事業、實業界の情勢等を調査研究して歸朝した。爾來新知識を傾注して實業界に雄飛以て今日

明治一六年一〇月生、三重縣

氏は三重縣桑名町の出身にして、夙に早稻田大學に學び、卒業後明治四十一年同鄕の先輩堀井卯之助氏の主宰せる東京興信所に入つた。爾來名古屋出張所主任等として活躍したが、堀井氏が千代田生命保險會社重役に就任と同時に同所を辭し淺野同族會社に轉じ、淺野家が全盛を極めたる好況當時諸種の事業企畫の樞機に參與し、大正八年先代總一郎翁が理想事業の一としたる電氣化學工業日本ウーリツト株式會社を設立し、その支配人に擧げられた。同十二年同社は淺野セメン

明治八年五月生、長野縣

氏は長野縣人故松尾仲右衞門氏の二男として同縣上水內郡水內村に呱々の聲を揚げ、後同縣更級郡更級村長勝寺の住職故富田容純氏の養子となり、其の家督を嗣いだ。夙に僧籍に入り、後豐山大學林に學び、卒業後新義眞言宗々會議員、同宗務長、豐山大學長、大正大學教授等として活躍し、中野寶仙寺の住職となりて以來同寺の經營に當る傍ら、寺院境內に中野高等女學校及び感應幼稚園を設立し、教化濟度に努力以て今日に及んでゐる。雅號を古堂と稱し、博學多才の名知識と位勳三等に叙せられた。後豫備役に編入され帝國在鄕軍人會本部理事等として活躍したが、大正十五年東京復興無盡株式會社監査役となり、昭和六年代表取締役に就任し、同七年全國無盡集會所理事長に擧げられた。爾來庶民金融の便を圖り勤儉貯蓄の美風涵養に努め、以て今日に及んでゐる。

妻とし（明治一一年生、茨城縣塙載三女）長男義年（同三六年生）同妻芳江（同四三年生、廣島縣天野保二郎二女）二男勝（同三八年生）

太田　光熙氏　大阪府北河內郡川越田宮、電話　枚方一五

從五位、勳五等、法學士、京阪電氣鐵道合同電氣各(株)社長、大同電力、阪和電氣鐵道、新阪神土地、東洋電機製造、國東鐵道各(株)取締役、濃勢電力、昭和電力、奈良電氣鐵道、大同土地興業、東洋車輛各(株)監査役、鞍馬電氣鐵道(株)顧問

明治七年一〇月生、山口縣

明治三一年東京帝大法科卒業

氏は山口縣士族大庭景明氏の二男として同縣下に生れ、後先代太田小三郎氏の養子となり、大正三年その家督を相續した。夙に東京帝國大學法科に入り、英法科を卒業後鐵道省に奉職し、その敏腕を認められたが、後官を辭して實業界に入り鐵道會社を中心とし各種事業に關係して著々擡頭し、今や斯界の重鎭として雄飛しつゝある。

妻ノブ（明治一四年生、東京府士族山形俊信長女）長男重光（同三六年生）三男顯光（同四五年生）四男定光（大正四年生）女高子（明治四二年生）二男資光（同三九年生、福岡縣鷹羽サク養子）

大澤　佳郎氏　品川區大井森前町三九九　電話　大森三一八一

第一銀行(株)常務取締役兼檢査部長、有終會(資)有限社員

明治六年九月生、岐阜縣

氏は岐阜縣大澤正交氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十五年分れて一家を創めた。夙に上京して第一銀行に入り、行務に勵精の餘暇を以て學業を修め、特に金融に關する研究を重ね、漸次その才腕を認められるに至つた。後累進して小樽支店長の要職に拔擢され、續いて神戶支店長に榮轉し、敏腕を揮ふこと多年に亘り、遂に同行取締役に擧げられた。現時常務取締役として益々同行の發展に努力しつゝあるが、才腕兼備加ふるに溫厚なる人格者として各方面に信望を博してゐる。

妻ナヲ（明治一五年生、東京府畑田カツ妹）

太田　新吉氏　澁谷區穩田町三ノ一六四　電話　青山二六四

法學士、太田商事、九州勸業各(株)社長

第一徵兵保險(株)副社長

明治三六年八月生、福岡縣

大正八年東京帝大法科卒業

氏は我が財界の重鎭太田淸藏氏の長男として福岡縣下に呱々の聲を揚げた。太田圭助氏の養弟、太田辨次郎氏の實兄である。夙に東京帝國大學法科に學び、卒業後三井銀行に入社して實地經驗を積み後同社を辭して渡米し、紐育に於て金融に關する研究を重ねたる後、米國を始め英、佛其他歐洲諸國の金融事業、實業界の情勢等を調査研究して歸朝した。爾來新知識を傾注して實業界に雄飛以て今日に及び、現時前揭の職を兼ね、大いに前途を囑望されてゐる。

父淸藏（文久三年生、現戶主）妻淑子（明治三五年生、東京府武田恭作二女東京女學館卒）長男新太郎（大正一四年生）二男元次郎（昭和三年生）長女禮子（大正一一年生）二女寬子（同一三年生）

片倉　武雄氏　長野縣諏訪郡川岸村三澤三七五　電話岡谷五〇八　小石川水道端町二ノ三五　電話　小石川二三五三

片倉江津製絲、昭和興業、多摩製絲各(株)社長、日華蠶絲(株)專務取締役、片倉製絲紡績(株)常務取締役、片倉米穀肥料、片倉生命保險、滿洲蠶絲、日本紡績各(株)取締役、日本ソリデヂツト、片倉殖產各(株)監査役

明治一五年一一月生、長野縣

當家は信州屈指の名門片倉家の一族にして、氏は先代片倉光治氏の長男、同三平氏の實兄として長野縣下に呱々の聲を

揚げ、大正六年その家督を相續した。夙に片倉系諸事業に關係し、漸次その地歩を開拓し、現時前掲諸社の重役を兼ねて活躍しつゝある。

妻かづ（明治二〇年生、長野縣士族三村正從長女）長男亮平（同四一年生）

加藤　正男氏　兵庫縣川邊郡小濱村川面寶塚一九ノ四　電話　寶塚五一四

東洋リノリューム(株)常務取締役

明治一七年三月生、大阪府

明治四一年慶應義塾大學理財科卒業

氏は大阪府中野政六氏の長男に生れ、後加藤長次郎氏の養子となり、大正六年その家督を嗣いだ。夙に上京して慶應義塾に學び、卒業後直ちに山口銀行に奉職し、漸次その手腕を認められて各支店長に擧げられ、更に本店營業部長の要職に据えられ、大正十五年取締役に選ばれた後東洋リノリューム株式會社に轉じ、或は組織の改善に努め、或は歐米を巡遊して製品の向上を圖る等、專ら同社の發展に努力し以て今日に及んでゐる。

妻キン（明治二〇年生、滋賀縣士族宇津木孚明七女）長男長策（大正元年生）三男達男（同五年生）四男資郎（同八年生）五男吾郎（同一一年生）六男尙也（同一四年生）長女富子（明治四二年生、東京府石橋誠妻）

吉村萬治郎氏　芝區高輪南町四四　電話高輪五五一七

古河鑛業(名)理事、富士電機製造(株)社長、古河林業部(名)代表社員

明治一九年三月生、京都府

明治四一年慶應義塾大學法律科卒業

氏は京都府木村幸次郎氏の實弟として同府に呱々の聲を揚げ、先代吉村ツルの養子となり、明治二十八年その家督を相續した。夙に慶應義塾に於て法律を修め卒業後更に渡歐し獨逸ハレー大學及び伯林大學に於て研鑽を重ねたる後、歐米先進諸國の實業界を視察研究して歸朝した歸朝後直ちに古川鑛業に入社し、克く當主虎之助氏を援けて同家の發展に努力し現時前掲の任に在つて益々古川系諸事業の發展に貢献しつゝある。

妻鶴（明治三一年生、男爵古河虎之助妹、東京女學館卒）男俊郎（大正一五年生）男徹郎（大正八年生）長女幸子（同五年生）二女彌壽子（同八年生）三女和子（同一〇年生）

田中　藏造氏　牛込區早稲田鶴巻町一〇〇　電話　牛込四五三一

勳七等、日清生命保險(株)參事兼東京支店長

明治一六年二月生、長野縣

大正二年早稲田大學法科卒業

氏は長野縣人田中士郎氏の二男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に上京して早稲田大學法科に入り、孜々として學業を修め、優秀の成績を以て同大學を卒業した。大正四年母校と關係深き日清生命保險會社に入社し、庶務部に勤務すること數年、その敏腕を認められて大正十年參事に拔擢された。後同社東京支店長に擧げられ、爾來此の要職に在つて同社の發展に努力以て今日に及んでゐる。

兄信（明治八年生、現戸主）妻佐保子（同一二年生、新潟縣川合庫太四女）長女房子（同四五年生）

高井計之助氏　小石川區丸山町一一　電話　大塚八〇

日本大學、中央商業學校各講師

明治八年一〇月生、愛知縣

明治三五年日本法律學校卒業

氏は愛知縣高井菊次郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に上京して日本法律學校に入り、孜々として學業に勵み、同校を卒へるや直ちに教育界に投じ、後進の指導に努力以て今日に及んでゐる。現時日本大學講師及び中央商業學校講師として活躍しつゝあるが、曾つて早稲田大學、慶應義塾大學等にも教鞭を執り、都下教育界に夙に確乎たる地歩を占め、溫厚篤實にして熱心なる教育家として信望を博してゐる。

妻たよ子（明治一〇年生）嗣子東洋彦（同四四年生）

吉村　佐平氏　赤坂區傳馬町三ノ一五　電話　青山六九八〇

國際通運(株)專務取締役、運送相互保證(株)常務取締役、大北火災海上運送保險(株)取締役、東京合同運送、大日本自動車保險、北陸汽船各(株)監査役

明治二九年八月生、北海道

氏は若狹德兵衞氏の叔父として北海道に呱々の聲を揚げ、前名を勝德と稱し、後先代高橋竹藏氏の養子となり、昭和三年その家督を嗣ぐと同時に竹藏を襲名し越竹商店（帽子問屋）店主

その家督を嗣いだ。夙に上京して慶應義塾に學び、卒業後直ちに山口銀行に奉職し、漸次その手腕を認められて各支店長に擧げられ、更に本店營業部長の要職に據えられ、大正十五年取締役に選ばれた後東洋リノリユーム株式會社に轉じ、或は組織の改善に努め、或は歐米を巡遊して製品の向上を圖る等、專ら同社の發展に努力し以て今日に及んでゐる。

妻キン（明治二〇年生、滋賀縣士族宇津木孚明七女）長男長策（大正元年生）三男達男（同五年生）四男資郎（同八年生）五男吾郎（同一一年生）六男尙也（同一四年生）長女富子（明治四二

歸朝後直ちに古川鑛業に入社し、克く當主虎之助氏を援けて同家の發展に努力し現時前掲の任に在つて益々古川系諸事業の發展に貢献しつゝある。

妻鶴（明治三一年生、男爵古河虎之助妹、東京女學館卒）男俊郎（大正一五年生）男徹郎（大正八年生）長女幸子（同五年生）二女彌壽子（同八年生）三女和子（同一〇年生）

田中　藏造氏　牛込區早稲田鶴卷町一〇〇　電話　牛込四五三一

勳七等、日清生命保險（株）參事兼東京支店長

高井計之助氏　小石川區丸山町一一　電話　大塚八〇

日本大學、中央商業學校各講師

明治八年一〇月生、愛知縣

明治三五年日本法律學校卒業

氏は愛知縣高井菊次郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に上京して日本法律學校に入り、孜々として學業に勵み、同校を卒へるや直ちに教育界に投じ、後進の指導に努力以て今日に及んでゐる。現時日本大學講師及び中央商業學校講師として活躍しつゝあるが、曾つて早稲田大學、慶應義塾大學等にも教鞭を執り、都下教育界に夙に確乎たる地歩を占め、溫厚篤實にして熱心なる教育家として信望を博してゐる。

妻たよ子（明治一〇年生）嗣子東洋彦（同四四年生）

吉田　秀彌氏　小石川區武島町一二　電話小石川七八四五

京成電氣軌道（株）取締役兼理事、京成乘合自動車、成田鐵道各（株）取締役

明治一四年一一月生、福島縣

明治三六年早稲田大學政治科卒業

氏は福島縣吉田誠一郎氏の二男、同稔氏の實弟にして、同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十九年分れて一家を創立した夙に上京して早稲田大學に學び、卒業後直ちに實業界に投じ、堅實にその地歩を進め、現時京成電氣軌道會社の取締役たる傍ら、その傍系會社たる京成乘合自動車、及び成田鐵道兩社の重役を兼ねて活躍しつゝある。

妻正（明治一八年生、東京府吉田富藏二女）養子春登（同三七年生、福島縣見矢木欽爾三男、東北帝大法文科卒）長女てる（同四二年生、跡見女學校卒養子春登妻）

吉村　佐平氏　赤坂區傳馬町三ノ一五　電話　青山六九八〇

國際通運（株）專務取締役、運送相互保證（株）常務取締役、大北火災海上運送保險（株）取締役、東京合同運送、大日本自動車保險、北陸汽船各（株）監査役

明治三年一〇月生、東京府

當家は舊幕以來飛脚屋を營み連綿として維新後に及び、後運送界統一の機關として內國通運會社が設立されるや其の中心として活躍し、我が陸運業界屈指の名門として知られてゐる。氏は先代吉村甚兵衞氏の二男、籾山仁三郎氏の實兄にして明治十六年家督を嗣いだ。國際通運の前身たる內國通運會社當時より同社の發展に貢献したる我が陸運界の功勞者にして、又斯界に於ける權威として名聲嘖々たるものがある。溫厚篤實稀れに見る人格者として各方面より尊敬され、現時前掲各社重役として重きをなしてゐる。趣味は日本音樂等。

妻せん（明治一九年生、東京府林九兵衞妹）男泉太郎（大正九年生）女榮子（同二年生）女薫子（同四年生）女久子（同六年生）女春子（同八年生）女多惠子（昭和五年生）

高橋　竹藏氏　芝區新橋六ノ一二　電話　芝二三三九

越竹商店（帽子問屋）店主

明治二九年八月生、北海道

氏は若狹德兵衞氏の叔父として北海道に呱々の聲を揚げ、前名を勝德と稱し、後先代高橋竹藏氏の養子となり、昭和三年その家督を嗣ぐと同時に竹藏を襲名した。夙に上京して越竹商店に入り、恪勤以て同店の發展に努力し、店主の信任を得て其の後繼者となるや益々同店の業務擴張に健闘し、今や各地方に確乎たる取引先を擁し、都下同業界の雄として普く認められるに至つた。

祖母イト（元治元年生、德島縣安宅幾久雄妹）養母ひで（明治一五年生、埼玉縣伊丹三省長女）妻たま（同三四年生、養父先代竹藏長女）長女洋子（大正一五年生）妹龜代（明治四〇年生）妹梅子（同四二年生）妹春子（同四五年生）妹千枝子（大正五年生）妹ひさ子（同七年生）

難波雄治郎氏　荒川區尾久町五ノ七六三　東京鋼鐵家具株式會社內

東京鋼鐵家具（株）取締役兼支配人

明治三二年九月生、東京市

大正七年東京市立商業學校卒業

氏は難波房治郎氏の二男として東京市四谷區南伊賀町に呱々の聲を揚げた。長じて市立商業學校に學び、同校を卒業後

直ちに東京保溫劑會社に入り、精勵恪勤次第にその才腕を認められ支配人に擧げられた。大正十三年東京鋼鐵家具製作所に轉じ其の販賣部支配人となり、昭和三年大東工業株式會社製品販賣所支配人に轉じたが、同七年七月東京鋼鐵家具株式會社取締役に選ばれ、同時に支配人を兼ねて活躍以て今日に及んでゐる。溫厚篤實にして而も才腕兼備、大いに前途を囑望されてゐる。趣味は觀劇等。

母和加（明治一〇年生）妻ハル（同三六年生、東京府、家政女學校卒）長男重雄（昭和三年生）二男吉彦（同七年生）長女笑子（同元年生）二女和江（同五年生）

中村太三郎氏　赤坂區溜池三一大塚方　電話　赤坂一〇五七

正四位、勳三等、法學士、東洋拓殖（株）理事

明治一三年一二月生、福岡縣

明治三九年東京帝大法科卒業

氏は福岡縣士族中野和四郎氏の三男として同縣下に生れ、明治二十一年その家督を嗣いだ。夙に東京帝國大學に學び卒業後更に研究を積んで同四十二年文官高等試驗に合格した。之より先同三十九年韓國統監府屬となり、爾來理事廳副理事官、朝鮮總督府事務官、同平安南道第三部長等を經て咸境北道知事となり、大正十五年咸鏡南道知事に轉じ昭和四年退官するまで其の任に在つて敏腕を揮つた。同六年五月東洋拓殖會社理事に擧げられて以來、同社の發展に盡瘁以て現在に至る。

妻ヨシエ（明治二五年生、福岡縣士族庄野弘毅長女）嗣子大軌（同四三年生）男浩（大正一四年生）女靜江（同元年生）女照（同四年生）女敦子（同八年生）女須美江（同一一年生）

中村　準策氏　神戸市中山手通四ノ七　電話　葺合二九二四

太平洋海上火災保險、釜山鎭埋築各（株）社長、兵庫大同信託（株）取締役

明治九年八月生、奈良縣

明治三三年東京高等商業卒業

氏は奈良縣士族並川玄策氏の三男として同縣下に生れ、後兵庫縣中村宇吉氏の養子となり、明治四十一年その家督を嗣いだ。生家は代々郡山藩に仕へたる名門である。夙に東京高等商業學校に學び、卒業後直ちに大阪商船會社に入社し、漸次その才腕を認められたが、在社僅かに三ケ年にして明治三十五年同社を辭し獨立して海運業を開いた。創業當初より着々發展し、歐洲大戰に因る好況當時には盛んに飛躍し巨萬の富を積んだが、大戰後之を廢した。現時太平洋海上火災保險會社々長たる外前揭重役を兼ねて關西業界に嘖々たる名聲を馳せてゐる。

妻富貴（明治二四年生、京都府瀧川英次郎妹）長男準一（同三五年生）同妻叡子（同四〇年生）

永井信二郎氏　澁谷區羽澤一〇二　電話　青山九〇一

三共（株）社員

明治二八年四月生、東京府

大正九年應應義塾大學理財科卒業

氏は東京府士族永井好信氏の二男に生れ、後分れて一家を創めた。夙に慶應義塾に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに高田商會に入り、實業界に活躍の第一歩を踏んだ。後操觚界に志し大正十四年同商會を辭して時事新報社に移り敏腕を揮つたが、昭和六年六月之を辭して三共株式會社に入社した。爾來專ら同社の發展に努力し、現時秘書課に勤務し社内に信望を博してゐる。趣味としてゴルフを好み、我孫子、武藏野及び相模カンツリー倶樂部會員として同好者間に知られてゐる。

妻英子（明治四一年生、三共社長鹽原又策二女）長男信策（昭和六年生）

中谷　貞賴氏　品川區大井立會町四九　電話　高輪三六九一

正七位、辯護士、法學士、衆議院議員、日本活動寫眞（株）專務取締役

明治二〇年二月生、茨城縣

大正二年東京帝大法科卒業

氏は東京府永井正義氏の三男にして大正十五年その家督を相續した。幼少の頃より秀才の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに帝國製麻株式會社に入社したが、大正十一年十二月三社に入り、同社の發展に努力すると共に我が國民の海外進出に貢献し、以て今日に及んでゐる。同社が近年隆々として好成績を擧げ、移殖民及び海外に於ける產業開發に資しつゝあるは氏の努力に俟つ所多く、斯界の功勞者として名聲を博し

中村太三郎氏　赤坂區溜池三一大塚方　電話　赤坂一〇五七

正四位、勳三等、法學士、東洋拓殖(株)理事

明治一三年一二月生、福岡縣

明治三九年東京帝大法科卒業

氏は福岡縣士族中野和四郎氏の二男として同縣下に生れ、明治二十一年その家督を嗣いだ。夙に東京帝國大學に學び卒業後更に研究を積んで同四十二年文官高等試驗に合格した。之より先同三十九年韓國統監府屬となり、爾來理事廳副理事官、朝鮮總督府事務官、同尹國道事務官

中谷　貞賴氏　品川區大井立會町四〇九　電話　高輪三六九一

正七位、辯護士、法學士、衆議院議員、日本活動寫眞(株)專務取締役

明治二〇年二月生、茨城縣

大正二年東京帝大法科卒業

氏は茨城縣士族中之內爲彥氏の實兄にして、明治四十年中谷速水氏の養子となり中谷姓を襲いだ。夙に東京帝國大學に學び、獨逸法科を卒業後直ちに官界に入り、廣島縣警視、警視廳保安課長、同警視、同外事課長、同西神田警察署長、同相生警察署長等に歷任し名聲を馳せた。後官を辭して辯護士を開業する傍ら實業界にも驥足を伸べ、一方政界に進出し、高知縣第一區より選出されて代議士たること既に四期、現に政友會所屬の敏腕家として中央政界に活躍しつゝある。

養父速水（安政二年生、現戸主）養母牛於（慶應元年生、高知縣士族金光曜武長女）妻春枝（明治四〇年生、高知縣小倉重璋二女）

永井　茂彌氏　淀橋區上落合一ノ二六〇

法學士、三省堂(株)取締役兼小賣部長、東都書籍、同文館各(株)取締役

明治二四年一一月生、東京府

大正五年東京帝大法科卒業

氏は東京府永井正義氏の三男にして大正十五年その家督を相續した。幼少の頃より秀才の譽れ高く、第一高等學校を經て東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業した。卒業後直ちに帝國製麻株式會社に入社したが、大正十一年十二月三省堂に轉じ、精勵恪勤以て支配人に拔擢され、更に取締役に選ばれた。現に取締役たる傍ら小賣部長の要職を兼ねて同社の發展に努力すると共に、東都書籍及び同文館の重役を兼ね、都下出版業界に重きをなしてゐる。

妻三枝（明治三一年生、東京府平岡佳吉二女）長女都士子（大正一〇年生）弟武雄（明治三〇年生）及其妻子、弟義太五男（同三五年生）及其妻子、弟義太郎（同三九年生）

村田　命穆氏　東京市外小金井村大城堀

南洋興發(株)常務取締役

明治二三年七月生、京都府

大正二年神戸高等商業學校卒業

氏は京都府村田命德氏の三男として同府に呱々の聲を揚げた。夙に神戸高等商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに實業界に入り、奮鬪努力主義を以て着々斯界に擡頭し、確乎たる地歩を占むるに至つた。後南洋興發株式會社に入り、同社の發展に努力すると共に我が國民の海外進出に貢獻し、以て今日に及んでゐる。同社が近年隆々として好成績を擧げ、移殖民及び海外に於ける產業開發に資しつゝあるは氏の努力に俟つ所多く、斯界の功勞者として名聲を博してゐる。

母モト（萬延元年生、岸本長四郎長女）妻ミネ（明治三三年生、京都府松室重明孫）

生方　祐之氏　淀橋區柏木二丁目　電話四谷三七〇五

日本煉瓦製造(株)常務取締役

明治六年九月生、新潟縣

氏は新潟縣士族安松立志氏の二男として同縣高田市に呱々の聲を揚げ、明治三十二年生方フデの入夫となり、後その家督相續と同時に前名彌太郎を祐之と改めた。生家は累代高田藩に仕へたる名門である。夙に實業界に投じ、努力奮鬪主義を以て斯界に邁進し、着々その地歩を開拓し名聲を認められるに至つた。現時日本煉瓦製造株式會社の常務取締役として活躍しつゝあるが、才腕兼備、而も稀れに見る高潔の士として信望を博してゐる

妻マツ（明治一九年生、群馬縣飯野金吾姉）長男孝一（同三七年生）二男竹二（同四二年生）三男淳三（大正四年

生）四男芳丸（同六年生）女正代（同二年生）女晄子（同七年生）

野崎　乙吉氏　日本橋區南茅場町二九　電話　茅場町三六〇—九
中央商會（株）社長、東京株式取引所一般短期實物國債取引員
明治五年二月生、新潟縣
氏は新潟縣人野崎善藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治三十一年その家督を相續した。夙に上京して輸贏市場に投じ、爾來斯界に活躍すること多年、此の間烱眼敏才を以て着々斯界に擡頭し、確乎たる名聲を博するに至つた。現時中央商會社長として益々斯界に活躍し、氏一流の敏腕と堅實なる營業方針と相俟つて社運日に隆盛となり、都下同業界に於ては勿論、凡ゆる方面に信望を博してゐる。資性溫厚篤實にして斯業界稀れに見る人格者として夙に定評がある。

山田英太郎氏　芝區白金臺町二ノ五四　電話　高輪一四五四
日清生命保險（株）取締役會長、日章火災海上再保險（株）相談役、岩倉鐵道學校々長、早稲田大學維持員、大日本國防義會々長、道路改良會常任理事
文久二年一一月生、愛知縣
明治一八年東京專門學校卒業
氏は愛知縣山田中辰氏の長男にして明治四十三年家督を嗣いだ。東京專門學校卒業後朝野民報、報知新聞等の記者として操觚界に活躍し、後愛知縣會議員、大谷派學校教頭、日本鐵道會社庶務課長、同社常務取締役、同社專務淸算人、成田鐵道會社取締役、同社長等に歷任して敏腕を揮ひ、現時保險界に活躍する傍ら教育界其他に盡瘁し、嘖々たる名聲を馳せてゐる。
妻れう（明治三年生、愛知縣大橋鉞之丞妹）男俊夫（同二七年生）同妻はな（同三二年生）男武夫（同三三年生）同妻壽子（同四〇年生）男宣夫（同四〇年生）女益子（同四四年生）

安永　秀雄氏　小石川區竹早町六五　電話小石川三五三六
安永舍化粧品工場主
明治二九年三月生、東京府
大正七年早稲田大學商科卒業
氏は東京府安永鐵藏氏の二男に生れ後その家督を相續した。夙に早稲田大學に學び、卒業後安永舍工場を設けて化粧品製造を開始した。化粧水ヘチマコロンは氏が苦心研究を重ねて創製したる當工場獨特の製品にして、之が一度市場に現はれるや、各方面に絶大の稱讃を博し、爾來氏の努力と巧妙なる宣傳に依つて益々聲價を博し、今や全國各地は勿論遠く海外にまで輸出され、國產化粧品の粹として歡迎されるに至つた。氏は現時益々その發展に努力しつゝある。
妻多見子（明治三一年生、茨城縣伊東四郎妹）嗣子太一（昭和二年生）女庸子（大正八年生）女節子（同一一年生）女道子（昭和三年生）

山中　遜氏　牛込區市ケ谷河田町二　電話　牛込六三二
法學士、片倉製絲紡績（株）監査役兼會計課長
明治二一年一〇月生、長野縣
大正五年東京帝大法科卒業
氏は長野縣士族山中助藏氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に東京帝國大學法科に入り孜々として學業に勵み、優秀の成績を以て卒業後更に研究を積み、大正七年三井物產會社に入社したが、後片倉製絲紡績會社に轉じた。爾來精勵恪勤以て只管同社の發展に努力し、現に會計課長の要職に在り且つ監査役として活躍しつゝある。
父助藏（元治元年生、現戸主）妻すゞえ（明治三二年生、長野縣重盛二三四長女）長男篤（大正九年生）二男信（同一四年生）長女しげ子（昭和二年生）

山口吉郎兵衞氏　兵庫縣武庫郡精道村蘆屋法泉寺　電話　蘆屋三三二〇
山口（資）社長、大阪貯蓄銀行（株）頭取、日本生命保險（株）取締役會長、關西信託大日本火災海上再保險各（株）取締役
明治一六年四月生、大阪府
當家は舊幕以來連綿たる舊家にして關西屈指の素封家である。氏は先代吉郎兵衞氏の二男、山口謙四郎氏の實兄として此の名門に生を享け、明治二十年家督を相續すると共に同時に吉郎兵衞と襲名した。明治三四年三月生、長野縣
大正一二年上田蠶糸專門學校卒業
氏は長野縣の出身にして夙に上田蠶糸專門學校に學び、卒業後母校の助手となり更に教師として後進の教導に當ると共に、絹糸に關する研究を積んだ。大正十五年上京して星野氏の經營する化學絹糸研究所に入り、爾來「再製絹糸」に關する研究に心血を濺ぎ、殆んど寢食を忘れて奮鬪の効果空しからず、遂に屑絹糸、古絹糸等を材料とする「再製絹糸」の製法を完成し、昭和六年三月化學工臺灣果物各（株）取締役、朝鮮紡織、太平洋炭礦、安部幸商店各（株）監査役
明治九年七月生、長崎縣
明治三三年東京帝大法科英法科卒業
當家は代々肥前平戸藩に仕へたる名門にして、氏は牧山猪七氏の三男、同熊二郎氏の弟、同耕藏氏の兄として長崎縣松浦郡に呱々の聲を揚げ、大正十年分れて一家を樹てた。夙に東京帝國大學を卒業後更に渡米してエール大學、及び南ダゴタ鑛山大學に學び、歸朝後三井鑛山に勤

し、氏一流の敏腕と堅實なる營業方針とに相俟つて社運日に隆盛となり、都下同業界に於ては勿論、凡ゆる方面に信望を博してゐる。資性溫厚篤實にして斯業界稀れに見る人格者として夙に定評がある。

山田英太郎氏　芝區白金臺町二ノ五四　電話　高輪一四五四

日清生命保險(株)取締役會長、日章火災海上再保險(株)相談役、岩倉鐵道學校々長、早稲田大學維持員、大日本國防義會々長、道路改良會常任理事

文久二年一一月生、愛知縣

明治一八年東京專門學校卒業

氏は愛知縣山田中辰氏の長男にして明治三四年三月生、長野縣

大正一二年上田蠶糸專門學校卒業

氏は長野縣の出身にして夙に上田蠶糸專門學校に學び、卒業後母校の助手となり更に教師として後進の教導に當ると共に、絹糸に關する研究を積んだ。大正十五年上京して星野氏の經營する化學絹糸研究所に入り、爾來「再製絹糸」に關する研究に心血を濺ぎ、殆んど寢食を忘れて奮鬪の効果空しからず、遂に屑絹糸、古絹糸等を材料とする「再製絹糸」の製法を完成し、昭和六年三月第三回化學工業博覽會を機とし、其の研究の結果を發表した。該發明は製糸界注視の的となり同年八月發明協會は其の功績を認め恩賜發明奬勵金を交付した。然れども之を工業化して國產の振興に資し延いて世界的に貢献するには尙ほ研究の餘地あるを以て爾來氏は益々熱心に研究を續けてゐるが、其の成功は近きに在るべく各方面より期待されてゐる。

妻三重子（明治四四年生、三輪田高女卒、星野正三郎氏二女）

牧山　清砂氏　麻布區簞笥町六二　電話　赤坂五七

帝國製糖、北海道製糖各(株)專務取締役

報國興業、十勝鐵道、南十勝振興、南北商事、中央製糖各(株)社長、北海道殖產

安永　秀雄氏　小石川區竹早町六五　電話小石川三五三六

安永舍化粧品工場主

明治二九年三月生、東京府

大正七年早稲田大學商科卒業

氏は東京府安永鐵藏氏の二男に生れ後その家督を相續した。夙に早稲田大學に學び、卒業後安永舍工場を設けて化粧品製造を開始した。化粧水ヘチマコロンは氏が苦心研究を重ねて創製したる當工場獨特の製品にして、之が一度市場に現はれるや、各方面に絶大の稱讃を博し、爾來氏の努力と巧妙なる宣傳に依つて益々聲價を博し、今や全國各地は勿論遠く海

帝國大學法科に入り孜々として學業に勵み、優秀の成績を以て卒業後更に研究を積み、大正七年三井物產會社に入社したが、後片倉製絲紡績會社に轉じた。爾來精勵恪勤以て只管同社の發展に努力し、現に會計課長の要職に在り且つ監査役として活躍しつゝある。

父助藏（元治元年生、現戸主）妻すゞえ（明治三二年生、長野縣重盛二三四長女）長男篤（大正九年生）二男信（同一四年生）長女しげ子（昭和二年生）

山口吉郎兵衛氏　兵庫縣武庫郡精道村蘆屋法泉寺　電話　蘆屋三三二〇

山口(資)社長、大阪貯蓄銀行(株)頭取、日本生命保險(株)取締役會長、關西信託大日本火災海上再保險各(株)取締役

明治一六年四月生、大阪府

當家は舊幕以來連綿たる舊家にして關西屈指の素封家である。氏は先代吉郎兵衛氏の二男、山口謙四郎氏の實兄として此の名門に生を享け、明治二十年家督を相續すると同時に吉郎兵衛を襲名した。夙に上京して慶應義塾大學に學業を修め後山口家經營の諸事業に關係して實地經驗を積み、克く祖業を繼承し得たるのみならず更に益々發展せしめ、名實共に關西財界の雄たる地歩を確保した。現時前揭諸會社の重役を兼ね、山口財閥の統帥者として敏腕至らざるなく、又社會公共的事業に關係して功績尠なからず、各方面に信望隆々たるものがある。

妻チカ（明治二三年生、大阪府西尾與右衛門姉）長男格太郎（大正七年生）二男文次郎（同一〇年生）女久仁（明治四五年生）女須美（大正三年生）

山本三六郎氏　品川區南品川六ノ一四三八　電話　高輪三一八四

化學絹糸研究所主任技術者

臺灣果物各(株)取締役、朝鮮紡織、太平洋炭礦、安部幸商店各(株)監査役

明治九年七月生、長崎縣

明治三三年東京帝大法科英法科卒業

當家は代々肥前平戸藩に仕へたる名門にして、氏は牧山猪七氏の三男、同熊二郎氏の弟、同耕藏氏の兄として長崎縣松浦郡に呱々の聲を揚げ、大正十年分れて一家を樹てた。夙に東京帝國大學を卒業後更に渡米してエール大學、及び南ダゴタ鑛山大學に學び、歸朝後三井鑛山に勤務し後製糖界に轉じ、更に各方面に敏腕を伸べて今日の成功を收め、而も尙ほ駸々として業界に進展しつゝある。

妻トミ子（明治一六年生、鈴木辰次郎長女）男武文（同四〇年生）長女露子（大正三年生）

松方　正熊氏　麻布區西町二二　電話高輪五五三五

帝國製糖、北海道製糖各(株)社長、太平洋炭礦、十勝鐵道各(株)取締役、中央製糖、朝鮮紡織各(株)監査役

明治一四年一二月生、東京府

先考松方正義氏は明治の元勳として嘖々たる名聲を馳せ、多年國事に奔走したる顯著なる功績に依り公爵に列せられた氏はその八男にして松方嚴氏、同正作氏同幸次郎氏、同正雄氏等の實弟、同義輔氏

の實兄に當り、大正八年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學農科林學科に學び、同大學卒業後更に米國に留學し、後同地實業界を視察して歸朝した。歸朝後實業界に入り、烱眼敏才を以て着々その地歩を開拓し、今や前掲各社の重役を兼ねて益々敏腕を發揮し、信望を博してゐる。

妻ミヨ（明治二四年生、群馬縣新井領一郎長女）男眞（大正九年生）長女仲子（同二年生）二女春子（同四年生）三女種子（同七年生）四女美惠子（同一一年生）五女眞理（同一二年生）

松本　留吉氏　四谷區傳馬町一ノ四七　電話　四谷二五〇〇

勳五等、藤倉電線、藤倉工業各(株)社長藤倉(名)代表社員、凸版印刷(株)取締役弘電舍、安立電氣各(株)相談役

明治元年一一月生、栃木縣

氏は栃木縣藤倉熊吉氏の五男として同縣安蘇郡植野村に生れ、後先代松本浪藏氏の養子となり、明治四十年家督を相續した。夙に渡米し、歸朝後兄善八氏と共に護謨電線の製造を開始し、更に藤倉工業會社を起して護謨防水布を製造し、後航空機材料、飛行船及び氣球等の製作に從事し、多年業界に活躍し國産の振興に寄與したる功績に依り勳五等瑞寶章を賜はり、又紺綬褒章を授與された。現時前掲各社の重役を兼ね、藤倉系事業を統轄して益々活躍しつゝある。

妻エイ（明治八年生、養父浪藏長女）長男新太（同二六年生）二男慶次（同三三年生、栃木縣藤倉胎一の家籍を嗣ぐ）三男重男（同三六年生）長女美代（同三〇年生、跡見女學校卒、山口縣高橋武美妻）

古屋　惣八氏　淀橋區柏木三ノ四三六　電話　四谷一八一三

松屋吳服店(株)常務取締役

明治一四年三月生、山梨縣

氏は松屋吳服店社長古屋德兵衛氏の實弟、先代德兵衛氏の三男にして、明治三十八年別れて一家を創めた。夙に令兄を援けて家業の發展に努力し、同家が横濱より東京に進出し更に銀座街頭に現はれるに及んで刻苦勵精、遂に松屋吳服店を して百貨店界の雄たらしめた。此の間に於ける氏の努力は尠少ならざるものとして夙に普く認められてゐる。同店の功勞者故内藤彦一氏の失脚以來、令兄と共に一層同店の發展に努力以て今日に及んでゐる。

妻もと（明治二一年生、山梨縣奥村三右衛門三女）長男惣太郎（同四二年生）二男祐次郎（同四四年生）三男善正（大正四年生）長女雅代（同二年生）二女智代（同七年生）三女貴代（同一〇年生）四女富代（同一四年生）

古屋德兵衛氏　品川區大井鹿島町　電話大森二九六九　麹町區五番町一四　電話九段三七六三

松屋吳服店(株)社長、古屋(名)代表社員

明治一一年三月生、山梨縣

當家の先代德兵衛氏は夙に横濱に出で、鶴屋吳服店を經營し、吳服業界に活躍の基礎を築いた。氏は先代の二男にして前名を藤八と呼び、明治四十四年家督相續と同時に德兵衛を襲名した。古屋惣八氏及び同榮一氏の實兄、同富一郎氏の伯父である。夙に家業を繼いで其の發展に努力し、東京市神田區今川橋際に松屋吳服店を設けて帝都に進出し、更に大正十二年の大震災後、元專務取締役故内藤彦一氏の言を容れて銀座に進出し、爾來逐年發展以て百貨店界の雄として名聲を博するに至つた。現に松屋社長たる外古屋合名會社代表社員として活躍しつゝある。

妻美津（明治一四年生、東京府青地伊一郎姉）亡兄正太郎妻アサ（同六年生神奈川縣田邊幸七二女）

小山　九一氏　麹町區元園町一ノ五一　電話　九段三四六五

扶桑海上火災保險(株)專務取締役

明治一八年一月生、新潟縣

明治四〇年東京高等商業學校卒業

氏は新潟縣小山九平氏の長男として同縣下に生れ、大正五年分れて一家を創立した。夙に實業界に雄飛すべく青雲の志を抱いて帝都に出で、東京高等商業學校卒業後直ちに株式會社に轉じ、常務取締役として今日に及んでゐる。資性溫厚にして社内外に信望を博してゐる。

妻小すへ（明治一六年生、兵庫縣士族荒木幾太郎長女）長男致知（同三八年生）妻きみ子（明治二七年生、東京府神山一郎長女）長男善之助（大正二年生）

安部　信治氏　赤坂區青山高樹町三　電話　青山五六五一

安部幸商店(株)專務取締役、鹽糖製品販

藤倉(名)代表社員、凸版印刷(株)取締役
弘電舍、安立電氣各(株)相談役
明治元年一一月生、栃木縣

氏は栃木縣藤倉熊吉氏の五男として同縣安蘇郡植野村に生れ、後先代松本浪藏氏の養子となり、明治四十年家督を相續した。夙に渡米し、歸朝後兄善八氏と共に護謨電線の製造を開始し、更に藤倉工業會社を起して護謨防水布を製造し、後航空機材料、飛行船及び氣球等の製作に從事し、多年業界に活躍し國産の振興に寄與したる功績に依り勳五等瑞寶章を賜はり、又紺綬褒章を授與された。現時前

援けて家業の發展に努力し、同家が横濱より東京に進出し更に銀座街頭に現はれるに及んで刻苦勵精、遂に松屋呉服店を して百貨店界の雄たらしめた。此の間に於ける氏の努力は尠少ならざるものとして夙に普く認められてゐる。同店の功勞者故内藤彦一氏の失脚以來、令兄と共に一層同店の發展に努力以て今日に及んでゐる。

妻もと（明治二一年生、山梨縣奥村三右衛門三女）長男惣太郎(同四二年生)二男祐次郎（同四四年生)三男善正(大正四年生）長女雅代（同二年生）二女

服店を設けて帝都に進出し、更に大正十二年の大震災後、元專務取締役故内藤彦一氏の言を容れて銀座に進出し、爾來逐年發展以て百貨店界の雄として名聲を博するに至つた。現に松屋社長たる外古屋合名會社代表社員として活躍しつゝある

妻美津（明治一四年生、東京府青地伊一郎姉）亡兄正太郎妻アサ（同六年生神奈川縣田邊幸七二女）

小山　九一氏　麹町區元園町一ノ五一　電話　九段三四六五
扶桑海上火災保險(株)專務取締役

明治一八年一月生、新潟縣
明治四〇年東京高等商業學校卒業

氏は新潟縣小山九平氏の長男として同縣下に生れ、大正五年分れて一家を創立した。夙に實業界に雄飛すべく青雲の志を抱いて笈を帝都に負ひ、東京高等商業學校に入りて只管學業に勵み、卒業後直ちに實業界に投じた。爾來三十年に垂んとし、此の間努力奮闘主義を以て着々地歩の開拓に努めたる効果空しからず、次第に各方面に信望を博し、今日の地位を獲得した。現時扶桑海上火災保險會社の專務取締役として同社の發展に心血を濺ぎ、社内外に信望を博してゐる。

妻キソ（明治二三年生、新潟縣高橋耘平三女）嗣子達夫（大正五年生）長女富美(同七年生)四男省吾(同一二年生)

寺西　福吉氏　兵庫縣川邊郡伊丹町五七一　電話伊丹一一一
東洋リノリューム(株)常務取締役
明治三年一二月生、石川縣

氏は石川縣士族寺西幾久松氏の實弟として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に入り、奮闘努力主義を以て着々その地歩を開拓し、漸次各方面に名聲を認められるに至つた。後由多賀織株式會社に入り、常務取締役として同社の發展に貢献したが、更にその後東洋リノリューム株式會社に轉じ、常務取締役として今日に及んでゐる。資性溫厚にして社内外に信望を博してゐる。

妻小すへ（明治一六年生、兵庫縣士族荒木幾太郎長女）長男致知（同三八年生）二男咸夫（同四二年生)三男恭(大正四年生）二女仲（明治四四年生）三女春（大正二年生）四女米子（同八年生）兄幾久松（安政六年生、現戸主）同妻ひな（明治四年生）

秋田　善造氏　京橋區銀座一ノ六
廣目屋
明治二〇年六月生、兵庫縣

氏は兵庫縣秋田柳吉氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十一年家督を嗣いだ。夙に實業界に雄飛すべく青雲の志を抱いて上京し、大倉高等商業學校に入り、孜々として學業に勵んだ。優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに實業界に投じ、後廣目屋を創立した。その時勢の要求に適合せる計畫と氏の熱心なる努力は相俟つて創業以來業績進展の一路を辿り、特に大正七、八年の好況時代以降益々繁榮せる爲め、同十二年之を株式組織に改め、内容の充實と業務の擴張を圖り、爾來逐年發展の一路を辿り以て今日に及んでゐる。

妻きみ子（明治二七年生、東京府神山一郎長女）長男善之助（大正二年生）

安部　信治氏　赤坂區青山高樹町三　電話　青山五六五一
安部幸商店(株)專務取締役、鹽糖製品販賣(株)取締役、東京砂糖取引所理事長
明治一八年五月生、新潟縣
明治三七年高田中學校卒業

氏は新潟縣田中正作氏の長男にして、同縣中頸城郡新井町に呱々の聲を揚げたが、大正二年先代安部幸兵衛氏の養子となり、後分れて一家を創めた。夙に縣立高田中學を卒業後直ちに安部幸商店に入り、横濱本店に勤務して業務の經驗を積み、後東京支店、大阪支店等に歴勤して敏腕を揮ふこと多年、店主に望まれてその養子となつた。大正十年七月同店が株式組織に變更と同時に專務取締役に擧げられ、爾來同店經營の衝に當ると共に、鹽糖製品販賣株式會社の重役を兼ね更に東京砂糖取引所理事長として斯業界の發達に貢献し、今や都下糖業界に普く信望を博してゐる。

妻カイ（明治二三年生、養父幸兵衛六女）長女三三子（大正三年生）

阿部　壽準氏　豐島區池袋三丁目　電話大塚一四〇七
正四位、勳二等、法學士、帝國海上火災

保險(株)社長、第一火災海上保險(株)取締役
明治一二年一〇月生、山口縣
明治三八年東京帝大法科卒業
氏は山口縣人阿部光忠氏の二男として同縣下に生れ、明治四十一年家督を嗣いだ。大學卒業後文官高等試驗に合格して直ちに內務省に奉職し、千葉縣事務官となり、後神奈川、兵庫兩縣事務官、法制局參事官兼內閣恩給局審査官、法制局書記官、內務監察官を經て鳥取縣知事となり、更に統計局長、特許局事務官等に歷任し大正十四年農林次官に任命された。後官を辭して保險界に入り、現時前揭の兩社に重役を兼ねてゐる。
妻たみ（明治二〇年生、兵庫縣川端又五郎三女）長男光寛（同四四年生）二男光正（大正一二年生）女壽子（明治四三年生）女準子（大正三年生）女隆子（同九年生）

櫻井　岩松氏　名古屋市東區橦木町二ノ三　電話東四二一七
安倍幸商店(株)常務取締役、同店名古屋支店長
明治八年二月生、三重縣
氏は三重縣櫻井重助氏の二男として同縣下に生れ、大正九年分れて一家を創めた。夙に上京して安倍幸商店に入り、多年本店に勤務し只管その職務に精勵して店主の信任を得、同店の柱石として重んぜられるに至つた。大正十年同店が從來の個人經營を改め株式會社となすに及んで、その常務取締役に選ばれ、現時その任に在ると共に名古屋支店長を兼ねて益々同店の發展に努力しつゝある。
妻きさ（明治一九年生、三重縣海老原三之助長女）長男保太郎（大正五年生）二男英治（同一〇年生）長女敏（明治四〇年生）二女文（同四二年生）三女妙子（大正三年生）

佐久間友三郎氏　蒲田區蒲田町九八
松屋吳服店(株)業務課長兼庶務課長
明治一八年一〇月生、群馬縣
氏は群馬縣藤本善七氏の三男として呱々の聲を揚げ、後佐久間金太郎氏の養子となり、その家督を相續した。夙に中村吳服店に入つて吳服業界活躍の第一歩を踏み、精勵恪勤して店主の信任を得、支配人に擧げられた。明治三十三年白木屋吳服店に轉じ、累進して吳服部仕入課長となり、多年の經驗と敏腕を以て同部の躍進に貢獻し社內の信望を博した。大正十二年白木屋を辭し一時閑地に在つたが同十四年松屋に聘せられ、現時業務課長として敏腕を揮ふと共に庶務課長の難役を兼ねてゐる。溫厚にして而も才腕兼備の士として信望がある。宗旨は日蓮宗、趣味は觀劇等。
養父金太郎（明治元年生）養母ます（同七年生）妻とみ（同一九年生、養父金太郎長女）長女靜子（同四四年生）二女秀子（大正九年生）

三宅嘉十郎氏　本鄕區駒込林町八〇　電話小石川四八一一
大三證券(株)常務取締役、東京株式取引所國債取引員
明治二一年三月生、東京府
大正三年慶應義塾大學理財科卒業
氏は東京府宮內惣吉氏の三男として呱々の聲を揚げたが、大正三年三宅捨吉氏の養子となつた。同年慶應義塾大學を卒業して直ちに實業界に入り、努力主義を以て次第に斯界に確乎たる地歩を占め後大阪銀行集會所編輯主任として活躍し更に野村合名會社調査部主任、野村銀行東京支店長、野村證券會社調査役等に歷任し、後大正證券株式會社常務取締役に就任し、帝都證券市場に活躍以て今日に及んでゐる。
養父捨吉（安政二年生、現戶主）養母しげ（明治一四年生）妻今子（同二七年生、養父捨吉長女）長女博子（大正三年生）二女常子（同一五年生）養弟守明（明治三八年生）

平生釟三郎氏　兵庫縣武庫郡住吉村新堂五三、電話御影三四〇　小石川區小日向臺町二ノ一八、電話小石川三三三
日魯漁業(株)專務取締役兼函館出張所長
太平洋漁業(株)取締役
明治一四年一一月生、北海道
氏は平塚善治氏の二男として北海道に呱々の聲を揚げ、大正元年分れて一家を綿として傳はれる同地方屈指の名門である。夙に實業界に入り、日本煉瓦製造株式會社の經營に當り同社をして今日の隆盛に導きたるのみならず、之を基礎として各種事業に巨手を伸べ、遂に業界の成

妻たみ（明治二〇年生、兵庫縣川端又五郎三女）長男光寛（同四四年生）二男光正（大正一二年生）女壽子（明治四三年生）女準子（大正三年生）女隆子（同九年生）

櫻井　岩松氏　名古屋市東區橦木町二ノ三　電話東四二一七

安倍幸商店（株）常務取締役、同店名古屋支店長

明治八年二月生、三重縣

氏は三重縣櫻井重助氏の二男として同縣下に生れ、大正九年分れて一家を創めた。夙に上京して安倍幸商店に入り、多年その家督を相續した。學業を卒へるや直ちに實業界に入り、保險界の雄として飛躍すると共に前掲各社の重役を兼ね、多年實業界に貢献せる功績に依り昭和三年十一月勲五等に叙せられた。

妻スヾ（明治八年生、東京府士族鈴木鬼一姉）長男太郎（同三四年生）同妻愛子（同三八年生、澤田節藏妹）三男三郎（同四四年生）五男五郎（大正六年生）五女富士（明治四五年生）六女美津（大正二年生）

平塚常次郎氏　澁谷區猿樂町二八　電話青山六四一六

明治一八年一〇月生、群馬縣

氏は群馬縣藤本善七氏の三男として呱々の聲を揚げ、後佐久間金太郎氏の養子となり、その家督を相續した。夙に中村吳服店に入つて吳服業界活躍の第一歩を踏み、精勵恪勤して店主の信任を得、支配人に擧げられた。明治三十三年白木屋吳服店に轉じ、累進して吳服部仕入課長となり、多年の經驗と敏腕を以て同部の躍進に貢献し社内の信望を博した。大正十二年白木屋を辭し一時閑地に在つたが同十四年松屋に聘せられ、現時業務課長として敏腕を揮ふと共に庶務課長の難役の養子となつた。同年慶應義塾大學を卒業して直ちに實業界に入り、努力主義を以て次第に斯界に確乎たる地歩を占め後大阪銀行集會所編輯主任として活躍し更に野村合名會社調査部主任、野村銀行東京支店長、野村證券會社調査役等に歴任し、後大正證券株式會社常務取締役に就任し、帝都證券市場に活躍以て今日に及んでゐる。

養父捨吉（安政二年生、現戸主）養母しげ（明治一四年生）妻今子（同二七年生、養父捨吉長女）長女博子（大正三年生）二女常子（同一五年生）養弟守明（明治三八年生）

平生釟三郎氏　兵庫縣武庫郡住吉村新堂五三、電話御影三四〇　小石川區小日向臺町二ノ八、電話小石川三三三

勲五等、大福海上火災保險（株）會長、扶桑海上火災保險、東京サルヴェージ、豐國火災保險、朝日毛織紡績、東京海上火災保險、明治火災保險、大正海上火災保險各（株）取締役、吳羽紡績、三菱信託、秘露棉花、東洋毛絲紡績各（株）監査役

慶應二年五月生、岐阜縣

明治二三年東京高等商業學校卒業

氏は岐阜縣田中時言氏の三男に生れ、後先代田中忠辰氏の養子となり、大正八年その家督を相續した。學業を卒へるや直ちに實業界に入り、保險界の雄として飛躍すると共に前掲各社の重役を兼ね、多年實業界に貢献せる功績に依り昭和三年十一月勲五等に叙せられた。

妻スヾ（明治八年生、東京府士族鈴木鬼一姉）長男太郎（同三四年生）同妻愛子（同三八年生、澤田節藏妹）三男三郎（同四四年生）五男五郎（大正六年生）五女富士（明治四五年生）六女美津（大正二年生）

日魯漁業（株）專務取締役兼函館出張所長太平洋漁業（株）取締役

明治一四年一一月生、北海道

氏は平塚善治氏の二男として北海道に呱々の聲を揚げ、大正元年分れて一家を樹てた。資性豪放にして常に國家奉仕の念に富み、夙に漁業界に入り其の烱眼と敏腕を以て着々斯界に於ける地歩を開拓し、南樺太漁業、大北漁業、露領水産、豆相漁業等の各社重役を兼ねて漁業界に雄飛すると共に、更に之と關連せる水産製造業、製罐業、或は水運業等にその巨手を伸べて敏腕至らざるなく、業界一方の雄として夙に名聲を博した。現時日魯漁業株式會社の專務取締役として依然斯界に重きを爲してゐる。

妻ヨシ（明治二二年生、新潟縣堤清六妹）庶子順司（大正四年生、生母北海道上坂小千代）養子千鶴子（大正三年生、新潟縣堤清六姪）

諸井　恒平氏　本鄉區眞砂町一七　電話小石川五四

秩父セメント、秩父鐵道各（株）社長、日本煉瓦製造（株）專務取締役

文久二年五月生、埼玉縣

氏は埼玉縣人諸井泉衛氏の二男として同縣本庄町に呱々の聲を揚げ、明治十年分れて一家を創めた。當家は本庄町に連綿として傳はれる同地方屈指の名門である。夙に實業界に入り、日本煉瓦製造株式會社の經營に當り同社をして今日の隆盛に導きたるのみならず、之を基礎として各種事業に巨手を伸べ、遂に業界の成功者として名聲を博するに至つた。資性濶達にして公共奉仕の念厚く、埼玉學生誘掖會寶倶樂部の創立等を始めとし鄉黨の爲め、或は社會公共の爲めに盡したる功績顯著にして、各方面に信望を博してゐる。

妻みち（明治六年生、埼玉縣竹井耕一郎妹）長男貫一（同二九年生）同妻てつ（同三六年生、野村治三郎長女）二男桃二（同三二年生）同妻正枝（同三五年生、岐阜縣大森長兵衛二女）

望月軍四郎氏　赤坂區青山南町六ノ六　電話青山一一〇三

勲三等、日清生命保險、九曜社各（株）社長、京濱電氣鐵道（株）會長、新高製糖、湘南電氣鐵道各（株）取締役、太平火災海上保險（株）監査役

明治一二年八月生、靜岡縣

氏は靜岡縣望月廣七氏の四男、同謹八氏の實弟にして、同縣下に生れ、明治三十九年分れて一家を創めた。夙に上京して株式取引界に投じ、烱眼克く商機を摑んで巨萬の富を獲たが、後保險界に進出

し、更に鐵道事業、製糖業等に敏腕を伸べて我が事業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。此の間育英事業、社會事業等に巨資を投じて功績顯著、その故を以て大正十三年勳三等に叙せられ、又昭和二年羅馬法王廳よりシルベストル勳二等章を授與された。現時前掲重役を兼ねて益々活躍しつゝある。

妻こう（明治二二年生、東京府田中彌吉姪）男太郎（同四一年生）男玉三（大正二年生）男楠夫（同一〇年生）女房子（明治四二年生）女美子（同四四年生）女昌子（大正五年生）

森田　達氏　（自宅）芝區新堀町三一（店舗）麹町區丸ノ内丸ビル、電話丸ノ内四六三七

森田商會（株）專務取締役、函館運送、樺太合同運送各（株）取締役、運輸商會（株）監査役

明治二九年二月生、山口縣

大正七年神戸高等商業學校卒業

氏は山口縣松野幹氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後鹿兒島縣森田昌司氏の養子となり、昭和六年四月その家督を嗣いだ。養家は鹿兒島縣多額納稅者にして縣下屈指の名門である。氏は夙に學業を卒へるや直ちに三井物産會社に入社し、神戸支店に勤務したが、後之を辭して森田商會を經營し、現にその專務取締役たる外各事業に關係して敏腕を揮ひつゝある。趣味としてゴルフを好み、多摩カンツリー倶樂部會員である。

妻アヤ（明治三三年生、養父昌司長女函館高女卒）長男昌也（大正一四年生）長女ヤス（同一〇年生）

千石興太郎氏　豐島區雜司ケ谷町一丁目、電話牛込五一六三

產業組合中央會首席主事、全國購買組合聯合會專務理事

明治七年二月生、東京市

明治二〇年札幌農業學校卒業

氏は島根縣人千石氏の息として東京市に於て呱々の聲を揚げた。夙に札幌農業學校に學び、卒業後島根縣農會に奉職し精勵恪勤すること十五ケ年に及び、同農會の功勞者として名聲を博した。大正十年產業組合中央會主事となり、傍ら產業組合中央金庫評議員、大日本生糸販賣聯合會相談役、全國米穀販賣購買組合相談役等として農民の福利增進に貢獻し、現在前掲の要職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚篤實稀れに見る人格者として夙に各方面に信望を博してゐる。

菅　禮之助氏　淀橋區百人町二二一　電話四谷五〇二二

明治一六年一一月生、秋田縣

明治三八年東京高等商業學校卒業

氏は秋田縣人菅禮治氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、明治四十五年その家督を嗣いだ。夙に實業界に志し、東京高等商業學校に學び、同校卒業後直ちに古河合名會社に入社し、漸次その才腕を認められて大阪支店次席に拔擢され、後更に大阪支店長となり、續いて門司支店長に轉じ、後本店詰となり販賣部長の要職に在つて活躍すること多年、社内の信望を博した。その後同系統の古河鑛業株式會社に轉じ、取締役として敏腕を揮つたが、後之を辭し現時閑地に在る。

妻キサ（明治二二年生、秋田縣長瀨直倫長女）長男禮太（同四五年生）二男達吉（大正四年生）三男元彦（同七年生）長女榮子（同一〇年生）養姉ツネ（嘉永三年生）

鈴木　忠治氏　品川區五反田五ノ八　電話高輪三三三三

鈴木商店、東信電氣、昭和工業各（株）社長、鈴木三榮、犀川電力各（株）監査役

明治八年二月生、神奈川縣

氏は味之素を以て名聲を博したる故鈴木三郎助氏の實弟にして、大正八年分れて一家を創めた。夙に横濱商業學校卒業後實兄三郎助と共に實業界に投じ、沃度の製造及び味之素の販賣等に從事し、克く三郎助氏を援けて同家今日の發展に貢獻し、現時前掲各社の重役を兼ね、三郎助氏歿後に於ける同系諸業の統轄者たる地位に在つて活躍しつゝある。此の間大正十四年及び昭和二年の兩度海外を調査して昭和二年醫學博士の學位を授與された後歐米各國に留學し昭和五年四月歸朝後陸軍々醫學校に教鞭を執り、現時その任に在る。頭腦明晰、發明の天才にして、細菌培養罐、濾水機其の他數十種の特許會の創立に奔走し、その成立後同會の發展に努力し、大正十二年理事に擧げられ爾來引續き其の職に在つて活躍以て今日に及んでゐる。眞宗を信仰し、音樂、謠曲、短歌等に趣味深く、就中短歌には造

ビル、電話丸ノ内四六三七
森田商會(株)專務取締役、函館運送、樺太合同運送各(株)取締役、運輸商會(株)監査役
明治二九年二月生、山口縣
大正七年神戸高等商業學校卒業
氏は山口縣松野幹氏の四男として同縣下に呱々の聲を揚げ、後鹿兒島縣森田昌司氏の養子となり、昭和六年四月その家督を嗣いだ。養家は鹿兒島縣多額納稅者にして縣下屈指の名門である。氏は夙に學業を卒へるや直ちに三井物産會社に入社し、神戸支店に勤務したが、後之を辭

學校に學び、卒業後島根縣農會に奉職し精勵恪勤すること十五ケ年に及び、同農會の功勞者として名聲を博した。大正十年産業組合中央會主事となり、傍ら産業組合中央金庫評議員、大日本生糸販賣聯合會相談役、全國米穀販賣購買組合相談役等として農民の福利增進に貢献し、現在前掲の要職に在つて活躍しつゝある。資性溫厚篤實稀れに見る人格者として夙に各方面に信望を博してゐる。

菅　禮之助氏　淀橋區百人町二二一　電話　四谷五〇二二
明治一六年一一月生、秋田縣
生）長女榮子（同一〇年生）養姉ツネ（嘉永三年生）

鈴木　忠治氏　品川區五反田五ノ八　電話　高輪三三三三
鈴木商店、東信電氣、昭和工業各(株)社長、鈴木三榮、犀川電力各(株)監査役
明治八年二月生、神奈川縣
氏は味之素を以て名聲を博したる故鈴木三郎助氏の實弟にして、大正八年分れて一家を創めた。夙に横濱商業學校卒業後實兄三郎助と共に實業界に投じ、沃度の製造及び味之素の販賣等に從事し、克

く三郎助氏を援けて同家今日の發展に貢献し、現時前掲各社の重役を兼ね、三郎助氏歿後に於ける同系諸業の統轄者たる地位に在つて活躍しつゝある。此の間大正十四年及び昭和二年の兩度海外を調査し、且つ常に海外事情の研究を怠らず、新知識として又敏腕家として夙に定評がある。
妻マス（明治一一年生、神奈川縣辻井繁七長女）長男三千代（同三四年生）二男松雄（同三六年生）三男竹雄（同三八年生）四男義男（同四三年生）五男治雄（大正二年生）六男正雄（同三年生）七男秀雄（同六年生）八男泰男（同八年生）女千榮（明治四一年生、お茶ノ水高女卒、竹内德治妻）

石井　四郎氏　牛込區若松町七七
從六位、醫學博士、三等軍醫正、陸軍々醫學校教官
明治二五年六月生、千葉縣
大正九年京都帝大醫學部卒業
氏は千葉縣石井柱氏の四男として同縣山武郡千代田村大里に呱々の聲を揚げた千葉中學校、第四高等學校を經て京都帝大醫學部に進み、卒業後更に同大學院に入り、研鑽二ケ年、更にその後研究を續け嗜眠性腦炎の病原に關する研究に依つて昭和二年醫學博士の學位を授與された後歐米各國に留學し昭和五年四月歸朝後陸軍々醫學校に教鞭を執り、現時その任に在る。頭腦明晰、發明の天才にして、細菌培養罐、濾水機其の他數十種の特許を有し和製エヂソンの稱がある。就中大正九年以來心血を濺ぎ寢食を忘れて研究を續け、昭和八年完成して天覽の光榮に浴したる「自動車式濾水機」は如何なる毒水、危險水をも即座に清淨なる飲料水に化し得る獨特の機能を有し、戰時或は平時用として効力絶大、眞に世界的大發明として稱讃の的となつてゐる。宗旨は禪宗、趣味は化學研究、發明、スポーツ等である。
妻キヨ子（學習院長荒木寅三郎二女、女子學習院卒）長女春海（大正一四年生）長男誠一（昭和六年生）

石榑辻五郎氏　日本橋區本石町三ノ四　電話　日本橋五六五
（救濟會）深川區佐賀町一ノ一　電話(代)本所八〇七
帝國水難救濟會理事
明治二年八月生、愛媛縣
氏は愛媛縣人横井良三郎氏の二男として同縣新居郡橘村に生れ、後石榑利八氏の養子となり明治二十九年その家督を相續した。同二十二年上京し帝國水難救濟會の創立に奔走し、その成立後同會の發展に努力し、大正十二年理事に擧げられ爾來引續き其の職に在つて活躍以て今日に及んでゐる。眞宗を信仰し、音樂、謠曲、短歌等に趣味深く、就中短歌には造詣頗る深く短歌雜誌「心の花」の編輯に從事し又歌集「潮鳴」「鷗」を著し、千亦の雅號を以て斯界に知られてゐる。
長男利壽（明治二九年生、慶大理財科卒、中央放送局勤務）同妻春子（同三三年生、靜岡縣松崎與一二女、同縣立高女卒）二男秀夫（同三一年生、明治學院商科卒、正金銀行新京支店員、昭和七年分家す）同妻照子（同會計課長渡部介二女）三男茂（同三三年生、東京帝大經濟學部卒、五島衞太郎養子）四男史郎（同三六年生、早大政經科卒不動貯金九段支店員）二女文子（同四三年生、跡見女學校卒）三女禮子（木更津高女卒）長女章子（同四一年生、東京女子學院卒、福岡縣人三井物産社員矢野矩妻）

池永　三治氏　京都市上京區小山花ノ木町、電話西陣三三六
太奏發聲映畫(株)社長
明治一〇年三月生、大分縣
氏は通稱池永浩久の名を以て夙に映畫界に名聲嘖々たるものがある。大分縣下

毛郡池永村池永爲策氏の三男として同所に呱々の聲を揚げ、大正十年分れて一家を樹てた。池永家は代々池永村の豪士として近隣に聞えたる名門である。夙に同縣立中律中學校に學び、第一期生として社會に立ち、大正元年日本活動寫眞株式會社に入社し、爾來會計主任、總務主任調査係等として活躍し、大正十二年三月同社京都撮影所長となり、同十五年九月同社取締役に選ばれ、大日活の爲め貢献する所甚大であつた。昭和七年同社を辭し同八年三月JOトーキースタヂオ顧問に聘せられたが、同年四月太秦發聲映畫株式會社を創立と同時に社長に互選され、以て今日に及んでゐる。宗旨は眞宗趣味として義太夫を嗜み、活歳太夫の藝名を以て同好者間に知られてゐる。

妻てい（明治八年生、奈良縣士族植松俊吾長女）長男浩久（大正一一年生）養子數男（明治三七年生、大分縣井上敏雄弟）長女光枝（同四二年生、數男妻）孫彰作（昭和五年生、數男長男）

石田新一郎氏　名古屋市中區廣見町五ノ五四、電話東一四三〇

工學士、矢作水力（株）取締役兼電氣課長

明治二〇五月生、長野縣

明治四五年東京帝大工科電氣科卒業

氏は長野縣石田新兵衛氏の長男として同縣松本市に呱々の聲を揚げ、大正二年家督を嗣いだ。之より先き東京帝大工科電氣科を卒業し、名古屋電燈及び木曾電氣鑛業會社の技師となり、兩社が大同電力會社に合併されると同時に同社に移り理事に擧げられ且つ技術課次長として活躍し、傍ら信美電力會社取締役を兼ねて敏腕を揮つた。後矢作水力に轉じて取締役に選ばれ、更に同社電氣課長を兼任し以て今日に及んでゐる。彈宗を信仰し、趣味は俳句、スポーツ、圍碁、讀書等である。

妻秀子（明治三〇年生、愛知縣服部富三郎五女、淑德高女卒）長男達義（大正五年生）二男耕造（昭和二年生）三男修造（同四年生）長女壽子（大正八年生）二女和子（同一二年生）三女隆子（同一四年生）

伊藤　琢磨氏　麴町區富士見町二ノ四三、電話九段二三四五

法學士、日本製靴（株）取締役會長、日本皮革（株）專務取締役

明治二年九月生、愛媛縣

明治三〇年東京帝大法科英法科卒業

氏は愛媛縣士族伊藤晴雄氏の三男として同縣下に生れ、明治二十九年分れて一家を創めた。大倉桑馬氏はその實兄である。夙に上京して東京帝國大學法科英法科に入り、孜々として學業に勵み、卒業後實業界に投じて着々その地歩を開拓し遂に今日の名聲を博するに至つた。現時日本製靴會社及び其の姉妹會社たる日本皮革會社の兩社を經營して斯業界に確乎たる地歩を占め、又斯界の功勞者として信望を博してゐる。

妻テイ（明治一四年生、山口縣士族諫早清輝從妹）男勇二（同三九年生）男七郎（同四四年生）男八郎（同四五年生）女壽惠子（大正五年生）

石井　光雄氏　目黑區上目黑一ノ一一〇、電話青山六八六八

法學士、日本勸業銀行（株）副總裁

明治一四年二月生、三重縣

明治三九年京都帝大法科卒業

氏は三重縣人、石井四郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正五年その家督を相續した。夙に京都帝國大學法科に學び、卒業後朝鮮銀行に入りて實務の經驗を積み、精勵恪勤して次第にその敏腕を認められるに至つた。後朝鮮殖產銀行に轉じて理事に擧げられ、更に日本勸業銀行に移つた。當初理事であつたが後昭和二年副總裁の榮職に拔擢され、同行の發展に努力以て今日に及んでゐる。

妻ふみを（明治二一年生、三重縣士族高松範重二女）男凉（大正一〇年生）女澄（明治四一年生）女藤（大正二年生）女清（同三年生）女壽（同五年生）女信子（同七年生）女和子（昭和二年生）女綏子（同五年生）

伊東眞五郎氏　品川區西品川四ノ九五四、電話高輪七六三九

日魯漁業（株）庶務課長

明治一四年七月生、東京府

明治四二年早稻田大學商科卒業

氏は東京府佐々木鶴氏の叔父として、二月同地に生れ、明治二十五年分家したが、夙に染物業を營み伊藤染工場を創設以來奮闘努力以て今日の隆盛に導きたる外、大日本織物協會理事、やまと工業會社取締役等として都下業界に名聲を馳せ

名を以て同好者間に知られてゐる。
妻てい（明治八年生、奈良縣士族植松俊吾長女）長男浩久（大正一一年生）養子數男（明治三七年生、大分縣井上敏雄弟）長女光枝（同四二年生、數男妻）孫彰作（昭和五年生、數男長男）

石田新一郎氏　名古屋市中區廣見町五ノ五四、電話東一四三〇
工學士、矢作水力（株）取締役兼電氣課長
明治二〇五月生、長野縣
明治四五年東京帝大工科電氣科卒業
氏は長野縣石田新兵衛氏の長男として明治三九年京都帝大法科卒業
氏は三重縣人、石井四郎氏の長男として同縣下に呱々の聲を揚げ、大正五年その家督を相續した。夙に京都帝國大學法科に學び、卒業後朝鮮銀行に入りて實務の經驗を積み、精勵恪勤して次第にその敏腕を認められるに至つた。後朝鮮殖産銀行に轉じて理事に擧げられ、更に日本勸業銀行に移つた。當初理事であつたが後昭和二年副總裁の榮職に拔擢され、同行の發展に努力以て今日に及んでゐる。
妻ふみを（明治二一年生、三重縣士族高松範重二女）男凉（大正一〇年生）二女和子（同一二年生）三女隆子（同一四年生）

伊藤　琢磨氏　麹町區富士見町二ノ四三、電話九段二三四五
法學士、日本製靴（株）取締役會長、日本皮革（株）專務取締役　愛媛縣
明治二年九月生、
明治三〇年東京帝大法科英法科卒業
氏は愛媛縣士族伊藤晴雄氏の三男として同縣下に生れ、明治二十九年分れて一家を創めた。大倉粂馬氏はその實兄である。夙に上京して東京帝國大學法科英法二月同地に生れ、明治二十五年分家したが、夙に染物業を營み伊藤染工場を創設以來奮闘努力以て今日の隆盛に導きたる外、大日本織物協會理事、やまと工業會社取締役等として都下業界に名聲を馳せた。氏は養父琴三氏を援けて伊藤染工場の發展に努力すると共に、東京高等工業學校に教鞭を取り、學識經驗共に深く斯業界に信望を博してゐる。
妻まつ（明治二九年生、養父琴三長女）女和子（大正八年生）女代々喜（同一〇年生）女彌壽（昭和三年生）

飯泉　良三氏　小石川區宮下町三三　電話　大塚一五八一
加波山石材工業（株）取締役、南洋協會幹事
明治一四年二月生、茨城縣
明治三八年早稲田大學法科卒業
氏は飯島斧一郎氏の三男として茨城縣下に呱々の聲を揚げ、大正十一年分れて一家を創めた。之より先き早稲田大學法科に入學し、孜々として學業に勵み、優秀の成績を以て同大學を卒業した。卒業後實業界に入り、大正二年東洋拓殖會社に入社以來只管同社の發展に努力し、その才腕を認められて參事に擧げられた。その後昭和二年同社を辭して加波山石材工業株式會社に入り、其の取締役として

女澄（明治四一年生）女藤（大正二年生）女清（同三年生）女壽（同五年生）女信子（同七年生）女和子（昭和二年生）女綏子（同五年生）

岩倉　具光氏　牛込區神樂町二ノ二二　電話　牛込七一二
泰東洋行、東京石炭、東京實用自動車、大北火災海上運送保險、東京灣汽船、國際通運、神戸市土地興業、六甲山乘合自動車、阪神急行電鐵各（株）取締役、日本レール（株）監査役
明治一九年九月生、東京府
明治四一年東京高等商業學校卒業
氏は明治の元勳岩倉具視の第三子岩倉具經子爵の三男にして、明治四十三年分れて一家を創立した。子爵岩倉具明氏の實弟、男爵鮫島具重氏の實兄である。學業を卒へるや官界に入り、第二次桂内閣の際には大藏大臣秘書官に拔擢されたが内閣の瓦解と同時に官界を去り、歐米に留學して主として經濟學を研究し、滯留二ケ年にして歸朝後實業界に投じ、漸次その地歩を開拓し、現時前掲各社の重役を兼ねてゐる。敏腕儁才、業界稀れに見る人格者として信望がある。
妻花（明治二四年生、東京府岩下清周長女）女敏子（大正三年生）

伊東眞五郎氏　品川區西品川四ノ九五四、電話高輪七六三九
日魯漁業（株）庶務課長
明治一四年七月生、東京府
明治四二年早稲田大學商科卒業
氏は東京府佐々木篤氏の叔父にして、大正五年先代伊東八郎氏の養子となり、同十五年その家督を嗣いだ。夙に早稲田大學商科に學び、卒業の翌明治四十三年朝鮮銀行に入り、大正十四年迄同行に勤續し、只管その職務に勵精し行内に信望を博した。同行を辭任後直ちに日魯漁業株式會社に入社し、庶務課長の難役に在りて活躍以て今日に及んでゐる。溫厚篤實なる人格者として、夙に社内外に普く認められてゐる。
妻きく（明治二九年生、養父八郎長女）男輝雄（大正一〇年生）男康雄（同一四年生）女八惠子（同六年生）女寛子（同八年生）

伊藤　一郎氏　麹町區上二番町一　電話九段三二七三
伊藤染工場、東京高等工業學校講師
明治二一年四月生、岐阜縣
氏は岐阜縣上野源左衛門氏の實弟にして、同縣下に呱々の聲を揚げ、後伊藤琴三氏の養子となつた。琴三氏は神奈川縣士族伊藤銓一郎氏の弟として慶應三年十

現在に及べる傍ら、南洋協會幹事として活躍しつゝある。

岩田　長作氏　下谷區中根岸四〇　電話　下谷七三九

東京福谷商店(株)專務取締役

明治一八年二月生、愛知縣

氏は愛知縣岩田長右衛門氏の三男として同縣下に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に投じ、濱松市の渡邊兼次郎商店に入り同社東京支店長として敏腕を揮ふこと多年に及んだ。大正十年五月、東京福谷商店が創立されると同時に同店に入社し大震災當時の苦難時代等に於ても、克くその敏腕を以て之を突破し、同店の發展に努力すること既に十餘年に及び、此の間その功績を認められて專務取締役に選ばれ、以て今日に及んでゐる。

妻ふじ（神奈川縣、佐藤專太郎長女）

女春子（大正二年生）女房子（同六年生）女千代子（同八年生）女君代（同一〇年生）

六所　靜一氏　兵庫縣武庫郡大社村森具北蓮毛八七七　電話　西ノ宮一六四八

富士電機製造(株)大阪販賣所長

明治二二年二月生、靜岡縣

大正二年東京高等商業學校卒業

氏は靜岡縣六所平四郎氏の長男として同縣富士郡今泉村に呱々の聲を揚げた。夙に實業界に志し、鄕里の中學を卒業後上京して東京高等商業學校に學び、卒業後直ちに古河合名會社に入り、後古河鑛業會社に轉じ、更に古河電氣工業會社に移り、大正十二年富士電機製造會社の創立と同時に同社に轉じた。同十四年獨逸シーメンス會社に研究員として入り、孜々として研鑽を重ねた。昭和二年歸朝後引續き同社に勤務し、大阪販賣所長として活躍以て今日に至つた。

妻嘉代子（明治二九年生、今井晨一妹）

女利子（大正一一年生）

原　安三郎氏　麹町區富士見町五ノ一二、電話九段二〇五八

金港堂書籍、山川製藥、日本針布、日本導火線、熱海埋立土地、持越金山、中外雷管、大日本レザー、朝日レザー各(株)社長、中外投資(株)會長、內外鑛業、日本火藥製造各(株)專務、朝鮮紡織(株)常務、火藥工業、江ノ島電氣鐵道、横濱共立倉庫、帝國染料製造、空中電氣鐵道、姫川電力、大日本炭礦、關東紡績各(株)取締役、スタンダード靴、永洞金山、室蘭貯庫各(株)監査役、日本雷管、朝日衡器各(株)相談役

明治一七年三月生、德島縣

明治四二年早稻田大學商科卒業

氏は德島縣士族先代安三郎氏の長男として同縣德島市に生れ、前名を保一と呼び、明治三十五年家督相續と同時に安三郎を襲名した。早稻田大學卒業後直ちに實業界に投じ、敏腕以て着々斯界に地歩を開拓し、現時前揭諸社の重役を兼ねて業界に雄飛しつゝある。

母ツタ（安政四年生）妻操（明治二八年生、東京府浮田利民長女）妹ひろ（同二一年生）

長谷川源次郎氏　麹町區永田町二ノ八六、電話銀座三五四〇

竹內組(株)取締役、富士製鋼(株)監査役

慶應三年八月生、東京府

氏は東京府長谷川源佐氏の長男として呱々の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に土木建築請負業界に投じ、紳士的請負を標榜して弊習を墨守する斯業界に異彩を放ち、當初は業績微々として振はなかつたが、その熱心と努力は漸次各方面に認められ、時代の要求に合致せる請負業者として名聲を博し、各方面よりの大小工事逐年增加して遂に斯業界に確乎たる地歩を占むるに至つた。現時竹內組の取締役として依然斯界に活躍する傍ら富士製鋼會社の重役をも兼ねて、業界に信望を博してゐる。

男正治（明治四〇年生）

服部　直吉氏　名古屋市東區富士塚三ノ一一、電話東四五三

九州瓦斯(株)取締役、東邦殖產(株)監査役、東邦瓦斯(株)秘書役

明治一七年八月生、愛知縣

明治三九年早稻田大學政治經濟科卒業

ウイルキンソン炭酸鑛泉(株)東京支店長　電話　芝二三〇四

明治二八年七月生、横濱市

大正三年大倉高等商業學校修業

氏は横濱市故西門新右衛門氏の長男として同市末吉町に呱々の聲を揚げ、後その後西野りうの養子となり明治十九年その家督を嗣いだ。慶應義塾を卒業後山陽鐵道會社に入り其の發展に努力して敏腕を認められ、該鐵道が國有となりて後、帝國劇場の創立に奔走し、創立後その專務取締役となり、明治四十五年同劇場の開